
デビルバスター日記外伝『大量殺戮者（ジェノサイダー）』

黒雨みつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デビルバスター 日記外伝『ジエノサイダー大量殺戮者』

【Nコード】

N5660W

【作者名】

黒雨みつき

【あらすじ】

魔王のごとき力を持つ史上最悪の大量殺戮者ヴェスタ「ランバート」。そんな彼がひょんなことから記憶を失い、あるうことが善人になってしまった！ お間抜けでちょっとナルシストな『元』大量殺戮者ヴェスタと、そんな彼に付き従う謎の少女ミュウが繰り広げるファンタジーコメディ！ 本編との関連性はほとんどなく、雰囲気もまったく違いますので御注意ください。 本編の息抜きから産まれる副産物のためかなりの気まぐれ更新です。 個人サイトとの重複投稿になります。 9/30ストック切れのためまったり更

新となります。

プロローグ

魔界

人間界と次元の壁一つ隔てたその場所には“魔”と呼ばれる生物が存在している。

“魔”は大きく三つの種類に分けられた。

人間界における人間たちと同じ位置を占める“人魔”

人間を除く動物の位置を占める“獣魔”

そして、人と獣の両方の姿を持ち、また、高い知能を持ちながら、数多くの規律に縛られた特殊な存在“契約者”

そしてこれは“魔”たちが人間界に現れては人々を襲って苦しめる、そんなことが日常的に起こっていた時代の物語である。

くプロローグく

ゴオオオオオオ……

辺り一面は真っ赤に染まっていた。

パチパチ……と、火の粉がまるで踊るように空を舞い、おそろくそれほど裕福ではないであろう、村の人々が築いてきたものを、一瞬にして焼き払ってゆく。

数瞬前まで村を支配していた、人々の絶望と嘆きの叫び声さえ、

もうすでにどこからも響いてこなくなっていた。

“男”がやってきて、この状態になるまでに消費した時間は、ほんの数十分。その僅か数十分の間に、決して大きいとは言えないながらも、一つの村……そして、数十人もの命が消え去ったのである。

その光景は、まさに地獄絵図であった。

「ふん、くだらんな」

“男”はまるで吸血鬼のような出で立ちで漆黒のマントに身を包み、燃えさかる炎の中に立っていた。若干細身の体に、美しささえ感じるほどに整った、それでいて冷徹さを漂わせる表情。切れ長の目は、周りの炎を映して真っ赤に染まり、冷徹な視線を辺りに向けていた。この男こそが村を滅ぼした張本人。その名を“ヴェスタ”ランバート”という。

その性格は、極めて冷酷で残忍。命乞いをする若者を。子供を庇う母親を。そして、兄弟の亡骸の前で泣きじゃくる少女を。その全てを残酷に切り刻み、全ての命を奪い去った後でも、彼の心の中には罪悪感のカケラすらも浮かんでいなかった。

その代わり、彼の心の中に浮かんでいたのは、

“ 退屈”

そう。彼にとって、今日、殺した人々の命など、暇潰しにもならない……その程度の価値しかなかったのである。

「やはり、ある程度の抵抗がなければ、なんの面白味もない」

呟いて、ヴェスタは肩越しに自分の斜め後ろに視線を移動させる。

「ミュウ。生き残りはいるか？」

「はい、御主人様」

彼の斜め後ろ　そう。その場にいたのはこのヴェスタという男だけではなかった。長身の彼に隠れて目立たなかったが、そこには背の低い一人の少女がいる。着ているのはヴェスタとはまるで対照的な、法衣のような白い衣、額の部分に黒い宝石のはめ込まれたサークレットをつけている。

「まだ一人残っているようです」

ミュウと呼ばれたその少女は視線を真っ直ぐ正面に向け、そう答えた。まるで濁りのない瞳　いや、それは光のない瞳、と言うべきだろうか。

「そうか。まだいたか」

ヴェスタの視界には入っていないが、このミュウという少女にはそれが見えているらしい。

「消滅させますか？」

その言葉には何のためらいもない。犬や猫を追っ払うかのような口調だった。

「そうだな……いや、待て」

ヴェスタの視界にも、ようやく一人の少年の姿が映っていた。

「あれか」

そう言っただけに冷酷な笑みを浮かべる。

「……私がやるう」

額から血を流し、真っ赤な瞳に涙を浮かべ、煤で汚れた顔を拭おうともせず。その状態で、なんと少年は少しづつヴェスタの方へ近づいてきていた。まだ十二、三歳。その手には短剣が握られている。「ほう……」

ヴェスタは目を細めた。その笑みがさらに冷酷に歪む。

「よくも」

少年は手にしていた短剣をグツと握り直して叫ぶ。

「……よくも父さんや母さんをつ！」

「子供ごときが、私に刃向かうというのか？　これは面白い」

「よくも……よくもオ……ッ！」

ヴェスタの言葉にも少年は恐れを見せなかった。あまりの怒りと悲しみで感覚が麻痺しているのか……あるいは、すでに耳が聞こえなくなっている可能性もある。

「ふん、おもしろい。たまには、こつこつ余興もなければ、な」

ヴェスタは少年を見据えたまま、無防備に歩み寄る。

「くっ……くっ……」

少年はさすがに怯んだ様子を見せた……が、そこから後ろに下がる気配はない。

ヴェスタと少年の間が縮まる。

十メートル。

五メートル。

三メートル。

そして、その間が一メートルほどになっても、ヴェスタは全く無防備のままだった。

「どうした？ 仇を討つのではなかったか？」

「うっ……うっうっ……」

ヴェスタの挑発に、少年が目溜まった涙を払い、短剣を手にした右腕を振り上げる。

「……みんなの仇っ……！！！！」

そして、その短剣はヴェスタに向かって真っ直ぐに振り下ろされ

ボンッ！

「……えっ？」

少年が驚きの声を上げた。

奇妙な音とともに、弾かれた剣が宙を舞う。

「おやおや……だらしないな」

ヴェスタは相変わらずの冷笑で、宙を舞う剣に視線を向けていた。

短剣は赤い飛沫を飛び散らせながら宙を……いや、宙を舞っているのは短剣だけではなかった。

「うっ……うわあああああっ！！！！」

一瞬、何が起きたのかも理解していなかった少年は、剣とともに弾け飛んだのが自分の右腕だったことに気付き、それとともに襲ってきた激痛に苦悶の叫び声を上げる。

ヴェスタはそんな少年の姿に、嬉しそうに目を細めると、

「なるほど。恐怖は麻痺しても、痛みは麻痺していなかったか。…
…ミュウ！」

「はい」

ヴェスタの言葉に、ミュウが音も立てずに歩み寄ってくる。が、
激痛にのたうち転がる少年にはそんな光景すら、すでに視界に入っ
てはいなかった。

「次はどうする？」

「はい」

ミュウはまるで昆虫観察でもするかのように、無表情に少年を見
下ろして、

「頭を飛ばすのが一番確実だと思われます」

「そうか。……任せる」

「はい」

そんなミュウの返答に、ヴェスタは満足そうな顔で頷くと、少年
に背を向けて歩き出した。

背後の少年の叫び声が、一瞬にして途切れたのを耳にしながら

「たいして面白くはなかったな」

ヴェスタとミュウの二人は村を出て、今は森の中を歩いていた。

雨が降ったのか、地面はぬかるんでドロドロになっている。

「御主人様が強すぎるのです」

その後ろを歩くミュウが無表情で答える。すでに夜になり、野獣
たちの声がそこかしこに聞こえていたが、この二人の前に現れよう
とするものはない。

彼らも、相手が自分より圧倒的に強いことを、本能的に悟ってい
るのだろう。

「数がいれば楽しめるかと思ったのだがな……」

「これから、どうなさいますか？」

ミュウの問いに、ヴェスタは答えて、

「とりあえずはこのまま移動だ。今度はもっと大きな所を襲う」

「はい。この近くでは北西の方に街があります」

「規模は？」

ヴェスタはそう言って肩越しに後ろのミュウを振り返った。

「先ほどのところよりは大きいと思われませう」

「では、次はそこだ。……今度はもっと面白い楽しみ方を考えておかなければならんな」

「はい」

そしてミュウが頷いたのを確認し、ヴェスタが正面を向こうとする。

そのときであった。

「！」

「あ……」

ミュウが軽い驚きの声を上げた。

(なっ……)

ヴェスタの足の甲を軽い衝撃が襲い、その体は前のめりにバランスを崩していた。どうやら、木の根が地面に突き出していて、それに足を取られたらしい。

世の中には完璧な生き物など存在しないのである。

それはこのヴェスタとて同じこと。たまにはそういうミスがあってもおかしくはない。

だが……この小さなミスこそが、彼の人生を大きく変えることになるうとは、一体誰が予想しただろうか？

当然、彼の体は即座に反応した。

片手を地面につき、すぐに跳ね起きようとする。だが。

……ズルッ！

(っ！?)

雨でぬかるんだ地面はヴェスタの手を大きく滑らせたのである。
片手で充分だと油断した、これは完全に彼の失敗であった。
そして、そのまま横に倒れこむヴェスタの身に、次に訪れたもの
は

後頭部への大きな衝撃。

ゴンッ！！！！！！

その1

俺は夢を見ていた。

過去形だ。だから、今はもう見ていないってことになる。先ほどまで鮮明に映っていた映像も、リアルに響いていた音も、全て消えてしまった。

目の前にあるのは、闇、闇、闇。

視覚も、嗅覚も、聴覚も、全てが遮断されてしまっている。

その代わり、俺の体が唯一感じていたもの

(あー、腹減った)

空腹である。どうやら意識の半分はすでに覚醒しかけており、この怠惰な肉体も起きることを要求しているらしい。

(ふむ、今日の朝飯はなんであろうか……)

思わずそんなことを想像してしまう俺。これは別に食い意地が張っているわけではなく、動物の本能による極めて自然な反応である。

(昨日はあまり好きな物じゃなかったしな、今日こそは)
そうそう。

昨日の朝食は確か

(……ん?)

思い出せなかった。

(なんだったか……)

とにかく、嫌いなものばかりで、ほとんど手をつけなかったような記憶はあるのだが。やはり思い出せない。

(なんだ? おかしいぞ?)

だいたい、俺はそれほど好き嫌いはないはずで。嫌いなものといえばせいぜい限られていて

(なんだったか……)

それもやはり思い出せない。どうやら、頭がまだ完全に覚醒していないらしかった。

(やれやれ、この歳で健忘症か)

そんなことを思つて、感覚だけで苦笑する。そうしながら、現実でも寝ながら笑つていたら不気味だろうな、などと考えてみるが、まあそんな心配はない。何故なら、俺には寝顔を見られる心配をしなければならぬような、そんな関係の人間は

(……いない、はずだな)

多分、いない……だろう。

(うん？ 何か変だな……さっきから)

いくら頭が半分寝ているといつても、思い出せないことがあまりに多すぎる。

それも、生活に深く密着した部分まで思い出せないという……なんか、あまりにも不自然な気がした。

そして、

(そもそも)

そして、俺はそこで重大な問題を発見してしまったのだ。

(……俺って……誰だっけ……?)

〈記憶喪失の大量殺戮者〉
ジェノサイダー

(うーむ。俺は一体誰なんだ?)

これは大問題だった。理由はよくわからないが、俺は自分が誰なのか思い出せないらしい。

(名前すら思い出せないってのは、もしかして相当ヤバいのではないか?)

いくら頭が半分寝ているとはいえ、さすがにありえない話だ。そもそも、俺はどこでどうやって寝ているのだろうか。

昨日はなにをしていたのだろうか？

寝る直前は

(……思い出せないな)

はつきりとわかるのは二つだけ。

どうやら、俺はこの世に存在していて。そして、どこかで寝ているらしいということ。

(そういや、さっきから少し眩しいな)

瞼の裏に微かな光を感じた。ということは、少なくとも朝なのだろう。どうやら、体の感覚も少しずつ覚醒してきているようだ。

(それでも思い出せん)

本格的にヤバい。

そして、達した結論。

(もしかして……俺、記憶喪失というやつではないのか?)

それは非現実的な発想でありつつも、今のこの状況にはマッチしている気がする。

とはいえ、それにしても頭の中が嫌にすっきりとしているが……こんなものなのだろうか？俺にとっては未体験ゾーンなので、はつきりとしたことは何も言えないのだが。

(さて、どうする)

考える。

考える頭が残っているということは、それほどひどい状態ではないと考えられる。脳に異常があって余命幾ばくとか、実はどこかの療養所で寝たきりとか、そういうことではないはずだ。

(とりあえず自分の名前もわからないのでは困るな。思い出してみよう)

考える。

一秒。

二秒。

三秒。

(……ま、いいか。起きればなんかわかるであろう)

すぐにそんな結論が採択されてしまった。この結果から推察するに、俺は相当楽観的な性格なのだろう。

(ネガティブよりはよっぽど良いではないかッ!)

意味もなく力説しているうちに、体が目覚めることを脳に要求し始めた。

いや、脳が体に要求してるのかも。

(まあ、どっちでもいいか)

そんなこんなで、俺の体はついに目覚め始めたのである

ポカポカとした陽気が心地よい。俺が寝ているところには、太陽の光が直接射し込んでいるらしく、少しの眩しさと心地の良い温もりを注いでくれている。

「う……む……」

体の感覚は完全に戻っていた。それとともに、後頭部に若干の痛みが蘇ってくる。

(ああ。記憶がはつきりしないのって、これが原因ではないのか?)
だとしたら相当ヤバいんじゃないか、とか思ったが、それは言わない約束である。

考えたら負けなのだ。

(さて、あとは目を開けるだけなのだが……目を開ける前にやっておかねばならないことがある)

そう。それはとても重要だ。

なにが、って?

考えても見るがいい。人間はだいたい一日に一回は睡眠をとるわけ、眠りから目覚める機会なんてのは月に三十回ほどもあるのだ。

え? なにを言っているのかわからないって?

つまりだ。俺が言いたいのは、普通に眠りから覚めるだけなら、別に記憶喪失じゃなくても出来るってこと。これなのだ。俺はそんな当たり前の人生など、これっぽっちも望んでいない。せつかく、記憶喪失などという、誰でも体験できるわけじゃない出来事に遭遇したのだ。楽しまなければ、記憶をなくした分だけ損であろう。

(という事で……目を開けた瞬間、どんな光景が待っているのか想像してみようではないか！)

なにしろ、こっちはなにも覚えていないのである。

もしかしたら、大金持ちの一人息子かもしれないし、どこかの国の王子様、なんてことも考えられる。それを、この、現時点で感じられる少ない手がかりから想像してみるのだ。

名付けて“記憶喪失でびっくり！俺って だったの？ ゲームーム！！”である。

(こんなゲームをやったのは、世界広しと言えども俺ぐらいのものだろう……)

それって結構すごいことだと思うのだが、どうだ？

さて、そんなこんなで。

まず最初に、出来る限りの情報を集めてみよう。

第一に、俺が寝ているところ。

これは紛れもなくベッドの中だ。そして、近くには窓があり、そこからは太陽の光が射し込んできている。

第二に、雀の声が結構近くに聞こえている。ということは、大きな屋敷の奥深くとか、どこかの地下室とか、そういう場所でないことは確かだ。

(おそらく、少し小さめの一軒家らしきところ……)
近くに人の気配は、ない。多分。少なくとも、大勢の人間が動いているような気配はない。

この時点で、大金持ちであるという望みは薄れてしまったようだ。
(なんか、いきなり楽しみが薄れてしまったな……)

こうなったら、もっと一般的な楽しみに期待するしかない。

(そうだな……目が覚めたら、とてつもなく可愛くて優しい女の子が看病してくれている、というのはどうだ?)

確かに、人の動いている気配はしない。が、例えば、ベッドの脇で看病に疲れて寝てしまっているとか、今はここを離れて朝食を作ってくれているとか。

有り得ない話ではない。というか、記憶喪失になっちゃったのだから、それぐらいの役得があってもいいではないか。

(次。職業でも予想してみるか)

これは難しい。職種など大量にあるし、手がかりがあまりにも少なすぎる。

とりあえずは体の感覚から、自分の外見予想でもしてみよう。

(……結構背が高いように思えるな)

俺の予想では百九十センチといったところか。結構細身で足も長いような気がする。

(実は、結構いい感じか?)

これに関してはちょっと期待してもいいようだ。

そして、ここから職種予想であるが

(細身にしては筋肉が結構ついている)

ということは、ある程度体を使う仕事なのかもしれない。

(大工! ……つてのは)

そう思ったが、あまり格好良くない。どうせなにもわからないのだから、もっと夢を見てもいいだろう。

考えを巡らせる。

体を使い、希少価値があり、格好の良い職業

(デビルバスター! ……つてのはどうだ)

結局、俺が行き着いたのはそこだった。

デビルバスターというのは、いわゆる、この世に害の成す“魔”を退治する、まあ、俺たち一般人にしてみれば、憧れの対象なのである。

ただ、これも“魔”を退治していれば勝手に名乗れるというよう

なものではなく、年に一度、帝都ヴォルテストで半月にも及ぶ選考試験が行われ、合格率一パーセント未満という狭き門をくぐって、ようやくデビルバスターを名乗れるわけだ。

これには人魔を退治する技だけではなく、人魔たちに関する幅広い知識の他、一般的な教養もかなり深く拾得していなければならぬのだが。

(……あんまり知識持ってないな)

しかしこれは、記憶喪失の影響ということも考えられる。

(よし。決定ということにしよう)

俺の職種はデビルバスターだ。

(おお、なんだか明るい未来が見えてきたではないか)

特別裕福なわけでもないが、しっかり看病してくれる女の子がいて(恋人かどうかはまだ決めてなかったが、少なくとも悪い関係ではないだろう)長身、細身でルックスが良く(?)、そしてみんなの憧れの的、デビルバスターである。もちろん強いのだ。これ以上を望んではバチが当たってしまうに違いない。目を開けるのが楽しみになってきた。

(……もつとも、どう考えても期待ハズレなんだろうが)

考えてはいけないことを考えてしまった。

……が、せめて一つぐらいは現実になることを祈ろう。

(開けるぞー、目を開けるぞー……)

誰に言うでもなく、心の中でそう呟くと、俺はゆっくりと目を開くことにした。

「……ん……眩しいな」

薄く目を開けると、まず真っ先に太陽の光が飛び込んできた。視界が真っ白になって何も見えなくなる。

だが、眩しかったのもその一瞬だけ。

すぐになにかが太陽の光を遮るようにして、俺の視界の中に現れた。

(ん……人、か?)

その人物はまるで覗き込むようにしてこちらを見ている。ただ、逆光になっているため、その顔は全く見えなかった。

「お目覚めになりましたか？」

「!？」

その声は 俺の錯覚でなければ若い女の子のように聞こえた。

(そ、そんな馬鹿な!?)

先ほどの妄想が現実になったのかと、俺は内心ドキドキしていた。

(……だが、待て)

冷静になるよう努力する。

(声はちよつと可愛い風にも聞こえるが、だからといって顔が可愛いとは限らないし、優しいとも限らないではないか)

だが、そう考える頭とは裏腹に、俺の期待感は全く止まらなかった。

(落ち着け……わかつているのだ。どうせ喜ばせておいて、いきなりどん底に突き落とすに決まっている。それが奴の手口なのだ。騙されるな……)

誰の手口だがさっぱりわからないが、ぬか喜びなどゴメンである。期待すればするほど後で馬鹿を見る。もしも、俺の期待通りだったとしても……期待していなかった方が嬉しいではないか。

(そう、不細工で性格の最悪な女に違いない……絶対そうだ)

そんな俺の心の葛藤など全く無視して、目は徐々に太陽の光に慣れてくる。眩しくてまともに見ることの出来なかった女の子の顔が、俺の視界のなかではつきりと形を取り始めた。

そして、俺の目に映った女の子は

「……のわああああああああっ!?!?!?!?!」

ずぞぞぞぞぞぞっ! ベッドの端に後ずさる音

ずるっ……ゴンッ! ベッドから転げ落ちる音

ドダダダダダッ!?!?! 木の床を四つ足で移動し、ベッドか

ら離れる音

「はあっ! はあっ!?!?!」

「……………」

そうして部屋の壁に背中を張り付かせた俺を、女の子は少し不思議そうに見ていた。

が、今の俺にはそんなことを気にしている余裕などない。

(や、ヤバい！)

俺は冷や汗が背中を伝うのを感じていた。

(ま、待て！ 落ち着くのだ！！)

誤解のないように言っておくが、俺が逃げたのは、視界に現れた女の子がとつもなくブサ　いや、つまり、その、オブラートに包み込んだ言い方をすると、いわゆる“地球外生命体”だったから……………ではない。

その“逆”である。

(やたらと可愛いではないか！！)

そう。可愛いのだ。俺の頭の中にいた“可愛くて優しい女の子(想像図)”が一瞬で吹き飛ばしてしまうほどに。

とてもベリーでキュートなぐらいに可愛いのである。

汚れない澄んだ水のように綺麗で大きな瞳。

これ以上ない、というぐらいに整った顔立ち。

首をかしげて、不思議そうに俺を見つめるその表情。

どこにも、俺にとってマイナスになる要素は持ち合わせていなかった。

(た、ただ)

そんな中、なんとか冷静さを少し取り戻した俺は、もう一度、女の子の出で立ちを観察して……………そして、結論を導き出した。

(少し……………年齢的に、な)

目の前にいる女の子はせいぜい十歳を少し越えた程度だった。“可愛い”と感じたのは確かだが、それはどちらかというと、男が女に、ではなく、大人が子供に対して感じるそれに近い。

俺の歳がいくつなのかはっきりしないが、おそらく歳の差は十歳以上あるだろう。

(う、うーむ……ま……まあ良い。まだなにもわかってないのだし、もしかしたら、兄妹とかそういう関係かもしれないではないか) ひとまず自分の心を落ち着かせた。というより、看病してくれていたのだから、そういう可能性の方が却って高いわけで。娘ってことはさすがにないと思うが、それすら定かではない。

(とにかく、ここはこの娘に話を聞こう。このままではなにもわからん……)

そう決心し、まずは何から聞こうかと、ようやく冷静になった頭を働かせ始める。

(まずは名前か……うむ。そうだろうな)

が、ここで再び、静まり始めた俺の心の小池(謎)に大きな巨石が投じられることとなった。

それは、女の子が首を傾けながら放った一言。

「御主人様？ どうなさったのですか？」

「……な、なななな……なにいいっ!!??」

再び後ずさりそうになって、後ろが壁だったことに気付き、そのままずり上がるようにして立ち上がる。

「ご、ごごごごご、ごしゅじんさまって、だ、だだだだ、誰のことなのだっ!!?」

(も……もしかして俺は、こんな女の子を隷属させて喜んでいる、超絶変態野郎なのかあっ!!!?)

話がいきなり飛躍しすぎであった。

「御主人様？」

「み……見るなっ！ そんな目で俺を見るでないっ!!」
壁に背をつけたままでブンブンと首を振る。

「わかりました」

「……へ？」

「これでよろしいですか？」

女の子は俺に背中を向け、全く冷静な声でそう言った。

「は、はあ、まあ……」

そんな女の子の行動に、俺は少し落ち着きを取り戻す。　　とい
うか、半分はネタだったので、冷たく流されたようでちょっと淋し
い。

「……今のはちょっとした冗談だ」

ちよつと気抜けしたままトコトコとベッドに戻る。

これ以上、ネタに走るのは気が引けたので、本格的に事情を聞く
ことにした。

「なんといいかだな……その、驚かないで欲しいのだが」

「はい。わかりました」

「……いや、その前にこつちを向いてくれんか？」

「？　もう、いいのですか？」

背中を向けたまま、不思議そうに聞き返してくる。どうも、相当
に律儀な子らしい。……それとも、単なる嫌味か？

現時点ではどつちか判断するのが難しいが、とりあえず、ここは
振り向いてもらわなければ困る。

「うむ。振り向いても構わんぞ」

「はい。ありがとうございます」

こちらを振り返って、ゆっくりと律儀な感じに頭を下げた。

（……なんか反応がちょっと変だな、この娘）

俺は初めてそう思った。

だがとにかく、彼女の口調や反応からして、俺がどうやら彼女の
“御主人様”であることは間違いないらしい。どういう経緯でどう
いう目的かはわからないが、俺はこの女の子を雇っているのだろう。
周りを見る。

どこかの一軒家かと思っていた場所は、少しだけ立派な小屋だっ
た。日用品は一応揃っているが、長く住むのに適したような場所だ
はない。

これらから察するに、やはり俺は少々金持ちの家の人間で、ちょ
つとした小旅行に召使いの少女を連れてきた……という感じなのか？

（……待て待て。結論を出すのはまだ早い）

そう。まずはこの少女に事情を話し、そして俺が何者であるのか、正しい情報を手に入れるべきではないか。

「ということ、どうやら……俺は記憶喪失らしいのだ」

「記憶喪失ですね」

「ぜんっ……ぜん、驚いておらん」

「御主人様が驚くと言いました」

「……なるほど。正論ではある」

とはいえ、普通は少しぐらい驚くものだと思うのだが、どうだろうか？

「では、どうなさいますか？」

やはり動揺の色さえも見せない女の子。やはり奇妙な娘だと思っただが、今はとりあえずそんなことを気にしている場合ではなかった。「俺に聞かれても困るのだが……まずは、俺の名前と君の名前、それに、俺と君との関係を教えてもらいたい」

「わかりました」

女の子はゆっくりと頷いた。それと一緒に、彼女が頭につけているサークレットの宝石が、太陽の光を反射してキラリと光る。

黒い宝石。

なんとという宝石だろうか。見たことがない。

(そういえば……格好も妙だ)

彼女の出で立ちをもう一度観察する。

高価そうな黒い宝石のはまった銀色のサークレットに、法衣のような白い装束。どう見ても一般人の服装ではなく、かといって、どこかの貴族に使える召使いの出で立ちでもない。

敢えて近いものを挙げるとするならば 女神官と言ったところだろうか。

まあ、彼女の主人が変わった趣味の持ち主で、召使い全員にこういう格好をさせているというのならわからんが。

(変わった、というか、そこまでいくと変人ではないか……)

どんな主人か見てみたいものである。

(……俺だ)

心の中でやってても誰もウケてくれない。
ちよっと空しい。

「御主人様のお名前はヴェスタ」ランバート様とおっしゃいます
そここうしているうちに、女の子の説明が始まった。

「ヴェスタ、ランバート？」

聞き覚えのない名前だ。

(……って、それはヤバイではないか！)

心の中で突っ込みを入れる俺。
やっぱり空しい。

「私の名前はミュウと申します」

「ミュウ、か。ふむ」

女の子によく似合った……可愛らしい名前だと思った。

そして、ミュウは言葉を続ける。

「御主人様は私の御主人様です」

「それは当たり前だ」

思わず素で突っ込んでしまったが、ミュウは笑わなかった。

「そして、私は御主人様の奴隷です」

「なるほど」

まあ、簡単な説明ではあったが、それ以外に説明のしようがなかつたのだろう。

とりあえず、俺の名前はヴェスタで、彼女の名前はミュウ。そして俺がミュウの御主人様であり、ミュウは俺の奴隷である、と……

「奴隷？」

「はい」

何か引っかかった。

「……奴隷？」

「はい」

ミュウはただ頷くことを繰り返すだけだ。

「……って、待たんかあッ！！！！」

俺は両手を大きく振り上げて、ぼふっ……と、それを布団に叩きつける、ミュウの方に向かって身を乗り出す。

「奴隷!? 奴隷ってあの、シモベとかゲボクとかドボクとかいうのと同義で、ドレイともヌレイとも読んだりする、あの奴隷のことかッ!!!?」

「いいえ。下僕や奴僕というのは、通常、男性に適用するものから、私の場合には当てはまらないかもです。でも、シモベというのはだいたい近い意味合いでしょうか」

「冷静に分析するでないっ!!!」

思わず強烈に突っ込んでしまった。

ちなみに、一般的に“奴隷”といえば、いわゆる金銭で売買された人々のことをいい、俺たちの住むこの大陸の大半では、現在、認められていない制度だ。

(つて、そんなことは覚えてるのか、俺……)

ま、まあ、それはいいとして。

「いかん! それはいかん! 俺は絶対に認めんぞっ!!!」

強い口調で言っつて、勢いに任せてミュウの肩をがっしりと掴む。

「いいか! 人というのは元来自由なものだ! 人が人を買ったりすることなど、言語道断! 犬畜生にも劣る行為なのだッ!!!」

「ですが、それが私と御主人様との契約ですから」

「だああああっ! ダメだと言っつているだろうがっ!!!」

「それでは、私との契約を破棄なさいますか?」

ミュウが真っ直ぐに俺の瞳を見つめてくる。

なんとなく、その言い方に少し引っかかるものを感じたが、それでも、考えるまでもなく、答えは決まっていた。

「当たり前だっ!」

「わかりました」

ミュウが目を閉じる。

そして、ゆっくりと立ち上がると、額のサークレットに手を移動

させた。

「……ん？ 何をしているのだ？」

その行動を不可解に感じて、そう聞いてみる。

「御主人様との契約を破棄します」

「……それと、そのサークレットを外そうとしていることは、一体、どのような関係が？」

俺には全く理解できなかった。

もしかして、そのサークレットと引き換えに、俺は彼女を従えていたのだろうか？ まあ、確かに高価そうなサークレットではあるし、金額的にはそこそこのものになるだろう。

一応、納得できなくはないのだが。

「いいえ、サークレットではないです。御主人様から頂いた力をお返しするのです」

「俺から……力？」

ちんぷんかんぷんである……が、なんとなく、嫌な予感がした。なにが、というわけではないのだが、それを許してしまうと、とんでもないことになってしまうような気がする。

「その力つてのは、なんの力なのだ？」

「闇の力です。そして、私にとっては生命の源でもあります」

「……やみのちから？ せいめいのみなもと？」

ますますわけがわからないが、非常に気になる単語なのは確かである。“せいめいのみなもと”というのが万が一“生命の源”という漢字を書くのであれば、それってかなりヤバイのでは。

「参考までに……それを外したら、ミュウ、君はどうなるのだ？」

「外したことはありませんけど、私の知識が正確なら、一週間も経たないうちに死ぬと思います」

「な、なるほど……」

彼女があまりにもさざりと言つてのけたため、俺の頭はその言葉を理解するのにかかる時間を要し。そして、言葉を理解した後でも、いまいち、どうという反応をすればいいのかわからなかった。

「と、とりあえず……待て。契約とやらを破棄するのは、もう少し話を聞いてからにしよう。うむ」

彼女の言葉はにわかには信じがたいものではあったが、絶対に有り得ないと否定するだけの材料もない。

そしてそれ以上に、彼女が嘘をついているとはどうしても思えなかった。

しかし、だ。

その言葉が真実であるとするならば……この先の話は、どうも人間の世界だけでは収まりきらない話になりそうである。

「さて、ミュウよ」

ミュウが再び椅子に腰を下ろす。俺は大きく深呼吸をして、まずは気分を落ち着かせた。

「次はその“契約”のことについて聞きたいのだが」

「はい」

「つまりだな。君は……何故、俺の、その……奴隷になっているのだ？」

「そういう契約だからですが？」

「いや、そうではなくて、だな」

決して理解力に乏しいという印象は受けない。だが、何故か目の前のミュウという少女には、正確な意志が伝わりにくかった。なんというか、言葉の表面しか理解できていない感じがする。

「つまり、何故、君は俺と契約しなければならなかったのか、ということだ」

これでもまだ満足な答えが返ってくるとは思えなかったが、とりあえずは手探り。

ただ、結果的にこの質問が糸口としては最適だったらしい。

「それが、私たちの種族の掟だからです」

「……掟？ 種族？」

なんか怪しい雰囲気の話が出てきてしまった。

これはやはり

「はい。感応幻蝶と呼ばれる、私たちルーミス族の掟です」

「……」

出た。これはもう確定の青ランプだ。

「つまりだな……ぶっちゃけた話、君は、いわゆる、普通の人間ではない、と？」

「それは、人間界の主位種族である人間族としての意味ですか？」

「あ……ああ、まあ、そういうことだ」

人間族だなんて単語が出ること自体、異世界の人間であることを示しているのだが、一応、そう言って頷いて見せる。

もちろん、結果はすでに見えていて。

「それなら違います。私は魔界に住む、俗に“契約者”と呼ばれる分類の生物です」

「……なるほど」

（しかも“契約者”か……）

俺だって、専門家ほどの知識はないにせよ、人魔や獣魔といった、いわゆる魔界に住む者たちのことを少しは知っている。

魔界の主位種族……いわゆる、人間界における人間に位置するものを“人魔”といい、それ以外の獣の姿をしたものを“獣魔”といい、そして、そのどちらでもない、人魔たちですらその全てを把握していない、人（人魔）と同等、あるいはそれ以上の高い知能を持ち、獣と人の特性を併せ持つ者たちを“契約者”というのである。

そして、契約者たちはそのほとんどの場合、数多くの規律や掟に縛られ、表に出てくる場合、基本的には人魔や人間と主従関係を結び、その命令によってのみ活動するという。

もちろん、ミュウの言うルーミス……感応幻蝶族のことなど知りたくないのだが、それはおそらく人間界の専門家とて知らないだろう。契約者とはそれほど秘密のベールに包まれた生き物なのだ。

それはつまり、彼女がよっぽど度胸の据わったホラ吹きでない限り、その言葉が真実であることの証明でもある。

（参ったな、これは……）

どうやら俺は想像していたよりもとんでもない人間であるらしい。契約者を従えている人間なんて、いわゆる、一般的に言う大金持ちより数が少ないだろう。

「わかった。君のことはもういい」

「というか、これ以上聞いたところで、俺には理解できない。」

「契約を破棄する云々の話もなしだ。とりあえずは今のままでよしとしよう」

「はい。ありがとうございます、御主人様」

ミュウがペコツと頭を下げる。

「が……御主人様と呼ぶのはまあいいとして。君は奴隷ではない。それだけは覚えておくように」

「でも、契約です」

「だからだな。……そう。君は俺の従者ってことで。奴隷じゃなくて従者だ」

「従者、ですか？」

「うむ。これから誰かに質問されたら、必ずそう答えるように」

「……御主人様がそうおっしゃるのでしたら」

「というか、そうしてもらわなければ困る」

先ほども言ったように、この大陸の大半の場所に奴隷制度はない。そんな中で、ミュウが誰かに俺の奴隷だなんて口走ったりしたら……ヘタをすれば俺は牢獄行きだ。

「さて、と……では最後に、俺のことを教えてくれんか」

本当は一番最初に聞かなければならないことだ。が、色々と驚きの事実がありすぎて、結局後回しになってしまった。

はつきり言って“記憶喪失でどつきり！”どころの話ではない。

（あ、“記憶喪失でびっくり！”だったか）

まあ、どっちでもいい。

「はい。……と言っても、何からお話すればいいでしょうか？」

「ふむ？ そうか、それは確かに困るな」

俺のこと、と言っても、あまりにも漠然としすぎだろう。

「うむ。では、俺がここに来る直前、何をしていたか話してくれ」
「はい。それでしたら」

ミュウは改めて姿勢を正した。

やはり澄んだ真っ直ぐな瞳で俺を見つめる。

……まるで精霊のようだな、と思った。

そして、ミュウはそのまま口を開く。

「ここに来る直前、御主人様はここから徒歩で二時間ほどの距離にある、小規模の村を訪れていました」

「ふむふむ」

やはり、俺はここに定住しているわけではなく、彼女の口調から察するに、何らかの事情で旅をしている人間のようなのだ。

(謎多き旅の若者ってどこか)

なんかちよつとカツコいいことを想像しながら、説明に耳を傾ける。

そして、ミュウは言葉を続けた。

「御主人様はそこで、推定七十八名の人間を殺害し、家々を全て焼き払った後、その村を離れ、こちらへとやってきました」

「ほうほう。推定七十八名の
ピタ。」

「……七十八名の……なに？」

「人間です。あ、人間族のことです」

そんなことはわかっている。俺が聞き返したのはそこではないのだ。

「それを？ どうしたって？」

「殺害しました。ついでに家々を全て焼き払いました」

「……」

(は?)

「あ、いえ。七十八名中の九名は、御主人様の命により、私が殺害しましたけど」

「……あ、あの……俺には君が何を言っているのかよくわからない

んですけど……?」

俺はかなり狼狽していた。

そりゃそうだ。いきなりそんなことを言われても、どう反応すればいいのか全くわからない。

というか、冗談だろ、これは絶対。

が、ミュウはそんな俺の心の中など全く気にした様子もなく、

「“殺害”の意味がわかりませんか? では、“殺しちゃった”ということで」

「それぐらいわかるわッ!!」

言っておくが、記憶がないこと以外、頭の中身は正常である。

「申し訳ありません」

ミュウが若干、申し訳なさそうな顔をする。それを見て、ちょっと胸キュン……じゃなくて、胸がチクリと痛んだ。

っていうか、それどころじゃない。

「あー……一応、聞いておくが……ギャグだろ?」

「ギャグではないです」

「じゃあネタ?」

「ネタでもありません」

「じゃあ……」

「マジです」

ミュウが妙に真剣な顔でいう。

こいつ、遊んでるんじゃないだろうな?

(けど、ミュウが妙……っての、ダジャレみたいだな。わはははは……)

……現実逃避。

わかってるのだ、そんなことは。

「……死のう」

結論。

七十八人? そりゃどんなさずさんな裁判だって死刑になるぞ。

捕まって、民衆の注目の中、罵声を浴びせかけられながら処刑さ

れるよりは、ここで自ら命を絶った方が良いだろう。全く記憶のないことではあるが、いくら樂觀人間の俺とはいえ、そんな事実を突きつけられては、のうのうと生きていくことなんて出来ない。

「？」

だが、そんな俺の言葉に、ミュウはものすごく不思議そうな顔をした。

「どうして死ぬのですか？」

「どうして、って……」

そんな彼女の態度に、俺は怪訝な顔を向ける。

(……聞きたいのは俺の方だぞ)

どうして彼女は平然そうな顔をしているのだろうか？

そう言えば、彼女も九人殺したと言っていた。

俺の命令で 俺の命令で？

(……なるほど)

先ほどの話から、頭ではわかっていたものの、感覚として理解してはいなかった。

俺から生命力を受け取っていること。生き死にを俺の判断に左右されるということ。

そこから導き出される結論は一つ。

(絶対隷従……)

彼女にとつての“契約”とは、つまりそういう意味なのだ。俺の命令が正義であり、俺の言うことが真理であり、俺の全てが彼女にとつての全て。

それは、ある意味、純真。……そしてある意味、冷酷だとも言える。

何も知らない子供が親の言うことを聞いて、それを達成したときに笑顔を見せる。それと同じなのだ。

たとえその内容が、誰かを殺すことであつたとしても。

(俺が死ねば……彼女も死ぬのか？)

きつとそうだろう。彼女の言い分からすると、そうに違いない。

少し、可哀想な気がした。

「……………」

俺は黙ってミュウを見る。

真っ直ぐな……そう。最初に感じたように、純真な瞳で俺を見て
いる。

実際に俺が死んだとしても、彼女は俺に対して恨み言一つ言わな
いのだろう。そして、今のように俺を見つめたまま、黙って死んで
いくのだろう。

なにも……本当のことはなにもわからないまま。

(……………考え方を変えよう)

思考の方向転換を試みた。

俺は七十八人の人間を殺した。ミュウが俺をからかっている限り、
それはおそらく事実であり、そして今までの話を総合するに、
彼女が嘘をついている可能性は限りなくゼロに近い。

だから、やはり事実なのだろう。

だが……それは俺であって俺ではない。

以前の俺はどうだか知らないが、今の俺は、どんな事情があろう
とも、七十八人も人間を殺したりはしないだろう。

つまり、全くの別人だ。

他人が犯した罪を、俺がかぶる必要など、どこにあるだろう。

都合の良い解釈だということはおわかってる。だが、俺の命
は俺だけの命ではない。二人分の命なのだ。

(……………別に妊娠してるわけではないぞ)

どんなときでもジョークを言えるのが、俺の特技らしい。

……と、それは置いといて。

(早い話が、俺は死にたくない、ということだ)

ミュウも死なせたくない。……だから死なない。

勝手な話だが、つまりはそういうことだ。もちろん、タダで生き
ていくつもりはない。俺が以前、どのようなことをしていたのか知
らないが、それを償うつもりで生きていく。

それが最善の選択であるような気がした。

(ついでに……)

俺はチラッとミュウの方を見た。

……相変わらずの瞳で俺を見つめている。

(この少女に、大事なことを教えてやらねばなるまい……)

契約者だから。魔だから。

そんなことは関係ない。

この人間界で生きていく以上、人間として、この世界の一員として、生きていくことを彼女に教えてやりたい。俺の命令だからなんでもする。人をも無表情に殺す。……それではいけない。それでは、カラクリ人形と同じだ。

「ミュウ」

俺は真剣な表情で彼女を見た。

「はい」

ミュウは相変わらずの瞳で俺を見返す。

(うお、可愛い　って、そんなこと言ってる場合ではない！)

一人漫才もいい加減クセになりそうだ。

「いいか。これから俺の言うことを良く聞くのだ」

というか、これでも本当に真剣なのだ。

「はい」

「まず、これからは俺のことを“お父さん”と呼びたまえ」

「……？」

(ちがあああああうー!!!)

いかん。俺の頭の中は完全に腐っているらしい。

「……というのは冗談だ」

「はい」

「まず……そうだな」

どう切り出すべきか迷う。いや、迷っていたからこそ、さっき、余計なセリフが口をついてしまったのだ。

というおこととしておじう。

「うむ。ひとまず……これからは、人を殺めることを禁ずる」

「はい。そうご命令ならば」

「いや、そうではなくて。誰の命令でも、だ。人を殺すのは絶対にいかん。……いいか？」

「はい。御主人様のご命令ですから」

「違う違う。俺の命令でもダメってことだ」

「……？」

ミュウが不思議そうな顔をする。

混乱してしまっただらしい。

(むづ……)

どうやら、わからせるには相当時間がかかりそうだ。が、見たところ、自分で考える、ということは充分にできているらしい。

「あー、まあよい。とにかく、人を殺めるのはいかんということだ」

「はい……わかりました」

ミュウは完全に納得できていないようだったが、それでも頷いてみせた。

とりあえず今はそれでいいだろう。何度もしつこく言い聞かせてやれば、そのうち理解できてくるに違いない。

「それと、だ」

もう一つ、言っておかなければならない。

「俺はこれから、人々への償いに人生を捧げるつもりだ」

「償い、ですか？」

「そうだ。……記憶にはないのだが、俺は七十八人も人間を殺してしまったのだろう？」

「はい」

「その償い、だ。まあ、一人一年として……最低、七十八年は人々のために尽くすことになるであろうな」

それはつまり“一生”という意味だ。もちろん、俺の一年が一人の命と釣り合うとは思っていないが、それは俺の決意の現れであり、俺流の冗談でもある。

「だから、ミュウ。君もそのつもりで……俺についてきてくれ」
俺は今度こそ真剣度マックスでそう言った。

「はい。もちろんです」

ミュウはすぐにそう答える。

彼女がそうやって答えることぐらい充分承知の上だった。が、それでもこうして言葉で答えてもらえると、なんとなく嬉しい。

(ふう……やれやれ)

なんだか奇妙なことになってしまったが、目的があるというのはとりあえずいいことだ。

人々への償い然り、ミュウのこと然り。

(新しい人生の第一歩ってやつか……)

こう思っではいけないのだろうが、何故か少し、清々しい気持ちだったりもする。

逆にいえば、記憶を失うまでの俺が濁っていたということだろうか？

……と。

「ですが、御主人様」

そんな俺の清々しい想いをブチ壊すかのよう。

ミュウが衝撃の事実を口にした。

「一人一年だとすると、最低五百年は尽くさなければならぬ計算です。御主人様はその前にも村を三つ滅ぼしていますので」

「……は？」

完全に思考停止する俺。

淡々と、ミュウは続けた。

「御主人様はここ最近で、村を三つと人間を五百人ほど殺害しております。それ以前の話となりますと、私も細かいところまで覚えてはいませんが、おそらくは」

「……」

「その前には道行く旅人を」

「……」

ミュウの口から俺の様々な罪状が紡ぎ出されてくる。
が、俺はすでに聞いていなかった。

(……ってというか、俺って……大量殺戮者……?)
七十八人でもすでに想像の範疇を超えているというのに。

……五百人? ごひやく……

(は……はははは……)

「御主人様?」

「……ミュウ」

「はい」

「……やっぱ死んでいいか?」

俺の決意は早くも崩れ去るのであった。

こうして……全く先の見えない俺たちの奇妙な旅は、始まりを告げたのである。

その2

切れ長の目に目鼻立ちのくっきりとした顔立ち。細身で長身、すらりとした伸びた足。そして、美しささえ感じるクールでシャープな雰囲気。

はつきりいつて美形だ。というか、やたらと格好いい。

口元に僅かに笑みが浮かぶ。

この微笑み一つで十人ぐらいいはコロッツといきそつだ。そつ。何度も言つが、やたらと格好いいのである。

え？ 誰が、つて？

もちろん、俺が。

↳ 納豆嫌いの大量殺戮者ジェノサイダー↳

「そう思わんか、ミュウ」

「なにがですか？」

とある街のとある食堂。

女性用の手鏡に色々な角度から自分の顔を映して、俺は悦に浸っていた。

いや、これは自意識過剰なわけじゃない。ほんとに、正直に、カッコいいのである。これは記憶喪失で、まるで初めてみるかのような視点で自分の顔を見ることができるところこそ言えることだ。

多分。

そついえば初めてミュウを見たときもやたらと可愛いように思っ

だが、もしかして、俺たち、ものすごい美形コンビ？

「御主人様？」

いつまで経っても鏡を手放さないので、さすがに呆れたのだろうか？ ミユウが食事をする手を止めて、

「差し出がましいようですが、お料理が冷めてしまいます」

「ん？ ……おお、そうだったな」

そんなミユウの言葉に、俺はようやく鏡をテーブルの上に置き、数分前に到着していた料理にようやく手を付け始める。

さて ミユウと奇妙な冒険をするようになってから、すでに半月ほどが経過していた。あれから特に変わったこともなく、俺たち二人はアテもない旅を続けている。

ああ、困ったことならたくさんあった。

まず第一にどうやって旅を続けていくか。旅には先立つものが必要なわけであるが、俺たちは手持ちの金などほとんど持っていないかった。だから今は、予想通り運動能力の高かった俺の体を最大限に利用し、色々なところで肉体労働をしながら路銀を稼いでいる。

え？ じゃあ、以前の俺たちはどうしてんだって？

……俺の記憶にはないが、かと言って、ミユウに聞く気にもなれない。

“ 殺して奪っちゃいましたあ えへっ ”

(つて返ってくるに決まっている)

想像すると背筋が寒くなる。 ……いや、もちろん殺して奪った、という方だぞ。決して音符記号に対してではない。むしろ、彼女が本当にそんなリアクションをしたなら、背筋が寒くなるというよりは、赤飯を炊いてお祝いをしなくてはならなくなる。

大人になったお祝いというやつだ。

……それが本当に大人の反応なのかどうかは別として。

とりあえず今、大事なものは、

「 やたらと格好いいぞ、俺 」

振り出しに戻る。

「……これ、なんででしょうか」

事件が起きたのは、食事も終盤にさしかかった頃だった。

「ん？」

ミュウが指し示した食べ物を見て、俺はゆっくりと頷くと、

「うむ。俺も最初から気になっていたのだ」

と、その彼女が指し示したものは、茶色の小さな豆みtainなもので、妙にネバネバ感のあるものだ。初めて見る食べ物なので、なかなか手を付けられずにいたのだが、ついにミュウがその話題に触れてきたわけである。

「ふむ……聞いてみるのが一番であろう」

俺はそう言つて、食堂の娘を呼ぶ。

「はい？」

そばかすだらけだが、なかなか可愛い娘である。……が、ミュウと同じく、やはり俺の守備範囲外であった。

「これは、一体なんなのだ？」

俺の問いに、娘はにこやかに答える。

「納豆、というものですよ」

と、娘が答えた。

「納豆？ ふむ……」

聞いたことがない。いや、記憶喪失な俺の記憶など、この世でもつともアテにならないもの一つに数えられるのであるが。

「名前だけは聞いたことがあります」

と、ミュウが言った。

「クセのある食べ物のようです」

「クセがある？」

その言葉に、俺の挑戦者魂が沸々と沸き出した。

クセがある＝一筋縄ではいかない＝強敵＝やるしかない！

「というわけで」

「どういわけですか？」

ミュウの突っ込み。

この半月の間に、彼女は少し……というか、かなりの成長を見せていた。もともとが真っ白であった分、ある程度染まりやすいところがあるのだろう。

ってことは、以前の俺も真っ白だったのか？　とも思ったが、それは違う。おそらく、以前の俺は彼女に何も教えようとしなかったのだ。

だから真っ白なままだった。

悪いことを教えなかっただけ、以前の俺には感謝したい。おそらく、命令に従わせることにしか興味がなかったのだろう。

(自分の悪口をそこまで言える人間ってのも少ないよな)

やはり俺はちょっと一筋縄ではいかない人間のような。

「ということで、チャレンジを　　って、待てっ！　なんでもう食べ始めてるのだッ！」

と、その納豆とやらをすでに食べ始めているミュウに、俺は強烈な突っ込みを入れてやった。

「？　……　申し訳ありません」

どうして怒られたのかわからなかったのだろう。ミュウは不思議そうな顔をしながらも、それでも怒られた以上は自分が悪いと思っただけ、手を止めて素直に謝ってくる。

(……やべ)

それを見て、またもや胸に痛みが走る。

「い、いや、勘違いするな。別に怒ったわけではないのだ」

俺は慌てて弁解した。

どうも、彼女相手の突っ込みは少々気を遣ってしまう。本気と冗談の区別がなかなかつかないのだ。

「謝らなくてよい。俺が悪かった」

「いえ、御主人様が悪いなどということは有り得ません」

「むう……」

こづいところはその簡単に直りそうもない。

(……まあいいか)

そう思い、俺も納豆とやらを食べ始めることにした。どうやら、ミュウが平然と食べているところを見ると、彼女が言うほどにクセのある食べ物ではないらしい。

(氣勢も削がれてしまったしな……) ぱくつ。

……ちゅどおおおおおん。

「御主人様、大丈夫ですか？」

「な……納豆め……貴様の顔は二度と忘れんぞ……」

未だに治らない胸のむかつきを気力で抑えながら、フラフラとした足取りの俺。

顔はげっそり。せつかくの美形が台無しで、街の娘も誰一人としてこのクールでビューティーな俺に声を掛けてこない。

……あ、それはミュウがいるからか。

ちなみにその原因は言わずと知れた

「納豆ですか」

「ああ……あいつだけは殺しても飽きたりん……いつかこの世から抹殺してやる」

まず、匂いで気付くべきであった。これは少なくとも、俺の食べる食べ物ではない、と。匂いを嗅ぐこともせず口に運んだのが、俺の敗因である。

「と……とにかく、今日はそろそろ宿を取って休もう。これ以上はどこかに行く気になれぬ……」

「街を歩いて回るのではなかったのですか？」

と、ミュウが俺の顔を伺うようにしている。

「ん？ 歩き回りたいのか？」

もしかして進歩したのか……と思いきや、

「いいえ。ただ、御主人様が予定を変更するのは珍しいので」

「それは以前の俺の話ではないか」

「そうですが……私にとつて、御主人様は御主人様ですので」

「……まあ、それもそうだな」

当然の話である。俺はもう、以前の記憶がないわけだし、どうやら性格も変わってしまったているみたいで、以前とは完全に別人なのだ割り切ってしまったているが……ずっと俺に付いている彼女としては、そう簡単に割り切るわけにもいかないだろう。

「まあ、とにかく予定変更である。俺にはもうそんな体力がない……」

「……そうですか」

と、ミュウは頷いた。

その日の夜、俺たちの行った食堂が一筋の光とともに消えてなくなったらしい。

死人や怪我人は何故か出なかったらしいが……世の中、不思議なこともあるものだ。

数日後。

「償うつたって、なかなか思いつかないものだな」

その街では特にやることも見当たらず、俺たちは次の街……いや、小規模な村のようだ……へと、足を進めていた。

これまで俺がやったことといえば、道行く老婆の荷物を持って上げようとしてひったくりに間違えられたり、男に追いかけられている少女を助けたら食い逃げ犯で、結局、逃げられてしまったり、道

を尋ねられて教えてあげようとしたら一緒に迷ってしまったり。

まあ、その程度のことしか出来ていない。

「難しいものだ」

「はい」

そうそう。つい最近、気付いたのだが、どうやら俺は方向音痴らしい。

ミュウが地図らしきものを購入して、なんとか位置を把握してくれているらしいが、まともに次の目的地に着いた試しがない。

これはきつと、以前の俺が目的もなく適当に旅をしていたからだろう。

と、こういうときだけちょっと責任転嫁してみる。

そんなこんなで俺とミュウはちょっとした森っぽいところへと差し掛かった。ここを抜けたところに、どうやら小さな村があるらしいのだが。

ん？ どうしてわざわざそんなところに行くのかって？ そりゃあ、そういうところの方が何かありそうな気がするではないか。だいたい、大きな街つてのはそれなりに治安とかもしっかりしていて俺みたいな個人が活躍できる場つてのは少ないのだ。

その点、こういう交通の便が悪く、あまり外との交流がない小規模な村だと、俺が必要とされる場合も多い……かもしれない、ということだ。

例えば、村の女の子が猛獣に襲われてて

「……きゃああああっ！ だっ、誰かつー！！」

「御主人様」

それで、こっちの方に走ってきたりなんかして。

「あっ！ その人っ！！ 助けてっ！！」

「御主人様」

で、その女の子は俺の後ろに隠れたりするわけだ。

「ねっ、ねえ！ ちょっと！ なにポーっとしてるのよっー！！」

「御主人様」

「……ん、なんだ？ ミュウ」

ミュウの呼びかけに俺は我に返る。そして、少し眉をひそめて彼女を見ると、

「今、俺はイメトレの真っ最中なのだ。邪魔をしてはいけないぞ」

「そうですか」

「ちよっ、ちよつと！」

その声に、俺は少し眉をひそめて、

「……ミュウ。少し静かにしてくれんか？」

「はい。では、この女性を排除しますね」

「ああ、そうだな　って」

ん？ 女性？

「こんなときに、なに言ってるのよ、あなたたちっ！」

「……おおっ!？」

背後から突然、見知らぬ女性の声がして、俺はびっくりする。

「なっ……なにいつ!？　いつの間に俺のバックを取ったのだ!?!」

「今さっきです」

ミュウが冷静に分析した。

「なっ、なんと！　この俺が心配すら感じ取れないとはッ!？」

俺が驚きの表情を浮かべると、ミュウは相変わらず冷静に、

「その女性は御主人様の真っ正面から走ってきましたけど」

その言葉に、俺はさらに驚く。

「な……なんとということだ！　まさか瞬間移動かっ!?!？」

「いえ、時速十五キロほどだと思えます。それと」

「ちよっ、ちよつと！　なに冷静に話してるのよっ!」

と、俺の背後にいた女性が叫び声を上げる。

「まっ、前！　目の前っ!！」

「御主人様の眼前に危険が迫ってます」

「危険？」

そこで俺は、ようやく視線を正面に移す。

「ぐるるるる……」

「……」

「なんだろうか？ 狼？ 野犬？」

茶色の体毛で、背骨の上にだけ白い毛が生えている、獠猛そうな牙を覗かせた謎の生物が俺の目の前にいた。

……どう見ても普通の犬ではない。かといって、狼というのとも違う気がする。

「地の七十六族ですね。通称“狂犬”とも呼ばれる獣魔です」

「獣魔？」

「はい」

「狂犬？」

「はい」

「……」

「……」

一瞬の沈黙の後、

「……のわあああああつ！！！！」

飛び上がる。

俺はようやく事態の深刻さに気付いてしまった。

せつかくのクールな第一印象（？）が台無しだったりするが、まあとりあえずそれどころではない。

「獣魔……狂犬って、めっちゃヤバそうではないかっ！！！！」

「ヤバイといえばヤバイかもしれない」

「なんでそんなものがこんなところにいるのだっ！！！！」

「聞いてみます？」

「……聞けるのか？」

「この前、虚ろな目で野良犬に一生懸命話しかけている人を見かけましたから」

「……それはイツちゃってるだけだ、馬鹿者！！！！」

「はい。申し訳ありません」

「ちよっと！ 漫才なんかやってる場合じゃないでしょっ！！！！」

と、背後の女性が怒鳴る。

助けてもらおうというのになかなか態度のでかい女性である。…

…というか、助けて欲しいのはこっちの方だ。

「ぐるるっ……………」

眼前にいる地の七十六族とやらは、今にもこちらに飛びかかってきそうな雰囲気であった。

これはちよつと真剣に考えなければならぬかもしれない。

「御主人様？ どうなさいます？」

と、ミュウは相変わらずの平然とした表情だ。

「うーむ…………少しは慌ててくれた方が可愛いのだが」

「慌てた方が可愛いですか？」

おっと声に出た。

失敗…………と思う間もなく、ミュウは急に慌てたようにしながら、

「ど、どどどどど、どーしましょう、御主人様あ」

「ミュウ…………表情が変わってないぞ」

彼女には悪いが、かなり不気味だった。

「申し訳ありません」

ミュウが瞬時にいつもの調子に戻る。

「あ…………あなたたち…………！」

背後の女性が…………なんだろう。どういふ表情をしているのかわからないが、呆れと疑惑と絶望と入り交じった…………あ、あと“怒り”？

「む…………」

俺は前方よりもむしろ後方に危険を察知して、急に真面目な顔になると、

「さて…………そこで、だ」

「どうなさいます？」

「どつすることが可能なのだ？」

と、俺はミュウに聞いた。

別に冷静なわけではないのだが、以前、ミュウに聞いた話…………どうやら、いくつかの村を焼き払ったらしいが…………を考えると、どう

やら俺はそれなりに強いらしい。獣魔を相手にしてどうなのかは知らないが、全く歯が立たないという事はないだろう。なんとかこの場を切り抜ける策ぐらひは考え出せるかもしれない。

と、そんなことを考えていた俺に、ミュウは躊躇うこともなく、「御主人様なら、なんでもできます」

「なんでも、と言われても困るのだが」

俺がそう言っただけで本当に困った顔を見ると、ミュウは頷いて、「では、これをお持ち下さい」

そう言っただけで、白い法衣の中から一振りの剣を取り出した。

「……ちよつと待て」

武器があるのはありがたい……のだが、どうにもその行動に不可解さを感じた俺は、そんなミュウの動きを制した。

「なんですか？」

「いや……な」

と、俺はミュウの手の中にある、刃渡りだけで百七十センチ以上もありそうな長剣を指さすと、

「ミュウ、お前……それを今、どこから取り出したのだ？」

「服の下からです」

「……それ、お前の身長より長いのではないか？」

「長いですけど」

「……どうやって収納していた？」

「……」

俺の言葉に、ミュウは首をかしげながら自分の服を見る。

そして 数秒後。

「不思議ですね」

「それだけか……」

こいつの服は四次元 ケットかなんかなのだろうか。

まあいい、とにかく

ピロリロリン

俺は刃渡り百七十センチ以上の長剣を手に

入れた！

というわけだ。

いや、でも振り回せるのか？

というか、それ以前に。

「……は？ なに？ もしかして、これで戦えというのか？」

「はい」

事も無げにミュウがそう答える。

「マジなのか？」

「マジです」

「……ふう」

その返答に、俺は一つため息を吐いた。

……マジなら仕方あるまい。

おかしな話だが、俺自身よりも彼女の方が俺のことを良く知っているのだ。その彼女がマジだというなら、おそらく、俺にはこの剣を扱ってどうにかできる力があるのだろう。

そう思って、俺はその異様に長い剣を鞘から抜き去る。

ちなみに最初の印象通り、俺の身長は百九十センチ以上あるため、これぐらいでもなかなかいいバランスだ。

しかも、妙に手にしっくりくる。おそらく、以前から俺が愛用している品なのだろう。刃こぼれもなく、なかなかの名剣のようだった。

（……以前から愛用、ねえ……）

これまでどんなことに利用されてきたのか……そう思うとぞっとするが、深いことは考えないようにした。

考えたら負けだ。

そうして、俺は狂犬……地の七十六族と対峙することになったのである。

俺は深刻な悩みを抱えていた。

「うーむ」

吸血鬼のような漆黒の装束に身を包み、獣魔を相手に長剣一本を振るい、涼しげな顔で事も無げに退ける。

「いやあ、びつくりしたわよ！　ちよつと山菜取りに森に入ったら、いきなりあれでしょう？」

ルックスはばつちりで長身細身、それでいて至ってクール。

「本当に助かったわ……もう、ダメかと思ってたしさ」

どう考えても女性にモテるタイプだろう。これで惚れない女がいたなら、そいつはとてつもなく感性が狂っているに違いあるまい。

「まあ、お礼なんて言うほど大層なこととはできないけど。せめてウチで晩御飯でも食べてってよ。母さんもきつと歓迎してくれるからさ」

ミュウは別格として……先ほど俺たちが助けた、リタとか名乗ったこの少女。

歳はおそらく十七歳か十八歳と言ったところだろう。少なくとも、外見的にミュウよりは年上で、まあ、平凡な村娘と言った感じの少女である。

ちよつとつるさいが　まあ、それはそれとして。

「ヴェスタさんって言ったっけ？　なんか“変な格好”しているわりには、すごく強いよね」。もうびつくりしちゃった」

これである。

どう見ても、命を助けてくださった超力ッコいいお兄様に対する態度ではない。

（もしかして俺、自分で思っているほどカッコよくないのでは）

ちなみに、先ほどの獣魔とやらは、あっさりと片が付いてしまった。

体が戦い方を覚えている、とでもいうのだろうか。自分で思うより早く体が動き、俺はアツという間に獣魔を退けることに成功した。

のである。まあ、おそらく以前の俺よりは相当ぎこちない動きだったのだろうが、それでも大したものだ。

と、自分で自分を誉めておくことにしよう。

「最初見たときは旅の芸人さんかと思っちゃった。そのカツコでお芝居でもするのかな、って」

「むっ……」

そう見えるのだろうか。

ちなみに今は、リタの案内で彼女の村へと向かっているところ。森の中をでたらめに逃げて回った（彼女談）わりには、案内はしっかりしている。少なくとも、俺が地図を見て歩き回るよりはよっぽど信用できるに違いない。

その方向感覚を少しは分けてもらいたいものである。

「でも芸人さんじゃないってことは」

と、森の中を歩きながら、リタが俺たちの方を見る。

怪訝そうに……俺を見て、そこからかなり視線が下がってミュウの方へ。

「……子連れ狼？」

どうしてそうなるのだ。

狼はなんとなくカツコいいからともかくとして、どう見ても子連れには見えないと思うのだが。っていうか、いくらミュウでもそこまで小さくはない。

「御主人様、子連れ狼ってなんですか？」

と、ミュウが俺の顔を見上げる。

「うむ。子連れ狼というのは、超絶美形で長身の男がミュウのような女の子を連れて旅をする物語のことだ」

「じゃあ、御主人様と私みたいなものですね」

そりゃそうだ。俺たちのことを言ったのだし。

「うーん、でも、その呼び方を見ると……」

と、リタがミュウの“御主人様”という言葉聞いて、首をかしげる。

「奴隷商人と、売られてきた可哀想な女の子？」

「……ぎくっ」

ちよつとだけドキツとする。そして、余計なことを言わないようにミュウに釘を刺そうと……思ったが、遅かった。

「ほとんど合ってますね」

「え？」

もちろん冗談で言ったつもりのリタが、ミュウの返答にびっくりしたような顔をする。

「だって、私は御主人様のどれ もがっ」

「な……なんでもないぞっ！ わはははははッ！！」

慌ててミュウの口を塞いだ俺は、かなりぎこちない笑いをリタへと向ける。

「……？」

幸い、リタにはミュウの言葉がしつかり届いていなかったらしく、不思議そうな顔で俺たちを見ているだけだった。

「……まあ、要するに、だ」

また余計な話にならないように、俺はコホン、と咳払いをして、「俺はとある大金持ちなちりめん問屋の御曹司でな。ミュウはお供の者なのだよ」

なんか水 黄門みたいだな……と、リタが思ったかどうかは定かではない。

その代わり、

「ふーん……大金持ちの御曹司が、お供の者を一人だけ連れて旅をしているわけだ」

ちよつとだけ疑わしげであった。が、ここで怯んでは負けである。

「うむ。変わり者だと良く言われるぞ」

「ああ、それは納得」

と、リタが本気で納得顔をする。

(……ん?)

なんか彼女の言い様はどこか引っかけたが……まあ、良しとし

よう。

考えたら負けだ。

「まあ、それにしても……また、奇妙な取り合わせよね」

リタはそう言って、再び、俺とミュウの二人を交互に見つめる。

「何を言うか。美男美女の組み合わせでピッタリではないか」

と、俺が真顔で言うのと、リタはうーん、と唸って、

「否定はしないけど……ヴェスタさんって、顔は二枚目だけど、性格は三枚目にしか思えないのよねえ」

「な、なにいいいいっ!!」

大シヨック。

まさか、俺にそんな欠点があるうとは。

っていうか、このクールでニヒルな俺のどこが三枚目なのだ？

……と、アホみたいなことを考えているから三枚目なのだろう。

(また一人で突っ込んでしまった……)

「ミュウちゃんは文句なく可愛いわよね」

「どうもありがとうございます」

特別な反応をすることもなく、ミュウがただそう言って頭を下げる。

うーむ。いまいち反応がパツとしない。

……が、こういうちょっと人形みたいなところが、かえって可愛く映るのかもしれない。リタはそんなミュウの反応をにこやかに見つめているのだ。

俺も今度ミュウみたいにやってみることに やっぱ、やめとこ

う。苦情が来たら困る。

「でもおかしな話よねえ」

リタは相変わらず納得できない顔で言った。

「御主人様が付き人を庇うように戦うってんだから」

「……」

リタの村へはそこから二十分も歩かずに到着することができた。

その間、俺たちは何かと彼女に突っ込まれ続けていたが、俺の素晴らしい話術と臨機応変な対応で何とか事なきを得た。

ただ何故か、彼女の俺たちを見る視線が、徐々に疑問に満ちたものになっていたのだが……まあ、気のせいであろう。

とにかく、すぐさま向かったリタの家では、彼女の言葉通り、歓迎を受けた。時間も時間だったので、俺たちはここで一晩の宿を借りることにし、今はテーブルについて夕食をいただくところとしていくところである。

「さ……遠慮なく、どんどん食べてよね」

と、食事を運んできたリタが笑顔でそう言った。その隣では、彼女の母親も同じように微笑みを浮かべている。

彼女はどうかやら母親と二人暮らしらしく、この、俺たちの前に出ている夕食も、彼女が母親と二人並んで作ったものだ。

なかなか微笑ましい光景ではある。

ちなみに二人ともそっくりで、並んでいると姉妹のように見える親子だった。

「ふむ……それでは頂くとするか」

そして、俺はその夕食へと目を向ける。

森に囲まれた村だけあって、メニューはそんな感じの山菜系が中心だった。いわゆる豪勢な食事というには遠いかもしれないが、これはこれでなかなか食欲をそそる。

「ヴェスタさんは旅のお方なんですってね」

と、食事を始めるとともに、リタの母親がそう質問してきた。

「む……う、うむ。そうだが」

口の中の物を呑み込みつつ、そう答える。

どうかやら食事の準備をしながら、リタが俺たちのことを説明したらしい。

……が、どんな説明をしたか疑わしいもので、

「ワケありの旅とかで……」

と、母親がミュウの方を見る。

「……………」
その視線に、ミュウが不思議そうに母親を見て、それから俺の方を見る。

「……………」
「どうやら、金持ちの御曹司&その供の者……………」という構図は、全く信用されなかったらしい。

「そりゃそうか。」

「親子という感じにはあまり見えませんが……………」
「あ、いえ、あまり詮索してはいけませんね」

「……………」

やはり親子が一番近いのか？

確かに……………俺は結構年齢不詳な外見をしているし、百歩以上譲るならば、見ようによっては親子に見えなくもないかもしれない。

「が、それはそれでなかなか不本意ではある。」

「……………」

(……………ん?)

俺はふと……………ミュウがこちらをじいっと見つめていることに気付いた。

ちなみに俺たちがついてるのは長方形の四角いテーブルで、俺の隣にミュウ、そして向かい側にリタ親子が座っているわけだから、彼女が食事もせずになんかこちらを向いているのは、

“ 食事の途中、ちよっとだけ物憂げに考え事してみたの。だって年頃の女の子だもん。えへっ ”

とか、そういう理由でないことだけは確かである。

明らかに俺のこのことを見ているのであろう。

「なんだ？ どうしたのだ、ミュウ」

もちろん食事をする手は止まっている。

今日は朝を食べてから何も口にしていなかったんで、彼女だって普通に腹が減っているはずだが。

「御主人様、あの……………」

ミュウがそう言って、少しだけ俺から視線をずらす。

「ん？」

つられてその視線を追う。

その視線はテーブルの上　中央に置いてある“とある物体”へと注がれた。

(…………ん？　お…………？)

それを見た瞬間、嫌な記憶が蘇る。

(……………これは……………これは“納豆”ではないかあああああつ！！)

そう。そこにあっただのは、思い出したくもない、俺の宿敵、“納豆”であった。

(のおおおお。ここにも現れおつたか！)

ここにも出現したことを考えると、どうやらそれは、この地方特有の食べ物ようだ。食卓には欠かせない食べ物なのだろう。

(お、おのれ、性懲りもなく……………)

俺は今すぐにでもそれを遠ざけたい気分ではあったが……………リタやその母親の手前、そういうわけにもいくまい。

幸い、今まで気付かなかったことからわかるように、そんなに匂いが気になる距離でもなかったし、

(ま、まあ、仕方あるまい……………)

ここは黙って目をつぶることにした。

……………と、思ったのだが、

「敵……………」

……………ん？」

ミュウがまだその納豆を見つめていた。

……………リタとその母親は二人で何やら談笑していて、こっちを見ていない。

「おい、ミュウ……………」

「御主人様の敵、ですね……………」

きiiiiiiii……………ん。

「？」

「え？　なにかしら……………」

急に奇妙な音が辺りに響いた。

それは耳障りなほど大きくはないが、人の耳には充分に聞き取れるぐらいの音で……リタ親子が天井や周りを見回す。

(ぬお……)

だが、俺はすぐさま気付いていた。

それが、ミュウの発している音だということに。

「おっ、おい、ミュウ……」

と、俺が言いかけた瞬間。

……バシユツ!!!

一筋の光がミュウの眼前から迸った。

「きゃっ!?!」

「えっ……なにっ……!?!」

リタ親子が突然の光に顔を覆う。

「……」

そして、俺は一瞬の後に訪れたその光景を、少し啞然とした顔で見つめていた。

しゅうつうつう……

テーブルから微かに煙が上がっている。

(……はい?)

煙の上があった部分にはぽっかりと穴が空いていて……もちろんそれは、例の“納豆”が置いてあった場所で……納豆が乗せてあった皿は、跡形もなく消え去っていたのである。

(……なんだ? 何の冗談?)

なんとなく、俺の目には、今、ミュウが怪しげな光線を放って、テーブル上の納豆を消し去ったように見えたが

(ま……まさか、な。わははは……)

そんな非現実的な話があるはずがないではないか。ミュウのような普通の……いや、普通とはいえないが、そんな少女が目から光線を放って、物体を消滅させるなんてこと。

(そ、そんなことがあるはずが……)

「消滅させました」

(あるはずが……)

「御主人様？ これでよろしいですか？」

と、ミュウがいつもの表情でこちらを見る。

同時に、リタ親子が怪訝そうな顔でこちらに注目していた。

(そ、そういえば)

『な……納豆め……貴様の顔は二度と忘れんぞ……』

『……あいつだけは殺しても殺したりん……いつかこの世から抹殺してやる』

数日前の自分の言葉が頭を過ぎって、俺の頭は瞬時に回転を止めた。

(は……ははは……)

そういやミュウって“人間”じゃなくて“契約者”だったんだな……と、俺は真っ白になった頭で思い出していた。

そして、心に誓ったこと。

(ミュウには……二度と余計なことを言わないようにしよう……)

いや、本気で。

その3

それにしても奇妙である。

俺は確か、償いの旅をしている途中で、この村に立ち寄ったのは、俺が何かの役に立てないか、と思ったからで……まあ、特に何もなければ、ここは素通りするつもりであった。

それなのに　今のこの状況。確かに、役に立ってないというわけではないのだろうが、なんとなく、俺が望んでいた形とは違っているような気がする。

そう。俺はこういうのを望んでいたわけではないのだ。

え？　何をやっているのかって？

まあ、色々と言い様はあるのだが、端的に述べるとこういうことだ。

「ヴェスタのおじちゃん！　こっち来てよーっ！！」

「お、おじちゃんではないぞ……」

子守り、である。

〈子供好きの大量殺戮者ジェノサイダー〉

「なんか違うと思わんか、ミュウ」

「なにがですか？」

いかん。前回とほとんど同じ出だしだ。

が。幸い（？）状況は著しく違っている。

「だから、だな……」

と、説明しかけた俺の言葉は、
ぐにっ！

横からの突然の攻撃によって遮られる。

「きゃははははっ！ おじちゃん、変な顔ーっ！」

「それは君が俺の顔を歪めているからだぞ、お嬢ちゃん
ぐいっ、ぐいっ！！

「どっどっっ！ はいやあーっ！ー！」

「坊や。俺の髪は手綱ではないよ」

ついでに木の枝で尻を叩くのもやめてくれんか。

「おじちゃん、おじちゃん！ 私とも遊んでよーっ！ー！」

「……だから、おじちゃんではないと言っに……」

これではクールで二ヒルな俺の印象が台無し。ついでにせっかく
今朝、時間をかけて整えた髪も、俺のビューティフルなブラックの
装束も台無しだ。

（な、何故、俺がこのようなことを……）

ついでに、子供が相手では俺の高度で超ワンドフルな冗談も全く
通じないし、完全に主導権を取られっぱなしであった。

これではおそらくミュウも、俺のことを呆れて見ているであ
らう。

と、同じように子守りをさせられているミュウの方を見ると、

「お姉ちゃん、お姉ちゃん。そこ、違うよー！」

「？」

「そこは、そうじゃなくて、こっやって……」

「こっですか？」

「……」

そこには……子供たち（主に女の子）に囲まれて、花の冠を作っ
ているミュウの姿があった。

それを見て、俺は愕然とする。

(……………なんなのだ、この差はああああ!?)

しかもミュウはいつもながらの表情で、別に子供たちに愛想を振りまいているわけでもないのだが、絶大な人気を得ているらしい見たところ、髪を引っ張られていることもないし、何か悪戯されるような気配もない。

(しかも、俺は“おじちゃん”なのに、あいつは“お姉ちゃん”なのか……………)

そりゃあ、ミュウの外見を見て“おばちゃん”だなんて言う奴は彼女の實の甥か姪だけであろうが、それにしても、この差はあんまりといえばあんまりであろう。

(微笑ましいといえれば微笑ましいのだが……………)

心なしか……………俺の単なる希望的観測かもしれないが、ミュウも少しだけ楽しんでいるように見える。もしそうだとすれば、それは俺としても、非常に喜ばしいのだ……………が。

「おじちゃん！ おじちゃん！」

(こ……………このやり場のない怒りは……………)

「おじちゃん、もっと速く走れよー！」

(どこへぶつければいいのだ……………)

「きやはははは！ おじちゃん、ブタ、ブターっ!!！」

「……………ブタでもおじちゃんでもないぞ〜」

と言いつつ、笑顔でこんなことを続けている俺は、ひよっとすると、とんでもない子供好きなのかもしれない。

(だが、所詮俺はブタ……………)

これではせつかくの笑顔も報われまい。

と、そこへ、

「御主人様？」

「ん？」

子供を背に乗せて四つ足でズリズリと走り回っていた俺は、目の前までやってきたミュウに気付いて足を止める。

彼女はさっきまで花の冠とやらを作っていたはずだが……………もう終

わったのだろうか。

(丁度良い……そろそろ助けてもらわねば、身がもたぬ……)

俺はそう思い、四つん這いの体勢のままゆっくりと彼女を見上げ、

「おお、丁度良いところに」

その口にすると同様だった。

ぽふっ

「……ん？」

彼女の手にしていた何かが、ゆっくりと俺の頭の上に乗せられる。同時に、微かな心地よい香りが周りに溢れ出した。

(これは……)

それが、先ほど彼女が作っていた花の冠だということに気付くまで、それほど時間はかからなかった。

(花の冠……か)

「お似合いです、御主人様」

そう言って、ミュウは……微笑みこそしなかったが、なんとなく、にこやかな雰囲気を漂わせている。ように思えた。

……勘違いだろうか？

勘違いではないと思いたい。

(ミュウ……)

と、俺は少し感動にも似た気持ちを覚えていたのだが、

「……御主人様？ お気に召しませんでしたか？」

黙って見上げる俺に、ミュウは少しだけ表情を堅くすると、その一瞬の無言が肯定だと思ったのか、

「申し訳ありません」

そう言って、俺の頭の上の冠に手を伸ばす。

「あ、あー、ちょっと待つのだ」

と、俺はミュウの手を制止する。

彼女の作った冠は、子供たちが作ったそれよりもボロボロで不格好ではあったが、気に入らないなんてことは、天地神明に誓って有り得ない。

だから、こちらを見つめるミュウに向かって、俺は笑顔を浮かべ、
「気に入った。ありがとう」

「は……はい」

俺の返答に、ミュウは少し驚いた顔をして

(お……)

そして、今度こそ、少しだけ微笑んだのである。

(やっぱ、笑えない……ってわけではないのだな……)

それを再確認して、俺はますます嬉しかった。

「おじちゃんっ！ 止まっちゃダメだってばーっ！」

「おじちゃん、ブターっ」

相変わらず、背中に乗っている子供や、追いついてきた少女が俺の顔を変形させたりなんだりしてはいたし、

「あ……いえ、御主人様が私ごときに礼などおっしゃる必要はありません」

ミュウもすぐさま、思い出したようにいつもの態度を復活させてしまったが、

(……ま、良しとするか……)

なんとなく、何もかもを許せる気分で、俺はその日の“お勤め”を終えることが出来たのであった。

「ごめんねー、ヴェスタさん。子守りなんかさせちゃって」

と、その日、夕食を終えた席で突然、リタが謝ってきた。

ちなみに、ここに滞在している一週間の間、俺たちはずっとこの家に世話になっているのだが、

「うむ。まあ、タダで世話になっているのだ。このぐらいは仕方あるまい」

俺は食後に出された牛乳を飲み干し、そう答えると、

「しかし、リタも大変だな。あれだけの子供を産んで養うとは」

「私の子供じゃないわよ……」

速攻で突っ込みが入る。

「おう……そうであったか」

てつきり、あそこにいた総勢十人ほどの子供は、全員彼女の子供だと思っていた。

「違ったんですか？」

と、ミュウも怪訝そうに言う。

そりゃそうだ。彼女に言われて世話をしていたのだから、彼女の子供だと思うのは至って正常な反応であろう。

……そうだろう？

「ミュウちゃんまで……」

俺の言葉はどう受け止めたか知らないが、ミュウの方は百パーセント本気だということに気付いたのだろう。リタは、ふうっ……と、大きなため息をついて、

「あのね。私は子供なんていないし、まして結婚もしていないわ。

見たらわかるでしょう？」

「とすると、あれはリタの」

「言っとくけど、弟でも妹でもないわよ」

先を越されてしまった。

「ふーむ、それはそうと……」

俺はキョロキョロと辺りを見回して、

「母上はどこへ行ったのだ？」

今朝の朝食の席で見掛けてから一度も会っていない。まあ、昼食は弁当で、ほとんどを外で過ごしていたから、会っていないのもそれほど不思議ではないのだが……それでも、この時間にリタの母親がいないのは初めてであった。

「ああ、母さん？ 母さんなら村の会合よ」

「会合？」

と、俺が聞き返すと、ミュウが横から、

「御主人様、会合というのは、相談、討議などのために人が集まることです」

すぐさまフォローが入る。

……というか、別に意味がわからなかったわけではないのだが
まあ、いいか。

と、リタはそんな俺の気持ちに気付いたのか、クスクスと笑い声を漏らすと、

「ほんと……あなたたちって奇妙な組み合わせよね」

「む……？　そうか？」

確かに、普通でない自覚はあるのだが、そんなに奇妙奇天烈に映っているのだろうか。少なくとも俺自身は、ちよつとクールでニヒル、納豆嫌いで子供好きな、単なる善良一般市民のつもりなのだが。「そうよ。でも、いいコンビだと思うわ」

リタが笑いながら答える。

「いいえ」

と、そんなリタの言葉に、ミュウが夕食を食べる手を急に止めて、「コンビという言葉は同列の方に対して使用される言葉ですので、御主人様に対して失礼です。私は御主人様の」

「！？」

ヤバイ。このパターンはすでに経験済みだ。

(のおおおっ！　待てっ！！)

俺は手にしていたスプーンをカシャン！　と、放り投げ、慌ててミュウの口を塞ごうとする。

……が、

「御主人様の従者ですので」

ピタッ。

俺はミュウの口元に手を伸ばした格好で止まった。

(……ほっ)

どうやら喜ばしいことに、ミュウには学習能力があるらしい(当たり前前か)。

……というか、遊ばれてるようにも思えるのは気のせいか？

「御主人様？」

不自然な格好で停止した俺を、ミュウが怪訝そうな顔で見上げて

くる。

「ヴェスタさん。そんなに焦らなくてもいいわよ」

と、そんな様子を見ていたリタが、おかしそうにしながら、

「なんかミュウちゃんが自分のこと、ヴェスタさんの奴隷だとか言っているのは、何回も聞いているから」

「なっ、なにいいいいっ！！！？」

ずざざざざざっ！！！ 椅子ごと後ろに下がる音

ごんっ！！ 勢い余って壁に頭を打ちつけた音

「~~~~~」

「ちよっ、ちよつと、ヴェスタさん……大丈夫？」

リタがちよつと心配そうな顔をするが、今の俺はそれどころではない。後頭部を片手で押さえつつ、目に少し涙を浮かべながら、ぶん、ぶん、と手を左右に振って、

「まっ、待て、俺は無実だっ！ そりゃあ、目が覚めたら可愛い女の子が目の前にいたらいいな、などとは思ったが、それとこれとは全く別の問題ではないかっ！！！」

「あ、あのね……私はまだ何も言っただけ」

「やっ、やめるのだっ！！ そんな犯罪者を見るような目で俺を見ないでくれええええっ！！」

「……」

そんな俺の姿を、リタは少し呆れたような顔で見ながら、

「……ヴェスタさんっていつもこう？」

そう言っつて、ミュウの方を伺う。

「はい」

ミュウは頷いて、

「二十五日ほど前からこうです」

「に、二十五日って……それまた随分、具体的ね」

「はい。それは」

そう言っつて、ミュウがリタに俺の記憶喪失のことを説明する。

そして、その頃には、

「だいたい、普段の態度見てれば、ヴェスタさんがミュウちゃんのことをどういう風に扱ってるかぐらい、簡単に想像つくわよ。……少なくとも、“奴隷”だなんて扱いを受けていないことぐらいね」という、リタの言葉もあって、俺はなんとか落ち着きを取り戻していた。……どうやら、彼女の言葉からすると、俺は牢獄に入らずに済みそうである。

「それにしても、記憶喪失ねえ……」

ちなみに……当然だが、ミュウがそれを彼女に説明する前には、ちゃんと俺の許可を求めてきた。隠す必要も特になかったので、もちろん許可したのだが。

「ヴェスタさんも大変なのね、色々」と

「大変なのか？」

「他人事みたいに言わないでよ」

「うむ……そう言われても困るな」

正直、記憶喪失なことについては、あまり大変だとは思っていない。問題は、記憶喪失以前の俺がやってきたことであって、記憶喪失になったこと自体は特に……というか、以前の俺がとんでもない悪人だったということを考えると、記憶を失ったことは逆に歓迎だったといえるであろう。

「でも、ミュウちゃんの言葉からすると、大分、性格が変わったみたいだけど？」

と、すでに食事を終えたりタは（俺たちも終わっていたのであるが）、テーブル上の食器をとりあえず重ねつつ、

「以前のヴェスタさんって、どんな人だったのかしらね」

「……」

「それは」

と、ミュウが再び俺の方を見た。許可を求めている……のかと思いきや、

「私の口からはお話できません」

俺の返答を待たずして、彼女の口から飛び出したのは拒否の言葉

だった。

「…………え？ どうして？」

と、リタが不思議そうな顔をする。

(…………気を遣っているのだろうか)

俺は驚きとともにミユウを見る。

彼女がそこまで考えているのかどうかはわからないが、気軽に話してはいけないことだというのは理解しているようであった。

「どうして？」

と、今度はリタが俺の方を見る。

それは単なる好奇心から来る質問であったのだろうか、

「…………」

俺としても、以前のことについて詳細に話す気にはなれなかった。それを話してしまえば…………いくら、今の俺が以前とは別人だと言ったところで、彼女は俺のことを許しはしないだろう。

「すまないが、詳しい話はできない」

そこで、俺は少し真剣な顔になると、

「ただ、一つだけ言えるのは…………俺が旅をしている理由は、以前の自分の罪を償うため…………ということぐらいだ」

とだけ言った。

もちろん、そんなこと自体、本当は口にするべきではないのだろうが…………このリタという少女には色々と世話になっているし、それぐらいのことは言ってもバチは当たらないだろうと思っただのである。そんな俺の表情から、リタも何かを読みとったのだろう。

「…………そっか。わかった、もう聞かない」

それ以上、そのことについて追求しようとはしなかった。そして、すぐに陽気な口調に戻ると、

「ま、大事なのは今だしね。少なくとも、今のヴェスタさんは悪い人じゃないわ、絶対」

「一日一善がモットーであるからな」

いや、本当に。善人であるということに関してならば、多少、自

信アリである。

そんな俺の言葉にリタは笑って、

「いや、でもさ、正直なところ、どうなの？」

と、ミュウの方を見る。

「ミュウちゃんはずっと前からヴェスタさんと一緒にいるのよね？」

「はい」

ミュウが頷くと、リタは興味津々の表情で、

「じゃあさ、じゃあさ。今のヴェスタさんと以前のヴェスタさんって、どっちがカッコ良かった？」

(ぐはあ……………)

なんとという質問を。

確かに、以前の俺の性格自体に触れる質問ではないが、これはこれで酷な質問ではある。

“えゝ、そりゃあ前の御主人様に決まってるじゃん”

とか、音符記号付きで言われたら、俺はショックで半年は立ち直れないであろう。……………音符が付いてなかったら五ヶ月半ぐらいで済むかもしれないが。

(……………あまり変わらん)

が、幸い(当然?)ミュウがそんな返答をすることはなく、

「私ごときが御主人様のことを評するなど、許されることではありませんから」

相変わらずの言葉でそう返したただけであった。

(……………ミュウならば、当然、そう答えるだろうな)

少しだけ、“今の方がいい”なんて答えも心のどこかで期待していたのであるが、まあ、これは仕方のないことであろう。

「……………なんだ。ミュウちゃん、相変わらず生真面目ね」

と、リタ。

ミュウのことを“生真面目”という単純な言葉で括っていいのかわろは、ちょっとだけ疑問であるが。

(生真面目というよりは……………)

と思っただが、的確な言葉が思い浮かばない。

(……やっぱ、生真面目でいいのか?)

それとはどこか違うと思うのだが。

などと、俺が自分の語彙不足を勝手に悩んでいると、

「でも……」

一瞬の間を置いて、ミュウが今度は自分から口を開いた。

「？」

俺とリタがもう一度注目すると、ミュウは俺の方に真っ直ぐな視線を向けて、

「御主人様はお花を受け取ってくださいました」

「……」

「花？」

リタは不思議そうにそう言って……ふと、近くの棚に置いてある花の冠に目を止めた。もちろん、いくらなんでもずっとかぶっておくわけにもいかないの、先ほど、そこに置いといたのである。

「……なるほど」

そして、リタは納得したように頷くと、ニコツと笑顔を浮かべて、俺の方を見ると、

「良かったわね、ヴェスタさん。少なくとも、悪くなったとは思われてないみたいで」

「……そ、そうなのか？」

と、俺はちよつと半信半疑にリタを見る。

もしもそれが本当だとするなら……ちよつと嬉しい。それはつまり、今の俺の教育方針(?)が嫌がられていない、ということであるからして。

「ヴェスタさん……なんか、幸せそうね」

「……お？」

気が付くと、リタがテーブルに肘を付いて、微笑ましそうにこっちを見つめていた。

「そんな風に見えるのか？」

「それ以外には見えないわよ？」

「むう」

俺はそんなに顔に出やすいタイプなのだろうか。

だが、今日は昼間のことといい、嬉しいことが二つもあったわけだから、いくらクールな俺であるとはいえ、多少は顔に出てしまっているかもしれない。

「……」

と、リタは一人納得している俺を、笑顔を浮かべたままですばらく見つめていた。

が、やがて、

「ふう……」

一つ、憂鬱そうに息を吐いた。

「？」

そのため息に、場の雰囲気少し変わった……ように思える。

(……なんだ?)

不思議に思ったが、その原因はすぐ目の前にあった。リタの表情から笑顔が消え、代わりに、視線がテーブル上に落ち、少し気落ちしたようなものに変わっていたのである。

「なんか……あなたたち見ると、罪悪感を感じちゃうわ」

「……む？ なにがだ？」

当然のように聞き返す。別に、彼女が俺たちに対して何か悪いことをしたとは思えないのだが。

「……うーん……」

リタはそのまま、しばらく何事か考えるようにしていたが、

「……もうダメ。やっぱり隠しておけない……」

そう言って、顔を上げた。

「？」

「？」

俺たちがクエスチョンマークでシンクロしていると、リタはちょっと苦笑して、

「えつとね。……怒らないで聞いてほしいんだけど」
「怒る？」

「ええ。隠していたことがあるの。とても大事なこと」
「隠していたこと？」

俺は眉をひそめてリタを見る。彼女の表情は真剣そのもので、その視線は真っ直ぐに俺へと向けられていた。

(むづ……?)

こんな真剣な顔で言う“隠していたこと”というのは、一体、なんであるのか？

そりゃあ、最近までサンタクロースを信じていたとか、実は去年までおねしょをしていたとか、隠していてもおかしくないことはたくさん予想できるが、おそらく、彼女の言い方からして、なにか俺に関係のあることなのであろう。

(ふーむ……)

少し考えてみて……俺はハツとした。

(ま、まさか……)

バツ、と顔を上げ、リタの顔をもう一度見る。

真っ直ぐに向けられた真剣な瞳。そして、なにか言いにくそうにしている雰囲気。

とすると、これは

(あ、愛の告白かっ!?)

そう思って見てみると、なんかそんな感じに見えてくるのではないか。

(そ、それはまずい！ まずいぞっ!)

俺は焦って、すぐさま声を張り上げた。

「ま、ままままま、待つのだ、リタっ!」

両手を前に出し、彼女に対して制止のポーズを取る。

「? ……なに？」

その行動に、リタが不思議そうな顔をして、紡ごうとしていた言葉を止める。

ひとまず先手を打てたことにホツとしながら、俺は言った。

「な……なんとというか、だな……。う、うむ。何も言わなくても、リタの言いたいことはわかっているのだ」

「わかってる？」

リタが驚いた顔をする。

……半信半疑の表情だ。

「う、うむ……その、それで、だな……」

と、俺は両手をゆっくりと下ろすと、こちらを見つめてくるリタから視線を逸らし、視線を泳がせながら言葉を懸命に探す。

以前の俺はどうだったか知らないが、少なくとも、俺自身の記憶の中では、女性に告白された、ということは一度たりともないのだ。どう答えればいいか、すぐに思いつくはずもない。

「……そ、そう。俺はだな……まだ十日ほどの付き合いたが、リタのことは非常に気に入っている。うむ、とても大切な“友人”だと思っっているわけだ」

友人、を強調する。

まあ、断るときの基本というやつであろう。

……え？ どうして断るのか、って？

(そりゃあ……俺が普通の平凡な男だったら断りはしないぞ)と、思う。

リタは基本的に明るくていい娘だし、料理は出来るし、面倒見はいいし……悪いところはない。特に女性のタイプにこだわりがあったりしない限り、欠点はほとんどないと言ってもいいだろう。そして、俺にはそれほどこだわりはない。本当の話、例えば俺が、単なるこの村の一員だったとしたら、決して断りはせず、彼女の愛を素直に受け入れていただろう。

(けど、俺は普通の平凡な男ではないのだ……)

そう。俺は……罪人だ。そして、それを償うために、これからも旅を続けなければならない。

そう心に誓ったのだ。

そして、それに彼女を付き合わせるといふのは……あまりに酷な話である。

俺はそう思い、

「さっきも言ったように、俺は償いの旅をしている途中でな。俺が出来る範囲で、今、現在も、そしてこれからも人々の役に立っていないかなければならない……役に立っていきたくて思っている」

言うべき言葉が見つかって、大分落ち着いてきた。

「……」

リタは真剣な顔で俺の言葉を聞いている。かなり遠回しな言い方ではあったが、おそらく、俺の言いたいことは彼女に伝わっているであろう。

「で、あるから」

と、俺はようやくリタの顔に視線を戻して、

「その先の言葉は言うてはならん」

そう言い切った。

なんかちよつとだけカツコいいかもしれない。

「……」

リタは俺の言葉が終わってから、じつと俺の顔を見つめていた。真剣な表情である。

(すまぬ、リタ……)

俺は心の中で彼女に謝罪した。

だが、俺も男である。一度決めたことは、最後まで実行しなければならなかった。ここで、のほほんと安穩とした一生を送るわけにはいかないのである。

「……ふう」

長い沈黙の後……リタが大きな息を一つ吐いた。

……気持ちの整理がついたのであるか？

一度、小さく首を振って、再び、ピタリと俺の顔に視線を止める
と、

「普段は三枚目だけど……やっぱ、本当は二枚目かもね」

そう言って、リタは少し冗談っぽい笑みを浮かべると、
「ずっとそんな感じだったら、もしかしたら惚れちゃってたかも」
そうだろう、そうだろう。

俺自身、今のセリフは決まったと思った。彼女が惚れてもおかし
くないぐらい

(……もしかしたら?)

ふと……そこで、俺は彼女の言葉に不自然な部分を発見して、思
考を止めた。

(もしかしたら惚れちゃってた“かも”と言ったのか、今?)
それはおかしい。絶対におかしい。

すでに惚れてるはずの人間が口にする言葉ではない。

(ど……どうということなのだ?)

俺の頭は再び混乱し始めていた。

聞き間違えかと思っただが、まさかそんなはずはない。一字一句、
見逃さずに聞き取ったはずだ。

「でも……まさか、気付いていたなんてね」

そんな俺の混乱に気付いた様子もなく、リタはそう言つと、

「それに、躊躇いもせずにそんな危険なことを引き受けてくれるな
んて……」

少し感動したように胸の前で両手を合わせ、ゆっくりと目を閉じ
た。

(き……危険?)

いや、そりゃあ旅を続けることはそれなりに危険なことであるが、
引き受けたというよりは、自分でそう決心したというか。

「でも……気を付けてね、ヴェスタさん」

と、リタは胸の前で手を組んだまま、目を開いて、

「ヴェスタさんが強いのはわかってるけど……相手は人魔だから。
どんな力を持つてるかもわからないし」

(……はい?)

相手? 人魔? ……なんだそれは? まるで俺が人魔と戦うみ

たいな口振りではないか。そんなの冗談ではない。人魔ともなれば、どんなに下級でもいつかの狂犬とはわけが違う。

(な、何がどうなっているのだ……?)

その後、リタの母親が帰ってきて、ようやく真相が判明した。

彼女らの話に寄ると……どうやらこの村は、少し前から近くに住み着いた人魔によって、脅かされているらしいのだ。毎月二回、定期的に金品や食料を要求され、近くに大きな街もなく、森に囲まれたこの村の人々は大人しくその言うことを聞くしかなかったらしい。デビルバスターを雇おうにも、その金がない。領主はこんな小さな村ごときのために動いてはくれない。

……そこへ現れたのが、俺たちというわけである。

リタの発言から、俺が獣魔を追い払ったことが広まり、この人ならあるいは、と思ったそうだ。だが、本当のことを話せば、すぐに出ていってしまうかもしれない。あるいは、仕事と称して法外な金額を要求されるかもしれない。

先ほども言ったように、この村にそんな金はないわけで……そこで考えついたのが、半月に一回、人魔が金品や食料を要求に来るときまでそのことを隠しておき、俺と人魔をバツタリと引き合わせる、という作戦だ。

相手の人魔は相当警戒心の強い奴らしく、俺は見た目、結構強そうで武器も持つてるわけだから、自然と戦いになるのではないか、という読み。つまりは“バツタリでドッキリ！ 人魔VS超絶美形青年、壮絶バトル！”作戦だったというわけである。

(なるほど……)

ちなみに作戦名は俺がたった今付けた。

で……リタの母親が行った今日の会合とやらは、実を言うと俺に真相を話すべきかどうか、ということだったらしい。村人たちも、昼間、子供たちの面倒を見ている俺たちの姿に、隠しているのが辛くなってきて、やはり話すべきだ、という意見が増えてきたそう。

なんだかんだで、この村は気のいい人たちの集まりだな……というのはとりあえず置いておこう。

つまり、リタの言う“隠してたこと”というのは、こういうことだったのである。

(た、確かに……俺の返答との噛み合いもしっかりしているではないか……)

俺がリタのことを“大事な友人”だと言ったり、“償いの旅をしている”と言ったりしたことも、つまりは“そんなことをわざわざ言わなくても、引き受けるに決まってるだろう”という意味に取られてしまったらしい。

いや、別に“愛の告白”が勘違いだったことは良いのだが。

問題は

(……ぬおおおおっ！ もはや断れる状況ではないではないかっ！！)

リタに対してあれだけカッコいいことを言い(単なる勘違いであったが)、俺が秘密を察してて、さらにそれを快諾した、という美談(?)は、この夜……ほんの一時間ほどの間に、もう村中に広まってしまっている。

もはや後戻りの出来る状況ではなかった。

(……どーするのだ……人魔となど、戦えるのか……)

いくら剣の扱いが上手いとはいえ、俺は所詮人間だ。人魔とは基本的に能力が違う。

そりゃあ、デビルバスターなんて人々がいるぐらいだ。人が人魔を退治するのは、無理な話ではない。が、それは本当に一握りの人間だけだ。彼らは特別なのだ。言うなれば超人。ある意味、人間ではない。

俺の力がそこまでのものだとは、どうしても思えなかった。

チラッ。

隣で布団を直しているミュウを見る。

余談であるが、そんなに広い家ではないため、俺たちはリタの部

屋を借りて泊まっております、リタは母親のところで寝ている。

「? どうなさいました?」

俺が見ていることに気付いて、ミュウがこちらを見た。

彼女だけはいつも通りである。

(頼みの綱は……ミュウだけだ)

そう思った。

この家に来た日、彼女が見せたあの力。契約者であり、人魔と同じ魔界の住人である彼女。彼女がもしも、俺より圧倒的に強いのであれば。

(あまり気は進まぬが……)

俺としては彼女に戦わせるのは極力避けたい。中身はよくわからないが、外見は小さな少女であり、それならばやはり、年上で男である俺が彼女を護らなければならぬだろう。だが、彼女が魔界の住人としての力を持ち、その力が普通に……それこそ、俺のようなちょっと剣の扱いが上手い人間など、足下にも及ばないような力を持っているのであれば　ここは彼女に任せるしかないと思う。

「なあ、ミュウ」

そして、俺は少し期待を込めながら、

「謙遜とかはせずに、正直に答えてくれ」

「はい」

と、ミュウが布団の上に正座して姿勢を正し、俺を見る。

「俺とミュウは……どっちが強いのだ?」

「御主人様です」

「……あ、そう……」

即答。

俺の心はあつという間に、一割ほどの安っぽい自尊心の安寧と、九割ほどの途方もない落胆に包まれてしまったのである。

そして、そんな俺にミュウの追い打ち。

「私の力など、微々たるものです。手品程度のことしかできません」「な、なるほどな」

つまりは納豆の皿を吹き飛ばす程度のことしかできないということ
とであろう。

それでは、彼女を戦わせるなど、言語道断であるが

(しかし……それで良く、四つもの村を……)

そう思ってしまう。

もしかして俺は知能犯だったのだろうか？

(……って、記憶を失った今の俺はほとんど能なしではないかっ！
！)

ますます絶望的。というか、ホントに本気でヤバいではないか。

(終わった……思えば、短い人生であった……サヨナラ、みんな、

サヨナラ……)

そして俺は、ほんの二十五日ほどの人生にお別れを告げたのであ
った。

人魔がやってくる日まで、あと二日

その4

逃げ出すなら今だ。

そもそも、俺はこんなところで死ぬわけにはいかない。まだ一人分の償いすら済んでいないのだから。

そりゃあ、人々の役に立つための旅をしているわけで、確かにこの場面、その使命を果たすためには絶好の機会であろう。だが、しかしだ。死んでしまつては元も子もない。旅だつて続けられないし、そして、正直な話、自信がない。

だつて、相手は“人魔”だぞ？ 人魔というからにはそれなりに強いわけで、村人が大人しく従つていふことは、それなりの力を見せたからだろう。

そんな人魔に、どうやら剣の扱いが上手いらしいとはいえ、俺みたいな普通の人間が勝てるわけがないではないか。

やめやめ。

村人たちは俺のことを完全に信頼しきつているし、こつそり逃げれば気付かれないだろう。そのうち……俺がもつと自分のことを思い出して、もつと強くなつたなら そのとき、改めて役に立つとしよう。

うむ。それが良い。

どうやら今現在のところ、村人に危険はないようだし……いや、若い娘が何人か連れていかれて、帰つてきてないようだが いや、いや、向こうで幸せに暮らしているかもしれんし

……んなわけないか。

だが、とにかくダメ駄目。俺は帰る。帰るったら帰るのだ。
帰

「えっ!?! おじちゃん、あの怖い人を追っ払ってくれるの!?!」
「ホント? じゃあ、もう隠れてたりしなくていいんだねっ!?!」
「すごーいつ!?! ヴェスタのおじちゃん、頑張っつてね!?!」
「おじちゃん、カッコいい!?!」

「う……うむ。任せておくが良い……」

……逃げられるわけがないではないか。

くサバ読み大量殺戮者く
ジエノサイダー

「違っぞ」

「なにがですか?」

タイトルコール直後のミュウのセリフって、毎回同じだな。

あ、俺が悪いのか。

「いや、だから、だな」

と、あの日以来、子守りから解放され、リタの家の自室(元リタの部屋のことだ)でくつろいでいた俺は、一応、ミュウからもらった剣の手入れなぞしていた。ミュウは相変わらず、この剣を服の下に収納しているらしいが、未だにその原理は謎である。とはいえ、まさか、服を脱がして確かめるわけにもいくまい。

まあ、考えたら負けだ。

(というか、重量も結構あるというのに、重くはないのだろうか…

…)

四次元ポットなのだと思えば、それすらも解決してしまうが。「どう見ても、俺は“おじちゃん”ではないと思わんか？」

ちなみに今日は、例の人魔がやってくる当日の朝である。こんな会話をしているほど余裕はないのだが……まあ、いわゆる現実逃避というやつである。

ミュウは頷いて、

「はい。御主人様は“おじちゃん”ではなくて御主人様です」

「いや、お前にとっての話ではなくて、だな」

と、半分予測していたベタな回答に、俺は首を横に振る。だが確かに。彼女にまでおじちゃんなどと呼ばれたら、俺は二度と立ち直れないであろう。

「というよりは……そう」

ふと、俺はもっと根本的な問題に気が付いて、

「俺は一体いくつなのだ？」

「年齢の話ですか？」

「そうだ」

と、俺は頷く。

そう。それが一番の問題だ。もしかしたら本当に“おじちゃん”なのかもしれない。

おそらく“おじちゃん”というのは、自分の父親に近い年齢の者に対する言葉であろうから、子供たちの平均年齢を五、六歳とする、と、だいたい

(……ヘタすると、二十代半ばですでおじちゃんか?)

実は結構きつかった。墓穴。

これでもし、五十歳とか言われたらどうしよう。おじいちゃんではないか。

あ、いや“年齢の割に若いですね”とか言われるからいいかもしれん。

……いいのか？

(ちつとも良くないぞ)

最悪でも二十代であって欲しい。

「御主人様の年齢は」

……ゴクリ。

思わず、唾を呑み込む。

……最初の言葉が“二”でありますように。

そして……彼女の口が開く。

「わかりません」

「……」

あまりにもお約束な回答であった。

が、

「……なるほど」

(まあ……確かにそうかもしれん)

良く考えてみれば当たり前であろう。彼女の話を聞く限り、以前の俺が、ミュウに自分の歳のことをわざわざ話したとは思えないし。

(……ん?)

と、そこへ……俺の頭に突然、神の啓示とも言つべき閃きが走った。

(誰も知らないってことは……イコール、何歳だと主張しても何ら問題が生じないということではないかアアアッ!)

「ミュウ!」

俺は決意を込めた拳をグツと握りしめ、その場に立ち上がった。

「はい」

一方のミュウはいつもの調子で俺を見上げてくる。そんな彼女に俺はビシッ! と、指を突きつけて、

「良いか、ミュウ! 俺はこれから十八歳で通すことに決めたっ!

」!

「十八歳ですか」

ミュウが少し首をかしげる。

と、彼女のその反応に、

「ふふん。何故、十八歳なのかと言いたげだな」

「いいえ。御主人様の決めたことですから」

「そうかそうか。ならば、その理由を教えてやるう」

「はい」

なんか会話が噛み合っていない気がするが、おそらく気のせいであろう。

「十八歳といえは花の高校生だからだ！」

「？ 高校生ってなんですか？」

「む？」

言われて気が付いた。

(そういえば……なんであろう?)

“高校生”などという言葉は聞いたこともない。どうしてそんな言葉が突然口をついたのであろう？

全くもって不思議である。

……まあいいか。考えたら負けだ。

「とにかく……そういうことで、俺はこれからずっと十八歳だ」

「ずっと、ですか？」

「うむ。ずっとだ」

「ちよつとちよつと……」

と、自信満々の俺に突っ込んできたのは残念ながらミュウではなかった。

「ヴェスタさんが私と同じ年はずないでしょ」

「む？」

その声に振り向くと、部屋の入り口に、朝食の片づけを終えたらしいリタが立っていた。心なしか、呆れたような顔に見えるが、おそらくは気のせいであろう。

「おお、そうか。リタは十八歳であったか」

と、俺はポンツと手を打つ。実は初めて知った。

「そうよ……って、ヴェスタさん、そんな話をしてる場合？」

と、リタは部屋の中に入ってきて、俺のすぐそばに腰を下ろすと、

「今日よ。あいつがやってくる日」

「うむ。わかってるつもりだ」

いくら俺でもそこまでボケてはいない。

「……余裕なのね」

「いや、全然余裕ではない」

俺は真面目な顔でそう答える。

第一、余裕ならば、逃げ出すか逃げ出すまいか悩んだりはしないだろう。

「ただ、考えても仕方ないので何も考えないようにしているのだ」

と、俺は正直に答えた。

もはや逃げられない以上、自分が予想以上に強いことを信じるしかないのである。考えたらとにかく負けなのだ。

「もしかして……自信ないの？」

と、今度は一転、リタが心配そうな顔になった。やはりこの娘は、なんだかんだで優しい娘なのである。

「ないと言えないし、あると言ってもないものはない」

「……」

リタが心配そうなのと呆れたようなのが入り交じった、複雑そうな表情になる。

……何か間違ったことを言ったのだろうか？

(むう、真理ではないか)

だが、どうやら彼女の心情は再び“心配”の方に傾いたらしい。

「もし、無理をしてるなら……やめてもいいのよ」

「いや、多分、どうにかなるであろう」

俺は即答した。

なにしろ、俺のモットーは“考えたら負け”であって、超楽観的な人間であることは、記憶を失った直後に確認済みなのだ。

確かに自信など全然ないが、だからといって、緊張や不安でドキドキしている、なんてことも全くなかった。

(いや……)

別の可能性を考えてみる。

……もしかしたら、俺は生に対する執着が普通の人間よりも薄いのかも知れない。

考えてみれば、俺は記憶喪失なわけで、つまりは想い出といったものがほとんどない。親しい人間というのも、つい最近会ったばかりのリタ、そして、この一ヶ月近くを一緒に旅してきたミュウぐらいのものであつて。

だからこそ、この世に対する未練というものが少ない、とも言えるだろう。

……いや、もちろん死にたくはないのだが。

(そもそも、俺の命は俺だけのものではないのだから……)
と言つても、別に妊娠(以下略)。

とにかく、そういうことなのだ、きつと。

「御主人様」

俺とリタの会話が途切れたのを見計らつて、ミュウが話しかけてきた。彼女の方にも全く緊張感が見られないが、これはいつもの通りである。

「来たみたいです」

ミュウがそう言うと同時に、外が少しだけ騒がしくなり始めた。

「……随分と早起きだな」

ちよつと意外。来るのはどうせ昼過ぎだろうとタカをくくつていたのだ。

家々のドアが次々に閉まる音が響いてくる。おそらく、村長を含めた幾人かの村人だけが残つて、子供や他の村人たちは全員家に隠れるのだろう。

「ヴェスタさん……」

リタからも、いつもの笑顔はとつくに消え失せて、心配そうな瞳を俺の方に向けていた。

「うむ」

もうここまで来たら、後に引くわけにもいくまい。

「心配ない」

俺はそんな彼女にそう答える。

「……多分」

「……」

さらに不安になったであろうことは想像に難くない。

「さて、と」

俺はさっきまで手入れしていた長剣を片手に、漆黒のマントを翻して立ち上がる。リタに“変な格好”だと突っ込まれたこの服であるが、俺が気に入っているのだからいいのだ。

……結構、カッコいいと思うのだがなあ、これ。

「御主人様」

「ん？ ミュウ。お前は付いてくる必要ないぞ」

「いいえ」

が、ミュウは俺を真っ直ぐに見上げながら、

「万が一、御主人様にお怪我があつては大変ですので」

「……万が一、で済むのか」

怪我をする確率が本当に一万分の一程度ならばどんなにいいことか。だが、この様子を見る限り、ミュウはどうやっても俺に付いてくるつもりだろうだ。

……まあ、もしも俺が負けて死ぬようなことがあれば、ミュウも同様の運命を辿るわけだし……付いてきてもさして問題はないだろうか。

それに、彼女の力も何らかの役に立つかもしれない。

「心配ありません」

と、そんなことを考えていた俺にミュウは言った。

「人間族を相手に脅して金品を奪っているような人魔は、魔界でも底辺の下位族である可能性が高いです」

冷静な顔でそう分析すると、そのままの表情でさらに一言。

「要するに雑魚ですね」

「……なかなか毒舌だな」

だが、その“底辺にいる下位族”が、村人たちを脅しているのは確かなわけで……ある程度の力がなければ、村人たちだって大人しく従ってはいないであろう。いくら小さい村とはいえ、大人の男だって何人もいるのだから。

つまり、普通の人間にとっては、充分、驚異的な力だつてことになる。

「それに、例の狂犬とやらも、おそらくそいつの手下なのだろう？」と、俺はこの村にやってきた日のことを思い出してそう聞いてみる。

あのかきはあまり深く考えなかったが、こういう状況になってみれば納得だ。何故なら、獣魔というのは、基本的に単独で人間の世界に来ることは少なく、大抵は人魔に従ってくるか、あるいは群でやってくるか、のどっちかなのだ。

「そうよ」

答えたのはリタだった。

「いつも、あいつがこの村に来るときには二、三匹、引き連れてくるわ」

「二、三匹、か……」

一匹相手なら楽に追い払えることは実証済みであったが、人魔＋複数匹となると大分話が違う。

……いやいや、考えたら負けだ。

まさに。想像すれば想像するほど、勝ち目が薄くなってくるような気がして、気が滅入ってくる。

（なんかこう、もっとドラマチックな展開にならぬものか……）

例えば……実は記憶を失う前はとんでもなく強くて、ミュウが言うところの“底辺にいる下位族”なぞ歯牙にもかけないほどで、体が戦い方を覚えていたりして、考えるヒマもなく一瞬で勝負がついたりして、村人たちに感謝されまくったりなんかして、惜しまれつつも『俺には困っている人々を助ける使命があるのだ……』とか言つて、クールにカッコよく村を立ち去ったり。

あるいは……（中略）……（後略）……xiii。
とか。

……ん？ 今、何か別の意志が介入したような 気のせいかな。
まあ、それはともかくとして。

記憶喪失だなんてハンデをいきなり背負わされたのだ。それぐらいの奇跡が起こってもよいではないか。別にクールでもカツコ良くなくてもいいから、せめて、今日のこの戦いに勝てるぐらいの

数分後。

どがあああああっ！！

「ぐはっ！！！！」

ズザザザッ！

「……お？」

一体……何が起きたのだろうか？

俺は目の前の光景に、かなりの時間、呆然と立ち尽くしていた。

「ぐっ……ばっ、馬鹿な……」

数メートル先の地面には、拳連打の後、蹴りで吹っ飛ばされ、唇から血を流し、苦しそうにこちらを睨み付けている男がいる。

周りには三匹の狂犬……地の七十六族が意識を失って倒れていた。そして、俺の後ろでは、

……カチッ。

「七秒ジャストです。ボスキャラとしては新記録かもしれませんね」
ストップウォッチを片手に、ミュウがそんなことを呟いていた。

ストップウォッチ？ ボスキャラ？ ……新記録？

一体なんのことであろう。

まあいいか。

とにかく、今、はっきりとしているのは……俺の目の前には例の人魔がかなりのダメージを負った状態で倒れていて、どうやらそれを演出したのは俺らしい、ということである。

「地の下位族ですね。この程度では所詮、御主人様の敵ではありません」

おいおい。誰だ、ミュウにこんな毒舌を教え込んだのは。それはともかく。

(俺ってこんなに強かったのか……)

相手が下位族とはいえ、よっぽど特殊な人たちを除き、普通の間が人魔に勝つというのはそれほど容易なことではない。つまり、俺はこういう戦いに関して言えば、その“特殊な人たち”に分類されるのであろう。

「御主人様、どうなさいますか？」

勝負が決したことを察して、ミュウがそう聞いてきた。

まだ相手の人魔は充分に動ける状態であったのだが……おそらく、これ以上やっても、結果は同じだろう。

自分の力について半信半疑の俺ですら、そのことが良くわかる。

「くっ……」

それは人魔にしても同じだったのだろう。フラフラとなんとか立ち上がったものの、もう戦意は見当たらない。

俺はまだ剣すら抜いていないのだ。

「どうする？ ふーむ……どうするべきであろうか」

というわけで、あとはこの人魔の処分について、である。

(ここはやはり)

「戦い 説得 改心 俺を弟子にしてください！」

の方程式が最も良いのではないだろうか。

こういうバトル物の敵ってのは、後で仲間になる確率が結構高いのだ。良くわからないが、某所でそういう統計が出されているのである。

(弟子ってのはなかなか良い考えだな……)

「御主人様」

(やはり俺ぐらいの人間になると、弟子ぐらいいても良いのではないだろうか)

「御主人様」

(ミュウは弟子つてのとは違うしなあ……いやいや、ミュウだけでは物足りないというわけではないのだ。ただ……)

「……御主人様」

(やはりもう一人ぐらいいても……つて)

俺は少し眉をひそめながらミュウを振り返って、

「……ミュウ。俺は今忙しいのだ」

「申し訳ありません」

と、ミュウがすまなそうに頭を下げる。

「いや、謝る必要はないが……用件はなんなのだ？」

「いえ、大したことではないのですが」

ミュウはそう前置きしてから、怪訝そうな俺から、その先の方に視線を移して、

「逃げました」

「なに？」

その言葉にクルツと振り返り、人魔の方を

「……いつ、いないいいいいいつ!!?」

そう。さっきまでそこにいたはずの人魔の姿が忽然と消えてしまったのである。

「どっ、どこへ行ったのだっ!!」

「逃げましたけど」

慌てて辺りを見回す俺とは対照的に、ミュウはあくまで冷静な顔で正面を指さす。

「……お？」

と、その指の先に、かろうじて先ほどの人魔の後ろ姿を捕らえることができた。

やはり先ほどのダメージが大きかったのか、大分モタつきながら逃げていたが、それでも結構遠くまで逃げていた。

俺の思考時間が思ったより長かったのだろう。そりゃ逃げるに決まっている。

「追いかけるぞ！」

「はい」

俺たちは逃げていく人魔を追った。

あれだけの力の差を見せたのだ。逃がしたからといって、再び、この村に現れる可能性はそんなに高くないかもしれないが、せつかくなら捕らえておきたい。

(捕らえて)

そこでふと思った。

……捕らえてどうするのだろうか？

これがただの犯罪者だというならともかく、相手は人魔だ。俺の知識が正しければ、大抵の場合は殺されてしまはずである。

(ふーむ……)

そう考えると、少しだけ可哀想になってきた。

普通の人間ならば、人魔相手に同情するようなことはないのだろうが……俺の場合は近くにミュウがいるからだろうか。異世界の住人とはいえ、同じ人型の生き物である人魔に対して、少しだけ同情の気持ちが浮かんでできてしまう。

ならばどうするか。

(やはり正義の味方としては……説得して改心させなければ！)
そう。

人魔とはいっても、頭の中身はそれほど人間と変わらないものなのだ。言葉が通じないわけでもないし、誠心をこめて説得すれば、きっとわかってくれるに違いない。

そしてその上で、村人たちに捕まらないように逃がしてやる。これが一番であろう。

(さて、そうと決まれば……)

ダメージを負っている人魔と俺たちでは、どう見ても俺たちの方が速かった。それに、村の中のことは俺たちの方が良くわかっている。村を出る前にある程度追いついておけば、逃げられることはまずないだろう。

……と思うのだが。

(それにしても……)

俺はふと思った。

(ここはどの辺りだろう……?)

忘れてた。俺は方向音痴だったのだ。

まだ村からは出ていないので、迷子になる心配はないだろうが、森の中に入ってしまつて戻つて来れない可能性がある。

やはり村を出る前に“絶対に”捕らえねばならない。

(ふむ……景色は見覚えあるぞ)

それでも一応、周りの景色を確認しておく。

ここは……そう。俺とミュウが、子供たちと遊んでいた場所に近い……と思う。

俺の記憶と方向感覚が確かならば(その両方が確かである可能性は極端に低い)、もう少し先に行けば、少し小さな花畑があるはずだった。

(花畑といえば……)

俺はふと、今朝のミュウとの会話を思い出す。

(ミュウが子供たちと、また花の冠を作る約束をしたと言ってたな)

前回の冠はかなりボロボロで、お世辞にも上手く出来ているとは言い難かった。ので、『作り直してもいいですか?』とか聞いてきたのだ。

もちろん却下する理由はなかった。……というか、そんなことで俺に断る必要はないのだが。

……と、そんなことを思い出していると。

「御主人様……」

俺の後ろを走るミュウが声を掛けてきた。

「ん?」

心なしか不安げなその声を怪訝に思つて、軽く首を後ろに向ける。すると、ミュウはいつもと変わらない……いや、注意していなければ

ば気付かないほどではあるが、少しだけ表情を曇らせて、

「あの……」

と、少し齒切れが悪い。

……彼女がこういう言い方をするときには、大抵、何かお願い事があるときだ。

「なんだ？」

こんなときに“お願い”もないものだが……それでも、俺は一応、聞き返してやる。

すると、ミュウは視線を先に向けて、

「このままではお花畑が踏み荒らされてしまいます」

「……お？」

その言葉に、俺は視線を再び前方の人魔に向ける。

そして、驚いた。

(なんと……本当に花畑だったか)

どうやら珍しく俺の方向感覚は正しかったようである。そして……人魔の足は躊躇いもなく、花畑の方角へと向かっていた。

(ううむ……)

もちろん、人魔はそのまま花畑へと進入するだろう。例えば、あの人魔が自然をこよなく愛する人物で、毎朝、花や木に親しげに話しかけているとか、そういう人物だったりすると、わざわざ迂回しなくてもいいかもしれないが、どう考えてもそうは思えない。

(まずい……それは良くないぞ！)

あの花畑は、ミュウが初めて俺に笑顔を見せてくれた場所であって、言うなれば、俺にとって想い出の場所である。その比重はこの大陸一個分にも相当するのだ。

絶対に荒らされるわけにはいかない……のだが。

「ど……どう考えても間に合わんではないか！」

人魔は今にも花畑へと進入するところだった。必死になっている彼には、目の前の花畑を気にする余裕もないのだろう。いや、余裕があったからといって、気にするかどうかはわからないのだが。

「まっ、待てっ！ 待つのだっ！！」

と、俺は少し必死になつて、前方の人魔に呼びかけてみた。が、それで人魔の歩みが止まるはずもなく。“待てと言われて待つ奴がいるかよ！”と、人魔が心の中で叫んだがどうかは定かではないが、その足はあと数歩で花畑へと入ろうとしている。

「御主人様……」

ミュウが再び、躊躇いがちに口を開くと、

「……守っても、いいですか？」

そう言った。

もちろん、“守る”というのは花畑のことであろう。

俺は少し狼狽しながらも、

「な、なにか方法があるのか？」

「御主人様の許可がいただけるのであれば」

どうやら人魔の足を止める方法があるらしい。

……それならば、それを却下する理由などなかった。

「任せる！」

俺はあまり考えることもせず、急いでそれを許可する。

……これがマズかった。

「はい」

ミュウは頷いて、

「？」

怪訝そうな俺の後ろで片手を前方に出す。

そこで俺は初めて嫌な予感を感じた。

「お……おい、ミュウ……」

きい……きい……ん。

……どこかで聞いたような音が聞こえてくる。

ミュウが納豆の器を消し飛ばしたときの音だ。

……彼女の長い髪がふわっと舞い上がる。

(ま、まさか……な)

確かに、ミュウは契約者　つまりは魔で、そういう力を持って

いることはすでに目の当たりにしていたが、彼女曰く、その力は微々たるものであり、人魔相手に通じるほどのものではないはずだ。

そりゃあ、無防備な相手の背中からだから、ダメージは与えられるのかもしれないが、果たして、あの人魔の足を止めることができるかどうか。……いや、それ以上に、ここは村中である。はつきりとはしないが、家の中から俺たちのこの状況を見守っている村人もいるはずだ。

そんな中で、彼女が力を使ったりしたら

「ま、待つのだ、ミニュ」

俺はそこでようやく制止の声をあげたが、どうやら一瞬、遅かったようだ。

きいいいいいい……ん……

あの、納豆の器を消したときのような小さな光が彼女の手の平から……と思った、その瞬間！

……カツ！……！！……！！

（なっ……）

辺りが眩いばかりの光に包まれる。

「っ！？」

人魔が異変に気付いてこちらを振り返った。

と、同時に、

「うっ……っわああああああっ……！！！」

ドオオオオオオンッ……！！

メキメキメキッ……！！

ガサガサガサッ！

ドドドオオオンッ……！！

ヒュウウウウウウ………キラーン。

（………はい？）

一瞬の出来事に、俺はまさに“開いた口が塞がらない”という状

態で、呆然としたままその光景を見守っていた。

それもそのはず。

ミュウの手の平から発射された幾筋もの巨大な光の束は、螺旋のような筋を描いて人魔に命中すると、その先にあつた花畑の上……ギリギリ当たらないところを走って、さらにその先の森に直撃。何本もの木々をなぎ倒し……一体、どこまで飛んだのであろうか？ここからでは確認できない。が、とりあえず、森の形が大きく変わったことだけは間違いないであろう。

ちなみに、最後の“キラーン”は、あの人魔がお星様になった音のようだ。

(……手品?)

いや、これが手品なら、手品師十人ぐらいで国を一つ滅ぼせてしまふ。俺の記憶が正しければ、こういうのは手品とは言わないはずである。

……というかむしろ、今はそんなことを冷静に分析している場合ではなかった。

「御主人様」

と、未だ、放心状態の俺の背後で、ミュウが口を開く。

「お花畑は無事です」

「……そう……みたいだな」

だが、お花畑は無事でも、俺たちは無事に済まないのだろうか……と。

いつの間にもやら、遠巻きに俺たちを見つめている村人たちの姿を視界の端に捕らえつつ、俺はそう確信していたのであつた……。

その5

まあ、当然といふかなんといふか。

普通、魔と一緒に旅をしている人間なんていないわけで。そうやってくると、今度は俺の人間離れた容姿もアダになってくるわけだ。

別に人魔だからハンサムだとか美形だとか、そんなのは迷信だと思うのだが、この状況と俺の出で立ちからして、俺自身も疑われるのは仕方のないことであろう。

それにしても……俺はその辺りの事情がわかっているからともかくとして 何も知らないミュウには少し可哀想なことになってしまったかもしれない。

〔自然破壊の大量殺戮者〕
ジェノサイダー

荷物をまとめる。

まとめる、とは言っても、もともと、たいした荷物は持っていないのであった。

窓からは強い太陽の日射しが射し込んでおり、まだそれほど遅い時間でないことを伺わせる。

「……」

準備が完了した後、俺は無言で十日間ほどを世話になった部屋の中を見回した。

それほど長い期間ではないのだが……それでも、俺が“目覚めて”から、という条件付きであれば、もっとも長く滞在した場所であり、離れるとなるとそれなりに寂しい気持ちにもなる。

「……ふう」

出来れば、こういう形で出ていくようなことにはなっただけ欲しくなかった。が、それも仕方あるまい。

人魔を追い払った（追い払った、程度の言葉で片づけていいのかどうかは甚だ疑問だが）あのときから、まだ三時間ほどしか経っていない。あ後の展開は、おそらく誰もが予想しえたことだろうとは思うが……とにかく、俺たち二人は早々にこの村を出ていくことになった。

まあ、正直な話、その程度のことではまだ幸いであったと言えるだろう。縛りあげられて、どこぞの憲兵に突き出されてもちつともおかしくない。“人”にとっての人魔とは、それほど恐れられる存在であり、その人魔を従えている俺は（厳密には契約者であつて人魔ではないのだが、そんなことまでわかるはずもない）、村人たちにとって充分恐怖の対象となり得るのである。

たとえそれが、村を救った恩人であつたとしても。

その辺のことは、いくら記憶を失っている俺とはいえ、充分に理解できる。だからこそ、こうして黙って村を去ろうとしているわけだ。

「御主人様……」

「ん？」

感慨深げに部屋を眺め回していた俺は、いつものように静かに座つたままのミュウに視線を移す。

この慌ただしい展開にも、彼女はやはりマイペースを保っている。どうやら、どうしてこんなに早く村を出ていくことになってしまったのか理解していないようだ。

当然だろう。この世界の……人間たちの常識については、ほとんど無知とも言っている彼女だ。自分の本当の姿が、人間たちにどの

ように映っているのかなど、わかるはずもない。

(止められなかった俺も悪かったのだがな……)

もちろん、この世界で生活する以上、そのことについてはミュウにしっかり教えておく必要があるだろう。

だが、

「なんだか……寂しい感じがします」

「……」

「子供たちとの約束も、守れませんでした」

「……ああ、そうだな」

今の彼女にそのこと……あの花畑を守るための行動が、ここを出て行かねばならない原因になったなどと、言えるはずもなかった。

「……さて、行くか」

荷物らしい荷物を背負うわけでもなく、ただ、いくつかの装備品を身につけ、俺は座っているミュウを促した。

「はい」

ミュウもゆつくりと立ち上がる。

そして、俺たち二人は部屋を出た。

実を言うと、これだけ早く村を出発することになったのは、村人たちが追い出そうとしたからではない。俺自身の判断だ。そうすることが一番良いと思った。

村人たちの瞳　ミュウを、そして俺を見つめる、驚きと怯えの色。ミュウもそれを敏感に感じ取ったに違いない。その原因はわからずとも。

だから、俺はすぐにこの村を出ていこうと思った。と言っても、別に村人たちに捕まって憲兵に引き渡されるのが嫌だからではない。……いや、それは確かに嫌だ。ってゆーか、そういう事情も無きにしもあらずといつかなんと……まあ、そんなことはどうでもいいのだ。

とにかく。

この村に来てミュウは、リタやリタの母親、そして、何人かの子供たちと仲良くなることが出来た。そして、子供たちと遊ぶことを楽しいと感じられるようになった。それは、とても大きな収穫だと言えるだろうし、彼女にとっても良い出来事であったろうと思う。

だからこそ、その“良い出来事”が“後味の悪い思い出”にならない内に、この村を去ろうというのである。

人魔に対する潜在的な恐怖心は人間ならば誰でも持っているものだ。それは大人でも子供でも関係ない。いや、むしろ、人魔についての知識を持っていない分、それは子供の方がはるかに大きいといえるであろう。

そんな子供たちに、以前と同じ目でミュウのことを見ることが出来るであろうか……いや、同じでなくとも、たとえ距離を置いてでも、彼女のことを嫌悪せずにいられるだろうか。

……答えはノーである。

子供たちの目にはおそらく“良い人のフリをしていた、本当は悪い人魔”ぐらいの感覚で映っている。そんな子供たちから罵声を浴びせかけられるだけは避けねばならない。

ミュウの……おそらく人間界に来て、初めての友達　そんな彼らに嫌われてしまっていることを、彼女に悟らせるわけにはいかないのだ。

「ヴェスタさん……」

「ん？」

家を出て……玄関を出てすぐのところに彼女は立っていた。

村の中は妙に静まり返っている。

「リタか」

俺はマントの裾が擦らないように注意して階段（この辺の家は少し床の位置が高く作られているため、玄関を出てすぐのところに三、四段の階段があるのだ）を降りつつ、

「見送りご苦労。世話になったな」

と、俺はいつもの調子でそう口にした。

それは、彼女なら……俺たちと最も親しかった彼女なら、ミュウのあの力を見ても、今までと変わらずに接してくれるだろう、という自信があったからだ。

「……………」
リタは無言で俺を、そして、その後ろに寄り添うミュウを見つめた。

「……………」リタ？
少し不安になる。

リタとて普通の人間だ。もしかしたら、ミュウの力に恐怖を感じているのではないか。彼女に対して……何か傷つくようなことを口にするのではないかと。

だが……結果的にそれは無用な心配だった。

「……………」ごめんなさい

と、リタは少し俺たちから視線を逸らして、
「本当なら、みんな、もっとあなたたちに感謝しなければならぬのに……………」

そう言っつて沈痛な面もちになる。

……………やはり俺の目は腐ってなかったらしい。

心の中でホツとしつつ、

「仕方あるまい。たとえば俺がこの村の一員だったとしても、おそらく同じ反応を示すであろう」

「それでも、やっぱり……………」

そして、リタはミュウに視線を移すと、

「ミュウちゃん。これから色々大変だと思っけど……………元気でね」

「はい。リタさんもお元気で」

と、ミュウは機械的に返事をするが、リタはそんな彼女にニッコリと微笑んで、いきなり、

「……………やっぱミュウちゃん可愛い〜！」

ギョウウウウッ！

「……………」

ミュウはされるがままにしつつ、不思議そうな顔で俺の方を見る。
(リタ……未恐ろしい少女よ)

いくら偏見がないとはいえ、あれだけの力を見せたミュウにこれだけのことが出来るとは。彼女は俺の想像以上に剛胆な人物であつたらしい。

そうでなければ……あるいは信頼を証明したかったのだろうか。

口だけではなく、自分は貴方たちのことを信じているのだ、と。

ギユウウウウウウ~~~~。

「……」

「ああ、ミュウちゃん！　ウチに持って帰りたいぐらい！」

ギユウウウウウウ~~~~。

「……」

ギユウウウウウウ~~~~。

「……持って帰る前に死んでしまうのではないか？」

「あ」

俺の言葉にリタがハツとして手を離す。

「……けほっ」

解放されたミュウが小さな咳を漏らした。……心なしか、顔が少し青い気がする。

「さて、と……持って帰られてはタマらんから、そろそろ出発することにしよう」

「はい、ご主人様」

「そう……」

と、リタは一步、後ろに下がって道を開ける。

そして、

「またね……ヴェスタさん。私は……私は、誰が何と言おうと、貴方たちは村を救ってくれた恩人だと思っているから……」

そう言つて、少し無理をしたように笑顔を見せた。

「うむ。そう言つてもらえれば、俺としても非常に嬉しい」

漆黒のマントを翻し、少し目を細めて微笑みを浮かべると、

「あとの心残りとは言えば、リタが結局、最後まで俺に惚れてくれなかったことぐらいであろうな」

「……」

そんな俺の言葉に、リタはきよとんとした顔をする。

が、次の瞬間、おかしそうに吹き出すと、

「……そうね。そういう三枚目なセリフさえなければね」

「なるほど……それは盲点であった」

俺が真面目な顔でそう答えると、リタは笑いながら、

「でも、それもヴェスタさんのいいところよ」

「そうか」

いいところが原因で惚れてくれないのなら、俺が背負わされた十字架は相当重いモノに違いない。

(まあいいか)

とにかく、俺は今度こそ、足を進め始める。

ほんの十日間……だけど、俺のこれまでの人生の中でもっとも長く滞在した、その場所に背を向けて。

静まり返った村の中を、出口に向かって歩く。

周りの家からは微かな視線を感じる……が、村人が出てくる気配はない。

まあ、当然といえば当然であった。下手をすれば、今までこの村を脅かしていた人魔よりもタチの悪い奴らかもしれないのだから。

……だが、俺にしてみれば好都合である。

このまま、何事もなく村を出ることができれば、それで充分なのだから。

「けほっ、けほっ……」

ミュウがしきりに咳き込んでいた。

「……というか、ああいう場合、苦しいならお前も何か言った方がいいぞ」

もちろん、リタに抱き締められたのが原因であることは断るまで

もない。

「はい……申し訳ありません」

そう言っつてミュウは軽く喉をさする。

「でも、心地良かったので」

「ん？」

彼女の意外な言葉に、俺がそう聞き返すと、

「リタさんは暖かかったです」

「……そうだな」

それが果たして肉体的なことなのか精神的なことなのか、俺は瞬時に判断することができなかった。が、どっちにしても、彼女の言いたいことは良く理解できる。

すっ……

「ん？」

ミュウの手が俺の手に触れた。

「御主人様も……」

ぎゅっ……と、それほど力は込められていなかったが、それでも、

彼女の手が俺の手を握った。

「暖かいです」

「……人というのは、そういうものだ」

「そうなのですか？」

ミュウが不思議そうな顔をする。

「ああ」

軽く手を握り返してから、そつとその手を離れた。

ミュウはその手の平を不思議そうに見つめながら、

「そういえば……子供たちの手も暖かかったです」

思い出したように言う。

そして、顔をゆっくりと横に向けた。

「……ん？」

つられて、俺も彼女と同じ方向へと視線を移す。

そこには花畑があった。

彼女が守った……彼女にとって、そして、俺にとっても大切な想い出の場所。

(やはり……これで良かったのかもしれない)
それを見て俺はそう思った。

あのとき……もしも、力を使おうとする彼女を制止していたら。それならば、村人たちにミュウの力を知られることもなく、俺たちはこの村で英雄扱いを受けていたかもしれない。もう少しこの村に滞在することができたかもしれない。

だが、しかし。きつとミュウにとっては、そんなことよりも、この花畑が無事であることの方が、よっぽど価値のあることだったに違いない、と、そう思うのだ。

(ま、結果論ではあるが)

俺が彼女を制止しなかったのはそこまで考えていたわけではない(というか、正確には“制止できなかった”だけである)のだが、結果的に良かったと思えるのは大事である。

今、花畑に子供たちの姿は見えなかったが……おそらく数日後には、再び、子供たちの姿で溢れることだろう。
それを思うだけでも

……と、そんなことを考えていた矢先である。

「……お姉ちゃん!!」

声がした。

「……?」

そのとき、俺たちの足はもう村の外れまで差し掛かっていたのだが……立ち止まり、振り返った俺たちの視界の中にいたのは、一人の少女だった。

見覚えはある。

が、

(……すまぬ。名前までは覚えておらん……)

だが、確かに、俺たちと遊んでいた少女たちの一人だった。

「はあっ……はあっ……」

俺たちが立ち止まったのを確認しながら、少女は息を切らしつつ駆け寄ってくる。

「……どうした？」

どうやら……少女は俺たちのことを恐れていないようだった。俺は、少女の目前にしゃがみ込んで視線を合わせてやる。

すると、少女はそんな俺を完全に無視して、横を素通りすると、

「お姉ちゃん、これ……」

ミュウの方に何かを差し出した。

(……むなしい)

「これ……？」

と、ミュウが不思議そうな声を出した。

(ん?)

一瞬、いじけモードに入るところだったが、少女とミュウのやり取りに、なんとか体中の気力を奮い立たせてゆっくりと振り返る。

「あのね……お姉ちゃんがすぐにお出かけしちゃうって聞いて、急いで作ったの！ それで」

(これは……)

と、俺は驚きに目を見開く。

少女が差し出して、そしてミュウが受け取ったのは……綺麗な花の冠だった。

「お母さんはね。なんでかわからないけどお姉ちゃんの側に寄りちゃダメって言ったんだけど……でも、私、どうしてもお姉ちゃんに渡したかったから……」

と、少女は一生懸命に、不思議そうな顔のミュウに説明をする。

そして、最後にニッコリと笑顔になると、

「きつと、お姉ちゃんに似合うと思うよ！」

「……」

ミュウは無言で手の中の冠を見つめると、

「……あ」

と、小さく声を漏らした。

どう反応すればいいのかわからない……そんな表情だった。

そして、ミュウは困ったように、

「……」

無言で俺の方を見たが、少女はそんなミュウの反応も待ってはくれない。

「あ……私、すぐ帰らなきゃ……怒られちゃうー!」

そう言っつて、慌てて身を翻すと、

「じゃあね! お姉ちゃん……また遊んでね!」

言っつてから、少しだけ俺の方を見ると、

「ヴェスタのおじちゃんもね~~~~!!」

「だから、おじちゃんではないと」

俺は言いかけたが、少女はその言葉を聞きもせず、手を振りながらさっさと走り去っつていっつてしまった。

(……やれやれ)

小さくなっつていく後ろ姿を見つめながら、俺はふうつとため息を吐いた。

元気なものだ。

あの小さな体のどこにあれだけの元気が隠れているのだろうか。不思議である。

(結局、最後まで俺は“おじちゃん”か……)

十八歳の身でそんな呼ばれ方をするのは非常に不本意であったが、まあ、向こうにも悪気はないのだから仕方あるまい。

「……さて、と。行くぞ、ミュウ」

少女の姿が村の向こうへと消えていくのを見送った後、俺はまだ不思議そうに手の中の冠を見つめるミュウに向かっつてそう言っつた。

すると、ミュウはハツとしたような顔をして、

「あ、はい……」

いつものように、歩き出した俺の後ろにくっつてくる。

少しだけ、少女の消えていった方角を気にしながら。

ちよっとだけ、泣きそうになった。

チチチチチ……

小鳥の囀りが聞こえていた。涼やかな森の中は、僅かに射し込む光と緩やかな風が、心地よい空気を演出しており、草木の匂いが気持ちを持ちをリラックスさせてくれる。

村を出て、約一時間。

「次はこの街ですね」

ミュウが地図を広げてそう言った。

「うむ」

俺は特に考えることもせずそう答える。

もともと目的地など決まっていけないのだ。とりあえず近い街や村を順々に回っていくつもりであった。

「わかりました」

と、ミュウが地図を閉じる。

早くも道順を暗記したのだろうか？　だとすれば、彼女の頭は相当吸収率が良いに違いない。

（それにしても……）

と、そんな彼女の頭の上に飾られている花の冠を見ながら、

（……まあ、色々あったが、結果的には、あの村に立ち寄って良かったようだな）

それはもちろん、ミュウのことだけではなく、人々の役に立つことができた、という点でも。結末は残念ながら百パーセントがハッピーというわけにはいかなかったが、それでも、こうして清々しい気分で次の目的地へと向かえるのだから。

出だしとしては上々であったといえるだろう。

「それにしても」

と、俺は地面に擦りそうになるマントの裾を上げ、土に飛び出した木の根を上手くかわしながら、

「嘘はいけないな、ミュウ」

と、後ろからついてくるミュウを振り返ってそう言った。

もちろん、それと同時に歩みを少し緩める。後ろを向いたまま歩いて、木の根っこにでも足を捕られ、なおかつ偶然転がっている石に後頭部でもぶついたら馬鹿馬鹿しい。

ん？　なんでそんなに説明的なのだ、俺は？

まあ、いいか。

ともかく。

「……？」

俺の突然の言葉に、ミュウは不思議そうな顔で同じように足を緩めた。

何のことを言われたのかわからなかったようだ。

「嘘、ですか？」

「うむ。……俺とミュウのどっちが強いか、と、聞いたと思うのだが」

二日前の話だ。万が一にも忘れていないことにはないだろう。

「はい。聞かれました」

当然のようにミュウもそう答えると、

「ですから、私は御主人様の方がお強いと答えました」

「だから、それが嘘だというのだ」

と、俺は少し眉をひそめて、

「どう考えてもお前の方が強いではないか」

っていうか、あれではむしろ次元が違うと言っても良いだろう。

いくら剣の扱いが上手く、身体能力が高いとはいっても、あんな攻撃を喰らった日には、痛みも感じぬ間に、気が付いたら夜空のお星様になっっているに違いない。

「いいえ」

だが、ミュウはそんな俺の言葉にも、小さくかぶりを振って、
「そんなことはありません。私の力など、御主人様に比べれば微々たるものです」

「そんなはずはあるまい……」

と、譲らないミュウの言葉に、さすがに俺は呆れ顔をする。

そりゃあ、御主人様を立てようとして謙遜するのはわかるが、あんな力を見せつけられてはそれも全く意味がないというものだ。

「気持ちは嬉しいが、別に謙遜せずとも良い。お前の方が強かったからと言って、別に嫉妬したりすることはないぞ」

俺はそう言ってポンツとミュウの頭に手を置くと、

「俺は俺で、人間としては充分すぎるぐらいに強いようだし、それで満足しているからな」

と、言った。

まあ、ミュウより弱いことにコンプレックスを全く感じないかといえは嘘になる。大人であり、男である俺が彼女を守ってやるべきだと思うし、彼女に守られるような状況は確かに不本意だ。

だが、だからといって、彼女の力に嫉妬するようなことはない。

そもそも、嫉妬などという言葉、クールでアダルトな俺には似合わない言葉であろう。ここは少し、大人として、器の大きなところを見せておかねばなるまい。

と、

「……？」

ミュウが急に立ち止まり、不思議そうな顔で俺を見上げていた。

「ん？ どうした？」

と、俺も同じように足を止める。

すると、ミュウは少し首を傾げて、

「御主人様？ 何故、御自分を人間族の物差しで測るのですか？」

「……は？」

その言葉の意味がわからず、俺は怪訝な顔をする。

「俺の力量の話ではないのか？ だから、俺は人間としては十分に

強いから、別にお前より弱くても大した気にはしない、と……」
別にわかりにくい言葉ではなかったと思うのだが、一応、もう一度説明してやる。

すると、

「？」

ミュウがますます不思議そうな顔になった。

何故か、話に通じていないらしい。

(なんだ?)

が、わけがわからないのはこっちも同じである。

……まさか、いきなり人間語がわからなくなったのだろうか。

そういや、契約者っていうぐらいだし、ミュウは半人半獣な生き物のはずであって(どう見ても人間型であるが、それは俺がそういう姿をまだ見ていないだけなのだろう)人間の言葉を理解できなくなってもおかしくないのかもしれない。

(だが、契約者ってのは人の言葉を普通に使うと聞いたことがあるぞ……)

「御主人様」

どうやらそういうわけでもないらしい。というか、彼女の言葉が俺に通じていることが、彼女が人間の言葉を解している何よりの証拠であろう。

そして、ミュウはようやく何事か理解したような顔を見ると、

「御主人様。右腕を前に出していただけますか？」

「右腕を前に？」

突然、何を言い出すのかと思ったが、

「ごうか？」

あまり考えることもせず、彼女の言うとおりに右腕を前に出してみせる。

「肘を伸ばして、手を広げてください」

「ふむ？ ごうか？」

言うとおりにする。

「はい」

ミュウは頷くと、俺の右側に寄り添うように並んで、

「では、肩の力を抜いて……手の平に意識を集中するようにイメージしてください」

「手の平に……イメージ？」

これも言われた通りにやってみる。

すると、やり始めてからそれほどもしないうちに、

……チリチリ。

「お？」

手の平に、微弱な電気が流れたような……そんな感覚が浮かび上がってきた。

「な、なんなのだ、これは？」

と、俺は隣ミュウを見る。

チリチリ……チリチリチリチリ……

痺れたような感覚が急速に強まってくる。

「御主人様。少し力を抜いた方がいいかもしれません」

ミュウが冷静な顔でそう言った。

「ち……ちからを抜く……？」

ギイイイイイイン……

そうこうしているうちに、なにやら不思議な力が俺の手の平に集まり始めた。

「な……なんなのだ、一体ッ！！？」

俺は少し声を張り上げてミュウを見た。

まるで周りの光を呑み込むかのような勢いで、黒い塊が広がっていく。

……嫌な予感と焦りが芽生えてくる。

「御主人様」

そんな中、ミュウは相変わらずの表情で、大きく育っていく塊を見つめている。

「力を抜いた方がいいと思いますけれど」

「そ……そんなことを言われても　！」

そもそも、俺はミュウの言われたとおりに念じてみただけで、最初から体に入れているつもりはないし、今だって一応、この力を抑えようと努力はしている。

「ぐつ、具体的に！　具体的にどうすればいいのだツ！！？」

黒い塊は今にも弾け飛びそうな勢いにまで成長していた。

ついでに、俺の中の不安も急激に成長している。なんだか良くわからないが、このままだと非常にヤバイような気がするのだ。

……いや、絶対にヤバイ。

「簡単です。右腕に流れ込もうとする御主人様の魔力を、その手前で堰き止めてください。あとは、収束し始めている闇のエネルギーを暴発しないように四散させるだけです」

ミュウはさも簡単なことのように説明する。

が、

「ま……待たんかつ！　そのどこが簡単なのだあツ！！」

俺にとってはチンプンカンプンである。

っていうか、これは別に俺の理解力が低いわけではないであろう。こんなことをいきなり言われて実践できる奴は、頭の構造がどこがおかしいに違いない。

「では、とりあえず力を抜くイメージを作ってください」

ミュウは大幅に簡略化したつもりなのだろうが、

「さつきからやつとるぞっ！！」

「……」

ミュウはそんな俺の様子を少し困ったような顔で見つめた後、言った。

「お手あげですね」

「……は？」

一瞬……何を言われたのかわからなかった。

ゴオツ……

右腕に発生した球状の塊は光を呑み込みながら渦を巻き、とてつ

もなく不吉な音をたてている。

ミュウはそんな俺を真つ直ぐに見つめたまま、
「御主人様に止めることができないのであれば、私にはどうする」ともできません」

「……………」

ゴゴゴ……………！

彼女のその言葉に、冷や汗が背中を流れる。

「ちなみに……………どうしようもなかった場合、どうなるのだ？」

ゴゴゴゴゴ……………！！

恐る恐るそう聞いてみた。

「……………」

ミュウはチラツと右腕の塊を見る。

そして、形の良い眉を少しひそめた。

……………とてつもなく不安だ。

「そうですね」

だが、ミュウはそんな俺に再び視線を戻すと、何故か明るい声で、

「道ができます」

「道？」

「はい」

そう言って、ミュウは俺の右腕の向いている先に視線を移した。

「……………」

鬱蒼と生い茂る、森。

ゴゴゴゴゴゴゴ……………！！！！

「……………道？」

ゴゴゴゴゴゴゴ……………！！！！！！

「……………」

その言葉の意味を理解した瞬間。

……………俺の額から、一筋の汗が地面に落ちた。

「むっ……無責任ではないかあああああああつ……!……!……!」

どおおおおおおおんっ!……!……!

「……」

「……」

「……太陽の光が眩しいな、ミュウよ……」

「はい」

俺たちは、何故か、射し込む光が急に強くなった森の中を歩いている。

「ふう」

空を見上げた。

視界の中いっぱい広がる青空。昼を過ぎて少し弱くなったが、それでもまだ頂上の近くでその存在をアピールしている太陽。

眩しい。

遮るものもなく、視界いっぱい広がる青空が。

遮るものもなく

「歩きやすくなりましたね」

と、ミュウ。

「……ああ、そうだな……」

足下に視線を落とす。

さっきまで歩いていたところは、人間にとっては道とも言えないような獣道だったのだが、今は足を捕らえる木の根も存在していないし、それどころかペンペン草一本生えていなかった。

とはいえ、それは俺たちが歩いている、幅五メートルほどの道だけだ。周りにはたくさん草木が生い茂っている。

「……………」
視線を正面に向ける。

そこにはやはり、幅五メートルほどの真っ直ぐな道がどこまでも続いていた。

「……………なあ、ミュウ」

「はい」

「この道は……………果たしてどこまで続いているのだろうか」

「わかりません」

「……………そうか」

俺はゆっくりと道ばたに視線を向けた。

……………そこには、明らかになぎ倒された様子の大木が何本も倒れている。

「森の出口まで……………続いてなければ良いな」

俺は強く強くそう願っていた。

あ、それと。

巻き込まれた人がいませんように。

俺が自分の罪を償い切るには、まだまだ気の遠くなるような時間がかかりそうだ

プロローグ

「はっ……はっ……！」

最近ではほとんど誰も通らない、お世辞にもしつかり舗装されているとは言い難いデコボコの道を一人の子供が走っていた。

いや“子供”という表現が合っているかどうかは不明だ。

身長は百六十センチ未満、おそらく百五十センチ半ばぐらいだが、その人物は日射し避けのフードを頭から被っており、顔がその中に隠れていて、実際のところはわからない。

「はっ……はっ……！」

風がその全身に強く吹きつける。

フードが少しずつズレて、茶色がかった髪が少しだけその姿を見せた。

「はあっ……はあっ……！」

少年、だろうか？

短めの髪型は一瞬、それを連想させるが、少し線の細い顔立ちを考えると、もしかしたら女の子かもしれない。

ただ、年齢はやはり十代で間違いないだろう。

額に汗を浮かべ、その子供は荒れ果てた道を目的の場所へと駆けていく。

もつすぐ。

もつすぐ見えてくるはずだ、と。

夕方時。

おそらく、炊事の煙が、ところどころから立ち上っているはずだと。

『あそこの村はねえ……』

息が切れる。

道の途中で出逢った、旅の商人の言葉が、何度も何度も頭の中で繰り返される。

『とてつもなく残酷な……黒ずくめの魔に……』

「はあっ……はあ……ッ！」

『滅ぼされちゃったらしいよ……』

嘘だ。

嘘だ、嘘だ。

何度も心の中で繰り返す。

それを、自分自身に信じ込ませようとするかのように。

だけど。

炊事の煙は、どこまで行っても見えてこない。

どこまで行っても。

……まだ。

きつとまだ、村までは遠い。

きつと……。

……コッソ。

足下に何かがぶつかる。

「あ……」

立ち止まってようやく周囲を見渡すと、そこには黒く焼けこげた、何かの残骸。

「嘘……」

ところどころに広がる……朽ち果てた、家の跡。
そこは確かに、村があったはずの場所。

「……嘘だ」

誰にも届かない少年の呟きは、瓦礫の山の中に吸い込まれていった。

砂埃を巻き上げる乾いた風とともに。

その1

なんかおかしい。

なんてゆーか、俺はいわゆる至って普通の善良な一般市民だ。そりゃ普通の人間よりはクールでビューティだったり、百万ドルな笑顔の爽やかナイスガイだったりもするが、それはあくまでプラス要素、つまりは人に好かれるべき要素である。

要するに……なんだ。人に恨まれることをした覚えなんてないし、ましてや、命を狙われるなんてことはあるはずもない。

なんたって、善良な一般市民であるからして、それは当然なくらいに当たり前であって、それはいわば宇宙の真理。

で、あるはずなのだが。

なんとというか……アレなのだ、アレ。

感じるのだ。

ん？ 何がつて？

だから、つまり

いわゆる敵意に満ちた視線、というやつを、だ。

（狙われた大量殺戮者^{ジェノサイダー}）

「ミュウ、お前も感じるであろうっ?」

「なにがですか？」

……。あー。せっかく前回の最終セクションでマンネリを脱したと思っただのに、すぐこれである。

もちろん、俺が毎回、唐突に質問するのが悪いのだとわかってはいるのだが、いつでもそういう状況なのだから仕方あるまい。てくてく。

俺とミュウが新たな街（そこそこの大きさの街だ）に到着したのは、昼時を若干過ぎた頃だ。もちろん前日は野宿であり、朝も干し肉ぐらいしか口にしていなかったため、俺とミュウが真っ先に食事処へと足を運び、人として当然の結果。

そこで腹一杯になって一時間ほど動けなくなったのも人として当然の結果。

そして今、俺たちは一杯になったお腹を抱え、宿を探している途中である……。の、だが。

「ううむ」

先ほども言ったように感じるのだ。何者かが後ろから付いてきている気配を。

……。いや実を言うと、これは今日、この街に着く前から感じていたことである。正確に言えば、今朝出発してから一時間ほど経った頃。

最初のうちは、俺のあまりのカッコ良さに一目惚れしてしまった街娘がこっそり付いてきているのかと楽観的に考えていたのだが、一つ前の街からここまではおおよそ徒歩で五日間ぐらいの行程にあり、その間、俺とミュウの超人的な歩きの速度に、普通の街娘が付いてこれるはずもない、と、つい先ほど閃いたのである。

「なにか……誰かに付け回されてるような気がするのだ」

「付け回されてる、ですか」

と、ミュウが少し首をかしげた。

その不思議そうな反応に、俺は少し安心する。

「いや。どうやら俺の気のせいのようなのだな」

ミュウが感じていないのであれば、俺の気のせいである可能性が濃厚だ。

何しろ、彼女は俺なんかよりそういうことにかけては敏感である。俺の方は、単なる直感というやつであって、全然アテになるものではない。

「はあ」

と、ミュウはそんな俺に、またまた不思議そうな顔を見ると、
「付け回されてますけど」

「……」

俺は気の抜けた顔で隣のミュウを見る。

「では、さっきの不思議そうな顔は何だったのだ？」

「随分長い間付いてきてますので、御主人様のお知り合いかと」

「そんなストーリーカーちっくな知り合いはおらんぞ」

話しつつ、軽く背後を振り返ってみた。

時間が時間ということもあり、大通りは人で溢れている。その中から、尾行している人間を捜し出すのは結構骨が折れるのではないか。

「というか、無理である。」

「ふむ。どうするべきであろうか？」

再び正面に向き直り、小声でミュウに問いかけてみると、

「放っておいても構わないかと思えます。気配の断ち方からして、御主人様に危害を加えられるほどの者とは思えません」

「しかし、どうにも落ち着かな」

「では、消去しますか？」

「いや、それはしなくてもよい……」

相変わらず、平気な顔でとんでもないことを口にする娘である。

近頃は多少マシになってきてはいるのだが、それでも主人である俺のためならいつでもそういうことをやりかねない勢いであった。

「ふむ。とりあえず、今しばらくは放っておくこととしよう」

今のところ、若干の敵意を背中に感じる程度で、実害があるわけ

でもない。ミュウとはぐれないように歩いていけば、何の心配もないであろう。

……で。

それからは、あまり後ろを気にしないように、今日の宿を探し続けた。

ついでに、そろそろ路銀も乏しくなってきたところでもあり、何か短期間の仕事がないかどうかも同時に探すことにする。

日割りのバイトは条件的にキツイものばかりなのだが、この際賢沢は言ってもらえん。

と、そんなところへ、であった。

「騒がしいですね」

「ん？」

ミュウの言葉に、少し耳を澄ませてみると……確かに。俺たちの進行方向で何やら喧噪が聞こえる。騒ぎが起きているようだ。

「なんであろうか？」

「わかりません」

「ふむ」

何かトラブルが起きているのであれば、力になれるかもしれない。

……ああ、改めて断っておくが、俺は現在、人々に対する償いの旅をしている途中であり、そういう立場からもちょう騒ぎは放っておけないのである。

「よし……行くぞ、ミュウ！」

「はい」

漆黒のマントを翻し、騒ぎの方角へと向かった。もちろんミュウも後をついてくる。

そして、俺たちが駆け出してまもなく。

「暴れ馬だぁーっ!!」

進行方向から叫び声が聞こえた。

「暴れ馬……?」

「暴れる馬のことですね」

「そのままではないか」

だが、確かに。何やら進行方向から馬の蹄の音が聞こえてくる。

ついでに言うところ“近付いて”きている。

「危ねえーっ！ 避ける避けるーっ!!」

ただでさえ人の多い時間帯、人の多い通り。

そんな叫び声で混乱が起こらないはずもなく、

「お…… おおっ!?! おおおおおおッ!?!」

進行方向から戻ってきた大量の人の波はアツと言う間に俺たちを飲み込まんとした。気を抜くとそのまま流されてしまいそうである。

俺は足を踏ん張りながら、

「ミュウ。はぐれてはいかんぞ」

大丈夫だろうが、一応そう声を掛けておく。

が、

「?」

返事がない。

怪訝に思つて、ふと後ろを振り返ると、

「……お?」

ミュウがいない。

そして、さらにその先に視線を向けると、

「うおっ!?!」

「……」

無言でこっちを見つめたまま、人の波に流されつつあるミュウの姿がそこにあった。

体重が軽いせいか、踏みとどまることが出来なかったらしい。

「ま…… 待てっ! 待つのだっ!?!」

慌てて人の波を追いかける。

中規模とはいえこんな街ではぐれてしまうと大変だ。ただでさえ

方向音痴な俺のこと。これが今生の別れにもなりかねない。
……と。

ドドドドドドッ……

「おっ、」

ミュウを追いかけていた俺の背後から、何やらものすごい足音が聞こえてくる。

(そういえば、何か忘れていたような……)

ドドドドドッ……

背後からものすごい足音。しかも近付いてきている。

人の波第二弾、などではない。

「……」

おそろおそろ……後ろを振り返る。

そして視界に入ったのは

「……のおおおおおおっ！！！！」

目前に迫る大型馬の形相。そして凶悪なほどのスピード。

(……やばいつ！！跳ねられたら死んでしまっ！！)

視線を正面に戻し、

「おおおおおっ！！！！」

マントが水平になるほどのスピードで猛ダッシュ。

ドドドドドドッ……

ダダダダダッ……

人間とは思えない速さで逃げる俺。

……だが、いくらクールでビューティーでワンダフルな俺の足でも、さすがに馬の足に敵うはずはなく。

(のおおっ！俺は馬に跳ねられて死ぬのかああっ！！！?)

ドドドドドドッ……

馬の足音が直前にまで迫ってくる。

水平になったマントが馬の眼前にまで迫った。

「おおおおおおッ！！！！」

ヤバイ。

本気でヤバイ。

……と、そこへ。

カツ！！

「…………お？」

眼前の人の波が光を発した。

「おおおおお！？」

そこから幾筋もの光の束が弧を描いて飛ぶ。

ズガアアアアアンツ！！！！

俺を避けるように、と暴れ馬の目前に突き刺さる光の束。

「…………ヒイイイイイインツ！！！！」

「おおおおおおっ！！？」

だが当然、近くにいた俺も無事に済むはずはなく、その威力に軽く吹き飛ばされ、

「てっ！！」

ゴンツ！！ 前のめりに前頭部をぶつけた。

「ぐえっ！！！！」

ドスツ！！ 前方に回転して背中から地面に突っ込んだ。

「ぐああああっ！！！！」

ズザザザツ！！ そのまま地面を数メートル滑っていく。

「ぐはああああ……………」

…………ピタツ。 ようやく止まる。

しいーん…………

辺りが静まり返った。

「…………いたたたた…………な、なんなのだ…………？」

何が起こったのかさっぱりながら、ぶつけたおでこを押さえつつ、むっくりと上半身を起こす。

背中に関しては、服を着ていたおかげもあって、それほど痛まない。というか、随分丈夫な生地で出来ているらしく、あれだけ土の

地面を擦ったにも関わらず、どこも破けていないようだ。

「ど……どうなったのだ……？」

地面にお尻を付いたまま、とりあえず状況を把握しようと、辺りを見回す。

と、そこへ、

「御主人様」

どうやら人の波が止まったおかげで解放されたいらしい。ミュウが俺の方へトコトコと歩み寄ってきた。

「ご無事でしたか？」

俺は顔を上げて、

「おお、ミュウよ。一体、何がどうなって」

言いかけてハツとする。

(そういや、光の束……って)

「……お前か？」

おそろおそろ尋ねてみると、

「はい」

案の定、ミュウはあっさりとそれを肯定した。してしまった。

「御主人様に危険が迫っておりますので、排除しました」

「……おおおっ！ なんとということを……！」

(まさか、こんな大衆の目があるところで力を使うとは！)

これでは、俺たちが人間でないことがバレバレになってしまうではないか。

即刻、捕まって縛り首にされてもおかしくない。

「に、逃げるのだ、ミュウ！」

パツと立ち上がるとミュウの手を引き、すぐさまその場を離れる。

「？」

そんな俺の慌てぶりに、ミュウは不思議そうな顔をして、

「逃げますか？」

「当たり前だっ！ ここでボーっとしていたら、すぐに捕まってしまっぞっ！」

「そうですか」

「モタモタするでないっ！」

何事か言おうとするミュウを引っ張り、早々に大通りを離れ、路地の方へと逃げ込む。

幸い、人々は驚きから立ち直っていないらしく、俺たちよりも光が飛んだ先……地面にボツコリと空いた穴の方に注目していた。

「……あの。御主人様」

俺に手を引っ張られたまま、まだ不思議そうな顔のミュウ。

「なんだ？」

ミュウはトテトテと小走りに俺の後を付いてきながら、

「おそらく捕まりませんけど」

「……何故だ？」

さらに足を緩めて聞く。

「いえ」

ミュウは俺の顔を見上げ、それから後方を振り返りながら、

「みなさん逃げることに必死でしたので。私が力を使ったことには気付いていないかと思えます」

「お？」

ピタッ。

足を止めた。

「……それは本当か？」

「はい。少なくとも、暴れ馬から必死に逃げていた人たちは気付いてません」

きっぱりと、そう答えた。

「……おお」

ミュウが断言するということは、絶対に信用して間違いない。それは今までの経験からよくわかっていた。

「そうかそうか！ 良くやった！」

俺は喜び勇んで、ポンポンとミュウの頭を撫でてやる。

ちなみに言っておくと、俺が喜んだのは、捕まらずに済むという

ことももちろんであったが、それ以上にミュウがそこまで周りに気を遣えるようになった、ということの方が大きい。

また俺が危ないからと、後先考えずに力を使ってしまったものだと思っていたから、尚のこと。

「よしよし。偉いぞ、ミュウ」

さらに撫でてやると、ミュウはちよつと不思議そうに俺の顔を見上げながら、

「……はい。ありがとうございます」

もしかしたらちよつと嬉しがってるのかもしれない。

「あ………ですが」

「ん？」

俺が頭から手を離れたところで、ミュウは少し思い出したような顔をする。

「必死に逃げていた人たちは気付いてませんが」

「うむ？」

「“必死に逃げてなかった人”は気付いているかもしれませんが」

「何を言うか。そんなもの、いるはずがなかるう」

俺はその不安を笑い飛ばした。

あれだけの騒ぎ、狂乱ぶりである。あれで必死でなかった奴がいるなら、それはよっぽど頭の弱い奴か自殺志願者。あるいは、馬よりも足に自信がある奴ぐらいであろう。

「はあ」

ミュウは俺の反応に、ちよつと首を傾げると、

「ところで、御主人様」

「ん？」

「やはりお知り合いでは」

「………は？」

突然の言葉に、俺は怪訝な顔をして、

「なんの話だ？」

「いえ」

と、ミュウは俺 いや“俺のいる方角”を見ながら、

「何かお話がありそうに見えますけど」

「話？ 何の話だ？」

「私にはわかりませんが」

「……はあ？」

いまいち要領を得ないミュウの言葉に、俺が再び首を傾げたときである。

がしっ！

「うおっ！！」

突然、背後から首に腕が回されたかと思うと、

「……動くな」

声とともに、首筋に何か金属質のものが当てられる気配。

「なっ、なんだっ!？」

突然のことにちよつとアタフタすると、

「動くんじゃない!」

もう一度、今度は小さいながら強い調子の声が飛んで、

「動くも命の保証はないぞ」

ピタツ、と、顎に冷たい感触。

氷の塊、などではない。もつと生々しい……いわゆるアレ。アレだよアレ。やばいアレの感触だ。

(ナ、ナイフ……か?)

ごくりと喉が鳴り、僅かに冷や汗が流れる。

そして同時に、先ほどまで背中に感じていた視線と、今、背後にある気配が同一のものであることに気付いた。

「ま、待て待て！ 何が何だかわけがわからんが、とにかく話せばわかるぞ!!」

とりあえず、必死に平和的解決を呼びかけてみる。

っていうか、相手が何者なのかわからんが、とにかく俺はこっや

ってナイフを突きつけられねばならないようなことをした覚えはないわけ。さつきも言ったように、俺は善良なる一般市民なのだからして、話せば向こうもきちんとわかってくれるはずなのである。人として。

だが、

「黙れ」

「……………う、うむ」

再びナイフが押し当てられて、俺は仕方なくそれに従った。

「御主人様」

と、そんな状況にも関わらず。

ミュウは別に困ったような様子もなく、ただ小首をかしげてこっちを見ている。

それを見て、

「おっと。お前も動くなよ」

後ろの人物がそう警告した。

だが、ミュウはそんな警告にも一切構う様子はなく、

「どうしますか、御主人様」

「ど、どうすると言われても……………」

「勝手に喋るんじゃないっ！」

と、背後の人物が少し苛立った声を上げる。

(む……………?)

背後の人物はかなりミュウに注意を払っているようだ。

(ふむ。と、いうことは……………先ほどのを見られていた、か)

ミュウは見た目、どう見ても十一歳か十二歳の普通(?)の女の子である。そんな彼女を見て警戒する奴など、よっぽどの臆病者かあるいは彼女が人間でないことを知っている者ぐらいに違いない。

つまり背後の暴漢は、ミュウが人間でないことを知っているということであろう。

(むむむ……………それはマズいな。さて、どうやって切り抜けるべきか……………)

などと考え込む俺をよそに、

「御主人様のお許しがいただけるのであれば、危険を排除しますけど」

そのミュウは相変わらず、緊張感のない様子で背後の人物を無視し続けていた。

「おいっ！ お前っ……！」

と、そんな態度に激昂したのか、背後の人物が僅かにナイフを動かす。

「うおっ」

ちよつとビビった。

と、同時に、

「……」

ミュウが初めてピクツと反応した。

「動かないでください」

そして、無表情な瞳をゆっくりと俺の背後へ向けると、

「御主人様に少しでも傷を付けたなら、たとえ許可がいただけなくても、必ずあなたを消滅させます」

いつもと変わらぬ声ながら有無を言わせぬ調子で、逆に後ろの人物を脅迫してみせたのである。

「！」

その断言するような物言いに、背後の人物が息を呑んだ。

だが、それも一瞬のこと。

再び、息を吸い込んで、

「ふ、ふん！ けど、その前にお前の御主人様はこのナイフである世行きだぜツ！？」

威勢のいい口調でそう言い切る。

だが、

「いいえ」

ミュウは全く動揺した様子もなく、

「あなたがそこから一センチでも御主人様の方へナイフを動かした

ら、その瞬間にあなたの存在はこの世界から消えます。御主人様には傷一つ付くことはありません」

平然と、淡々と、そう言い切った。

「あなたは間違いなく、犬死にです」

「っ……………！」

再び、背後の人物が動揺した様子を見せる。

……………緊張感が二人の間に流れた。

いや正確に言うと、緊張しているのは背後の人物だけであろう。

ミュウは平然と、だがまるで獲物を捕らえる肉食獣のような目で、こちらの動きを見守っているだけだ。

「……………」

触れている腕から、背後の人物の脈が速くなっていくのが伝わってきた。

その手が徐々に汗ばんでいくのもわかる。

だが、まあ、それはともかくとして。

(……………むう)

ナイフを突きつけられている俺の存在感が一番薄い辺り、そこはかとなく物悲しいではないか。

(うーむ)

ここは一つ、少しぐらいは存在感を示しておかねばなるまい。

というか、ミュウはおそらく本気である。そして本当に、このナイフが俺の首に打ち込まれる前に、背後の人物の存在はこの世から消えているに違いないのだ。

そのことは俺が一番良く知っている。

ミュウは決して、俺の命をハツタリや賭けの対象にしたりはしないのだ。そんな彼女がああ言っている以上、本当に無傷で助け出す自信があるということに他ならないわけであるからして。

そして、それを知らない背後の人物が、ヤケになってナイフを動かしたりすれば……………どうなるかは目に見えている。

それだけはあってはならないことだ。

「あー、待て待て。二人とも、少し落ち着くのだ」

と、俺は仲介に入ることにした。

そして、なるべく刺激しないよう、ゆっくりした口調で、

「まあ、なんだか良くわからんが、後ろの方。出来れば、そのナイフを下ろしてもらえないか？」

「……………」

「事情は知らぬが、少なくとも俺には、命を狙われなければならない覚えはないわけであるからして……………えー、まあ、まずは話し合いをするべきであろう」

「……………」

沈黙する。

何事か考えているらしいが、ほんの僅かにナイフが離れた。

それを感じてホッとする。

……………いやいや、危険が遠ざかったからではなくて。ミュウが背後の人物を狙撃する危険性が小さくなったという意味である。

そして、さらに続いた沈黙の後、

「……………逃げたりしないか？」

「約束しよう」

俺がそう答えると……………観念したのだろうか。

フウツ、と、小さく息を吐く音がして、スツ……………と、ナイフが俺の首筋から離れた。

「御主人様」

それを見て、ミュウが近寄ってくる。

パツ、と、背後の人物が少し、後ろに飛びすさった気配。俺の言葉が全面的に信用されたわけではないらしく、かなり警戒している様子だ。

「……………ふう」

そして、俺は相手を刺激しないように、両手を軽く挙げながらゆっくりと振り返る。

「あー……………それで……………って……………？」

と、振り返った俺は……そこにいた人物の姿を見て、

(おお……?)

驚いた。

短髪、というほどではないが、少々短めにカットされた髪。警戒心一杯にこちらを睨み付けてくる、ちよつと大きめの瞳。着ている服はあまり良いものではなく、顔や手足と同じく、土と埃にまみれてボロボロだった。

いやいや、それはとりあえずどうでもいい。

他に大事なのは……そう。

身長だ。

目の前にいるナイフを片手に持った人物は、身長百五十センチとちよつとぐらい。要するに、どこからどう見ても、

「こつ……子供ではないか」

俺は驚きに目を大きく見開く。

そう。年の頃は……せいぜいミュウより少し年上、十三歳程度であろつか。

その事実にも、俺はさらに混乱する。

(……ますます、狙われる覚えがないぞ)

こつ見えても俺は、子供には好かれる性格であつて……まあ、善良な一般市民であるからして、大人に恨まれる覚えももちろんないが、子供に恨まれることなどさらに有り得ない。

(ど……どうなっているのだ……)

と、俺が一人、苦悩に頭を抱えていると、

「お前」

目の前の少年はこつちを睨み付けたまま、ナイフをピシッと俺の方に向け、

「……お前なのか？」

「む？」

いまいち要領を得ない少年の質問に、俺が怪訝な顔を見ると、少年は目を閉じ、すうーっと、大きく息を吸い込むと、

「お前が」

キツとこちらを睨み付け、

「……お前が村を滅ぼしたのかっ!？」

「は？」

そんな少年の言葉に、俺とミユウは顔を見合わせて……そして、そのまま（俺だけ）固まってしまったのであった。

その2

いや、別にそうと決まったわけではないのだ。

少年の村が“黒づくめの人魔”に滅ぼされたというのは、もう一年以上も前のことのようにであり、だからして、俺……つまり以前の俺がやったと決まったわけではないわけ。

少年の口から村の所在地を聞いて、ミュウに確認してみても、彼女の記憶にはない。かといって、俺が絶対にシロかといえば、そうとも言い切れないであろう？

ミュウが忘れていただけかもしれないし、あるいはミュウと出逢う前のことかもしれない。

とにかく、少年は犯人が俺であると疑って……俺たちの動向を伺い……そして、ミュウが力を使ったのを目撃して、疑いを強めたわけであった。

もしも……もしも、本当に俺が犯人であるならば、俺は少年に謝らねばならない。謝って許されることではないが、俺にはそれしかやりようがないのであるから。

……だが、さっきも言ったように、確証はないわけ。

というところで、とりあえずはごましておくべきであろう。
うむ。

（嘘つき大量殺戮者）
シエノサイダー

「……というわけである」

「なにがですか？」

「なんか、遊んでないか？」

「いや、お前でなくて、だな。丁度、そっちの少年に説明を終えたところなのだ」

「？」

「ミュウは納得しかねる様子で、

「突然、そうおっしゃられたように感じましたけど」

「いや、それはそうだが。そこはいわゆる大人の事情というやつであって」

「そうですか」

「納得したようだ。」

「ちなみに俺たちがいるのは、先ほどの街にある、とある宿屋。その一階にある食事処。」

「そこで俺は、少年に対し、弁解をしていたわけだ。」

「俺は至って普通の、善良な旅する一般市民であり、その途中でたまたま出逢ったミュウ（記憶喪失の少女という設定だ）とともに旅を続けているところなのだ。」

「ミュウが人間でないことは、さすがにゴマかきれなかったが、俺については、至って普通の人間であることを強調しておいた。」

「もちろん真つ赤な嘘であるが、嘘も方便と言うであろう？」

「問題は少年がミュウについてどう思うか、であったが、どうやら少年は“黒ずくめの人魔”にしか興味がないらしく、大して突っ込んでくることもなかった。」

「これまた、非常に珍しい人間である。」

「その代わり、俺に対する疑惑の視線は、こうして夕食を共にしている今も、消えることはなかったが」

「ところで少年」

「……」

「気持ちは痛いほどわかるのであるが」

「……」

「もう少しゆっくり食したらどうであろうか？」

「っ！」

と、口の中一杯に食べ物をつ込んだ少年が、ようやく顔を上げて俺を見る。

何やら、俺たちを尾行するのに手一杯で、道中、ロクな物を食べてなかったらしく……。まあ、泥にまみれたボロボロの服を見れば、どれだけ苦労したかは一目瞭然なのであるが。

「っ……………むぐ……………」

そして、少年は懸命に口の中の物を租借し始め、それをごくんと、と一気に呑み込むと、

「……………私は少年じゃない」

急に突き放したような態度を復活させる。

なんだか良くわからない少年である。

「む、そうか。では、名前を教えてもらえんか？」

「……………」

少年は俺の顔をジッと睨むように見ていたが、一瞬、チラッと、目の前の食べ物に視線が移って、

「……………ルーン」

早く空腹を満たしたいという誘惑に負けたのか、素直に名前を口にした。

「ふむ」

俺は頷いて、

「そうかそうか。少年はルーンという名前か」

そう言うと、少年 もとい、ルーンは眉をひそめて、

「だからっ。私は少年じゃないって」

何事か抗議の声を上げようとしたが、

「御主人様」

ミュウの言葉に遮られた。

「む？」

隣に座る彼女の方を向くと、ミュウは珍しく困ったような顔をし

て、

「すみません、御主人様。そろそろ、資金の方が……」

「お、おお、そういえばそうであった」

それで思い出す。

そう言えば、路銀の方もだいぶ乏しくなっていたのだ。それに加え、この思わぬ出費（食事代）である。いい加減、何か仕事を見付けなければならぬ。

「何か働き口があれば良いのだが……」

「はい。私もまた、何かお手伝いします」

と、ミュウ。

「うむ、何かあれば良いな」

その言葉に俺も頷いた。

実は以前の街で、ミュウがどうしても資金稼ぎの手伝いがしたいというところに、たまたま俺の働き口と同じ場所でベビーシッターのような仕事を頼まれてしまい……多少は苦戦しつつも、彼女はそれを意外と上手くこなしたのである。

どうやらミュウは赤ん坊を含め、子供に好かれる才能があるらしいのだ。

「しばらくの宿代ぐらいはあるのだろうか？」

「はい」

「そうか。とにかく、急いで探さねば、な」

言って、

「……ん？」

「……」

そこで俺は、ルーンという名の少年がこちらの方をじいつと見つめていることに気付いた。勢い良く進めていた食事の手も止まり、少し気まずそうにしている。

（ふむ……？）

考えてみて、ふと思い当たる。

（……もしかしてアレだろうか？）

確かに。何度も言うように、俺は“超”が付くほどビューティーな男である。もしかしたらそういうことも有り得るのかもしれない。「少年よ……」

そこで、一応、念を押しておくことにした。

「まことに申し訳ないが、俺は頭のとっぺんから足の先までヘテロなので、少年の求愛には応えられぬ。すまん」

「んなこと一言も言っていないっ！」

いきなり先ほどまでの勢いを復活させるなり、バンツ！ と、テールに両手を叩きつけて、

「それに、私は少年じゃないって　！」

「御主人様」

そこで、またまたミュウがその言葉を遮ってしまふ。

「ん？　なんだ？」

「ヘテロというのはヘテロセクシャルの略で、つまりホモセクシャルではないという意味でしょうか」

「む？　うむ」

「そうですか」

言って、ミュウは少し首をかしげながらルーンを見る。

「？」

その行動の意味は良くわからなかったが、

(……まあよい)

それはとりあえず考えないことにしておく。

そして、

「さて、ルーンよ」

少年がようやくく食事を終えたようだったので（何か言いたそうにしていたが）、俺は話を先に進めることにした。

「そんなわけで……俺が無実であることはわかってもらえたであろうか？」

期待を込めて言った。

だが、

「……………」

ルーンは黙って俺の方を見る。

それは、どう好意的に解釈しても、信頼に満ちた視線だとは言いがたかった。

(うーむ……………)

仕方なく、誰もが思わず和んでしまいそうなスマイルを無意味に浮かべてみるが、全くの無反応。

ちよつとだけ淋しかった。

「信じられるわけないだろ」

そして、ルーンは目を細めながら、

「……………けど、確かに、お前が私の探していた仇だという確証もない」
小さく肩を落とした。その表情に、苦悩と淋しさの影が過ぎる。

そんな少年の態度に、

(ふむ……………考えてみれば不憫な子ではあるな)

その境遇に思いを馳せてみる。

……………村が滅ぼされたのは一年前の話だという。ということはつまり、一年もの間、この少年は仇を追い、たった一人で辛い旅を続けてきたのであろう。

着ているものは、泥や埃にまみれた薄手の服に、厚手ながらボロボロになったフード。おそらく、時には雨に降られ、強風に巻き上げられた砂埃に顔を背けながら。

いわゆる、雨にも負けず、風にも負けずというやつだ。

それだけの苦勞をしていれば、この、善人を地で行っているような俺の言葉さえ信じられなくなるのは、仕方のないことかもしれない。あまりにも辛い境遇に、おそらく純真であった少年の心は少しずつ荒れてしまったのだ。

そうに違いない。

そう思うと、目の奥に熱いものが込み上げてきた。

(あ、あまりにも不憫ではないか！)

「な、なんだよ」

急に瞳を潤ませた俺を見て、ルーンは僅かに身を退く。……それも仕方あるまい。何故なら彼は、すでに他人を信じる事ができなくなっているのだ。

(なんとという)

俺は両目に溢れてくる涙を感じながら、一つの決意を胸に固めた。(更正してやらねばなるまい！ 少年の、この荒んでしまった心を！！)

「お、おい、お前」

「ルーンよ！」

ガシツ。

「っ！？」

身を乗り出して両手を掴むと、ルーンはびっくりしたように身を固くした。一見、警戒しているようにも見えるが、それも仕方ない。彼は人間不信に陥ってしまったているのだから。

俺はそのまま、身を乗り出すと、

「わかった！ それならば、思う存分に俺のことを調べ尽くすがいい！」

「……は、はあ？」

怪訝そうな顔になる。

「少年も俺についてくれば、人を信じることの素晴らしさがわかるであろう！ ああ神よ！ あなたは素知らぬフリをしながらも、この少年に一筋の蜘蛛の糸を差し伸べてくださったのですね！？」

「な……なに言っただ、こいつ？」

ルーンがまるで助けを求めるようにミュウを見ると、

「要約すると“疑いが晴れるまで、そばですっと監視していて構わない”ということだと思います」

通訳。

「そう。つまりはそういうことなのだ」

俺の溢れ出るほどの気持ちをミュウが代弁してくれた。

……状況を代弁しただけか？ まあ、どちらでもよい。

だが、ルーンは納得したらしく、

「……なるほどな」

腕を組み、少し思案するような表情になって、

「確かに、お前にしばらくくっついていれば、いつかはボロを出すかもしれないし……」

そう言った。

どうやら彼の心は、どちらかと言うと疑う方に傾いているらしい。だが、それも今のうちだけであろう。

彼の荒んだ心は、俺の善人ぶりを目の当たりにするうちに、少しずつ矯正されていくに違いないのである。

(我ながら、なんとも素晴らしい方法ではないか！)
悦に浸っていた。

そして、何度もうんうんと頷きつつ、

「では、決まりだな、ルーンよ。しばらくの間、俺たちとともに旅をする仲間である」

言って、握手を求める。

だが、ルーンは少し眉をひそめて、

「私はただ、監視をするだけだ。別に仲間ってわけじゃ」

「それはならん！」

ドンツ！ と、テーブルを叩く。

「旅には危険が付き物なのだ！ 助け合いの精神が常に必要である
！……」

「わ、わかったよ」

俺の剣幕に押され、ルーンは渋々と言った表情で手を差し出してくれる。

そして、俺と少年の手ががちりと組み合わさった。

感動の瞬間である。何事も、まずは第一歩が大事なのだ。

(しかし……)

そして、手の平に感じる感触にふと思った。

(……思ったより華奢であるな)

確かに、ルーンは外見からして少し華奢な感じではある。が、まだ少年であることを考慮にいれたとしても、あまりにもその手は細かった。

(まるで女の子のようではないか……)
ミュウほどではないにしても。

(……まさか)

そこまで考えて、俺は“とある可能性”に思い当たる。

そして、目の前のルーンをもう一度、良く観察してみた。

……華奢な手先……軽そうな体。

「ルーンよ……お前、まさか……」

「ん？」

ルーンが怪訝そうな顔をする。

子供にしては細く映るその輪郭に俺はその疑いを強め……そして、言った。

「え、栄養失調ではないのかっ!？」

「……はあ？」

何のことだかわからないようであった。

「そりゃ、こんな食事は久しぶりだけど……」

その言葉に俺は納得して、

「そうか。それでまるで女の子みたいに華奢なのだな……無理もあるまい」

うんうん、と頷く。

だが、ルーンはやはり俺の言葉に眉をひそめて、

「あ、あのな。だから、さっきから言ってるように、私は
「御主人様」

そのタイミングで口を挟むミュウに、何か外界の意志のようなものを感じるのは何故であろうか。

「そろそろお休みにならないと、明日の行動に支障がでるかもしれない
「御主人様」

「む。もうそんな時間であったか」

時計を確認し、彼女の言葉が正しかったことを知ると、「では、とりあえず、自己紹介などは部屋に戻ってからにしようではないか」

言つて、テーブルから立ち上がる。

だが、

「おい」

そんな俺の行動に、ルーンは戸惑つたような顔をして、

「部屋つたつて、私はここに宿なんて取つてないぞ」

「……何を言うのだ、ルーンよ」

言つて、俺はとびつきりのスマイルを浮かべると、

「俺たちは仲間ではないか。心配いらぬ、お前は俺の部屋に泊まるが良い」

「え？」

がしつ。

戸惑うルーンの手をがっちり掴む。

「いや、ちよつ……ちよつと、ちよつと！」

手を引つ張られて、ルーンがちよつとだけ焦つた声をあげた。が、ここで退くわけにはいかない。ここは、少し強引にでも絆を深めておかねばならぬ。

「遠慮はいらぬぞ、ルーンよ。今日は男・同・士、同じベッドで夜中まで語り合おうではないか」

ルーンはさらに焦つたような顔をして、

「な、なに言つてんだよ、お前！ よく見る、私は……！」

「御主人様」

と、ミュウが俺たちの歩みを止める。

「ん？ なんだ？」

俺が振り返ると、ルーンはホツとしたような表情をして、

「お、おい。お前からこいつに言つて……」

すると、ミュウはいつものごとく、何事もなかったかのような顔をする。

「おやすみなさいませ」

「うむ、お前もゆっくり休むがよい」

「おい、待てっ！ ま、まさか……本気っ！？」

なにやらルーンが意味不明の叫び声をあげていたが……まあ情緒不安定なのだろう。

「さあ、少年よ。今日はお互いのことについて、ゆっくりと語り合おうではないか」

ガシツと、その華奢な肩を抱える。

「うわっ……だ、だから……少年じゃないって言ってんだろおおおっ……！」

そんなルーンの叫びは、その場に集まり始めた酔っぱらいたちの喧噪の中へと消えていき……そして、ひとまず騒動は一件落着いて、平和な夜は更けていくのであった。

めでたしめでたし。

一夜明けて。

「御主人様。よろしかったのですか？」

俺たちは昨日の予定通り、ちよっとした仕事が見つからないかと街の中を彷徨い歩いていた。

「なにがだ？」

ミュウの質問にそう問い返すと、

「あのルーンという方のことです」

言って、そつと後ろを振り返るような仕草を見せた。

俺たちの後方、五メートルぐらいのところをついてきている少年。なにやらとてつもなく不機嫌……というか、まるで眠れない一夜を過ごしたかのようにやつれた顔をしている。

（うーむ。やはりアレだろうか？）

思い出す。

実を言つと、昨晚、彼があまりにも『野宿をする』と言い張つたものだから、少し力尽くでベッドに縛り付けてしまったのである。

いや、別に体ごとロープで縛り付けたというわけではなく。ただ、少し不意をつき、手足を縛って身動きできないようにしてから、ベッドに優しく寝かせてあげただけなのだ。

……確かに、少々手荒だったことは認めねばなるまい。だが、大した用意もなく、あのような少年に街中で野宿をさせるなど、俺の良心が許さなかつたのである。

いわば、必要悪というやつであろう。

「問題ないだろう」

ミュウの質問にはそう答えておいた。

ミュウが“人”でないことは、すでにルーンにはバレているのだし、早い話、俺の正体がバレなければなんの問題もないわけである。

(そもそも、俺は未だ、力を制御できないのだ)

あのときは人気のない森の中だったから良かったようなものの、こんな街の中に“道”を作ることになってしまったは大変であろう。

しかし……それにしても納得できないのは、

「ルーンよ」

足を止めて振り返る。

「そんなに離れて歩かずとも」

「……私に話しかけるな。この変態野郎」

これである。

確かに昨晚のことはやりすぎだったかもしれないが、それにしても“変態野郎”はちょっとひどくないだろうか？

(むう……これも彼の心が荒んでしまっているせいなのだろうか)

結局、自己紹介も出来ずじまいであった。

「？」

ミュウが不思議そうな顔で俺を見上げて、

「御主人様も変態するのですか？」

「おそらく、お前の言うニュアンスとは違うな」

というか、俺は断じて変態などではないし、もちろん変態 形
態を変えたりもしない。

(……って)

そこでふと、違和感に気付く。

(御主人様“も”とか言わなかったか、今……)

隣を歩くミュウへと視線を送る。

……特にいつもと変わった様子もなく、トコトコと歩いていた。

(突っ込むのはヤメておくべきであろうな、うむ……)

「……ところでさ」

そうこうしているうちに、ルーンがいつの間にか少し差を詰めて
きていた。

が、もちろん俺の方は完全に無視する格好で、

「ミュウ……つつたっけ、あんた？」

「はい」

頷くと、ルーンは少し眉をひそめて、

「あのさ……その“御主人様”ってのは、一体なんなんだ？」

すると、ミュウは表情一つ動かさずに、

「主人というのは、一家の主、他人を従属・隷属させている者、あ
るいは女性が婚姻関係にある自分の夫を指している言葉です。御は
強い尊敬の意を表す言葉、様は敬意を表す言葉です」

全くの一言。

たいしたものであるが、ルーンは当然のごとくに眉をひそめて、

「は？ ……いや、そんな一般的な言葉の意味を聞いてるんじゃないな
くて」

「私にとっての御主人様とは、私を隷属させている御主人様のこと
です」

「……」

「ミュウよ」

「はい」

「隷属というのは少し言葉のイメージが悪い。せめて従属ぐらいにしておいてくれぬか？」

「はい。御主人様」

「……」

そんな会話に、ルーンは“なんだこいつら”とでも言いたげな顔をしていたが、それ以上、突っ込んでくることはなかった。

そんな彼の態度に、俺は少し不安になって、

「ルーンよ。一言、言っておくが」

足を止め、再び、少し離れて歩くルーンを振り返ると、

「私は奴隷商人でもなければ、変態成金野郎でもないぞ」

「……んなことは言っていない」

「ふむ、そうか」

では、どの辺りが“変態”なのだろうか。

……まさか、とは思っただが。

「変態もしいぞ」

「言っていないっての……！」

そんなこんなで。

「……ふうむ。なかなか見つからぬものだ」

昼時になり、俺たち三人は昼食を取っているところだ。

とはいえ、食事処に行くとただでさえ少ない資金が底を尽きかねないので、今日はミュウが昼食を準備してきたのである。

「それにしても」

と、公園の芝生に座り、ミュウから手渡された包みを広げる。

「お前の作る料理というのは、はじめて食べるような気がするぞ」

「はい」

頷くミュウ。

「初めて作りました。……御主人様が、以前、作ってみるとおっしゃられましたので」

「おお、そうかそうか。偉いぞ、ミュウ」

そんなことを言った記憶はすでになかったが、とりあえず彼女の努力を誉めてやることにする。

考えてみれば、あれだけ人間の世界のことを知らないミュウのことだ。料理などしたことがないのも、至極当然のことであったかもしれない。

そうしてから、俺はクルツと後ろの方を振り返って、

「ルーンよ。お前もそんなところに座っていないで、こっちに来たらどうだ？」

と、わざわざ遠くに座ったルーンを呼んだ。

彼の態度は相変わらずで、今も同じように鋭い眼差しでこちらを見つめていたが、

「……」

やがて、空腹に耐えられなくなったのだろう。渋々ながら、ゆっくりと立ち上がり、無言のままはこちらにやってきた。

「うむ」

俺も満足し、三人で昼食を取ることもなった。

中心にミュウの作ってきた弁当を置き、それを広げる。

「……ところでさ」

そこまでやったところで、ルーンが口を挟んできた。

「これ……食べ物なのか？」

「む？」

突然、おかしなことを言い出すルーンに、俺は怪訝そうな表情を向け、

「何を言っておるのだ。そんなこと、当然ではないか」

言いながら、自ら開いたその包みの中身に目をやって、

「……おおうっ！！？」

驚愕に目を見開いた。

「御主人様？ どうなさいました？」

と、無垢な瞳で不思議そうにこちらを見つめてくるミュウ。

だがしかし、俺はその彼女の問いに、すぐさま答えることができなかった。

(こ、これは……!?)

その弁当箱に詰められていたのは、どう控えめに表現しても“グロテスク”としか言い様のない、奇妙な物体の数々だったのだ。

「見よう見まねで作ってみたので、御主人様のお口に合うかどうかはわかりませんが」

と、ミュウが若干、遠慮がちな表情を見せる。

「そ、そうか……」

どんなものを見て、どこを真似たのか非常に気になるころであった。

(だが、ミュウがおそらく一生懸命に作ったものなのだ……まさか、食べないわけにもいくまい!)

そう思っ、もう一度、弁当箱の中身に目を移す。

「……」

クラッ……

眩暈がした。

そもそも、料理の過程云々という前に、原材料からして何か間違っているようにも思ってしまう心を、俺は決して否定することができないのであった。

「おい……これ、食べられるのか?」

相変わらず、不審そうな表情で尋ねてくるルーン。

(だが、決して粗末にするわけにはいかぬ……これもミュウのためなのだ)

俺はそう思い、

「……当たり前ではないか」

なんとか平然とした態度を装って答える。

「これはこの地方特有のものでな。パツカルチョという食べ物なのだ」

大嘘だった。

だが、ルーンは納得できない顔をしながらも、

「そ、そうなのか……」

「そうなのですか？」

「って待て！　なんでお前まで不思議そうに」

「ルーンよ」

ミュウを追求しようとするルーンを制止して、

「さあ、食べるが良い。一度食べたなら、病みつきになることは間違いないであろう」

どうも俺はこのルーンという少年に対して、嘘ばかりついているような気がしてきたのだが……まあ、おそらく気のせいであろう。

たとえそうだととしても、それは間違いなく方便な嘘である。

「そ、そうか……」

やはり空腹だったのだろう。

ルーンは少し眉をひそめながらも、そのグロテスクな物体に手を伸ばした。

続けて、俺もそれに習う。

（見た目が悪くとも、味はイケるかもしれないではないか……）

どことなくむなしさが漂う希望を抱き、ミュウの期待の眼差し（？）を感じながら、俺とルーンの二人はその物体を口に運んだのである

幸い、二人とも全治まで三日程度であった。

その3

しつこいようだが、俺はかなりのビューティフルガイである。

もちろん内面もそうなのだが、外面は間違いなく二枚目であるし、なんとというかこう……二ヒルな魅力？ みたいなものが、体中から滲み出ているわけなのだ。

毎回毎回、体中の筋肉を酷使用するような労働となるとなかなか辛いものもあるし、ここは一つ、このルックスを生かした仕事を探してみようと思つた次第である。

そうして見つけたのが、いわゆる客引きの仕事だ。

つまりはこの俺のマーベラスなスマイルを持って客の気を引き、どんどん招き入れようとそういうことなのである。

造作もない。

……と、そう思つて引き受けたのだが。

「道化師 大量殺戮者」
ジエノサイター

「納得いかぬぞ」

俺がそう言うと、“なにがですか？”と返ってくるのがいつものパターンなのだが、残念ながら今、近くにミュウの姿はなかった。代わりに、

「あ、ピエロさんだー」

「おお、ボウヤ。明後日からだ。良かったら見に来てくれたまえ」
言いつつ、手にしたお菓子を渡す。

そう。

俺は今、丸い付け鼻を装着し、顔中にはペイント&奇妙な帽子と服を着込み、ピエロの格好をしてサーカスの客引きをしている真っ最中なのであった。

(むう。こんな格好では、俺の素顔が全く見えないではないか)
暑い。とてつもなく暑い。

それに加えて、

「おら、新入り！ ボーっとしてねーで、もっと宣伝しねえかっ！
」！

怒鳴り声が後ろから飛ぶ。

「う、うむ……了解した」

今更に気付いたのだが、この炎天下の中を延々ビラ配りというのは、下手な肉体労働よりよほどきつい仕事だったりした。

聞いたところによるとこのサーカスはなかなか有名な一団らしく、テントの規模にしても客席が二階建てだったりかなり大規模なもので、給料もなかなか見所があったりするのだが

「もっと声出さんかっ！ そんなんじゃ野良猫すらも立ち止まってくんねえぞっ！！」

「……」

一生懸命やっているにも関わらず、これである。
とにかく厳しいのだ。

そもそも大声を張り上げたら、野良猫は普通逃げるのではないかな？ ……なんて屁理屈が通用するはずもなく。

(しんどい……)

ギラギラ照りつける太陽が、快調に俺の体力を奪っていつてくれるのであった。

「つつ、疲れたぞ」

そしてようやく休憩時間。

ちなみにミュウとルーンはちょっとした内装の手伝いなんかをや

らされてるらしいが、テントの中は風通しも良く、意外に涼しいら
しかった。

まあ、客が大量に入れば、そうでもなくなるのかもしれないが。

(ミュウは大丈夫であろうか……)

俺と離れ離れになることを知ると、僅かに不安そうな表情を覗か
せていたが、まあ、ルーンも一緒にいるのだし、おそらくは大丈夫
であろう。

「しかし暑い……」

背中汗でぐっしょりだ。

休憩とはいえ、テントの中で休めるわけではなく、脇に積まれて
ある木材の山に腰掛け、手の平をうちわ代わりにして仰いでいるだ
け。

「日射病になってしまっているか……」

団員たちはテントの中に入って麦茶を飲んだりしているらしいが、
この俺には飲み物が出てくるわけでもなし。

臨時に雇われただけあって、待遇は最悪であった。

「む……文句を言っても仕方がないが……む」

ビューティフルだけではない、鍛え抜かれた肉体を持つこの俺
でなくば、とつくに倒れているところであろう。

「そもそもおかしいのだ。ピエロというのは元来、喋ってはいけな
いものではないのか」

付け鼻の表面を撫でながらちよつとだけ文句を言ってみる。

「だいたい、クールで二ヒルな俺に適する役ではなからう」

「ふうん。じゃあ、どんな役がいいの？」

「ふむ、そうだな。やはり、この天から授かったとも言つべき、ビ
ューティフルフェイスを生かせる役にすべきであろう」

「でも、サーカスは顔じゃなくて芸を見せるところだよ？」

「む……そう考えると難しいところだが……む？」

言いかけてふと気付いた。

「……ところで、俺は今、誰と喋っておるのだ？」

周りには誰もいない。

いるのは、どうやらサーカス団の一員らしい、小柄で細身の少女だけである。

(……小柄で細身の少女?)

顔を上げた。

そして、

「……おおう!? どこから現れたっ!?!?」

「反応遅いよ」

言つて、少女はクスクスと笑つた。短く揃えられた髪に、まだ幼さを残す顔立ちと相まって、無邪気で純真そうな印象を受ける。

だが、

「まさか……気配が全く感じられないとは」

ただ者ではない。

「普通に歩いてきたよ」

「普通に、だと!?!?」

(そういえば、一流の暗殺者は普段から気配を消して暮らしていると聞いたことがあるぞ)

しかし。この無邪気そうな少女が暗殺者だと言つのであれば、この、善良が服を着て歩いているような俺ですら、詐欺師ぐらいの扱いになつてしまつてもおかしくないではないか。

……自分で言つてて良くわからんが、つまりそういうことだ。

ちなみに、少女の見た目はミュウと同じぐらいで、おそらく十一歳か十二歳ぐらいであろうか。

「だが、気を付けるのだ。見た目に騙されてはいかん!」

「……誰に話してるの?」

「子供が細かいことを気にするでない」

「?」

少女は怪訝そうに小さく首をかしげたが、ふと、思い出したように、

「あ、そうそう。はい、これ」

言って、手にしていたカップを俺の方へと差し出した。
「む？」

「外、暑いだろうと思って」

「おおー！ 麦茶ではないかっ！！」

そこには、この俺が渴望して止まない薄茶色の液体がなみなみと注がれていた。

そんな俺の反応に、

「ごめんね」

と、少女は両手を合わせて、

「みんな忙しくて。ピエロさんのこと忘れてたわけじゃないんだけど……」

「……いやいや」

むぐむぐと、麦茶を一気に飲み干して一息つく。

残念ながらキンキンに冷えているとは言いが難かったが、半分脱水症状になりかけていたこともあり、その麦茶は死ぬほどうまかった。俺は口元を拭い、飲み終わったカップを少女に返して、

「すまぬ、助かった。君は命の恩人だ」

「あはは、大袈裟だよ」

少女は少し照れくさそうに笑ったが、

「いやいや。君の親切はいずれ、君自身の幸運となって返って来るに違いないであろう」

俺は真顔でそう返した。

情けは人のためならず、という。他人にかけた情けは、必ず自分に戻ってくるのだ。世界はそのようになっていくものなのである。

「ふふ、ピエロさん、面白い人だね」

「ピエロさんではないのだが……」

言って、命の恩人に自己紹介しようとする。
が、

「ユン！ そろそろ番組の打ち合わせをするぞーっ！！」

「あ、はーいっ！」

「む……」

俺が引き留める間もなく、

「じゃあ あ、私、高綱をやるの。ピエロさん、良かったら見てね」

「だから、ピエロさんではないと」

言い終わる前に、少女はクルツと踵を返し、

「じゃあねっ」

「む……うむ」

ブンブン、と手を振りながら走り去って行ってしまった。

俺も小さく手を振り返しながら、

(ユン……というのが、あの少女の名前か)

なかなか良い名である。

いや、別に麦茶をもらったから、というのではないぞ。

(ところで、高綱というのはなんであるうか)

こんな仕事をしていて難だが、いまいちサーカスの演目に疎い。

ただ、言葉の意味を考えるに、

(高綱……高い綱……綱渡り……)

そこまで考えが達して、ふと思う。

(ふむう。あんな子供が、そのような危険なことをするのだな)

まあ、サーカスで行われるアクロバットやらというのは、大人より子供がやることの方がかえって多いらしく、特別珍しいことでもないのかもしれない。

(とにかく、見に行つてやらねばな)

当たり前のことであるが、俺は非常に義理堅い人間なのである。

麦茶一杯とはいえ、その恩には報いてやらねばならないと思う次第だ。

(……さて、そろそろ休憩も終わりか)

立ち上がる前に、

「おら、新入り！ いつまでもダラダラ休んでるんじゃないやねえっ！！」

「う、うむ……」

またあの地獄の時間が始まるのかと思うと、さすがの俺でもうんざりしてくるのであった。

「ああ、あの子か」

その日の晩。

再び宿に戻って昼間の話を見ると、ルーンが頷いてそう言った。

どうやらミュウとルーンの二人も、あのユンとかいう子と話をしたらしい。

「サーカスってのは、孤児とか引き取って芸を仕込むことが多いからな」

「それはともかくとして」

と、俺はそんなルーンを真顔で見つめて、

「ルーンよ。……その、手の中でナイフをクルクル回すのはやめてもらえんか？」

「……なに言ってるんだよ」

ルーンは細めた目でこつちを見据えると、

「お前みたいな得体の知れないのと一緒にいなきゃなんないんだ。

これぐらいの警戒は必要だろ」

ピタツと俺にナイフの切っ先を向ける。

「むう」

どうやら、彼の信用を得るにはまだまだ時間がかかりそうな雰囲気であった。

ということ、ひとまず話題を戻すでしょう。

「しかし大変な話だな。小さい頃から、あんな芸を仕込まれなければならんとは」

腕を組んで言つと、

「……ふん」

ルーンは再びナイフを手の中で弄びつつ、顔を横に向けて、

「あの子は運がいい方さ。それこそ、餓死したり娼楼に売られたりするよりはな」

「なんと」

俺は眉をひそめて、

「そういう子供は孤児院などに引き取られるのではないのか」

「……お前、意外とモノを知らないんだな」

ルーンは呆れ顔でこっちを見て、

「そんなのはほんの一部の、運のいい奴らだけさ。……もっとも」

それから、少し口元を歪めるような笑みを浮かべると、

「その方が不幸な場合もあるけどな」

「ふーむ？」

どういう意味かはわからなかったが、ひとまず考えないことにした。突っ込んでも答えが返ってくるとは思えない。

「しかしルーンよ。お前、子供の割にはなかなか物知りなのだな。

いや、感心感心」

感心する。

まあ、それなりに苦労してきた子供だというのは、外見からも容易に想像できるが。

「あのな……」

だが、そんな俺の掛け値なしの賞賛に、ルーンは視線をさらに鋭くして、

「私は子供じゃない。勝手に子供扱いしないでくれ」

「ふ」

俺は前髪を軽く払いながら、

「そうか。ルーンは背伸びしたい年頃なのだな。その気持ちはよくわかる。わかる……が、十三歳といえばまだまだ子供なのだ。無理して背伸びする必要などないのだぞ」

などと、ちよつと大人の余裕と貫禄と包容力を見せてやろうと思つたら、ルーンは何故か目尻を吊り上げて、

「誰も十三歳だなんて言つてないだろ！」

「お？」

俺は首をかしげて、

「それもそうか。とすると十二歳か？」

「お前……私を馬鹿にしてるのか……？」

何故だかルーンはプルプルと拳を震わせ始めた。

カルシウムが足りていないのだろうか。

(ふむ……今まで十分な食事を摂ってなかったのだ。それも致し方あるまい)

などと思いつつ、

「では、いくつなのだ？」

「……」

問うなり、ルーンは急に言葉に詰まってしまった。

そして、僅かな空白の後、

「……少なくとも、物心がついてから十三年は生きてるはずだ」

「はず？ なんなのだそれは？」

反射的にそう突っ込むと、ルーンはキッとこっちを睨んで、

「うるさいなっ！ 私も孤児だったから、正確な歳は知らないんだ

よっ……！」

「……そ、そうだったか。それは済まぬことを聞いた」

どうやらこれは俺の方が悪かったらしい。

素直に謝って、ついでに彼の気持ちを落ち着かせるべく完璧にフオローしておくことにする。

「い、いや、それにしてもルーンは若く見えるぞ。うむ。まるで十

三歳の少年のようぞ

「~~~~~っ！」

ダンッ！

ルーンは床を踏みならすようにして立ち上がると、

「私は十三歳でもないし、少年でもないっ……！」

「お、おい、ルーン」

呼びかける間もなく、

ダン！ ダン！ ガチャツ……バタンツ！！

不機嫌そうな足音を立て、そのまま部屋を出て行ってしまった。

「な、なんなのだ？」

おかしい。完璧なフォローのはずだったのに。

「ミュウよ。ルーンは一体どうしたのだ？」

どうにも彼が怒った理由がわからず、黙って成り行きを見守っていたミュウへと助けを求めると、

「お急ぎのようでしたので、ご不浄かもしれませんがね」

「いや、そういう問題ではないのだが……まあよい」

子供というのは総じて感情的なものだ。そうして次第に世の機微を学び、自らを律する術を知る。だから子供のうちはむしろアレで丁度良いのである。

（おお、俺はもしかすると教師に向いているのかもしれない）

まあ、それはともかく、である。

（……しかしルーンのヤツ、物心ついてから十三年ということは）

「ミュウよ」

「はい」

「物心というのは、だいたい何歳ぐらいでつくものだ？」

そう問うと、ミュウは少しだけ考えてみせて、

「物心という言葉の意味によりますが、もっとも古い記憶のある年齢ということでしたら、二歳から四歳といったところではないでしょうか」

「ふむ……」

それで計算すると、ルーンの歳は十五歳か十七歳ぐらい……俺は永遠の十八歳なので、そうになると、ルーンとほとんど変わらない計算になってしまう。

そこで質問してみることにした。

「ミュウよ……アレが十五歳や十七歳の男に見えるか？」

「はあ」

するとミュウはなにやら曖昧な顔をしながらも、

「見えませんが」

きっぱりとそう答えた。

……ほら。やっぱり俺が正しいのだ。

アレはどう見ても十三歳ぐらいにしか見えん。身長だって百五十センチ程度。一般的な男性の平均を遙かに下回っているではないか。

あれ以上成長しないのだとしたら、かえってその方が可哀想である。

「やはりサバを読んでいるのだろうか」

ボソツと呟くと、ミュウがそれに反応して、

「鯖を読むのですか？」

とてつもなく不思議そうな顔をした。

「どこことなくであるが、お前がイメージしているものとは違うような気がする」

「？」

小首をかしげるミュウ。

「いや、それにしても変わった人物だな、あのルーンという少年はそういうや、あの日以来、部屋も俺とは別の部屋を取ったりしている。個人的な希望としては、お互いもう少し打ち解けるためにも、同じ部屋で深く語り合いたいところなのだが、

『お前と同じ部屋でなど寝れるかっ！』

とか、ものすごい剣幕で怒鳴られてしまった。

「照れ屋さんなのだろうか」

「はあ」

相変わらず、ミュウの反応もはっきりしない。

なにか不可解なことでもあるのだろうか。しきりに首をかしげている。

そして、

「あの、御主人様」

「なんだ？」

「ご主人様には、他にルーンという名の男性のお知り合いがいらっしゃるのですか？」

「む？ なにを言うのだ。いるはずなからう？」

「はあ。そうですね？」

また首をかしげる。

……… いったいなんなのだろうか。

(まあ、よい)

自慢ではないが、俺は考えることが苦手なのだ。

ゆっくりとマントを翻して立ち上がり、

「少し涼みに外を歩いてくるとしよう。……… ミュウよ、お前はどこうする？」

そう聞くと、ミュウはそのまま立ち上がった俺を見上げて、

「御主人様の仰せのままに従います」

「む………」

相変わらずといえれば相変わらずなのだが、彼女にはいまいち自主性というものが欠けている。

ここは少し、その成長を促してやらねばなるまい。

そう思い、

「ミュウよー！」

俺は唐突にビシッと指先を突きつけて、

「たまには自分の意志というものを主張せねばならんぞー！」

「？」

ミュウが小首をかしげる。

「………？」

「つまりだ……… ついてくるか来ないか、自分で判断しろということなのだ！」

どーん。

……… という効果音が鳴ったかどうかは定かではないが。

俺のその言葉にミュウは、

「？」

と、ますますわからない顔をしてしまった。

(むづ)

これではラチがあかない。

だが、彼女を人間世界に馴染ませるために、これはとても大事なファクターであるかのように思われる。

(ここは強引にでも、“自分で判断すること”を教えてやらねばなるまい)

優しいだけで教育者は務まらないのだ。時には厳しくすることも大切である。

そこで、

「……俺は行くぞ」

マントをバサツと翻してミュウに背中を向けると、

「ついてこいともついてくるなとも言わん。お前の好きなように行動するが良い」

「……」

背中に反応は返ってこない。

(厳しく……厳しくだ)

俺は振り返らずに歩みを進めた。

ミュウが動く気配はない。

……行かないと決めたのだろうか。あるいは、俺の言葉の意味がわからずに戸惑っているだけなのか。

一瞬、立ち止まってしまいそうになったが、

(ダメだ！ 時には厳しく行かねばならんだ！！)

そのまま、部屋の出口まで差し掛かる。

(……しかし)

そこで、ふと思った。

(ミュウのことだ……俺が気配を感じていないだけで、もしかしたらついてきているのかもしれないな)

振り返ってみたら、すぐ後ろにいた……なんてことも、充分にあ

りそんな気がしてならない。

(むう……)

そしてついに衝動に負け、チラッと振り返ってしまう。
すると、

「……」

ミュウは元いた場所から動いていなかった。

そこに座ったまま、真っ直ぐに俺の方を見つめている。

表情は……いつもと少しだけ違っていた。

「……御主人様」

まるで、捨てられ、途方に暮れた子犬のような瞳。

(きつ…… 厳しくせねばならんぞ……！)

足が止まりそうになる。

(厳しくせねば)

自分にそう言い聞かせた。

「……」

ミュウは相変わらず、じいっとこちらを見つめてくる。

(厳しく……)

そして一瞬の逡巡。

「……わかった。ついてくるがよい」

教育者の仮面は呆気なく崩壊してしまった。

……というか、こういう表情は反則であろう？ まともな神経を持つ人間ならば放っておくことなどできようはずもなく、審判がいれば、間違いないく笛を吹いて胸ポケットから黄色い紙を出しているに違いない。

ただ、

「……はいっ」

そう答え、すぐに立ち上がって駆け寄るミュウの言葉と表情が、妙に嬉しそうだった気がして、それはそれで幸せな気分だったりもするのである。

人とは何と現金な生き物であろうか。

(まあ、焦る必要もあるまい。明日がある)
と、まるで夏休みの宿題を先延ばしにする子供のようなことを考
えつつ、俺は結局ミュウを連れて涼みに出掛けたのだった。

一方、その頃。

「……ったく。なんなんだよ、あいつ!」

ズンズン、と地面が響きそうな勢いで、ルーンは憤慨しながら夜
の街を歩いていた。

「何が“十三歳の少年”だ! 私のどこをどう見たらそんな風に見
えるってんだよ!」

少々短めに切られた髪。健康的に日焼けした浅黒い肌。少々乱暴
な言葉遣い。

確かにそう見間違われる要素がないというわけではない。
だがそれでも、第一印象で彼(と言っておこう)のことを“十三
歳の少年”だと思ふ人間は少ないに違いなかった。

だから、彼の憤りは決して理不尽なものではないのである。

「……それにしても」

ふと、その歩む速度が落ちる。

そして腕を組み、口元に軽く手を当てると、

「あいつ、本当に違うのか……?」

打って変わって、その表情が真剣な色に染まる。

正直、彼自身の中ではまだ半々ぐらいの気持ちだった。あのミュ
ウという人魔らしき少女を連れていることからして、ヴェスタが普
通の人間だとはとても思えなかったし、ミュウのあの力を目撃した
ときは“間違いない”とさえ思った。

だが。

「あんな馬鹿が……?」

そう。ただその一点が、彼の中で疑問だったのである。

仇の人魔はひどく残忍で冷酷だと聞いてきた。一年間も追い続けてきて、彼の中ではそれなりのイメージも出来上がっている。が……あのヴェスタという男は、あまりにもそのイメージとかけ離れすぎていたのだ。

もちろん演技をしているという可能性も考えられなくはない。だが、

(……そんなことする必要、ないよな)

ルーンは感じている。ヴェスタに関してはわからないが、その彼に付き添う少女……ミュウの力は間違いなく本物である、と。

おそらく自分だけの力でそう容易く戦える相手ではない。そうだとするなら、わざわざ正体を隠す理由なんてなさそうに思えた。村を滅ぼしたときのように、彼の命を奪ってしまえばそれでいいのだから。

あるいは、他に何か理由があるのか　と考えて、

(とにかく、しばらくは様子見　しなきゃダメかあ……)

この数日間のことを思い出し、ルーンは少々げんなりする。

正直、あの二人のノリにはいまいちついていくことができそうになかった。しかも、どっちも真顔でやっているから手に負えない。

それに

(……ちくしょう！　何が“少年”だっ……！)

道端にあった石ころを思いっきり蹴っ飛ばす。

腹立たしさが振り出しに戻ってきてしまった。

(そりゃそれほど気を遣ってるわけじゃないさ！　髪だつて邪魔くさいから伸ばしてない！　けど……けど、だからって、あんな馬鹿にあんな風に言われるなんて　くっ、悔しいいいッ……！)

ここで彼にとって大事なものは“あんな馬鹿に”という部分であり、普段からそれほどこだわっていないだけに、普通の人間に勘違いされたのならこれほど腹は立たなかつただろう。

コッソリ。

(ちくしょう。いつか思い知らせて　)

「……つてーな……」

(ん?)

不意に聞こえた何者かの呟きに、ルーンは足を止めた。そして顔を上げる。

(あ……)

視線の先……数メートルのところに、後頭部を押さえながら彼を振り返る男。

薄暗闇ではつきりとはわからないが、顔がうつすらと赤くなって、どうやら少し酔っているようだ。

そしてその足下には、

(……うわ。やっちゃまったか……)

見覚えのある石ころが転がっていた。

どうやら、さっき蹴り上げた石ころが、不幸なことに通行人に命中してしまったらしい。

「……こら、ガキイ。こいつをぶつけやがったのは、てめえか?」

「あ、いや……」

周りを見回しても人影はない。

どう考えても犯人は彼しかいなかった。

こうなってはどうしようもない。

「……悪い。当てるつもりはなかった」

正直にそう答えたルーン。

だが、もちろん向こうがそれだけで収まるはずはなく、

「ふざけんじゃねえぞっ! 悪いで済むなら警邏隊はいらねえんだよっ!」

男は酒臭い息を吐きながら、いかにもなセリフを口にして彼に歩み寄っていく。

(……まいったな)

自分に非があるとはいえ、このまま黙っていたらいきなり殴り飛ばされそうな雰囲気だ。石ころをぶつけた程度で黙ってボコられるわけにもいかない。

と、

「ん？ おめえ……」

男は近付いてくるなり、少し眉をひそめながら顔を近付けて、

「なんだ……生意気なクソガキかと思っただら……」

口元に笑みが浮かんだ。

「っ……」

それを見たルーンの表情に、明らかな嫌悪感が姿を現す。

そして、男の手が彼の肩に伸びた。

「へへ、良く見りゃ、おん」

そう言いかけた瞬間。

……パシュツ!!!

空気が奇妙な、鋭い音を立てた。

「え……」

男の表情が驚愕のまま、動きを止める。

「その手で、私に触れるんじゃない」

厳しい視線でそう言ったルーンの左手には、鋭いナイフが握られていた。

「な……てめ　！」

男が怒りの表情を見せたのもほんの一瞬のこと。

パシュツ!!!

もう一度、空気が奇妙な音を立てる。

「死にたいなら、別だけどな」

「……？」

何が起きたのか理解していない様子の男。

「ふん……」

ルーンは鼻を鳴らして、その足下を指さすと、

「その格好なら、酔いも覚めやすくもいいだろ」

「なっ……なんだこりゃあああっ!!!？」

いつの間にかふんどし一丁になった自分の姿に、男は驚愕の声を上げて。ピタツ……と、その眼前にナイフの切っ先が迫る。

「失せる。……それと、石をぶつけたのは悪かった」

「ひっ……」

男は一步、二歩と後ずさると、

「っ……！」

あとは振り返ろうともせず、用を成さなくなったズボンを引き上げながら走り去っていった。

「……ふう」

クルクルツ……とナイフが手の中で回転して、パチンと腰の鞘に収まる。その仕草も堂に入ったもので、いかにも使い慣れてる様子だ。

(……あ、そうか)

そしてルーンはふと気付いた。

(勘違いされている方が安全なのかもしれないな)

あのヴェスタという男はいまいち得体が知れない。今のところは“単なる馬鹿”という認識しかないが、もしも彼がルーンの追う仇だとするならば、必ず別の一面も持っているはずであり、それを想定するならばかえって“十三歳の少年”だと勘違いされていた方が、色々都合がいいのかもしれない。

(とにかく……あいつの正体がハッキリするまでは付いていくしかない、か)

この一年の旅の中で、手がかりらしき手がかりが得られたのすら、今回が初めてのこと。

何しろ“黒づくめの人魔”については、遭遇して生き残った者がなかなか存在しないため、その情報は全てが伝え聞くものばかり。直接的な証言は未だ一つも得られていないのだ。

(……しかし、なあ)

もう一度、頭にヴェスタという男の顔が浮かんで　そして、

「はあ……」

ルーンはため息とともにゲンナリした気分のまま、夜の道を宿に向かって引き返し始めるのだった……。

その4

割れんばかりの歓声。

テントを覆い尽くす熱気。

暑さなど簡単に忘れてしまっほどの興奮。

凶暴なはずの猛獣たちは合図に合わせて芸を披露し、ステージ上の人々は信じられないような身軽さで様々な演目をこなしていく。そこは今、完全なファンタジーワールドと化していた。

まあ……しかし、なんだ。

世の中、華やかな舞台があれば、もちろんそれを支える裏方ってのは間違いなく存在しているわけで。

言っなれば、縁の下の力持ち？ というのが必ず必要になってくるわけである。

……で、何を言いたいのかと言うと。

「こら、キリキリ動けっ！！ さっさとしねえと次のプログラムに間に合わねえだろうがっ！！」

「お……おっ」

俺にはサーカスを見る時間など、どうやら与えられないらしい……
…ということだ。

くアクロバティック大量殺戮者ジェノサイダーく

「ふう、やれやれ。やっと一息つけるぞ……」

「ご苦労様です、御主人様」

舞台裏、様々な器具が置かれている倉庫で、ようやく一息。

裏方といっても俺の場合はほとんどが雑用係みたいなものだが、だからこそ、とにかく徹底的にこき使われるという現状もあるわけだ。

よりにもよって、数日に渡って続いてきたこのサーカスの最終日である本日は、今までにないほどの真夏日。日陰で黙っているだけでも汗が噴き出してくる気温だ。いくらこの俺が鍛えられた肉体を持っているとはいえ、その中をこの格好であれだけ動き回れば、軽い脱水症状になるのも仕方のないことであつた。

「馬鹿だな、お前」

突然、俺に向けられた声。

「む？」

その方向を見ると、そこではルーンが相変わらずクルクルとナイフを回しながら、呆れ顔でこつちを見ていた。

「もうピエロの格好なんて必要ないだろ。そんな動きにくい服で裏方仕事なんて」

「ワアアアアアッ！！」

舞台の方から歓声が聞こえて、ルーンが途中で掻き消される。

が、その先の言葉は聞かなくても当然理解できた。

「なるほど」

確かに俺は今、宣伝時に使っていたピエロの衣装のままである。

「しかし、臨時とはいえ今はサーカスの一員であるからな。いつ何時、臨時要員としてステージに立たされるかわからんではないか」

「んなわけないだろ。どう間違つたって、芸も覚えてないズブの素人をステージに立たせたりなんかするもんか」

「む？」

それは盲点であった。確かに俺は、ステージに上がったところで芸の一つも出来るわけではない。

「そうか。ならばやはり、いつもの格好に着替えるか……ミュウ？」

「はい。……どうぞ、御主人様」

そう答えて、ミュウは法衣の下から俺の着替え（いつもの服だ）を取り出した。

……何度も言うように、突っ込みは不可である。

「あんな……」

そんな俺たちのやり取りに、ルーンはさらに呆れた調子を強くして、

「そいつは、どう見ても今の格好より暑苦しいだろ」

「む？ そうか？」

「……」

ルーンは大きなため息をついて、それから首を横に振るだけだった。

「ふーむ……」

しかし、残念ながら俺は別の服を所有していないのだ。

つまりはいつもの服に戻るか、ピエロの格好のままであるかの二択になる。

「仕方あるまい。ミュウよ、やはりその服はしまっておいてくれ」

どっちにしても暑いならわざわざ着替えることもあるまい。

「はい」

再び、俺の服を収納するミュウ。

と、そんなところへ、

「あ、ピエロさん」

「む？」

聞き覚えのある声とともに、一人の少女がこの器具室に入ってきた。

「おお、君は確か……」

まるで水着のようなサーカス衣装。年齢に似合わない化粧を施した顔は、以前とはだいぶ印象が違って見えた。が、俺はいわゆる義理堅い人間であって、ちよつとやそつとのこととで恩を受けた相手の顔を忘れることはないのだ。

「ユン、といったか」

「うん。覚えててくれたんだ？」

そう。彼女はまだサーカスの準備期間中に、俺に一杯のかけそばじゃなく、一杯の麦茶を持ってきてくれた少女だったのである。残念なことにあの日以来、この少女と話をする機会には恵まれてなかった。ついでに言うと、サーカスが開幕してからの数日間仕事が忙しくて、彼女の演目も一度も見れずじまいである。

せめて最終日の今日ぐらいは見に行きたいとは思っていたところなのだが

（ふむ。なんとかせねば、な……）

「あれ……ミュウちゃん？」

と、歩み寄ってきたユンは不思議そうに俺のそばにいるミュウを見て、

「ピエロさんと知り合いだったんだ？」

「はい」

ゆっくりと頷くミュウ。

以前、少し会話を交わしたと言っていたが、ユンの反応を見る限り、結構好印象を持たれているようだった。

（うむ……それはよいことだ）

年の頃も同じぐらいだろうし、同年代の娘と話すことはミュウにとってもプラスになるであろう。

とまあ、それはいいのだが。

「ところで、ユンよ」

俺は少しだけ眉をひそめて、

「前にも言ったように、俺は決して“ピエロさん”という名ではないのだが」

「ふふっ……でも、ほら。今日もピエロさんのままだもん」
「むう」

言われてみればその通りであり、まったく反論できん。
するとユンは満面の笑みを浮かべて、

「それにピエロさん、その格好、良く似合ってるよ」

「む？ そうなのか？」

丁度近くに鏡があったので全身を映してみる。

……言われてみれば似合ってるような気がしなくてもない。

「ふむ、なるほど……なるほど、なるほど」

色々ポーズを取ってみる。

まあ、詰まるところ、俺のようにスーパービューティーな男はどんな格好をしても似合うというのが定説なのであるが。

「……」

「ん？」

隣のミュウがいつからかじつと俺の事を見つめていた。

明らかに何か言いたそうな感じである。

「どうしたのだ、ミュウ？」

「いえ」

問いかけると、ミュウは少しだけ首をかしげて、

「私はいつもの御主人様の方がいいと思います」

「む？」

ミュウがこういうことで自己主張するのは珍しい。

「……ところで」

そこへ口を挟んできたのは、少し離れた場所で腕を組んでいるルインだ。

手の中にあつたナイフはいつの間にか姿を消している。

「お前、こんなところでそんなのと話してる暇ないんじゃないのか？ そろそろ出番だろ？」

「そんなの？」

なんとなく引つ掛かる言い方だが、多分気のせいであろう。

「あ……うん」

頷くユン。

「おお、そうか」

高綱はサーカスの華でもあるので、いつでも最後の方らしい。

さつきも言ったように実際にやっているところは見たことないのであるが、裏方の仕事をしているときにロープを張っているところは見た。何メートルあるのかわからないが、おそらく他のサーカスと比べてもかなり高い。落ちたら怪我どころじゃ済まない高さなのだ。

「怖くはないのか？」

俺だったらあの高さに上るだけでも少々遠慮しておきたいくらいである。

「うーん……」

ユンは少しだけ考えて、

「少しは怖いけど、でも怖いって考えたら余計に怖くなるかな」

「ふむ。そういうものか」

「それに私、これしかできないから」

そう言って、屈託なく笑った。

「むう……」

こんな小さな子供でも、自分の居場所を確保するのに必死なのであろうか。感心すると同時に、ほんの少しだけ不憫にも思えてしまっ

う。
(しかし、俺に何ができるわけでもないのだな……)

「よし！」

俺は決心するとともに、ポンツと膝を叩くと、

「ならば今日こそは見に行つてやらねばならぬな！」

「え？」

俺の言葉にユンは少しびっくりした顔をする。

「でもピエロさん、お仕事忙しいんじゃない？」

「そんなものは気合でどうとでもなる！」

ググツと拳を握り締める。

何しろ相手は命の恩人なのだ。仕事とどっちが大事かといえば……そりゃ生活がかかっているわけでもあり、仕事は仕事で大事だが、まあ多少ならば支障はあるまい。

限りなく主観的な判断であつたが。

「そうなんだ」

ユンは嬉しそうだった。

「なんだか緊張してきちゃった。ピエロさんが見に来るなら、絶対に失敗できないね」

「む？」

そう言われてみれば確かに。

笑顔ながら、ユンの表情は心なしか青白く映った。

「ふむ。いや、そういうつもりはなかったのだが……」

これはまずい。

変にプレッシャーを与えてしまったのだろうか。

「ならば、やはり見に行かない方が良いか？」

だが、ユンは思いつきり手を振って、

「あ、ううん。そういうことじゃないから！」

「む？」

「おい、ユン！」

そこへ、器具室の入り口から声がかかった。

「そろそろ準備しとけよ！」

「あ、はい！」

返事をして、ユンは最後にもう一度、俺の方を見ると、

「じゃあ……約束だよ！ 絶対に見に来てね！」

「それはもちろん構わないのだが」

「ありがと！ じゃあまた後でね！」

元気良く、手を振って背を向けるユン。

そこへ、

「おい」

ルーンが再び口を挟んだ。

「？」

振り返るユンに、ルーンは相変わらず腕を組んだまま、

「頑張れよ」

どこか真剣な。

確実に気持ちのこもった言葉を投げ掛けた。

「あ……はい」

「？」

なんであろうか。

と、そんな俺の疑問は、ユンの姿が器具室から消えるなり、ルーン本人の口から明らかにされた。

「だいぶ悪そうだな」

「む？」

「……なんで私の顔を見るんだよ」

ルーンは不審そうだったが、俺は納得して頷きながら、

「いや、確かにルーンの口は悪」

「刺すぞ」

どこからかまたナイフが現れた。

どうやら違うらしい。

ルーンは呆れ顔をして、

「あの子……ユンのことだよ。体調、相当悪そうだったろ」

通路の方を見つめながら、ナイフを懐にしまう。

「む？ そうなのか？」

びっくりして聞き返すと、ルーンはやはり呆れた顔をして、

「お前にそんなのを期待した私が悪かった」

「む……」

なんとなく馬鹿にされている気がしないでもないが、考えないよ
うにしよう。

考えたら負けである。

そこへミュウがさらに口を挟む。

「いつもに比べて足取りに安定感がありませんでした」
「ほう」

なるほど。ミュウがそう言うのであれば間違いな
「もしかすると、いいパンチをもらっちまったのかもしれない」
「は？」

「？」
ルーンともども呆気に取られ……それから意味を尋ねようとして、
ミュウの手の中にある本の存在に気付いた。
目を凝らして見る。

タイトル……“リングの鬼”。
「でも大丈夫です。男と男のしょーぶは肉体が限界に達してからが
ホンバンなのです」

誰だ、こんなものをミュウに読ませたのは。

「まあ、それはおいとくとして……だ」
だがまあ、せっかく染まっているところをムリヤリ醒ますことも
あるまい。

「ルーンよ。ああいう演目は体調が悪くても平気なものなのか？」
尋ねる。

が、ルーンはあっさりと言い放った。

「並外れた集中が必要な演目だぞ。平気なはずあるか」

「そ……それはまずいではないか！ ルーンよ！ 気付いていたな
ら何故止めなかったのだ！？」

抗議したが、ルーンは変わらず腕を組んだままの厳しい表情で、
「本人が隠そうとしてるんだから仕方ないだろ」

「し、しかし！ それではあまりにも危険すぎるではないか！」
さつきも言ったように、失敗して“ごめんなさい”で済むような
ものではないのだ。

俺は居ても立ってもいられなくなつて、

「ええい！ ならば俺が止めて ……」

「やめろって！」

「！」

少し苛立たしげな声が、俺の足をその場に縫い止めた。

振り返ると、ルーンは組んでいた腕を下ろし、まるで睨み付けるように俺を見て、

「私だってお前だつてこここの事情を知ってるわけじゃない！ 余計なことをして、あいつがここに居づらくなったりどうするつもりだ！ 責任取れんのか!？」

「っ……」

そういうものなのであろうか。確かにそういう事情に関しては、俺よりもこのルーンの方が詳しいようでもあるが。

「しかし……」

「それに」

俺の言葉を遮り、ルーンはチラッと器具室の入り口に視線を向けて、

「本人は大丈夫だと思ったから行ったんだ。どうしてもダメなら自分から言うさ。あんな子供でも、それで生活しているプロなんだから」

「……むっ」

それで俺の反論は完全に封じられた。

確かにそういう事情であるならば、そう易々と口を挟めるものではない。

「しかし……むっ……万が一……」

「……」

腕を組んで呟く俺に、ルーンは少し怪訝そうな視線を向けてきた。

そして一言、

「お前、本気で心配しているのか？」

「む？」

その言葉に、俺は眉をひそめて、

「当たり前ではないか。……ルーンよ。お前は心配ではないのか？」

「……」

良くわからないが、何やら複雑そうな表情だった。
なんであろうか。

まるで、俺の心を探ろうとするかのようにじっと視線を向けてい
る。

……これはまさか。

「ルーンよ……前にも言ったが」

「なんだかわからんが、違う!」

まだ何も言っていないのに突っ込まれてしまった。

ムキになって否定するところが怪し　　かつたりはしないである
うな、おそらく。

「ふむ。しかしともかく……ユンがそこまでして頑張ろうというの
であれば、やはりこの俺が見守ってやるしかあるまい!」

そして俺は決意を新たにするのである。

ググツと拳を握り締め。

「……カンカンカン」

ボソツと、何故か試合終了のゴングが鳴り響いた。

歓声。

歓声の渦。

普段見られないいくつもの超人的なショーの数々に、観客の興奮
は否が応でも高まっていった。

そしていよいよクライマックスが近付く。

残された演目はあと僅か。

ステージには、二階席よりも高い位置に僅かに段差のある二本の
ロープが張られていた。そしてそのロープの一端、その舞台上に現れ
たのは、キラキラと輝く派手な衣装を身につけた、年端もいかない
一人の少女。

その瞬間、客席が一瞬静まり返った。

「……………」

舞台上で少女が客席に一礼。

それとともに、下のステージにいるピエロがお決まりの口上で観客を煽る。

少しずつ。

少しずつ、ざわめきが戻り始めた。

緊張と興奮。

これこそが、このサーカスというものの醍醐味なのかもしれない。危険であること。

失敗すれば命すら落としかねない状況。

もちろんそれを演じる者はそれだけの修練を積んでおり、おそらく失敗しないであろうことは観客にもわかっている。むしろ、そうでなくては客も見に来るはずはない。彼らが見たいのは悲劇ではなく、一見不可能とも思えることをやり遂げてしまう瞬間。それを見に来ているのだから。

それが客を興奮させ、感動させる。

だから少女が舞台上に現れたときも、観客は“本当に大丈夫なのか”と緊張し、その後、少女がいかにしてそれをやり遂げてしまうのかを期待して見つめているのだ。

ワァ……………」

短い歓声。

少女がロープの上に一步を踏み出したためだ。

……………」手には長い棒を持っていた。バランスを保つための小道具であるう。

ワァ……………」

危なっかしい足取りで、だけど確実に少女はロープの上を歩いていく。

今までの演目とは違い、観客は比較的静かに、固唾を呑んでそれを見つめていた。歓声を上げること、少女がバランスを崩してしまふのを恐れているかのように。

フラ……フラ……

足取りは相も変わらず危なっかしい。

だが、それを見上げていたピエロは、さらなる口上で観客の不安を煽り続けていた。

……おそらく演技。

観客の一部はそのことに気付いている。

少女は危なっかしく見える足取りながらも、致命的なミスは決しておかせない。見る人が見れば、ロープ上の少女に余裕があることはわかるはずだった。

そして少女の足はついにロープを渡りきり、反対側の台の上に立つ。沸き起こる拍手。

だが、一瞬の後。

わあっ……

それはさらなる緊張に変わった。

「……」

少女は舞台上で再び一礼するなり、手にしていたバランスを保つための棒を投げ捨ててしまったのだ。

それだけならまだしも。

今度は先ほどよりもまるで慎重さのない足取りで、無造作にロープの上を歩き出したのである。

わああっ……

悲鳴とも感嘆ともつかぬ声が観客から漏れる。

だが、少女は先ほどよりもよっぽど安定した足取りで、まるで地面を歩くかのごとくロープの上を進んでいった。

途中、ロープの中央で片足を上げ、クルツと回転してみたり、その場でジャグリングをしてみせたりと、少女は様々な芸を見せる。

そうしていて、観客もようやくわかってきたようだった。

……ああ、大丈夫なんだ、と。

少しずつ遠慮のない派手な歓声が沸き起こるようになって。

少女は高いロープの上、笑顔で観客に応え、そしてまた歓声が起

いる。

興奮が高まる。

熱気がテントの中を覆う。

そんな、数分ほどの時間。

おそらく観客にとっては一瞬にも近い、興奮した時間。

全ての演技を終えた少女は、最後にロープの中央で一礼をした。

同時に沸き起こる、割れんばかりの拍手と歓声。

それを背に受けて、少女は台上へと戻っていく。

やはり最初と同じように、危なっかしいフラフラとした足取りで。

……誰一人として、異変には気付かなかった。

興奮した観客も。

下で相変わらずの口上を続けるピエロも。

それが、最初と同じ少女の演技であると、信じ切っていたから。

……バランスを崩し。

……体が横に傾いて。

それでもまだ、誰も異変を信じない。

一瞬の後には、何事もなかったかのようにロープ上に復帰するだ

らうと、そう思っ

「……きやあああああっ!!」

客席のどこかからようやく悲鳴が上がったのは……少女の足がロープから離れ、ゆっくりと落下を始めた、そのときになってからだった。

「あー、そこそこ。なかなかうまいね、あんた」

「そ、そうなのか？」

返事をしながらも、俺は空の上……じゃなくて、上の空である。

俺の手の先でうつ伏せになっているのは、派手なステージ衣装に身を包んだ年上の女性。

二十歳ぐらいだろうか。

断じて、向こうが年上である。

(むう……)

気が逸る。

先ほど最終段階のステージのセッティングを終え、さあ誰にも見つからないように隠れてユンの演技を見よう……と考えていた矢先、運の悪いことに俺はこの女性に声をかけられてしまったのである。

曰く、出番が終わって疲れたからマッサージしてくれ、と。

「俺は按摩さんではないのだが……」

「別にプロの技なんて期待しじゃないよ。ちよっともみほぐしてくればいいんだ」

ちよっとなどと言いつつ、こうしていかれこれ十分以上が経過している。

これは由々しき事態であった。

(まずい……このままではユンの演技が見れないではないか！)

先ほどのセッティングによる休憩時間から、演目を一つ挟んで高綱だったはずなのだ。とすると、今頃はもう始まっている、いや、へたをすれば終わっている可能性すらある。

(……ぬおおおおっ!!)

「いたっ！ ちよっと！ 痛いつてばっ!!」

「む……す、すまん……」

いつの間にか力が入っていたらしい。

「ちゃんとやってよね」

「むう……」

どうやらこの女性はまだまだ続けさせるつもりらしい。口答えは許されない……悲しきアルバイトの身であった。

「……」

すぐそばではミュウが、相変わらずの無表情で女性の足の裏を揉

んでいる。“リングの鬼”の呪縛からはすでに解き放たれたようだ。で、もう一人……ルーンとはいえば、どうやらユンの演技を見に行ったらしい。やはり彼女のことか心配だったようだ。

彼も根は心優しい少年なのだろう。

(うむむ……俺も何とかしてこの場を抜け出さなくては！)

こうしていても始まらない。

「……ところで」

とにかく話を切り出すことにした。

作戦その一。

「実を言うと、俺はこれから少し用事が」

「あつ、もうちょっと下ね」

「う、うむ」

聞いてない。

失敗。

作戦その二。

「実を言うとだな。祖母が危篤で」

「あー、そこ、きくわぁ」

「む？　ここか？」

「っ……そうそう」

聞いてない。

失敗。

……というか。

(聞いてないのでは話にならないではないかっ！！)

俺の明晰な頭脳が閃いた。

文字通り“話にならない”のだ。

(ダジャレを言っている場合ではない！！)

心の中の眩きである以上、自分で突っ込むしかなかった。

(くう……どうすれば)

世の中はあまりにも理不尽だ。

こうしている間にも時間は刻一刻と過ぎていく。へ夕をすればす

でに手遅れかもしれない。

(ぬおおおおっ！ このままでは俺は、少女との約束を破る最低野郎になってしまうっ！！)

変態で最低なロリコン野郎(？)とか、そういうレツテルだけはどうしても回避しなければならぬ。善良な一般市民としてのプライドを賭けてでも！

「……………」

「へ？」

クールでビューティーな俺としたことが、思わず間抜けな返事をしてしまった。

女性はうつ伏せになりながら肩越しに俺の顔を見ている。

「何か言いたいことがあったんじゃないの？」

「……………」

「どうやら聞いてくれていたらしい。

神はまだ俺を見捨てていなかったぞ、うむ。

「実はだな」

「すかさず事情を話すことにした。

「ユンが俺の命の恩人であり、この最終日に演技を見に行く約束をしたことを。」

「簡潔に、手短かに話した。

「もちろん、それで納得してもらえるかはいささか不安であったが

……………それはいらぬ心配だったようで。

「突然、

「……………なんだあ！ そういうことなら早く言いなさいよっ！」

「女性はがばつと起き上がった。

「お？」

「そうしてすかさず俺の背中をバンツと叩く。

「ほらほら！ 高綱だったらもうとっくに始まっている！ 急がないと終わっちゃうわよ！！」

「お、おお……………」

「……」

ミュウとともに背中を押され、控え室の外にまで押し出される。

「な、なにを」

驚きとともに何とか尋ねると、女性はニッコリと笑顔を浮かべて、「あの子は私たちの可愛い後輩よ。約束したってんなら、破らせるわけにはいかないでしょ」

「……おお、そうか！」

その言葉を聞いて少し胸が熱くなる。

どうやらユンは結構可愛がられているようだ。

実を言うと、居場所がどうこうとかいうルーンの言葉を聞いて少し不安になっていたのだが、こういう人がいるのであれば心配することもないであろう。

「名もなきサーカス団員よ！ 礼を言うぞ！」

「失礼な！ ちゃんと名前あるわよ！」

背中に浴びせられた言葉に手を上げて応え、

「ミュウよ！ 急ぐぞー！！」

「はい。御主人様」

駆ける。

駆ける。

女性は“とつくに始まつてる”と言った。

一つの演目にどれぐらいの時間を割くのかはわからないが、まさか三十分もやっているわけではあるまい。

それを考えると、本当に時間はなさそうである。

……わあああああつ！！

「！！」

一際大きな歓声が上がった。

（まさか……終わってしまったのか！？）

通路の先に出口とステージが見えてくる。

もちろんいわゆる関係者以外立入禁止な通路であって、ステージに直接出られる通路だ。

「……ん？」

その通路の奥に見知った人影があった。

「ルーン！ どうなのだ！？ もう終わってしまったのか!？」

「お、おい、騒ぐなって」

俺の姿を認めたルーンが振り返って、それからフツと息を吐き出すと、

「そろそろクライマックスだ。ギリギリ間に合ったってとこじゃないか？」

「そ、そうか……」

本来なら全部見たかったが、贅沢を言うわけにもいくまい。

ホツと息を吐いてルーンのそばに並ぶ。

「それで、ユンの様子はどうなのだ？」

「心配無用、つてところだ」

そう答えてから、ルーンはハツとした様子で少し身を離していく。

「……どうやらまだまだ親密度が足りないらしい。」

が、今はそれよりもユンの方である。

「ふむ」

頷いてステージの方を見ると、

「……うお」

見上げるだけで目眩がしてきそうな高さ。

そんな高さで、ユンがロープの上、信じられないようなバランスで立っている。いや、立っているどころか、そこで派手な動きを見せているのだ。

「み……見ているだけで寒気がするぞ」

「大したもんだ、あいつ。さすが、これだけ大きなサーカス団でやってるだけのことはあるよ」

ルーンの賞賛は混じりけのない、純粹なものだった。おそらく、それだけのものをこれまでに見せられてきたのだろう。

「……」

そんな俺とルーンの間から顔を出し、同じようにユンを見上げて

いたミュウ。

ふと、不思議そうに、

「御主人様。あのユンという方は空を飛べるのですか？」

「む？ そんなはずはなかるう」

突然の質問に、当然のごとくそう答えると、

「では、あの高さから落ちてでも大丈夫なのですか？」

ユンがステージ上のピエロから投げられた二本のクラブを、見事にロープの上でキャッチする。

バランスを保ちながら、ユンはその場で華麗にジャグリングを始めた。

「もちろん大丈夫ではないぞ」

クライマックス。

ユンの動きも激しくなってきた。二本のロープの上で舞い、踊る。

「っ……………」

思わず息を吞んでしまうほどの大胆な動き。

それでもユンはロープの上にいる。

「……………」

ミュウも黙ってそれを見つめている。

いつの間にか響いていた音楽も、興奮を煽るかのようにテンションを上げている。

ものすごい熱気だ。

「御主人様」

もう一度、ミュウが俺のことを呼んだ。

「む……………なんだ？ 今、いいところではないか」

俺は視線を動かさずに答える。

演技は完全にクライマックスを迎えていた。

ロープが揺れ、二本張られたロープの上で軽く飛び、跳ねる。

そのとき俺の視線は、完全にロープ上の少女に釘付けだったのである。

「……………」

ミュウは黙った。

いや、

「……………ます」

何事か呟く。

「む？」

聞こえなかった。

「何を言ったのだ、ミュウ……………？」

やはり視線を動かさずに尋ねる。

そして、ユンの演技が終わった。

観客から沸き起こる拍手。

すぐそばからも、小さな拍手が聞こえる。

ルーンのものだ。

いや……………俺も無意識のうちに手を叩いていた。

それほど素晴らしいものであったのだ。彼女の演技は。

「……………」

だが、ミュウは微動だにせず。

ロープ上。

客に向かって礼をするユンを見て。

「御主人様」

もう一度、言った。

「落ちます」

「……………は？」

今度は間違いなく、その言葉は俺の耳に届いてきた。

「なにが」

聞き返すまでもなく、ミュウはもう一度言った。

「落ちます」

その視線は微動だにせず。

見つめているのは……………ロープの上。

「……………」

その言葉の意味を理解し。

そんな馬鹿な、と振り返って。

そして……そこに、その光景があった。

「……きやああああっ!!」

客席から轟いたのは悲鳴。

「なっ……!!」

息を呑んだのはルーンであったか、あるいは俺自身であったか。何百人もの観客の前で、ロープの上にあったユンの体は、ゆつくりと、まるでスローモーションでも見ているかのように、落下を始めていた。

「……っ!!」

ミュウの言葉がなければ、まず最初に呆然としていたかもしれない。だが幸い、今の俺には何が起きたのか瞬時に理解することができた。

何をすべきか。

どうするべきなのか。

……考えるまでもなく。

「ミュウっ!!」

「はい」

何を指示したわけでもないというのに、ミュウはそう答えた。

それより先に、俺の足が床を蹴っている。

「おいっ……!!」

背中に飛んだルーンの声に反応する暇もなく。

疾風のごとく、俺とミュウの体はステージに飛び出していた。

観客のざわめきよりも速く。

速く。

……早く。

(っ……間に合うかっ……!!)

ユンの体はロープと地上の真ん中ほどにまで達している。

意識があるのか、ないのか……どちらにせよ、あの体勢のまま地上に叩きつけられたらどうなるか、考えずとも明らかだった。

(絶対に……助けてみせるっ!!!)
体が燃えるように熱くなる。頭にかぶっていたピエロの三角帽子が後ろに飛んだ。

その速さは、もはや人間の領域にはない。

「ユン ツツツツ!!!」

渾身の力を両足に込めて、出来うる限りの最速で飛ぶ。俺とユンの体が見る見るうちに近付いていく。

「っ…………!!」

だが……その距離を測って愕然とした。

届かない! ほんの数メートル……届かない!

「うおおおおおっ!!!」

その瞬間、

…………ヒュッ!

横を何かが走り抜けた。

「!?!」

俺を上回るスピードで走り抜けた何かは、真っ直ぐにユンに向かっていく。

「…………ミュウツ!!!」

白い装束。白い羽。

ミュウが俺の限界を越える速度で翔んだ。

(…………羽?)

疑問に思う間もなく、ミュウの体は落下寸前のユンに追いつく。そのまま空中で受け止めようとするが、

「っ…………!!」

いくら軽いとはいえ、落下している人間をミュウの小柄な体で受け止められるはずはなかった。

無表情で端正な顔が僅かに歪む。

だが、その一瞬。

僅かに落下速度が弱まったその一瞬だけで、俺には充分であった。
「ミュウ！ ユンツツツ！！！」

俺の体は間一髪で二人の真下に入り込んだ。
そのまま二人を抱き留め、
ガクンツ！！！！

両腕を襲うとてつもない衝撃。

両足を前に投げ出して抱え込むような体勢を取る。

「くううっ！！！」

腰が落ちるとともに体にかかる衝撃を全て受け止め、堪えて、和らげる。

冷静に考えると常人には到底不可能な荒技であったが、必死だった故か、俺はそれを完璧に成し遂げていた。

「っ……………！！！」

やがて、全身にかかっていた圧力が緩和し……………そして最終的には、人間二人分のそれへと収束していく。

いや、最後に訪れたそれは、二人分にしては軽すぎるくらいであったが。

「……………ふうっ！」

安心した直後、全身から溢れ出す冷や汗。

……………そして静寂。

テント内はまるで水を打ったように静まり返っていた。

ステージ上にいたピエロも。

悲鳴に彩られていた客席も。

テント外の音が聞こえてきそうなほどに静寂。

そして、最初にそれを破ったのは、

「んう……………う……………ピエロ……………さん……………？」

「御主人様……………」

腕の中にいる二人の少女。

片方は少し青白く怪訝そうな顔で。

もう片方はいつもと変わらない無表情。

直後。

ワアアアアアアツ!!!!!!!!!!

(うおっ!?)

割れんばかりの大歓声がテントを揺るがした。

それと同時に送られる、惜しみない拍手。

その向けられた先は。

「……………俺?」

一瞬、何が起きたのやらさっぱりであったが……………どうやら俺たちの行動は、パフォーマンスの一環として観客に認知されてしまったようである。

「うーむ……………」

とりあえずミュウを下ろし、そして未だ意識がはっきりとしていないユンを抱きかかえたまま、客席に一礼してみる。

……………さらに大きな拍手が沸き起こった。

何やら大スターにでもなったかのような気分である。

やはり俺のような人間は、全く普通に生活していてもスポットライトを浴びてしまうのであろう。

「いや、どうもどうも……………」

調子に乗って手を上げ、軽くポーズを取ってみる。

さらに轟く歓声。

「御主人様?」

ミュウも怪訝そうな顔をしていた。

……………そういや、先ほど一瞬見えた羽はすでにそこにはない。

(やはり錯覚であったか……………)

その後、呆然としていたピエロ(俺ではなく、元からステージにいたピエロだ)が、とりあえず臨機応変に観客を煽り、俺たちはさらなる歓声を受けることになったのであった。

(わ……………悪い気分ではないな、うむ)

さらに手を振って歓声に答えるヒーロー（俺）。

……そのときは浮かれてて全く気付かなかったのだ。
自らの体に起こっていた異変を。
そして。

「やっぱり、あいつ……」

そんな眩きとともに。

とある一点から鋭い視線が突き刺さっていたことを。

その5

気付いてなかったのだから仕方ない。

あのときは必死だったのだ。それはわかるであろう？

ただユンを助けようと必死で、それ以外は何がどうなっていたのかもさっぱり。

……そりやおかしいと思わなくてもなかった。

妙にあの一瞬が長く感じたり。

でもそれは要するに……アレだ。

アドレナリン？

それがどっぴあっと大量に分泌された故であって。

でもおかしいといえはおかしいこともある。

……俺は確かに、そのゆっくりとした時間の中を“いつも通りのスピード”で動くことができたのだ。

さて、これはどう説明しようか。

非常に難しい問題である。

……いや、たった一つ、すでに可能性が打ち出されてはいるのだが。

ただ、それを認めてしまうことは……なんとなくか、非常なるピッチを招いてしまうことになりかねないというか。

あー、要するに。

……どうも俺はあのとき、微妙に正体を晒してしまっていたらしいのだ。

（執行猶予の大量殺戮者）
ジェノサイダー

「……」

「……」

夕方。

すでに数日逗留を続けている宿の一室には、たった今、得も知れぬ緊張感が漂っていた。

(むう……)

目の前で微動だにせず俺を見つめているのは……まあ、これがルーン以外だと想像できる者はそうそういないであろう。

ついでにいうと、いつも手にしているナイフの切っ先の照準はピタリと俺に対して向けられており、突きつけられているというほどでなくとも充分に威圧感を感じる程度の距離ではある。

「説明してもらおうか」

二度目の詰問。

その瞳は炎が揺らめいて……そんな幻覚が見えるほどの厳しさ。

どうにも冗談が通じる気配ではない。

「私だって人魔については色々調べたよ。人魔と人間のハーフの中には二つの姿を持っているヤツがいて、髪の色が変化したりするらしいって、な」

そう。

そうなのだ。

普段、俺の髪は艶のある、いわば吸い込まれそうなほどに美しい黒髪なのだが、あのとときの俺はどうやら金髪になっていたらしいのだ。幸い、人魔のもう一つの共通した特徴である“尖った耳”は、俺の長い髪に隠れていたせいか見えなかったよう、観客などにはまるで混乱が起こらなかった様子だが

「ルーンよ」

俺はコホンと咳払いして、

「それはいわゆる光の加減で」

「光の加減ぐらいでその真つ黒な髪が金髪に見えたりするもんか！」
「むう」

まるで取り合ってもらえない。

いや、当たり前か。

「御主人様」

と、そこへミュウの助け船が差し伸べられた。

「今日は夕食も作ってみました」

「そ、そうか」

助け船はさらなる地獄へ向かって航行中であるらしい。

「と、とりあえずそれは後で食べることにしよう……うむ」

ひとまず、彼女の努力を無駄にするという鬼や悪魔のような選択肢は、善良な一般市民であるところの俺には選べない。つまり、今であろうが後であろうが、食べることはすでに決定されているわけであり。

修羅場を抜けても、そこは地獄。

ああ、人生とはかくも無情なものであったか。

(む？ 待てよ？)

そこで俺はピンと妙案を閃いた。

「ルーンよ」

「……食わないぞ」
にべもない。

「それでうやむやにしようだったって、そうはいかないからな」
しかも読まれてた。

「さあ、正直に話してもらおうか！」
どん！

しかしまあ、意外といえば意外である。

え？ なにがって？

……考えてもみるがいい。ルーンが追っているのはいわゆる家族、友人、近所の人……いわゆる故郷の人々の仇であり、その怒りのほ

どはこれまでも存分に思い知らされている。

とすると、だ。もしも彼が俺のことを本当に仇だと思っているのなら、こうして話し合う機会すらないはずであろう。

つまりどうやら彼は、まだ俺のことを完璧に疑っているわけではないらしいのだ。

「……むう」

さて、どうしたものか。

正直に話せば疑いはさらに強まり、二度と修復の機会は訪れないかもしれない。かと言って誤魔化そうとすれば、嘘がバレたときにとんでもない事態に陥る可能性もあろう。

「むむ、むむむむむ……」

難問だ。

いや、そもそもこれは誰が悪いのだ？

俺が人間でないことが悪いのか？ …… そんなことはあるまい。

たとえ俺が純粹に人間ではなかったとしても、心は純朴な好青年である。産まれて人を差別することが最低の行為であることは、皆さんご周知の通りだ。

悪くない。

悪いはずがない。

たとえばミュウがあのような特殊な種族として生まれ、極悪人に騙されて（昔の俺のことだが）幾人もの命を奪ってきたことも…… もちろん命を奪われた本人やその家族には決して納得できないだろうが、しかし。

悪いのは…… 本当に悪であるということは、それを悪と知りながら自らの欲望のためだけに平気で悪事を行う者のことを指すのではなからうか。

それは以前の俺であり、それについて言い訳はすまい。

しかし、今の俺は違う。

潔白。これ以上ないほどに真っ白。

ならば、俺の取る道はただ一つのみ

「ルーンよ！」

「え？」

「見るが良い！」

片膝を立て、ガバツと勢い良く胸元を開く。

「ッ！？」

ルーンはビツクリして、

「い、いきなり、な、なんのつもりだ、お前ッ！！」

何故か異様なものでも見るかのような視線を向けてきたが、熱くたぎる俺のハートはその程度で動じることはない。

そして俺は正義を叫んだ。

「そんなにも私を疑うというのなら、よかろう！ 俺は身の潔白を証明するため胸を開き、この夜空のお天道様にこの清廉な心臓を晒してみせようではないかあああッ！」

どーん！

そんな俺のあまりの迫力に、周囲の誰もが動きを止めた。

そして、

「御主人様、夜空にお天道様はありません」

「……」

「……」

しん、と、静まり返る。

「……厳しい突っ込みだな、ミュウよ」

「申し訳ありません」

「あ、いや、別にお前が間違ってるわけではないが……」

しかし、それなら如何にすべきか。

「仕方あるまい。代わりにお月様にでも見てもら」

どッ………しゃあああああああ！！

「……でも」

額の上に手をかざしたミュウが窓の外を見つめた。

「外は土砂降りのようにですね」

「……さっきまで降ってなかったではないかッ！」

ああ、なんとということだ！ 神はそんなにも俺の決意を見たくないというのか！

俺はがっくりと肩を落として、

「もう良い。ならば宿のオバさんにも見てもらうか」

なんか有り難みがないが仕方あるまい。

「そういうわけで付いてくるがよい、ルーンよ。宿のオバさんの元

へ

だが、しかし。

「ッ……」

ぎりっ。

どこからか聞こえた歯ぎしりの音。

「むっ？」

ルーンはそこに座り込んだまま動こうとしなかった。

「どうしたのだ？ 具合でも悪いのか？」

ショートにした真っ黒の髪はピンと緊張し。

やや浅黒い肌はその変化が分かるほどに紅潮し。

視線を落とし、膝の上で握りしめた拳は小刻みに痙攣して。

そして、

「ルーン？」

もう一度問いかけた俺の声を引き金に。

空気が、裂けた。

「……ふざけるのもいい加減にしろおおオオッ！！！」

ダンッ！！

「ッ！！」

悲鳴のような怒声に、俺は思わずのけぞる。

ルーンの足は床を殴りつけ、睨み上げたその目は、涙こそ浮かんでいなかったが充血していて真っ赤だった。

ギリッ、と、奥歯が再び抑えきれない怒りを露わにする。

そして進む、怒声。

「なにが、心臓だッ！ なにが、決意だッ！ そんなものどうでも

いい！ どうでも、いい！！」

「っ……！？」

俺は思わず唾を呑み込んだ。

「私が聞きたいのはただ一つッ！！」

手にしたナイフが俺の胸元に伸びていた。

「……」

ミュウが反射的に目を細める。

先ほどまでの和やかな空気は一瞬で碎け散り、冷徹な意志を込めたミュウの右手がゆっくりとルーンの方へかざされた。

きいいいい……ん。

静かに。

だが、そこにあつたのは、彼を一瞬でこの世から消し去ってしまったであろう、圧倒的な魔力。

「っ……！！」

しかし、それでもルーンは止まらなかった。

真っ直ぐな視線はただ俺を睨み付け。

真っ直ぐな怒りは、その奥にぼんやりと浮かんだ“黒ずくめの魔

”へと向けられて。

「お前が仇なのか、どうか！ ただそれだけ……！ ただ！ それだけだッ！！」

「……」

「……」

荒い息が、静まり返った部屋に反響する。

目尻には、一滴の涙。

「……ルーン……」

決して無知なわけではなかった。

俺にナイフの切っ先を向けることで、自分の命が風前の灯火となることを当然に理解し、それでもなお俺にそれを向け、そして真実を引き出そうとしている。

彼にとつての村が、故郷が、家族が、どれほど大切に。そしてそ

れを失ったことがどれほどの哀しみだったか。
伝わってくる。

避けようもない。

誤魔化しようもないほどに。

……ならば。

俺もその想いにそれなりの態度で応えねばなるまい……

「ミュウ」

「はい」

俺の呼びかけにもミュウは視線をルーンに向けたままだった。完全な臨戦態勢。もしもルーンがこれ以上の動きを見せたなら、彼女は俺の意志を伺うこともなくその手に集約された力を解き放つことだろう。

それは、許されない。

「ミュウよ」

俺はもう一度呼びかけて、

「お前に一つ頼みがある」

「はい、お任せください。御主人様の身に危険が及ぶことはありません」

ルーンを見つめるその瞳はあくまで冷酷。つい先ほどまで、まるで打ち解けたかのような表情を見せていたのが嘘のよう。

それを見て俺は少し悲しくなったが、今はそんなことを考えている場合ではなかった。

「違う」

俺は首を横に振って、

「ミュウよ……お前の命を、俺に委ねてはもらえんか？」

「……？」

初めて、ミュウの瞳が俺に向けられた。

一瞬怪訝の色がそこに過ぎったが、ミュウはすぐに、

「私の命は最初から御主人様のものです。私の判断によって委ねるようなものではありません」

予想通りの回答。

「ああ。……だからこそ、聞いた」

もちろん本当の意味で委ねられたのではないことはわかっている。

だが、それでも。この俺の中にミュウの命があり、俺の命と彼女の命が切り離せるものでない以上、たとえ表面的なものであっても許可を得ておかなければ決断を下すことができなかつたのだ。

「ルーンよ……」

「！」

俺が一步近付くと、ルーンはビクツと反応し、真っ赤な目でさらに俺を睨み付けた。

だが、俺は躊躇しない。

一步。

もう一步。

「……」

ルーンが動揺する。

ミュウが目を細め、その瞳に暗い輝きが灯る。

「御主人様」

「ミュウ！」

「!?!」

視線で、ミュウの動きを制止する。

「撃つてはならん。これは命令だ」

「御主人様……?」

そして俺はさらに一步、ルーンに近付いた。

……所詮は安宿の一室。そんなに広い部屋ではない。

三步。

「……お、お前……」

たったの三步で、俺とルーンの距離はほんの一メートル程度に縮まっていた。

腕を伸ばしたルーンのナイフは、俺の胸元にピタリと寄せられて。

「ルーンよ……」

そして俺は真っ直ぐにルーンを見つめ、言った。

「真実を話そう。……俺の決意に嘘偽りなどはない。だから、もしお前が必要だと思ったならば、即座にそのナイフで俺の胸を切り裂き、この心の臓をえぐり出すが良い」

「な、なんだと……!?」

だが、ルーンはそんな俺の言葉にさらなる怒りを露わにする。

「ふざけるなよ、お前ツ！ 私は事実を聞いているんだ！ ……仇じゃないなら、お前なんかを殺したって何の意味もないツ!!」

「……」

もっともな話だ。

だが、

「それはわかってる。……だが、ルーンよ。残念ながら俺には、お前のその一生懸命な問いかけに答えてやる事ができないだ」

「なにを　!?」

激昂しかけたルーンに、俺は言った。

「俺には……記憶がない」

「……え？」

ピタリ、と。

ずっと怒りに染まっていたルーンの瞳に、初めて別の感情が灯った。

疑問、戸惑い。

そして向けられたのは、問いかける視線。

「記憶が……ない、だと？」

その視線に俺は頷いて、

「記憶を失ったのは三ヶ月ほど前のことだ。だから正直なところ、その村が滅ぼされたという一年以上も前のことは、俺にはまったくわからない。……が」

俺はさらに続ける。

隠すことはもはや無意味であろう。この真っ直ぐな怒りと哀しみに応えられるのは、真に正直な言葉。

ただ、それのみ。

「伝え聞く話によれば、記憶を失う前の俺は罪のない人を何人も殺めた大量殺戮者だったらしい。それは紛れもない事実。……その中にお前の故郷の村がなかったと断言することは難しいだろう」

「ッ……」

「だから言うのだ。……俺はお前の真つ直ぐな想いに真実の答えを返してやることはできん。そして俺が罪のない人を殺めてきたことも事実。お前が俺を許せずにそのナイフを突き立てたとて、それも当然のことだろう」

ルーンの唇が震える。その手に再び力がこもるのがわかった。

「っ……信じられるかよ……っ」

それでもまだ、その腕は迷ったまま。

「その話が本当だとしたら……本当に本気で命を差し出そうとしてるなら……どうしてお前はそのときに死を選ばなかった？

……それだけの人を殺した事実を知って、どうして今まで安穩と生き延びていられたんだよッ！」

それもやはりもつともな問いかけ。

「もちろん、死を選ぼうかとも考えた。……が、お前も先ほど耳にしたであろう？ 俺の命は、俺一人のものではないのだ」

「なんだと……？」

「ミュウ」

「はい……御主人様」

右手の光は消えていたが、それでもその手はルーンに向けたままだった。困惑し戸惑う様子が、いつも無表情なはずのその頬に浮かんで見える。

「説明してやってもらえんか？ 俺が言ってもイマイチ信憑性がな
いようなのでな」

「……はい」

頷いて、ミュウはようやく右手を下ろした。

ルーンがゆっくりと視線を動かす。

そして、

「!?!」

その目が驚きに見開かれた。

「お前」

エメラルドグリーンの光を帯びた瞳。

背中に産まれた四枚の白い羽。

……その姿に、俺もちょっとだけ驚いてしまったのは内緒である。
ミュウは白い装束の胸に右手を置いて、そして囁くように答えた。
「私たちは契約者、感応幻蝶ルーミス族。主と生命をともにし、生涯を主に捧げる者」

美しくも、儂い。

その様は絵本か何かに登場する神秘的な妖精そのものだ。

「普通の魔じゃ、ないのか……?」

一般人に毛の生えたぐらいのレベルだと、彼女たちのようないわゆる“契約者”に関しての知識などはほとんど皆無に等しい。……かくいう俺もそのうちの一人。

ミュウはエメラルドグリーンの瞳でルーンを見つめ、答えた。

「“普通”の定義によりますが、それが獣魔や人魔と呼ばれる存在を指しているのであれば、違います。私たちは獣でも人でもありません」

「……」

驚きの余りか、ルーンの口から言葉が続かない。

無理もあるまい。

「俺も記憶がないので詳しくはわからないのだが……ミュウの生命力は俺の力を源にしているらしいのだ。つまり俺が命を絶てば、ミュウもまた生きてはいられぬ」

「……」

ゆつくりと、ルーンがこちらに向き直った。

「結局、俺は自分勝手だと罵られることを覚悟の上で生き続ける道を選ぶことにした。生き続け、出来うる限り人々の役に立ち、少し

でも償いをしようと思いい立ち、こうして旅をしている」

ミュウの体を覆っていた光がゆっくりと力を弱め、背中の羽も煙のように消えていく。

そして、

「……御主人様」

元に戻ったミュウに、俺は小さく頷いてみせて、

「ルーンよ」

再びルーンに視線を戻し、言った。

「俺たちにそのような権利がないことを承知の上で言わせてもらえ
るのなら……お前に赦しを乞いたい。俺たちが生きていくことを赦
してもらいたい。償うことに躊躇いはないが、俺には同時に、生き
て成し遂げたいこともある」

「……」

「頼む」

そのまま、頭を下げた。

そして目を閉じる。

……あるいはこの目は二度と開かぬかもしれない。だが、そのと
きは仕方ないだろう。

三ヶ月というあまりにも短い期間ではあったが、ミュウと出会え
たことに、色々な人と出会えたことに感謝し、そして少なくともこ
の三ヶ月だけは天に誇れる生き方を貫いたと、胸を張って三途の川
を渡ろうではないか。

さらば、我が人生。

その生涯に一片の悔いもなし

だが。

「……」

次の瞬間俺の耳に届いてきたのは、魂を地獄へ誘う鬼の囁きでも、
天国へと招く天使の歌声でもなく。

「……私は」

まるで独白のような、弱々しいルーンの呟きだった。
「ゆっくりと顔を上げる。」

と、そこには

「私の人生には、無数の地獄と、たった一つの天国しか存在してない」

「……ルーン？」

俺から逸らした視線は斜め下に流れ、軽く下唇を噛む。

ルーンは空いている左手で自分の右肩を掴んだ。

そして

「……」

彼が自らはだけさせた右肩を見て、俺は思わず息を呑んだ。

「……ルーン、お前……」

「曰く、私たちみたいな痴子にや、こういう躰が必要なんだとさ」
「……」

浅黒い肌にくっきりと残る、醜く焼けただれた火傷の跡。

それも事故ではなく、明らかに焼けた鉄棒のようなものを押しつけられた跡。それも一つや二つではなく、いくつも残っていた。

「なんと……ひどい……」

おそらくは一生消えることがないであろう、傷跡。その向こうに剥き出しの悪意が漂う、否応なしに胸の悪くなる傷跡だった。

ルーンは薄笑いを浮かべて、

「私の体は全身満遍なく、だいたいこんな感じだよ。……ま、食べ物をつっぱらおうとして私刑を受けた、なんて自業自得の分もあるけどな」

「なんと……」

まさかこんな年端もいかぬ少年が、そんな過酷な人生を歩んでいようとは。

『……その方が不幸な場合もあるけどな』

以前、彼が口にした不可解な言葉。

それはつまり……そういうことだったのだろうか。

「……あの村に引き取られるまでずっとそんな感じだったから、さ
はだけた服を直しながら、ルーンはポツリと呟いた。
ナイフを握る右手にグツと力がこもる。」

「あの村だつて、特別いい人たちばかりでもなかったよ。酒癖の悪
いのもいた。根性の悪いのだった。気に入らないヤツだつてた
くさんいた。でも」

……ポタツ。

床が滲んだ。

一粒。

二粒。

「……それでもこんな私に家族を覚えてくれたあの村は、私にとっ
ては掛け替えのない天国だったんだ」
俯いて呟くその表情に胸が痛んだ。

「ルーン……」

吐き気を催す二日酔いの頭痛より。

食あたりでギリギリと痛む腹の痛みより。

何倍も、痛い。

それは何とも表現のし難い……魂の痛み。

(……どうすれば、良い?)

緊張し、汗まみれの手の平に爪が食い込む。

どうにか。

どうにかして彼の、ルーンの痛みを和らげてやらねばならない。

いや。

和らげて、やりたい

(しかし、どうすれば……良いのだ?)

どうすれば?

思考も言葉も、この状況では最早何の役にも立ちはない。

ならば　そう。

俺はもともと、考えることが苦手なのだ。

だから

「だから！」

再び口調を荒らげたルーンの瞳が、キツ、と俺を睨み付けた。

「たとえどんな事情があろうと！ 私は絶対にその犯人を許せない

！ たとえ私の命を賭けることになっても！ たとえそれがどんな

相手であつても　　！！」

ドスツ。

「……え？」

俺の突然の行動に、ルーンが驚きに目を見開く。

「ルーンよ……」

「な　　」

俺は思わず彼の頭をその腕に掻き抱いていた。

……そう。

言葉が用を為さなくなつた今、信じられるのは　　深く心を抉つ

た傷を癒せるのは、ただ人の温もりのみ。

単純にそう感じた故の行動だった。

そして俺は口を開く。

「もしも可能であるならば、お前の痛みを少しでもこの俺に分け与

えてはもらえぬか。……この細い肩で背負うには、その苦しみはあ

まりにも重すぎる……」

髪の毛を撫でながら、目尻の涙をそつと拭った。

あまりにも華奢な体躯。

その身で背負う凶悪な苦しみはどれほどに過酷なものであつたこ

とが。

俺に向けた殺意。全ては裏返しであり、怒りの強さは、彼の村に

対する愛の深さでもあつただろう。

その程度のことは俺にも容易に理解することができて、そしてそ

んな彼の姿に祈らずにはいられなかった。

（神よ……どうか、どうかこの少年に明るい未来を。そのために必

要であるならば、この俺がどのような責め苦でも請け負おう　　）

そして俺は、真に願うのだ。

「神よ」

だが、そんな俺の言葉に。

「ばっ……!!」

ルーンは焦った声で叫んだ。

「バカヤロウッ!」

「む?」

バカヤロウとは穏やかではない。……いや。

「照れずともよいのだ、ルーンよ。今は何も考えず、俺の胸の中で
思う存分」

「違う、馬鹿ッ!」

だが、ルーンはそんな俺の腕をふりほどくようにして離れ、そして叫んだ。

「おまつ……お前、ナッ、ナイフが胸にッ!!」

「……む?」

俺はようやく我に返った。

が、あまりに不可解なルーンの叫びに眉をひそめて、

「なにを言うのだルーンよ。この貧乏な俺の胸にサイフなどあるはずが」

「こっ……この、アンポンタンッ! サイフじゃない! ナイフだ

よ、ナイフッ!」

「む? ナイフ?」

そういえば。

ふと見下ろすと、ルーンの右手にあったナイフが先ほどから姿を消している。

アレは確か……彼が俺の胸元に突きつけていて……えっと……

「……おお?」

よくよく考えると、俺とルーンの距離は際限なく近付いていた。

……とすると、その間に存在していたナイフは一体どこへ?

「ま、まさか、これが俗に言う神隠し!？」

「御主人様」

と、そこへミュウがいつも通りの冷静な声で告げた。

「御主人様の胸にあるものがそうではないのですか？」

「む？」

言われて視線を下に落としてみると、

「おお」

なるほど確かに。俺の胸からナイフの柄が生えていた。

「これはこれは気付かなかった。ははは、灯台下暗しというやつだな」

しかし不可抗力とはいえなかなか面白い光景だ。人の胸、それも心臓の辺りから生えるナイフの柄なんてそうそう見れるものではない。るまい。

「……………む？」

いや待て。

なにか……………変ではないか？

(そういえばルーンの頭を抱いたとき“ドスツ”とかいう、何とも状況にそぐわない効果音が流れていたような気がするぞ……………)

「……………」

「……………」

「……………」

俺の視線と、ルーンの強張った視線と、ちょっとだけ眠たそうに目を擦るミュウの視線が、部屋の中央で火花(?)を散らした。

そして、

「のっ……………のおおおおおッ！ お、俺の心臓にナイフが突き刺さっているのではないかあああああッ!!」

「ば、馬鹿！ 気付くのが遅すぎるだろおおッ!!」

俺が飛び上がると同時にルーンも少々青ざめて、

「と、とにかく抜いて、い、いや、抜いたらマズいのか!？」

こういう場合はどうすれば……………!!」

いや、待て！

俺の明晰なる頭脳が即座に最善策を導き出す。

……そう。こういう非常事態にもっとも頼りになるのはミュウだ。

「ミュウ、ミュウよ！ ど、どつする！ どつすればよいのだ！！」

「はい」

するとミュウはいつものように即座に、的確に、そして明確に答えた。

「冷めてしまった晩御飯はデンシレンジでチンです」

「そ、そうかッ！ その手があつたかッ！！」

一筋の光明。

つて。

「晩御飯の話ではないッ！ ナイフ！ このナイフのことだ！！」

というか、デンシレンジというのは一体なんのことだッ！

「申し訳ありません」

そう言いながらも、ミュウは冷めてしまった晩御飯（だと思われる奇妙な物体の数々）を少し残念そうに見つめながら、

「邪魔でしたら取ってしまつて構わないのではありませんか？」

そんな彼女の言葉にはルーンが即座に突っ込んで、

「ば、馬鹿！ そんなことしたら血が一気に噴き出すに決まつてるじゃないかッ！！」

「そ、そうだぞ、ミュウ！ いくらクールでビューティなこの俺でも、心臓から血が噴き出したらきつと死んでしまつに違いなぞ！」

「きつと、じゃない！ 絶対死ぬつてのッ！！」

「はあ」

ミュウは小さく首を傾げてみせる。

その姿が子犬を連想させて胸キュン……とか言つてる場合ではないのだ、マジで！

ミュウは言った。

「血が噴き出しますか？」

「と、当然ではないか！ ナイフがこうして心臓に刺さっておるのだから！！」

「はあ」

ミュウはもう一度俺の胸に刺さったナイフを見て。

俺の顔を見上げて。

そして、言った。

「でも刺さってませんけど」

「そうだろうさうだろう！ 見事に刺さって へ？」

きよとん、として、ミュウを見る。

「……」

ミュウはトコトコと俺に歩み寄ってくると、俺の胸に刺さったナイフに手をかけた。

そして

「お、おい、ミュウ、何を……」

問いかける暇もなく。

なんの躊躇いもなくナイフが引き抜かれる。

「のわっ！？ のわああああああ、死んだああああ……！！」

俺は断末魔の叫びとともに天を見上げた。

左胸に開いた傷跡からは大量の真っ赤な血が噴き出し、そして世界一クールで世界一ビューティな善良なる一般市民ヴェスタランバートの物語はこうして感動のフィナーレを迎えたのだった。

……と、思いきや。

しゃこん、しゃこん。

「……はれ？」

視界に映るのは薄暗い部屋の天井のみ。

いつまで経っても天使のお迎えがやってこないではないか。

「お、おい、お前……」

何やら信じられない表情で俺の左胸を見つめるルーン。

しゃこん、しゃこん。

そして先ほどから鳴っているこの奇妙な音。

「ど、どうなっておるのだ……？」

「こんなこともあるのかと、すり替えておきました」

「へ？」

「しゃこん、しゃこん。」

「ミュウの手にあつたナイフ。……いや。」

「……お？」

それはナイフの形をした、刀身が柄の中に沈んでいく仕組みのオモチャだった。しゃこん、しゃこんという奇妙な音は沈んだ刃先がバネの力で元に戻る音だろう。

「お？」

「恐る恐る左胸へと視線を落としてみる。」

「背中を見る。」

「首、肩を回してみる。」

「おおおおおおお？」

「飛び跳ねてみる。」

「着地と同時にポーズ。」

「全て、何の支障もなかった。」

「おおおおおおおおおお！！！」

「御無事でなによりです、御主人様」

「……よくやったああああ！！！」

「ぎゅううううっ！！！」

「……？ 御主人様 …？」

「ミュウが目を白黒させた。」

突然の行動。だが、大袈裟でもなんでもない。その機転がなければ、本当にナイフが刺さっていた可能性もあるのだ。

俺が喜びのあまり思わず彼女を抱き締めてしまったのも至極当然のことであろう。

「危うく三途の川を渡ってしまつところだったぞ！ お前は命の恩人だ！」

「……」

艶のある髪の上から頭を何度も撫でてやると、蝶々のように儂げで頼りない体からは何故か花のような香りがした。

「そつだ、褒美に何か買ってやるつではないか！ さあ、何でも言ってみるが良い！」

「……………」

「服か？ アクセサリーか？ いやいや、意表について食べ物という線も」

「……………」

「そつそつ、物でなくとも良い！ 何か俺にして欲しいことでも

……………む？」

「……………」

反応がないのを訝しんで少し体を離す。

「ミュウ？ どうしたのだ？」

「……………」

ミュウはまるで電池が切れたロボットのようじゃなくて、糸が切れたカラクリ人形のようになっていた。

やはり反応がない。

「おい、ミュウ？」

さらに離れて軽く肩を揺すつてやると、

「あ……………あ、いえ」

一瞬だけ心なしか残念そうな顔になったが、その表情はすぐに元に戻り、いつものように冷静で的確な返答がその口をついた。

「私が御主人様をお護りするのは当然のことです。うちゅーの真理で相対性理論で謎のマスクマンは大抵主人公の身内だったりするのです」

相対性理論？ ……謎のマスクマン？

「な、何を言っているのだ？」

「……………あ……………その」

ミュウが珍しく口ごもる。そしてチラッと俺の顔に視線を向けた。

「？」

なんであろうか。

何か付いているのかと自分の両腕に視線を落としてみるが、手には彼女を抱き締めたときの感触が残っているだけで、他には何の変哲もない。

「どうしたのだ？ 俺の体に何かついてているのか？」

「……いえ、なんでもありません」

問いかけると、ミュウが再び視線を横に逸らす。……あるいは体調が優れないのだろうか、よく見ると頬が少し赤味を帯びているようにも見えた。

「ふむ？ なんでもないのであればよいのだが……」

いまいち納得できないが、まあこのミュウのことだ。何でもないと言えば本当に何でもないのである。

と、俺は簡単に結論付けて、

「しかしまあ、ともかくこれにて一件落着ということだな！」
だが、

「……何が一件落着だよ」

声。

「む？」

振り返ると、ルーンは部屋の隅にどっかりと腰を下ろしていた。

「おお！」

そうだ。ナイフ騒動で彼のことがかうやむやになってしまっていたではないか。

（こ、これはマズいぞ！ あんなにも大事な話の最中に……！）

さぞかし怒っているであろうと思いつつ見てみると、

「ルーン？」

「ったく」

ルーンは壁に背を預けたまま、大きなため息を漏らしていた。が、その表情は怒っているというよりは、呆れているような様子。

なんというか。

先ほどまで張り詰めていた緊張の糸が切れてしまったような。

緩んだ空気。

それからルーンはホッ、と息を吐いてミュウをチラツと見ると、
「いつの間にすり替えられたのか知らないけど……でもま、ホント
に刺さってなくて良かった」

「む？ 良かった？」

意外な言葉だった。

「ルーンよ。俺のことが憎いものではなかったのか？」

「……」

壁に背を預けたままルーンはチラツと俺を見上げて、それから視線を伏せると同時に軽く両手を広げた。

そして、

「……お前の様子を見てると記憶喪失だったのは間違いなさそうだったたら、少なくとも現時点でお前を殺すほどの理由はない。だろ？」

「……ルーン」

「勘違いするなよ」

だがルーンはすぐに視線を鋭く上げて、付け加えた。

「記憶があるうがなかるうが、仇は仇だ。もしお前が村を滅ぼしたのだと判明したら、私はこの命を賭してでも必ずお前を殺す。それだけは覚えとけ」

揺らぐことのない意志。

強い怒り。

深い、愛情 ……

「……ああ」

俺は自然と深く頷いていた。

「心配せずともお前に命を賭けさせるようなことはない。お前が望み、それでお前の心の負担が軽くなるのなら、俺は即座にこの命を差し出そうではないか」

「……真顔で言いやがって」

「む？」

何事かボソツと呟いたルーンに、俺は少し耳を傾けて、

「なにか言ったのか？ すまぬ、聞こえなかった」

「なんでもない」

何故か拗ねたように視線を逸らすルーン。

何か機嫌を損ねることも言ったのであろうか？

(思春期の少年は難しいものだ……)

……しかし、まあ。

ひとまず執行猶予とはいえ今は俺たちが生き続けることを許してもらえたということ、まず一安心、一件落着といったところであらうか。

一件落着。

と、来れば、次に訪れるのはやはり

「では、御主人様。そろそろ夕食にしましょう」

「うむ。そうだな」

一件落着の後はやはりメシに限る。そうすることによって真の意味で心も落ち着き、そして明日への活力が産まれるのだ。

ん？ なんか大事なことを忘れているような気がするが……まあ、いいか。

「御主人様、夕食の準備できてます」

と、そんなミュウの言葉に俺の思考は中断されて、

「おお、そうか。相変わらず用意がいいな、ミュウよ」

「お褒めに与り光栄です」

「では早速食そうではないか。……む？ どうしたのだ、ルーン？」
見ると、ルーンは何やら奇妙な顔をしてこっちを見ているだけで、呼びかけても食膳に近づく気配がない。

「食べぬのか？」

「え、いや、だって、お前、それ」

「む？」

何やらおかしい反応だ。ダイエットという体付きでもないであろう。

しかしまあ、食べる気がないものを無理強いするわけにもいきません。

「ならば、先にいただくことにしようか」

旅は長い。体力は蓄えておけるときに蓄えておくに限る。

……何故か恐ろしいものでも見るかのような顔のルーン。

……何故かほんの僅かに期待感のようなものを浮かべたミュウ。

「？」

そんな二人に見つめられながらも、俺はフォークを手に取ると、

「では、いただきます」

ぱくつ。

俺の意識はそこで不自然に途切れた。

しかし、まあ。

紆余曲折悲喜交々あったにせよ、とりあえず結果オーライとでもいべきか。

「そうは思わんか、ミュウ」

「なにがですか？」

む。このやり取りも久々だな。

「いや」

ばさつ、と、漆黒のマントが風に翻る。

夏の日差しはここ数日で急速に弱り始め、徐々に秋の気配が増してきた。服を通して感じる太陽の熱も今日は優しい。

「まるで世界が我々の旅立ちを祝福しているかのようにではないか」

「？ 御主人様には“せかい”という名のお知り合いがいらっしやるのですか？」

不思議そうな顔で見上げるミュウ。

「いや、それは比喻といつかなんといつか」

「比喻　物事を他の物事を用いて表現すること……世界……あ、わかりました」

ミュウはポンと手を叩いて、

「御主人様のお知り合いは世界と同じぐらい体の大きな方なのですね」

「……そんなはずはあるまい」

渋い顔をして諭す。

「そんなに大きかったら寝る場所がなくて困ってしまうのではないか」

「……そういう問題かよ」

風がため息を運んでくる。

「む？」

三步、いや四歩ほど後ろを旅人用のコートを纏った一人の少年が付いてきていた。

その正体については、改めて言うまでもあるまい。

「御主人様のあまりのカッコ良さに一目惚れしてしまった街娘でしようか」

「な、何故にそんな昔の独白を……」

俺自身はおろか、俺たちの旅をこの世界のどこかから見守っている神様すらもほぼ確実に覚えとらんぞ、きっと。

「それに“少年”だとさつきから地の文で説明しているではないか」
「はあ」

不思議そうにチラツと後ろを振り返るミュウ。

強い風が吹く。

「少年という言葉は男性に限るものではないのでしょうか？」

「む？　なにか言ったか、ミュウ？」

風に消されて声がよく聞き取れなかった。……別に外界の意志が働いたわけではない。

「はい。だってルーンさんは男性ではな」

「あーあー、もう。余計なことは言わなくてもいいっての」
今度は少年　もといルーンがミュウの言葉を遮る。

彼の出で立ち初めて出逢ったときと同じボロボロのコート、さすがに普通の人間だけあって少々疲労した様子の顔は強い風に運ばれる埃で微かに汚れていたが、まるで弱音を吐いたりしないのはその気丈な性格故か。

結局、彼は俺の白黒が判明するまで旅に同伴することになった。帰る場所もなく、目的も復讐以外にない。……そんな彼が俺たちについてくるのは当然の成り行きだったし、俺としてもそんな彼を放っておくことはできなかったのだ。

「はあ。余計なこと、ですか」

「ああ。余計なことだ」

三步、二歩。

ルーンがほんの僅かに俺たちとの距離を縮める。

「む？　何の話なのだ？」

「お前には関係ない」

「……むう」

せつかくこうして旅の仲間になれたというのに、相も変わらず素っ気ない態度である。尖ったナイフのような少年の心を解きほぐすのはやはり容易なことではない。

「しかしいつの日か、傷付いた少年の心に俺の想いの届く日が来るに違いない。それまで俺は暖かく少年の成長を見守っていこうではないか」

「……」

ゴスツ！！

「ぬおっ！？」

いきなり尾てい骨付近に蹴りが入る。

俺は即座に振り返って、

「な、なにをするのだ、ルーン！！」

ルーンは微かな怒りに眉を震わせながら言った。

「少年を連呼されるとやっぱムカつく」

「な、なにゆえ……」

「難しいお年頃、というヤツですね」

わかっているのかわかっていないのか、ミュウが悟ったようなことを言う。

「……むう」

背伸びしたいお年頃なのだろうか？

(……やれやれ。まるで二人の子供を抱えたお父さんみたいになってきたな……)

そんな俺の感想が正しいかどうかはともかくとして。

「さて、ミュウよ、次の目的地はどこなのだ？」

「国境が近いですね。このまま進むと隣のビルア領に入ります」

「ふうむ。それもまたよかるう」

風の向くまま、気の向くまま。

「よかるう、って、ホントに適當だな、お前ら……」
振り返って答える。

「困ってる人間はどこにでもいるものだ。残念ながらその全てを救うことは不可能だが、可能な限り多くの、様々な人々を救いたくないか」

「……変なヤツ」

そう言っただけはぶいっとそっぽを向いてしまった。

決して疑いが晴れたわけでもなく、前途多難といえはその通りではあるが、深くは考えまい。考えたら負けだ。

「……ビルア領は治安の悪い土地だ。困ってる人間はおそらくごまんといる」

「む」

「お前の本性を見極めるにはちょうどいいかもな」

そう言っただけで挑戦的な視線を投げてくるルーン。

……だが、それこそ望むところである。

「ならば見ているが良い」

ばさつ、とマントを翻し、俺はニヤリと笑みを返した。

「今度こそ、この俺の男らしく素晴らしい生き様を見せてやるうではないか！」

どーん！

「……決まった」

俺のあまりにもカツコイイ決め台詞に言葉も出ないようだ。

「御主人様」

と思つたら、そうでもなかった。

それどころか

「そろそろお昼御飯にしましょうか」

「……」

ミュウの口から飛び出したのは何とも不吉な“宣告”。

法衣のような白い装束の下から取り出されたバスケットは、禍々しい瘴気を放っていた。

「ルーンさんは遠慮なさっていたので、今日は御主人様の分だけ作ってみました」

「……」

ひゅうう、と。

俺の周りに無言の空つ風が吹く。

(……え？ え？ また？ またか？ また……またこのオチなのかッ！？)

期待を込めて見つめる純真無垢な瞳と、その手の中にある大量殺人兵器。

まるで蛇に睨まれた蛙のように動けない。

これ以上に凶悪な組み合わせが果たしてこの世に存在するだろうか。いや存在しない。

「……先に男らしい死に様を見せられることになりそうだな」

「……」
哀れみの込もったルーンの言葉に胃がキリキリ痛むのを感じながら、俺は脂汗とともに答えるしかなかった。

「ルーンよ……哀れみはいらぬ。どうか屍は晒しておいてくれぬか」
「ああ。了解したよ、ヴェスタ」
ルーンが初めて俺の名を呼び、間に初めて友情らしきものが芽生えて。

そして俺は真に願うのだ。

この料理オチが、決して次回に引っ張られることがありませんように、と。

俺たちの旅は、まだまだ続く

プロローグ

か細く繊細な、オルゴールのような声だった。

「お母様」

ふわりと広がったウェーブの髪。

大きな黒翡翠の瞳。

清楚な純白のドレスとプラチナのティアラ。

まるで西洋人形が現実世界に迷い込んだかのような可憐な少女。

「ついに……この日が参りました、お母様。私の新しい旅立ちをどうか御見守りください」

紅葉が秋風の上を滑り落ちていく。

近付いてくる馬車の蹄の音。

少女を不思議の森から連れ出す魔法の馬車。

「ルクレツィア。準備は整いました？」

背後の扉が開いて顔を出したのは少女の一つ上の姉。

「はい。お姉さま」

少女が振り返ると、姉はそのあまりの可憐さに言葉を失った。

もともと姉妹の中でも抜きんでて可愛らしい少女ではあったが、

今日はそれが一段と際だっている。

ため息。

「羨ましいわ、ルクレツィア。まさかあのヴィルヘルム様に見初められるなんて」

「申し訳ありません、お姉さま」

視線を落とした。

少女は知っている。彼女の何人かの姉たちが、揃いも揃って彼女の婚約者であるヴィルヘルムという青年に恋い焦がれていたことを。目の前にいる一番歳の近い姉も、その中の一人であることを。

だが、姉は少しだけ笑った。

「他のお姉さま方ならともかく、あなたなら私はちっとも悔しくな
いわ。本当よ」

「……」

そっと、姉の指が頬に触れた。

顔をあげると真っ直ぐに視線が重なる。

「本当に綺麗よ、ルクレツィア。どうか幸せになってね」

「お姉さま……」

伏せた瞳から一筋、涙がこぼれる。

外から彼女を呼ぶ声が聞こえた。

「それじゃあ、ね」

パタン、と、扉が閉じる。

しん、と、静まった。

「お母様」

振り返る。

壁に飾られた貴婦人の肖像画を真っ直ぐに見つめ。

少女はオルゴールのような声でもう一度呟いた。

「どうか、私の新しい旅立ちを御見守りください」

純白のドレスがそよ風に揺れた。

その1

振り返ったところに一撃。

戸惑っているところに再び一撃。

血相変えて何事か叫ぼうとしたところにまた一撃。

怯んだところにさらに一撃。

「大丈夫かな、お嬢さん」

秋の夕日を背負って立つのは漆黒の美青年。

倒れ伏すのは引き立て役である名もなき四人のチンピラたち。

見つめるのは目に涙を溜めた美しい少女。

漆黒のマントがオレンジの光の中に翻る。

何か発しかけた少女の言葉を遮るように、俺は言った。

「なに、名乗るほどの者ではない。ただの通りすがりの正義の味方さ。しかし気を付けたまえ。日が沈みきつていなくとも、このような人通りの少ない小道。君のような少女が一人で歩くには危険すぎる」

肩越しに振り返り、忠告と笑顔を残し、颯爽と立ち去るのみ。

正義の味方とは、見返りを求めるものではない。

ただ人を助けること、そのこと自体に喜びを覚えるもの。

闇の色濃い町に突如現れた正義の味方。

人々の賞賛と悪人たちの畏怖を浴びて立つ、誉れ高きその者の名は

正義の大量殺戮者

ジェノサイダー

「前代未聞だな」

「前代未聞　今までに聞いたことがない、それほど信じがたい出来事の形容……わかりました」

一呼吸。

「前代未聞だと思えます」

いつの間にやらミュウとルーンの息がピッタリだ。喜ばしいことである。

窓の外は夜。

ふと思う。

「ところで二人とも。いったい何がそんなに前代未聞だということだ？」

「……」

「……」

む？　何故そんな犯罪者を糾弾するような目で俺を見る？

ゴロンとベッドに横になったルーンが半ば諦めたような口調で言った。

「暴漢から女の子を助けるヒーローはいくらでもいるけど“一緒に助けに入ろうとした善良な一般市民”までノックアウトするヒーローは前代未聞だって言ってるの」

「む」

さすがはルーン。何とも読者に優しい説明口調だ。

いや待て。

それではまるで俺が失敗したようではないか。

「待つのだ。俺には俺の言い分があっただな、それはなんとというかアレだ」

「アレ？」

「その者があまりにも悪党面をしていたもので、つい「ルーンがため息を吐いた。」

「……前代未聞だ」

俺たちがビルア領の最初の町に到着して約半月ほどが経った。

近隣でも最高に治安が悪い領地との噂はまさにそのとおりで、町に入った初日にいきなりひったくりと強盗の現場にバツタリ遭遇することとなり、見事にこれを撃退。

そのとき俺は感動とともにこう思ったわけだ。

この土地こそまさに、神が俺に与え賜うた試練の地ではないのかと。

そんなこんなで約半月。

町はいつしか、突如現れ悪人たちをバツタバツタと取り締まるスライリツシュでクールビューティな正義のヒーローの噂で持ちきりとなったわけである。

「ふん、正義のヒーローが聞いて呆れるよ。恋人同士の痴話喧嘩に首突っ込んだり、ひったくりから荷物を取り返した人を強盗だと勘違いしてノックアウトしたり　噂の半分は悪い噂じゃないか」

むむむ。これは俺一人では少々分が悪い。

「ミュウよ。ちよいとこやつにガツンと言ってやってくれぬか。俺がどれだけ世のため人のために頑張っているのかということを」

「はい、御主人様。　ルーンさん」

素直に頷いてルーンと対峙するミュウ。

いい子だ。思わずぎゅうっと抱きしめてなでなでしてやりたくなる。

……あ、いや。別にそういう幼女趣味的なアレではなくてだな。

純粹に父親としてというか家族愛的なものというか

「がつん」

「……」

「……」

一同沈黙。

「？」

不思議そうなミュウ。

お約束すぎて、すまん。

さて。

一応こちらで紹介でも入れておくのでしょうか。

「ん？ なんだよ、ヴェスタ。何か用か？」

まずはこの、ベッドの上でクルクルとナイフを弄んでいる方、褐色肌で茶髪のショートカットの方がルーンだ。少々不憫な子供時代を送ったせいか世間を冷めた目で見ていたり全体的に粗雑だったりもするが、本当は心優しく故郷想いの十三歳の（と言うと何故か怒りだす）少年（と言うと何故かさらに怒りだしてしまう）なのである。

そしてもう一人、

「御主人様？ どうかなさいましたか？」

入り口近くの椅子にちょこんと腰掛けてつぶらな瞳で見つめてくる、白い法衣に黒い宝石のはまったサークレットという不思議な出で立ちの少女がミュウ。外見的には十歳を少し過ぎたぐらいの年齢だと思うが、実際のところは俺にもわからない。何しろ彼女はいわゆる普通の人間ではないのである。

「いや、二人とも何でもないぞ。ただ、たまにはわかりやすく親切な主人公を演じてみようかと思っただけだ」

「？ 御主人様？」

「またわけのわからんことを……」

そして俺が、街を歩けば全ての女性が振り返り、全ての男たちが憧れの視線で見つめてくる、均整の取れた長身と甘いマスク、漆黒の装束に漆黒のマント、クールでビューティ、澄み切った心の正義漢ことヴェスタ＝ランバートである。

「……ふむ。少し簡単すぎたか」

まあいい。俺のことはこれからの活躍を見てもらえればすぐわかっていただけるだろう。

「さてと。では！ そろそろパトロールに行つて来るとしようか」

夜も深まった。早速行動である。ヒーローたるもの、夜のパトロール

ールは欠かせない。正義の味方に休息などないのだ。

「お供します、御主人様」

漆黒のマントを翻して立ち上がると、ミュウが即座にそう言った。相変わらず健気な娘である。

しかし。

俺は小さく首を振って答えた。

「以前から言っておろう。女の子がこんな時間に外を出歩くものではないのだ」

緊急事態ならともかく日常的にというのは情操教育上あまりよいことではない。

「ですが、私は御主人様の」

「従者だろつと女の子は女の子だ。そうであろうっ？」

「……？」

きょとんとした顔が何とも愛らしい。といってもそれはそういう幼女趣味的なアレではなくて以下同文。

と、ミュウとそんなやり取りをしていると、横からルーンが口を挟んできた。

「ま、実際お前らに敵う人間なんてそうそういないだろうけどな。けど、町中でめったやたらに変な力を使うわけにやいかないだろ」

「うむ、そういうことだ。それに女の子を危険にさらさぬことは男の使命でもある」

「へえ。たまにはいいこと言うじゃないか」

ルーンがそう言って笑う。

珍しい。普段辛口のルーンが俺のことを誉めてくれるとは。

「たまにというのが少し引っかかるが……まあ、よい」

それでも俺は少し気分を良くしながら、さらに勢いを増して言った。

「では行くとするか、ルーンよ」

「は？」

ルーンはなんとも表現しがたい顔をした。

「は、ではない。先ほどお前も賛同したではないか。……女の子を危険にさらさぬことが男の使命であれば、ミュウの代わりに一緒に来ることがお前の義務。そうであるっ？」
「というのも。」

まあ自分で言うのもアレだが、俺はほんのちよつと、ほんのちよつとだけ方向音痴であり、こんな暗い時間に外に出ると宿に戻ってこられるかどうかほんのちよつぴり不安なのであって

「……む？」

気付くと、なにやら陽炎のようなものがルーンの背中から立ち上っている。

ついでにどこからかゴゴゴゴゴという効果音まで聞こえてくる。

……何かあったのだろうか？

「どうしたのだ、ルーン。いくらお前が華奢で女の子のような体付きなのだとしても一人の男として女の子を危険にさらすようなことは」

「ゴスッ！！！！」

「~~~~~！！！！！！」

下腹部に非情のサッカーボールキックが炸裂し、俺は悶絶した。

「ル、ルーンよ……と、突然なにを……」

見上げると、ルーンのこめかみがピクピクと動いている。

いきなり怒りゲージ最高潮だった。

「ワザとやってんだろ……なあ？ お前、絶対ワザとだよな、それ

……」

「な、なにを言っているのだ、お前は　　がくっ……」

年頃の少年の心は理解し難い。

「　　おやまあ、賑やかだねえ」

そこへ四十歳ぐらいの宿の女将がトレイに乗せた夕食を運んできた。
た。

「三人分こっちに運んでいって言ってたから全員分持ってきたよ。」

だいぶ涼しくなったねえ。今晩は寝惚けて寝間着を脱ぎ散らかす心配もなさそうだ」

そう言って女将は甲高い声で笑った。

ここには数日前から世話になっていて、少しは気の知れた人物である。元来、客と話をするのが好きな性格らしく、なかなかの好物。……まあ、その話のなかにデマ話というか確証のない噂話らしきものが大量に混じっていたりするのが玉に瑕であるが。

俺は脂汗を拭いながらどうにか復帰して、

「……そういえば」

女将に尋ねてみた。

ちなみに尋ねようとしたことはまったく関係ないが、ここはルーンとミュウの寝泊まりする二人部屋で、本来は俺だけ別の個室である。本当なら三人仲良くベッドを並べて寝るのが一番だと個人的にはそう思うのだが、ルーンのヤツがどうしてもイヤだということで俺だけ別の部屋なのだ。

何か　　とうかかなり　　納得いかんが、ルーンにいつものあの剣幕で押し切られては仕方あるまい。ミュウもそれで何の文句もないようだ。

まあ、それはともかく。

「最近、町の通りが妙に飾り付けられているようだ　　もしかして近々なにか催し物でもあるのだろうか？」

「ん？　ああ、お客さん、知らないのかい？」

女将が少し意外そうにしながら教えてくれる。

「ビルア公の末のお姫様がこのたびご婚約なさってね。町でお祝いのパレードを催すことになったのさ」

「ほう。ビルアの姫が」

ビルア公といえばその名のとおりこのビルア領で一番偉い人物であり、昔でいえば王様であり、その娘ならつまりは王女様のようなものである。

「しかしビルアの姫が何故このような町でパレードを？　……ああ、

すまぬ。別にこの町を悪く言うつもりではないのだが」

女将はホホホと手を振った。

「いいよいいよ、気にしなくて。一部に治安の悪い地区があるのはホントだからね。首都の辺りに比べれば規模だって、ね。小さい頃、姫様がこの町の別邸で過ごされていたご縁なのさ。まあ姫様といっても十三人姉妹の末っ子だしねえ」

「じゅ、じゅうさん……」

お姫様もそんなにいると割と有り難みがない気がする。

「……ただ、ねえ……」

「む？」

女将は何やら気になる物言いをした。というか、何やら聞いて欲しいそうな顔でこっちをチラチラ見ている。

「何かあるのか？」

期待に込えてみると、女将は待ってましたとばかりに顔をツヤツヤに輝かせて、

「そうなんだよ。ここだけの話、今回のご婚約は色々問題があったみたいでさ」

「問題？」

それだけではいまいち要領を得ない。

「そのめでたい話のどこが問題なのだ？」

女将は声を潜めながらも滑らかに続けた。

「実は今回の姫様のお相手 “ヴィルヘルム公” っていうんだけど、これが領内一の色男でさ。ま、色男つつつても浮気性ってわけじゃなく、ものすごく真面目な好青年らしいんだけど」

「ほう」

まるで俺のようで何とも親近感が沸く話である。と考えるとここで、なにやらルーンが馬鹿にするような目で俺を見た。

なにか見透かされてしまったのかもしれない。

いや。もちろん見透かされて困ることなど何も無いのだが。

「んで、末の姫様は十三人の姉妹の中でも一番お美しいと評判のお

姫様なんだけど……」

「む？ それならばますます似合いのカップルではないか
いったい何が問題だというのであろうか。」

「話はここからさ」

女将はこれ見よがしにさらに声を潜めてみせる。楽しそうだ。噂話が好きなお年頃なのだろう。

「その色男はね、その姫様の姉君たちの何人かが、揃いも揃って狙っていた相手なんだよ」

「ほう」

なんだか急に俗っぽい空気が漂ってくる。

「そうすると、そのうちの何人かはやっぱり今回のご婚約をよく思わないだろ？ 思うわけないさ」

俺は腕を組んで、

「ふうむ。しかし今回の結婚はお互いに好き合っつてのものなのであ
らう？」

「まあ、ヴィルヘルム公も末の姫様しか眼中になかったらしいから
ねえ」

「ならば肉親たるもの、祝福してしかるべきだと思っただが……」

そう言つと女将は高らかに声をあげて笑った。

「そんな簡単にいくはずないじゃないか。姉としてのプライドみた
いなものもあるんだらうしさ」

「ふうむ」

そういうものだろうか。いまいち理解できんが、まあ同じ女性の
言うことだ。そういうものなのかもしれない。

「そんなこんなでさ。実は今回のパレード、何か起きるんじゃない
かってもっぱらの噂だよ」

「なにか、というと」

女将は野次馬の顔で頷いた。

「つまり、一騒動あるんじゃないかってことさ」

数日後。

「これはまたすごい人ばかりだな……」

人、人、人。どこにこんな隠れていたのだろうかと思うほどの人の波が町の一番大きな通りに出現していた。左右に並んだ家の屋根にはビルア領の紋章を刻んだ旗が掲げられ、たくさんの警邏たちが警備をしている。

歓声。

便乗して商売に精を出す人々。

我々はそんな喧噪溢れる通りの端っこを歩いている。

「町の外からも結構来てんだろ。領主の娘か何か知らんけどさ、ホント暇なヤツらだよ」

頭の後ろで手を組んでつまらなさそうにそれを眺めるルーン。

「まあそう言うな、ルーンよ。たまにはこういうお祭り騒ぎも良いではないか」

「ご主人様、いったいなにが始まるのですか？」

不思議顔のミュウ。

そうか。こういうのを見るのは初めてなのかもしれない。

「これからお姫様の成婚パレードがあるのだ」

「せいこんぱれーど？」

「うむ。要するに結婚のお祝いだな」

そう教えてやると、ミュウは少し考える顔をした。

「結婚　男女が夫婦になること　継続的な協力関係を結び家庭を築くこと　人生の墓場　ああ、わかりました」

ポン、と手を打つミュウ。

「……本当にわかったのか？」

何やら不穏な言葉が混じっていたような気がするが　まあ、教えて気にするまい。

と。

まあそんな感じで我々が町に出てきたのは、別に先日の方將の言葉を受けたからではない。根拠のない主婦の噂話（？）は話半分に分くのが定石というものであって、そもそもすでに決まった結婚のパレードを妨害したところで婚約そのものが破棄されるわけもなく、妨害した方には何のメリットもないであろう。命そのものを奪うというのならばともかく、実の姉たちがまさかそこまでのことをするはずもない。

だからパレードを妨害する悪党の野望を阻止しようとかそういうことは考えていない。

では、何故わざわざパレードの日に外に出てきたのかというと「パレードといえばお祭り騒ぎ！ 祭りといえば男の浪漫だっ！」というわけである。

「要するに野次馬根性が騒いだけだろ」と、ルーン。

相変わらず冷めた反応である。

「いかにぞ、ルーン。男というものは常に情熱を持って人生を歩んでいかねばならぬ。それこそが男の美学！ それこそが男の浪漫！ 情熱を持たない男など、印籠のないちりめん問屋の御隠居のようなものだあああッ！」

「どーん！！」

「そのたとえはよくわかんないけど……私には要らないよ、そんなもん」

「むむむ」

なんたることだ。荒廃しきった少年の心には、この情熱ほとばしる男気さえもまるで伝わらんとするのか。

「御主人様。少し向こうが騒がしくなつたようです」

ミュウが白い法衣の中から手を伸ばして東の方角を指した。

「お。どうやら始まつたようだな」

一際大きな歓声と楽隊の音楽が聞こえてきた。

街の東側にあるビルア領主の別荘から何台もの馬車が出てこの大

通りを抜け西の方にある教会へと向かう。別荘から教会までのルートはおよそ一時間程度の道のりで、我々のいる場所はそのちょうど真ん中ぐらいだから、ここにやってくるまではおよそ三十分といったところだろうか。

と。

(……む?)
ミュウが背伸びして人垣の向こうを覗き込もうとしているが、どうやら彼女の背では通りが全く見えないようだ。

よし。となれば

「よ……つと」

「え?」

後ろから抱えて右肩に乗せてやると、ミュウは戸惑ったような声を出した。

「あの、御主人様、一体何を」

「お前の背ではパレードが見えぬではないか。せつかくの機会だ、お前も楽しむが良い」

するとミュウが珍しく慌てたような顔をした。

「で、ですが、御主人様にこのようにしていただくなど、恐れ多い」

「気にするな。祭りは無礼講が基本というものだ。……おつと」

「きやつ」

通行人にぶつかって少しバランスが崩れ、ミュウが女の子らしい悲鳴を上げて俺の頭についた。

「遠慮はいらぬ。しっかり捕まっていなさい」

「は、はい。御主人様」

結局ミュウは素直に従った。

そんな彼女に、ちよつとした父親気分で浮き浮きである。

「しかし」

肩に負った感触はなんとも軽い。見た目からして小柄なミュウではあるが、その見た目以上に軽く感じる。

「ミュウよ、もっと飯を食わねばならんぞ。世の女性たちはダイエツトだのなんだのと口々に言っているが、健康を考えればほんの少しぐらいぼっちゃりしている方が良いというからな」

「はあ」

よくわからない様子のミュウ。

するとルーンが意地の悪い口調で、

「遠慮なく食わせるほどの稼ぎもないくせに、よく言つよ。前の街で稼いだ路銀もそろそろ危ないんじゃないのか？」

痛いところに突っ込んでくる。

「ば、馬鹿を言うでない。お前たちが望むならば、夜を徹してでも必要なだけ稼いでこようではないか。それが男の甲斐性というものだ」

ルーンをそっぽを向いて、

「私はいいよ。自分の分ぐらい自分で何とかするしさ」

「むむ……」

子供らしからぬ強情さだ。

「だから子供じゃないって言ってんだろ」

背伸びしたがる年頃でもある。

「だから背伸びもしてないって」

むむむ。

「というか。俺は今、一言も喋ってなかった気がするのだが」

「お前の馬鹿面見れば何を考えてるかぐらいすぐわかるっての」

「ば、馬鹿面……」

おお、母さん。

素直な娘に比べ、息子の方はこんなにもひねくれて育ってしまったよ。

……む？ 母さん？

俺はポンと手を打った。

「そっか、わかったぞ」

「？ なんだ？」

怪訝そうなルーンに俺は言った。

「我々に足りないのは母さんだったのだ」

「は？」

ルーンが何とも奇妙な　まるで急に不可解なことを言い出した頭の可哀想な人を見つめるような　顔をした。

そんなルーンに俺は主張する。

「やはり家族というものは父親と母親が揃ってこそ。我々にはその母親分が足りてない。だからいつまで経ってもルーンが俺に懐いてくれんのだ」

「………どういう思考回路してんのか理解不能だけど、お前が何を妄想しているのかはだいたいわかったよ」

ルーンは何故か可哀想な人を見る目のままだった。

と、まあ。

そうこうしているうちにパレードが我々の眼前までやってきたようだ。

歓声上がる。

「………ほう」

遠くで綺麗に飾られた馬車がゆっくりと通りを闊歩する。

その馬車の中から手を振る一人の少女。

人々の祝福を受け、幸せそうな満面の笑顔。

「なるほど。姉妹の中でもっとも美しいと聞いたが………確かに綺麗な姫だ」

女将の話によると、その姫はルクレツィアという名らしい。

一目でわかる高貴なオーラと触れれば壊れてしまいそうな儂さの同居する希有な美しさ。他に十二人の姉がいるというが、その姉たちを見なくともおそらくこの姫がもっとも美しいだろうと確信できる、それほどの美少女だった。

さすがの俺もただ感嘆するしかない。

「美しい姫だ。ミュウよ、見えるか？」

「………」

ミュウは一言も発さずに見とれている。　　良いことだ。一時は
そうだった情緒が欠如しているのではないかと思えることさえあつ
たが、決してそんなことはない。彼女とて一人の女の子なのだ。

俺はますますいい気分になった。

「ルーン。ルーンよ。お前もこつちに来るがいい。そこからでは見
えないではないか。ほら、左肩が空いているぞ」

「いいよ、私は。別に興味ないから。……ってか、そんな恥ずかし
い真似できるか」

そっぽを向くルーン。

「照れるな。俺とお前の仲ではないか」

「どんな仲だよ、ったく」

しかし、なるほど。あの美しさならば、ヴィルヘルム公とかいう
色男が夢中になるのもわかる。

「それにあの笑顔。屈託のない、内面の美しさまで滲み出ているか
のようではないか。あの姫のような女性を娶る者はきっとこの上な
く幸せな人間であろう」

「内面なんて滲み出るわけないだろ。単にいいモノ食っていい生活
してるだけだ」

と、相変わらずひねたルーンの言葉の後、

「御主人様」

ふと、ミュウが言った。

「御主人様もあの女性と結婚なさりたいのですか？」

「ん？ まあ、男であれば誰でもそう思うであろうな」

俺とて男であるから例外ではない。とはいえ、男と女の関係とい
うのはそういった単純なものでもなく、そういうものはやはり長く
付き合った末に産まれてくるものである。美しく優しそうだからと
いってそれだけで良いというものでもない。

だからまあ、あくまで一般論だ。

「わかりました。御主人様はあの女性をお望みなのですね」

「ははは、それはまあ、あれほどの姫であれば誰でも憧れるに決ま

っている」

あくまで一般論だ。

「そうですか。……お望みなのですね」
む？

なんか会話が微妙にちぐはぐのような気がするぞ。
と。

「！」

ルーンが急に何事か気付いたような顔をして、青ざめた。

「お、おい、ヴェスタ。そいつ、もしかして何かとんでもない勘違いしてるんじゃないか……」

きいん。

「勘違い？ 何をだ？ ……というか、なんだ、この耳鳴りのような音は？」

きいいいいいん。

どこかで聞いたことがある、甲高い音。

「御主人様がお望みならば 私は従うだけです」

きいいいいいいいん。

「へ？ って」

俺はそこでようやく気付いた。

右肩の上で。

ミュウがとんでもない行動を起こそうとしていたことに。

「のわああああああッ！ ミ、ミュウ！ お、お前、一体なにをするつもりだ！！」

そんなもの、聞かずともわかっていた。

「あの女性を獲得します」

光が収束する。

きいいいいいいいいん。

って、ちよつと待て！！

「のおおおおっ！ まっ、待つのだ、ミュウ！ そ、そんなことしたら我々は国家レベルの重犯罪者になってしま ……！！」

そんな俺の必死の制止も空しく。
爆音が、町中に響き渡った。

お母様　私の新しい旅立ちを御見守りください

歓声。

花吹雪。

「ルクレツィア、大丈夫かい？　疲れたら座つてもいいんだよ」
観衆に手を振り続ける彼女を気遣う、優しい青年の声。
夫となる人。

皆に祝福され。

優しく誠実な婚約者に寄り添って。

「平気です。この光景をもっと目に焼き付けておきたいのです」
これがかっと誰もが憧れる、女性としてもっとも幸せな瞬間なの
だろう、と、ルクレツィアは思った。

そこに自分がいる。

姉たちが望んでいたその場所に。

半分ほど進んだだろうか。

あと三十分。

と。

「……」

そこでルクレツィアは観衆の一点に目を奪われた。

一際目をひく、黒装束の男性。

長身。

美形。

まるで作り話に出てくる吸血鬼のような出で立ちの男性。

そういえば、最近耳にしたたわいもない噂話。

町に現れた、正義の味方を名乗る得体の知れない、けれど腕の立

つ男性の話。

もしかすると、あの人物のことなのかもしれないと思った。右肩の上に、小柄な少女を乗せている。

まるでアンバランス。

それがかえって幻想的に思えた。

男性と少女がゆっくりと視界から切れて

手を振るのを止め、座席に腰を下ろした。

一呼吸。

「疲れただろ、ルクレツィア。大丈夫かい？」

「気遣ってくれる言葉に頷くか頷かないかの、その刹那。

「！！！」

爆音が響いて、馬車が傾いて。

誰かの悲鳴が聞こえた。

その2

姫の成婚パレードという国を挙げての慶事に襲撃をかける三人組。これはもう文句なしの重罪である。苦勞して築いた正義の味方の肩書きも全てが水の泡だ。

ああ、なんとということであろう。我々に残された道は、ただ逃げるのみ。一生消えない罪人の十字架を背負い、追っ手から逃れるだけの日々が始まるのであろうか。

いや。

いやいや、ここは逃げるべきではない。

俺はともかく。ミュウヤルーンにまで過酷な逃亡生活を強いるわけにはいくまい。

ならば。

ならばどうする。

そう。ならば 俺が全ての罪を背負い、暗い牢獄からの二人の幸せを願おうではないか。

それが父（仮）として最低限の務め。

おお、まだ見ぬ母さんや。

俺は今こそ、務めを果たそうではないか。

（指名手配の大量殺戮者^{ジェノサイダー}）

悲鳴をあげて人々が逃げていく。

馬車を守れ

捕まえろ

怒声が響き渡る。

ミュウの力で起きた爆音に、祝福ムードに溢れていた通りは大混乱だった。

しかし俺はその場に立つたまま。

決めたのだ。逃げも隠れもせぬ、と。

そして俺はミュウを見つめる。

「ミュウよ……何も気に病むことはない。お前の早とちりを止められなかったのは紛れもなく俺の責任。だからお前には何の罪もない」
ミュウが悲しそうな顔で俺を見つめ返した。

お義父さん、と。

「言うな。何も言わずともよい。全ては俺の罪。お前は何もしておらぬ。よいか。お前は何もしておらぬのだ」

「御主人様。あの」

と、ミュウはますます悲しそうに あ、いや。

全然悲しそうじゃなかった。

「まだ何もしてませんけど」

「そう。何もしていない へ？」

「おい、ヴェスタ！」

ルーンが辺りを鋭く見回して、

「今のはそいつじゃないぞ！ どこか別のところで爆発したみたい
うわっ！」

パン、パパン！ と。

どこかで爆裂音が響いて、ルーンが身を縮ませる。確かに。今のは紛れもなくミュウの力ではない。

「……とすると先ほどのも？」

ミュウは頷いて、

「はい。申し訳ありません。先を越されてしまいました」

「いや、先を越されてよかった……」

ホッと胸をなで下ろす。 とはいえ、辺りが大混乱であることに代わりはない。馬車の周りの憲兵と恐慌状態の見物客が入り乱れ

て大変なことになっている。

とにかくポーッと突っ立っている場合ではない。

「ヴェスタ、とにかく避難だ！ ここにいたら巻き込まれちゃう！」

「避難？ …… ルーンよ、お前はなにを言っているのだ？」

「え？」

身を翻しかけたルーンがピタリと止まる。

俺の顔を見て、そして少し青ざめた。

「お前、まさか」

「ふ」

ブワサアツ！ と、漆黒のマントを翻す。

姫の婚礼パレードを狙った謎の爆発。

逃げまどう人々。

この光景を前にして、すすろご退散するヒーローがいようか。いや、いない。

「ルーンよ、こうは思わないか？ 我々はこの日、このとき、人々を護るために、そして美しき姫の幸せな未来を護るために、神の手に導かれてこの町にやってきたのではなかったか、と！」

人差し指を天に向け、高らかに宣言する。

「ならば応えねばなるまい！ この命に代えても人々を、そして姫の幸福な未来を護ろうではないか！」

「……あー、やっぱそうなるのか」

どうも乗り気ではない様子のルーン。

「ぱちぱちぱちぱち」

どこからともなく音声による効果音発生。

そのうちに辺りの人も徐々に減り始め、馬車が止まった辺りからは“追え！”だの“安全を確保しろ！”だのという叫びが聞こえてきた。

追え、ということとは、犯人らしき人物が近くにいるということである。

よし。ひとまず彼ら憲兵隊から情報提供を受けるとしよう。

「では行くぞ、二人とも！」

人の波に逆らって ミュウは放っておくと人波に流されてしまうので、片腕に抱いたまま、ルーンを引き連れて進んでいく。

「なんだかなあ。嫌な予感がする……」

そうして歩き出していくらしないうちに、

「きゃ……っ！」

「お……っ」と

俺は通りの向こうから走ってきた小柄な少女とまともにぶつかってしまった。

「すまぬ。大丈夫か？」

と、尻餅をついた少女に手を伸ばす。

もちろん、俺は彼女を助け起こしてすぐにでも馬車の方へ向かうつもりだった。

しかし。

「……」

ゆっくりと見上げた少女は、俺の顔を確認するなりハツとした顔で突然叫ぶ。

「助けてください！」

いきなり俺の服を掴み、上目遣いにそう懇願してきたのである。

「へ？」

改めて少女を見下ろした俺は瞬時に目を奪われた。

美しい少女だった。

ふわりと広がったウェーブの髪。

大きな黒翡翠の瞳。

まるで西洋人形が現実世界に迷い込んだかのような可憐な

(……ん？ どこかで見覚えがあるような)

「あ、あなたのような方をお捜ししておりました。どうかお願いします。私は命を狙われているのです」

「な、なんだとっ！？」

少女の言葉に俺は驚愕した。

あの爆発だけでも大変な事態だというのに、今度は暴漢に追われ命を狙われる美少女の登場だ。

「し、しかし我々は今、あの馬車の姫を助けに
はた、と。」

言葉を止める。

俺をじつと見つめる少女。目尻には涙が浮かんでいる。見るからに必死の表情だ。事情はわからぬが、確かに彼女は何者かに追われているのだろう。

……神よ。

これを。

こんな少女を俺に見捨てていけというのか。

「必ずお礼はいたします。ですから、どうかお助けください……」
消え入りそうな声だった。

姫を助けるか。

この名もない町娘を助けるか。

一つしかない肉体では、両方を取ることはできない。

二つに一つ。

と、そこへ、

「つ、つーか、おい、ヴェスタ。その女」

「御主人様」

ルーンが何事か言おうとしたようだが、それは神の絶妙な采配によつて遮られた。

「複数名、ものすごい勢いでこちらに迫ってきます。かなり殺気立っている模様です」

ミュウはいつも通り冷静だ。

「む……」

猶予はない。

いや。

迷う必要などない。

確かに姫のことは心配だが、それでも向こうには護衛を務める男たちがいる。しかしこの少女には誰もいない。

今、俺が助けなければ誰もいないのだ。

ならば 迷う必要などないではないか。

「娘よ。……落ちぬようしっかりと掴まっているがよい」

「あつ……」

左手で少女の体を抱えると、少女はほんの一瞬躊躇した後、はい

と素直に俺の体にしがみついた。

「おい、ヴェスタ」

「ルーン、お前は自分で走れるな？ しっかりついてくるのだぞッ

！」

地面を蹴って、走り出す。

「え、つて、おい、ヴェスタ！ だつて、そいつ ！」

「 見つけた！ おい、怪しい男たちが ツー！」

「うわあつ、来たあああ ツー！」

弾かれたようにルーンもついてくる。二人抱えているとはいえ、俺のスピードについてくるとは大したものだ。

駆ける。

駆ける。

右肩にミュウを、左腕に少女を抱えたまま。

逃げまどう人波を縫うように。

追ってくる怒声よりも速く。

「ていうか、おい！ ヴェスタ！ あの追っかけてきてる連中、ど

う見ても暴漢なんかじゃないような ツー！」

息を切らせながらルーンが何事か叫んでいる。

「舌を噛むぞ、ルーン！ 今は黙って走るのだッ！」

俺だつてそれほど余裕があるわけではない。なにしろ人を二人抱

えて走るのは並大抵のことではない。

今はとにかく走るのみだ。

「だあああああつ！ どうなつても知らねーぞおおおおおッ！」

ルーンの叫びは、人々の叫喚の中、一際大きく青空の中に吸い込まれていった。

「……ルクレツィアがさらわれた、ですって？」

「まさか」

町の中心部を襲った騒動とは無縁の、静かなテラスの中に二人の女性がいる。片方は左右に三本ずつ、頬の辺りまで隠れてしまいそうな豪華なロール髪を結った二十歳ぐらいの気位の高そうな貴婦人。そしてもう一人はそれよりいくらか年下であるう、ストレートロングの、こちらは温厚そうな女性だった。

「はい。カディーナ様、フローラ様。どうやら爆発の混乱に乗じて何者かが」

甲高い声に、空気が裂けた。

「馬鹿者ッ！ お前たちは何をしていたッ！！」

「は、はッ！」

年上の方の女性、カディーナの叱責に侍従の体が硬直した。

「も、申し訳ありません！ 現在、全力を挙げて行方を捜索中ですので」

「……」

カディーナは目を細めた。

「それで？ ヴィルヘルム様はどうなさったの？」

ただでさえきつい目尻がさらに厳しくなる。

「あ……はい。ヴィルヘルム様も大層ご心配なさっておられまして、その、捜索チームに加わられて」

「すぐこちらにお連れしなさい」

「は？」

「すぐにヴィルヘルム様をお連れしなさいと言ったの。この町はあなたの方が歩かれるには危険すぎます」

「は……はい！ かしこまりました！」

弾かれたように、侍従はサロンを飛び出していった。

「……まったく」

その後ろ姿を見送って、カディーナは正面の妹 フローラへと視線を移した。

「カ、カディーナお姉様……」

「しっかりなさい、フローラ。今はお父様も他のお姉様方もおられないのだから」

「ル、ルクレツィアは、無事なのでしょうか……わ、私はどうすれば」

今にも気を失ってしまいそうな弱々しさで、フローラは姉にそう訴えた。

カディーナはテーブルの上を彷徨っていた彼女の手をそっと取って、少し口調を柔らかくして答える。

「あなたが取り乱したところで何も解決しないでしょう。とにかく、今は彼らに任せるしかないわ」

「ああ……」

フローラは泣きそうな顔になって姉の顔を見つめた。

「まさか……さっきまであんなに幸せそうにしていたのに……ルクレツィア、どうか無事で」

「ルクレツィア、と申します。この度は本当に危ないところをお助け頂き、心より感謝いたします」

スカートの裾を軽く持ち上げて優雅に。儂げな印象の美少女はその挨拶もまたイメージどおりの楚々としたもので、声はまるでオルゴールのような美しさだった。

「これは丁寧。俺の名はヴェスタという。見てのとおり、通りすがりの正義の味方だ」

そう自己紹介してミュウを促す。ミュウはぺこりと頭を下げて、「ミュウです。見てのとおり、通りすがりの正義の味方です」

「……おい」

「それとこっちの無愛想な顔をしているのがルーンだ」

何が気に入らないのかルーンは相変わらず不機嫌なので、代わりに紹介した。

「それで娘 いやルクレティアよ。色々事情はあるうかと思うが、そろそろ我々にも事情を話してはもらえんだらうか。あのような暴漢どもに追われることになった理由は？ 事と次第によってはこれからも力になるうかと思うのだが」

「……おい、ヴェスタ」

ちなみに我々がいるのは町の中心部からだいぶ離れたところにある空き家の地下室である。以前、この町で正義のパトロールを行っていたときに偶然発見した場所なのだ。

つまり日頃の心がけがこういうときに役立つということだな。うむ。

「しかし姫の成婚パレードなどという人の集まるイベントの最中にごく普通の町娘をかどわかそうとするとは、なんとという大胆な悪党どもだ。あるいは何か裏にとつてもなく大きな組織が」

「……いつまでボケ倒すつもりだ、お前」

む。なんだかルーンがいつも以上に不機嫌だ。少しひやっとした地下室の壁に背を預け、右手で愛用のナイフを弄び、そして凍り付くような目でこっちを見ている。

俺はそんなルーンに向けて大きく両手を広げ、

「ルーンよ、先ほどから一体どうしたというのだ。何か気に入らないことがあるのであれば遠慮なく言ってみるが良い」

「話にならない」

と、ルーンはクルクル回していたナイフを腰の鞘に収め、腕を組んで町娘 ルクレティアを見た。

どうにも好意的とは言い難い目だ。

「おい、言つとくけどな。その馬鹿、本気であんたのこと気付いてないぜ」

「そうなのですか？」

と、ルクレツィアは驚きに目を少し見開いてこっちを見たが、すぐにこやかに微笑んで、

「私のことを御存知ないにもかかわらずお助けくださったのですね。なんと素晴らしい殿方なのでしょうか」

「む？」

話がまったく見えてこないような。

「ルーン、ルーンよ。どういうことだ。俺には話がさっぱり見えてこないのだが」

「……フン。なにが御存知ないにもかかわらず、だ。むしろ知ってたら助けてないだろ」

悲しいかな、俺のセリフは完全無視だった。

「暴漢だつて？ ずいぶんお堅い格好の暴漢がいたもんだ。あいつら、あんたの周りにわんさかいた連中だろ。襲われてたんじゃなくて、あんたがいなくなったもんだから捜して追っかけてきてただけじゃないのか」

「……」

ルクレツィアは何も言わず、ただ微かにまっげを震わせてルーンを見つめていた。

得も知れぬ疎外感。

「おい、ルーン。だから俺にもわかるように話を……」

「だ・か・ら！」

ようやくルーンがこっちを見た。ただし、とてつもなく苛ついた目で。

「お前の目はガラス玉かなんかかよ！ どこをどう見たらこいつが普通の町娘に見えるってんだ！」

「む？」

確かに、普通の町娘にしては少し奇妙な格好である。長めのコー

トを羽織っていたのでわからなかったが、その下はかなり高価そうな純白のドレス。頭には白金のティアラが輝いていて、その肌も髪も毎日相当丁寧に入手入れされた女性のものだ。
とすると

「あ、なるほど……そういうことか」

確かに、俺の目は節穴だったようだ。

ルーンは呆れた様子で片手を腰に当てて、

「ったく。すぐ気付けよな。だからさっきの連中は暴漢なんかじゃなく」

「うむ」

それはそうだろう。

「つまり連中はもつと大きな犯罪組織の構成員ということか」

「……は？」

「きっと彼女の父親は有名な大富豪かなにかなのだろう。その娘をさらって金やら不当な要求やらを突きつけるつもりだ、と。つまりお前はそう言いたいのだろうか？」

ちよつとした名探偵気分で自信満々にそう言うと、ルーンは何故か脱力した顔をした。

「御主人様」

ミュウが地上へ続く階段のそばで天井を見上げている。

「町の中が騒ぎになっているようです」

「何か聞こえるのか？」

地上の音は俺にはほんやりとしか聞こえないが、ミュウにはそれが聞こえているらしく、

「はい。なんでもお姫様が暴漢にさらわれたとか」

「……なんと！」

「馬鹿な！？ くっ！ この俺が助けに行かなかったがために、なんてことだ！」

「ああ！ もうッ……！」

ついにルーンがぶち切れた。

顔を真っ赤にして近づいてくると、軽くジャンプして俺の後頭部を掴む。

「うおっ!?! ル、ルーン。ちょっと落ち着け! 家庭内暴力反対」

「アホか、お前はあッ! よく見ろ、お前の目の前にいるのがそのお姫様だろうがあああッ!」

「へっ?」

僅か二十センチほどの距離に近付いたルクレツィアの顔をまじまじと見つめる。

「……」

なんだかふんわりとしたい匂いがする。

そしてしばらく。

「……ルーンよ」

彼女の顔と、記憶の中の馬車から手を振っていた少女の顔を重ね合わせてみた後、俺はようやく我に返ってルーンに言った。

「他人の空似というのは、あるものだな」

「ああ、そうだなヴェスタ」

返ってきたのは永久凍土のように冷たい言葉だった。

「もしそうなら、お前、国賊級の犯罪者にならずに済んでたな」

少し、整理してみようか。

目の前にいる少女、ルクレツィアは件のパレードで主役だったお姫様である。

何の因果か、そのお姫様は現在我々と一緒にいる。

地上では、姫が暴漢に拉致されたと大騒ぎになっている。

イコール。

「……終わった……」

巡り巡って結局のところ重罪人というわけか

「あの。ヴェスタ様、と、そう呼ばせていただいてもよろしいでしょうか?」

ハッと、ルクレツィア いや、ルクレツィア姫を見る。

そして俺は、超高速で土下座した。

「ほ、ほんの出来心だッ！」

「……は、い？」

きよとんと。

姫が俺を見下ろした。

「ゆ、誘拐などと、実は俺の本心ではなかった！ つい魔が差してやってしまっただけなのだ！ だからどうか情状酌量をッ！！ いや、俺のことはいい！ だがせめて、せめてこの子たちの命だけは助けてやってくれえええッ！！」

「あ、あの、ヴェスタ……様？」

「み、見るなッ！ そんな犯罪者を見るような目で見ないでくれええええッ！！ お、俺はただ、俺はただ　　！！」
ただ

「……はて？ 俺は何故、誘拐などという大それたことをしようとしてたのだろうか？」

「永遠に考えてる、バカ」

「それはともかく御主人様」

ミュウがそう言って階段から離れ、両手に大きめのバスケットを抱えてトコトコとやってくる。

「そろそろ昼食にしましょう」

「お前もマイペースだな、ホント。……ま、とにかく落ち着いて事情を聞く必要があるし、ちょうどいいか。お姫様、あんたもそこ座りなよ。　ほら、お前もいい加減立っての」

「いてっ」

ルーンの蹴りが尾てい骨に入った。

まったく。最近では以前にも増して扱いが酷くなってきた気がするぞ。

そんなこんなで。

「まあ、可愛らしい」

開いたバスケットの中身に、ルクレティアは目をまん丸にした。

ミュウが言った。

「今日はルーンさんに以前指摘された味付けを少し調整しました。それと御主人様の好物の甘藷が安く買えましたので、茹でてからすりつぶしたものを焼いてお菓子風に調理してみました」

なるほど。今日の昼食はなかなかバラエティーに富んで豪華だ。食費はいつもと同じだけしか渡していなかったはずだから、おそらく彼女なりに工夫したのだろう。

甘藷の料理を一口。

「うむ、美味い。また上達したな、ミュウ」

「……ありがとうございます、御主人様」

いつも無表情なミュウが少しはにかんだ顔をするのが、なんとも愛らしい。

そうそう。前回、爆発才子並のひどい扱いだった彼女の料理はアツという間に上達して、今では一流シェフ並の腕前となった。

結局のところ、彼女は正しく指導さえしてやれば何をやっても一流なのだ。

ただ、

「でも次こそは、口から火を噴いたり目から光線が出るような料理を作ってみせます」

奇妙な目標を掲げているのが少々気にはなるが。

「確かに短い間によくこれだけ上達したもんだよ。最初なんか、ホント ああ、思い出したくない」

と言いつつ思い出してしまったのか、胃の辺りを押さえて青ざめたルーン。

気持ちはわかる。

「つて、あなたは食わないのか、お姫様」

「いただいてもよろしいのですか？」

「庶民の料理が口に合うのならな」

と、素っ気ない口調のルーン。言葉に少し棘がある。やはり彼女にはあまり良い感情を抱いていないようだ。

が、おっとりとしたルクレツィアはそれにも気付いていないのか、無邪気な仕草で両手を合わせて、

「私、市井の方々の生活にとても懂れておりますの。ですからこのようなものはかえって好ましく思います」

と言うと、豪快に　とまではいかないが、見た目のイメージよりは遙かに遠慮なく、ミュウの料理に手を付け始めた。

「それで姫よ。改めて問いたいのだが」

バスケットの中身がだいたい片付いたところで、俺はルクレツィアに向かってそう切り出した。

「何故、あのような嘘をついてまで我々に救いを求めたのだ？　おそらく何か事情あったのことは思うが」

「……」

ルクレツィアは口元を上品に拭いながら、膝の上で両手を重ね、一つ、二つと深呼吸。ゆっくりと持ち上げた視線が少し悲しそうに俺の全身を捕らえた。

「嘘、ではありません。命を狙われていたのは本当のことなのです」「ふむ」

意外な言葉ではない。あのとときの必死の表情はやはり本当だったのだ。

ルーンは冷めた目で見ている。

ミュウはなにを考えているかよくわからないが、やはりルクレツィアを見ている。

ルクレツィアは続けた。

「私は十二人いるお姉さま方の中の一人に命を狙われているのです」「姉？　姉に命を狙われているというのか？」

どこかで聞いたような話。

そう。昨日の宿の女将の話だ。

しかし、まさか

「まさか。妹が姉に命を狙われるなどと、そのようなことが信じがたい。」

そんな俺の心情を読みとったかのように、ルクレツィアは悲痛な表情で首を横に振った。

「私もそのようなこと信じたくはありません。ですが、これまでの経緯を考えるとそうとしか考えられないのです」

「それはつまり」

女将の話を読み出して、

「あのヴィルヘルムという青年のことで、なのか？」

「……」

少し躊躇った後、ルクレツィアは無言で頷いた。

「しかしそのようなことで、まさか……なにかそう思う出来事でもあったのか？」

ルクレツィアは視線を伏せ、一呼吸置いてから話し始めた。

「二年ほど前、ここの別荘ではなく本邸での出来事です。姉の一人が二階のテラスから転落して大怪我をしました。その姉は時々屋敷を抜け出して外に遊びに行ってしまうような方だったので、本邸を抜け出すときにいつも使うテラスの手すりに細工がしてあったのです」

「む？」

脈絡のない話のように思えた。

が、

「姉上は当時、ヴィルヘルム様ととても親しくしておられました。

……どうやらそれを妬んだ別の姉が細工をしたようなのです。

そして私がヴィルヘルム様と婚約してから、今度はそれが私の身に起こるようにな……」

なんと。

「先ほどの爆発のように、ということか？」

「……」

少しの間をおいて、ルクレツィアはコクリと頷いた。

「しかし……なんだ。俺の聞いた話では、そのヴィルヘルムという青年は最初から一番下の姫　つまりあなた一筋であったと聞いた

が……」

ルクレツィアは悲しげに視線を横に流して、

「違うのです。本当は姉上が一番あの方と親しくされていて、ヴィルヘルム様も本当は　ですが、姉上はそのときの酷い傷跡が顔や身体に残ってしまったため、自ら身を引いてしまわれたのです」

「馬鹿な」

俺は少し憤って、

「女性の価値はそのようなもので決まるわけではない」

「あるいは」

ルクレツィアはようやく視線を上げ、少しだけ微笑んでみせた。

「ヴィルヘルム様もそうお思いだったかもしれません。でも姉上は　もともと親しかつたというだけで男女の感情など持っていないなかつたと、笑いながらそうおっしゃられるだけで　」

……なんとも。

それが強がりなのだとしたら、やりきれない話ではある。

「姉上がそのテラスから抜け出していたことを知っていた者はほんの数人しかおりませんでした。それ以外にも　とにかく身近にいる者の仕業でなければ起こり得ないような出来事がいくつもあったのです」

「なるほど。それで、その青年を慕う姉の誰かが、というわけなのだな？」

ある程度筋は通っているように感じる。実際、そう確信できるだけの出来事が起こっているのだろう。でなければ、この大人しそうな姫が今回のような大胆な行動をとるはずもない。

しかし、

「はっ」

ルーンは馬鹿馬鹿しいと言わんばかりに笑い飛ばした。

「そんなくだらないことで命狙おうなんざ、常人の考えることじゃねえよ。さすが、生きていくのに不自由のない方々は考え方がぶつとんでら」

ルクレツィアがルーンを見る。

「否定はいたしません。市井の方々が明日の食べ物にしているときに、私たちは社交界に着ていくドレスを何にするかで悩んでいるのです。それを疑問に思わない方々も確かにたくさんおられるのですから」

「……へえ」

ルーンは少し意外そうに口だけで笑って、

「自分はそうじゃない、とでも言いたいのか？」

「いいえ」

ルクレツィアは首を横に振った。

「何も行動に現せないのと同じ……です。私は末娘ですから……周りに何か口出しできるような 出したところで聞き入れてもらえるような立場にはないのです。ですから……反論する資格も、そのつもりもありません」

「ふーん。……つまりそのぶつ飛んだ考えの誰かさんは、何の口出しもできないような末の小娘に思い人を取られちまって、プライドとやらが許さない、ってわけか」

まだ少し含んだ口調だったが、ルーンなりに納得したようだ。

タイミングを見計らって俺は言った。

「それで、姫よ。これからどうするつもりなのだ。ここにいても何も解決せぬだろうし、ヴィルヘルムという青年も心配するであろう」

「私は」

少し、迷うような表情をした。
しかし。

この姫。一見すると儂く壊れてしまいそうに見えるが、実際はかなり気丈な少女なのかもしれない。

上げた視線は強い力に満ち溢れていた。

「姉の間違いを正したいのです。ここで私が身を引いたとしても次は別の誰かが このままでは、姉は本当に人を殺めてしまいます。そうなる前にどうにか止めたいのです」

そして少しだけ、視線を落とす。

「ですが、私の力だけでは……助けが必要なのです。それも屋敷の者ではなく、外の方のお力が。ヴェスタ様。偶然お助けいただいただけの貴方にこのようなお願いをするのは非常識であるとわかっております。でも」

再び、視線を上げた。

外見以上に気丈ではあるけれど。

それでも所詮はか弱い少女。

おそらくは半分以上が虚勢であろう。

しかしそれでも、ここまでの大胆な行動が取れるのはひとえに姉に罪を犯させたくないとの姉妹愛故か。自分は命を狙われているというのに

「どうかお力添えをお願いいたします。私に出来る限りの御礼はさせていただきます。ですから、どうか」

「……」

なんと。

なんと健気な。

これほどに健気な姫の願いを断れる男がこの世にいるのだろうか？ いるとすればそれはよほどの冷血漢に違いない。

もちろん俺は即答した。

「頭を上げるのだ、姫よ。……あなたの気持ちはよくわかった。礼などいらぬ。俺にできることであれば喜んで力を貸そうではないか」

「……」

ルーンがチラッとこっちを見た。が、さすがのルーンもこの姫を突き放すほどの冷血漢ではないらしく（もちろん俺はそう信じていたが）そのまま何も言わず視線を流した。

「ああ …… ありがとうございます、ヴェスタ様」

よほど安堵したのか、ルクレティアはホッと息を吐いた後、急に脱力した様子で椅子に腰を下ろした。

「ふ、礼などいらぬ。あなたのような方を助けることこそ、俺にと

って至上の喜び」

キラン、と、白い歯を見せる。

おお。

今の俺は最高に輝いている。

勢いに乗って俺は立ち上がった。

「ようし！ そうと決まれば善は急げだ。そろそろ日も傾いてきた頃だろう。ひとまず外の様子でも窺ってくるとしようか」

「お供します、御主人様」

「む、そうだな。よし、ついてこい、ミュウよ。 ルーン。留守

の間、姫のことはお前に任せた。一人の漢として、姫の護衛をしっかりと頼むぞ」

「くっ、いちいちムカツクな……けど、わかった。やるよ」

ルーンにしては素直な反応だった。

「よしよし。お前もようやく正義の味方としての自覚が出てきたか」

「……正義の味方じゃねえし」

憎まれ口のルーンに背を向けて、俺は気分良くバサツと漆黒のマントを翻した。

「では、出・撃！」

「アイ・アイ・サー」

ミュウは一体どこでこういう言葉を覚えてくるのだろうか。なんてことを頭の隅で考えながら。俺たちはルーンとルクレツィアの二人を地下室に残し、地上の偵察へと出掛けたのであった。

ちようどいい、と。

ルーンはヴェスタたちの出ていく音を聞きながら地下室の天井を見上げていた。

壁に背を預け、クルクル、クルクルとナイフを弄ぶ。

地下室はしばらくの間静寂が支配した。地下室といってももちろ

ん完全密閉されているわけではない。ひんやりとした空気がどこから流れ込んでくる。

中央にあるテーブルのそばにはルクレツィアが座っている。

沈黙。

沈黙。

沈黙　そして頃合いか、と、ルーンはピタッとナイフを弄ぶのをやめた。

「それで」

ルクレツィアがこちらを見たのが気配でわかる。

ルーンはわざと視線を上にとらしたまま、不機嫌でも上機嫌でもなく、ごく当たり前に質問した。

「さっきのあんたの話、私はどこまで信用すればいいんだ？」

「？」

ルクレツィアが不思議そうな顔をするのがわかった。

「どういう……意味ですか？」

予想通りの反応だ。

「ふん」

ルーンは口調を変えずに続けた。

「だったら言い方を変えよう。……どこまでが、本当の話だ？ それとも全部嘘っぱちなのか？」

「全て本当です」

心外とばかりにルクレツィアは即答した。

「嘘など申しません。ヴェスタ様のような心根の正しいお方に嘘など申し上げるはずがありません」

「……心根の正しいお方、ねえ。ま、あんたよりは正しいかもしくないけどさ」

「なにを」

「嘘をつくな」

ルーンは語尾を強め、ようやくルクレツィアの顔を見た。

ふんわりとしたウェーブの髪。

大きな黒翡翠の瞳。

純粹で可憐な姫。

だが ルーンの目には彼女の別の一面が見えている。

「あなたは自分が周りにどういう風に見えるかちゃんとわかってる。それを利用する術も熟知してる。馬鹿な大人やお人好しのアイツは騙せても、私はそう簡単に騙されないぜ」

「……何故、そのようなことをおっしゃるのですか？」

姫のつばらな黒い瞳が震えた。

それだけで、まるで自分が悪者であるかのような錯覚に襲われる。無意識にやっているのだとしたら、ただ純粹無垢なのだともいえるが、違う。

これは確信だった。

彼女は間違いなく意図している。そういう自分がどう見えるか熟知していて、その上で“演じて”いる。

ルーンは壁から離れ、ルクレツィアに歩み寄った。

「！」

手にしたナイフを見て、ルクレツィアが怯えたような顔をする。

だが、もちろん彼女を傷付ける意志などない。

ルーンはナイフを腰の鞘に収めて、

「少なくとも。あなたが正直に語ってないことが一つある」

「正直に語っていない、ですか？ ……それは？」

「あなたはきつと頭も切れる。わかってるんだろ」

「わかりません」

頑なにそう言い張るルクレツィアに、ルーンはフンと鼻を鳴らした。

「あの爆発のように、か？」

「……」

少しだけ。

表情が硬くなった。

ルーンはそんなルクレツィアを見据えたまま続けた。

「ヴェスタがそう聞いた瞬間、あんたは一瞬考えた。正直に答えるべきか、嘘をつくべきか……何故ならあの爆発は本当はあんたの命を狙ったものじゃない。あの爆発　あの騒ぎ自体、あんたが自分で起こしたものだから、だろ？」

「……」
「普通に考えて、今まさに命狙われてますって状況で自分から護衛どもを撒いてくるわけがない。……で、結局正直に答えなかったのは、その事実が自分の純粹で可憐なイメージを壊すと咄嗟に考えたからだ。つまりあんたは最初から、自分がヴェスタの目にどう映っているか計算しながら話を進めていたことになる」

ルクレツィアは下を向いたままだった。

予測も多分に含まれている。が、それほど事実とかけ離れてはいないはずだという自信がルーンにはあった。

「さて、どこまでが真実だ？」

とはいえ。そんなルーンも先ほど語った彼女の話が全て嘘だまでは思っていない。あんな騒ぎを起こしてまで逃れ、ヴェスタを頼ろうとしたのはやはりそれなりに切羽詰まった事情があるからだろうし、きつとそれは誰か　あるいはこの目の前にいるルクレツィア自身の命にかかわるものなのだろうとも思う。

だからヴェスタの前では敢えて口を挟まなかった。

「本当のことを隠したまま力を借りようなんて虫が良すぎるよな。

私はヴェスタのヤツと違ってそこまでお人好しじゃないんだ。……

さあ、答えてもらうぜ。あんたの本当の目的を」

「……」

やはりしばらく。ルクレツィアは黙っていた。

だが、ルーンは慌てない。

やがて

「　申し訳ありません」

ポツリ、と。

ルクレツィアは素直に自らの非を認めた。

往生際悪く否定するわけでも、開き直るわけでもなく。本当に申し訳なさそうにそう言って、ゆっくりと視線を上げた。変わらない。

やはり彼女は健気で可憐な姫だった。

「しかし勢いで思わず出てきてしまったが、大丈夫であろうか？」
「なにがですか？」
「いや」

俺はゴソゴソと、家と家の間の狭い隙間から路地の様子を窺いながら背中のみユウに言った。

「ルーンもあれで思春期の少年だ。あの可憐で美しい姫と二人つきりにしてしまつて良かったのだろうか、少しな」

まあ、不憫な境遇ゆえひねたところはあるものの、根本的なところは真人間であるルーンのことだ、間違いないと思うのだが、しかし。あの年頃の情熱と言おうか熱情と言おうか、まあそんな感じのアレはなかなかコントロールし難いものでもあつて

しかし。

「はあ」

そんな俺の心配にミュウはなんとも奇妙な言葉を返してきた。

「御主人様にはルーンさんという名前のお知り合いがたくさんいらつしゃるのですね」

「む？ どういう意味だ？」

「あ。御主人様。あれをごらんください」

「ん？」

見ると、ちょうど十二、三歳 ちょうどルーンと同じ年ぐらいの少年が歩いていて。身なりを見る限り、それなりに裕福な家の子供のようだ。

「……つたく、あのババア。なんでもかんでも口出ししやがって。自分の考え押しつけようとするんじゃないよ」

何やら不満そうにしている。

「他人の真似事なんてうんざりだっつーの。俺は俺、他の誰でもないんだ。見てろ、いつかきつと他の誰にもできないような何かを成し遂げてやる」

ブツブツ呟きながら、少年は俺たちの近くを通り過ぎていった。

ミュウが言った。

「御主人様。今のが“あの年頃のそんな感じのアレ”ですか」

「……」

違うと思うが、完全に違つとも言い切れない。

まあいい。ルーンのことだ、きつと大丈夫だろう。

「ところでミュウ」

「はい」

「ここはどの辺りだ」

「……」

ミュウは少し辺りを見回した。

日は完全に沈みかけていた。

「人生のハーフタイム辺りでしょうか」

いや、そういうことではなくて。

というか、俺はまだそんなに行つてない。せいぜい前半の二十分ぐらいだ。

「使命感に燃えすぎて道を忘れてしまったようだ。街の様子もだいたい掴めたしそろそろ戻ろうかと、な」

「そういうことですか」

「普通はそういうことだと思うが……」

もっとも道を忘れてしまった俺が偉そうに言える立場でもない。幸い、ミュウはきちんと道を覚えていたようで、彼女に案内されるまま暗くなつた街の中を進んでいく。

遠くには昏間の喧噪がまだ残つていて、ルクレツィアが戻るまで騒ぎは収まりそうもない。

「ところで御主人様。先ほどのお言葉はどのような意味だったので

すか？」

「む？ ああ、ルーンとルクレツィアのことか。 まあ、年頃の男女を二人きりにすると色々と良くないことがあるのだ。調味料を取ろうとして手が触れ合ってしまったり、偶然風呂場で鉢合わせてしまったりとな」

「はあ」

わからんようだ。

うむ、俺自身も何を言っているのかよくわからん。

「ですが、私と御主人様も二人きりです」

「む？ いやまあ、それはそうだが」

しかし年頃というにはミュウは少し幼すぎる。まあ人間換算でいくつぐらいの年齢に相当するのかわからんが。

「要するに俺はそういう方向では正常な人間だということだな、うむ」

「？」

不思議そうな仕草があまりに可愛らしくてちょっとだけ目覚めそうになってしまったことは内緒だ。

「しかし、それよりも気になるのは ルーンのヤツが、ルクレツィアにあまり良い感情を持ってないらしいことだ」

ミュウが俺を見上げた。

「いや。不憫な境遇で育った故、そうたやすく他人を信用できないというのかわからんでもない。……しかしだ。あんなにも健気で、それこそ 天地がひっくり返りでもしない限り嘘などつきそうにない、あの姫の言葉さえ信用できないとは、あまりにも悲しいではないか」

「はあ」

そう言いながらミュウが地面を夜空を見比べる。

「でもひっくり返ってませんね」

「む？ まあ、そのぐらいあり得ないという例え話だからな」

「はあ。……？」

そのときミュウが何故よくわからないような顔をしたのか、そのときの俺にはもちろんわからなかったのだが

「申し訳ありません、ルーンさん。私、あなたのごことは頭の軽いお猿さんか何かだと思っていたのです。本当に申し訳ありませんでした」

「……………」

一瞬。

さすがに呆気にとられた。いや、あるいはルーン自身も少なからず騙されていたのかもしれない。

その儂げな容姿に。

オルゴールのような繊細な音色の声に。

ルクレツィアは可憐な姫のまま、今にも泣き出してしまいそうな顔で言葉を続けた。

「学などまるでなさそうな貴方にしてはとても筋の通った推測でした。ですが、どうか勘違いなさらないでください。別に悪意があったわけではないのです。ただ私は、私にとって不利になることを口にしなかつただけなのです。ですからどうか、どうかお許しください」

儂く可憐に微笑むその姿も、その口調も、先ほどまでと何一つ変わらない。

だが、

「……………てめえ」

どうやら彼女の本性はルーンの推測のさらに上をいていたようだ。

思わず口調を荒らげる。

「そついうのを悪意ってんだろーが！」

ビクツと怯えた“フリ”をして、ルクレツィアは悲しそうな顔を

した。

「ルーンさん……どうか落ち着いてください」

と、正面の椅子を指し示し、

「少し落ち着いてお話をいたしましょう。……それとそういう汚い言葉はあまりお使いにならない方がよろしいかと思えます。ますますヴェスタ様に性別を勘違いされてしまいますから……」

「くっ……！」

ルーンは即座に言い返そうとしたが、地上の方から物音が聞こえて口を噤んだ。

「……」

ヴェスタやミュウが戻ってきたにしては早すぎる。しばらく様子を窺っていたが、異変はない。

どうやら近くを通った人間が何か重い物を落とした音らしかった。ひとまず安堵する。

見ると、ルクレツィアもその音が気になっていたらしく天井を見上げていた。

少し冷静になる。

「……いいのかよ、あんた。私がヴェスタのヤツにバラしたらあなたの思惑は台無しになるんじゃないのか？」

「……」

ス、と、ルクレツィアは上品な仕草で視線を天井からルーンの前へ戻した。

「それも誤解なのです。私は最初から隠すつもりなどありませんでした。ただ、あのヴェスタ様というお方は、余計なことさえ言わなければ無償で働いていただけそうでしたので」

「不利になることを口にしなかっただけ、か？」

ルクレツィアは少し微笑んだ。

「はい、そのとおりです。あなたが見掛けによらず話のわかるお方でとても助かります」

「ちっ……」

なんといいけ好かない女だろうか、と　ルーンはおそらく同い年ぐらいの姫を睨み付けた。

その視線にさらされた可憐な姫は、ホッと物憂げなため息を吐いて、

「ですが……残念なことに、私がおなた方のお力を必要としているのは本当なのです。ですから　ルーンさん。あなたに対しては、純粹にビジネスとしてお話しすることにいたしましたしょう」

「ビジネス？」

「はい。ビジネス、です」

そう言って、姫はニツコリとルーンを見つめた。

「末とはいえ領主の娘です。きつとルーンさんにご満足いただけるような謝礼ができると思いますわ」

「……」

気に入らない、と、そう思っていないながら。ルーンは思わず動きを止め、マジマジとルクレティアを見つめてしまう。

頭を過ぎったのは残り少なくなった路銀の額と、そういう方面ではまったく頼りになりそうにない黒衣の男の顔。

ほんの数秒の葛藤の末。

ルーンは彼女の正面に腰を下ろして不機嫌そうに言った。

「……とりあえず。話は聞こうじゃないか」

その3

行き当たりバッタリだ。

風来坊に安定した収入がないのは当たり前。だからこそ、路銀がなくなる前に何らかの方策を早め早めに練っておくのが普通である。大きい街なら日雇いの働き口はそれなりに見つかるが、それも確実な話じゃない。2、3日程度探し回って全く見つからないことだってないわけじゃない。

にもかかわらず、だ。

あの男は真正正銘“無くなる”まで本当に何も考えていないのだ。計画性がないというか脳天気というか……そのくせ、食費を稼ぐのは大黒柱である自分の役目だから心配するとか偉そうにのたまうのである。

不安だ。

とてつもなく、不安な毎日を送っている。

だから 少なくとも数ヶ月分の路銀が保証されるであろう今回の話……思わず身を乗り出してしまったのは仕方がない、と言いつてはなくそう思う。

そう思う……のだが。

実際のところ、やはり不安だ。

あの女が信用できないということもあるけれど、それ以上に。

こんなもので上手くいくと本気で思っているあの馬鹿男の脳天気さが。

（潜入捜査の大量殺戮者）
ジェノサイダー

「ルクレツィア」

「御心配をお掛けしました、姉上」

なるほど、この女性が　と、俺はすぐにその人物の正体を理解した。

玄関ホールで真つ先にルクレツィアを出迎えたのは、なんともきらびやかな雰囲気的女性である。装飾品のたくさん付いた高価そうな衣装に、顔が隠れてしまいそうなほどボリュームのある巻き髪。

「……よく無事で」

何かを噛みつぶしたような複雑な表情。

この女性については事前にルクレツィアから聞いている。12人の姉のうちの1人で、名はカディーナというらしい。幼顔のルクレツィアと並んでいるのを見るとかなり年長のように思えてしまうが、13人姉妹の中では下から4番目でまだ10代らしい。

そういう目で見るとなるほど、その有閑マダムのような装いとは裏腹に顔の化粧は薄く、肌には若々しい健康的な輝きがある。衣服と髪型を変えればまたガラッと違う印象になるのではないか。

そしてもう1人。

「ルクレツィア！」

ホールに姿を現し、ルクレツィアの姿を目に止めるなり今にも泣き出しそうな顔になって駆け寄った女性。

「ああ、ルクレツィア。無事なの？　怪我は？　どこか痛めてしまったところはないの？」

と、大事そうに彼女の手を取る。

ルクレツィアは心の底から申し訳なさそうな顔をして女性に答えた。

「フローラお姉様にも御心配と御迷惑をおかけしてしまいましたよ
うで、申し訳御座いません」

「迷惑だなんて……あなたが無事だったならそれで」

そこで言葉を詰まらせ、ようやく安堵の表情を見せる。

その女性についても事前に聞いていた。カディーナとは対照的に清楚な白をベースにしたシンプルな服装とストレートロングの髪。いかにも穏和そうなこの女性はフローラといって、ルクレツィアの1つ上、つまり一番歳の近い姉らしい。

手を取り合うフローラとルクレツィア。そしてその2人を少し離れたところから冷やかな視線で見つめるカディーナ。

「うむ。なんとも華やかな光景ではないか」

可憐なルクレツィアの美しさについては以前に何度も触れたが、この2人の姉もなかなかどうしてかなりの美女である。気の強そうなカディーナ、穏和で優しそうなフローラ、可憐なルクレツィアと、姉妹にしてはバラバラな個性ではあるが、それぞれに視線を奪うだけの魅力を持っている。

美人姉妹とはまさにこういうことを言うのだろう。

と、そんな俺の呟きを聞いたルーンが面白くなさそうに言った。

「金持ちには見てくれのいい女の遺伝子が集まるっただけだろ。珍しくもない」

「む」

まあ確率的にはそういう考え方もできるのかもしれない。

「だが、それでもいいであろう。別に彼女たちの美しさに罪があるわけでもないのだから。なあ、ミュウよ」

「御主人様のおっしゃるとおりです」

ミュウはゆっくりと俺を見上げて頷いた。

「ああやって少し極端にでも特徴付けしないと書き分けが大変なのです。ルクレツィアさんとフローラさんは微妙にキャラがかぶりますけど、ニーズが多様化、細分化されている昨今では仕方ありません」

「? なにを言っているのだ、お前は?」

また何か変な本でも読んだのだろうか。

ひとまず放っておこう。

「それで？　今までどこで何をしていたの、ルクレツィア」

視線を戻すと、カディーナが見た目から推測されるとおりの厳しい声でルクレツィアにそう問いかけたところだった。彼女と手を取り合って無事を喜んでいたフローラが雰囲気を感じて一歩離れ、代わりにカディーナが一歩だけ歩み寄る。

「皆、お前が急に消えたと聞いて探し回っていたのですよ。ヴィルヘルム様も大層御心配なされて　ルクレツィア。皆に心配をかけて、お前は今まで一体どこで何をしていたの？」

「それは　」

ルクレツィアが少し視線を落としたところへ、フローラが遠慮がちに口を挟む。

「カディーナお姉様。戻ってきたばかりなのに、いきなり　」

「フローラ。お前は黙っていなさい」

「ですが　」

「……お姉様」

ルクレツィアがフローラを制する。気の強そうなカディーナに比べ、儂げな彼女の姿は一見頼りなさげに見えてしまうが、実際にははつきりとした口調で姉に向き合った。

「皆様に御迷惑をおかけしてしまったことはとても申し訳なく思っております。あの爆発で気が動転しわけもわからずに逃げ出してしまい……道がわからなくなって途方に暮れていたところを　」

ルクレツィアが振り返って俺と真っ直ぐに視線が重なった。

「こちらの司祭様に助けていただいたのです」

「……」

カディーナの鋭い視線と、フローラの戸惑ったような視線がこちらを向いた。

ようやく俺の出番のようだ。

コホン、と、軽く咳払いをして一歩前が出る。

「お初にお目にかかります、お嬢様方。私は旅の司祭でヴェスタ＝ランバートと申す者。こちらは旅の供で修道士のルーンと修道女の

ミュウでございます」

ペコ、と修道女姿のミュウが礼をする。修道士姿のルーンは何故か居心地が悪そうに引きつった笑顔だった。

紹介を終えて正面に向き直ると、

「……」

「……」

2人の女性の視線が不審そうに俺とルクレツィアの間を行き交う。……まあ、無理もなからう。俺のように若くて美形な司祭を見る機会などそうそうないであろうからな。

俺は少し声を張り上げて続けた。

「ミス・ルクレツィアより事情は伺いました。彼女の婚礼の儀に関して何やら不穏な気配があるとか。これも神のお導きかと思ひ、是非協力させていただこうかと参上した次第であります。なに、御心配なく。私は各地を旅しているだけあってこういう事態には慣れておりますゆえ」

なんともいえない顔の姉二人に対し、ルクレツィアはオルゴールのような細く可憐な声で言った。

「あのような騒ぎの後ですが、せっかく司祭様がお助け下さると仰せですので、明後日の吉日、正午に再度婚礼の儀を行いたいと思っております。ヴィルヘルム様には私の方からご説明いたしますわ」

俺たちが案内されたのは2階の客間だった。

「ふう、どうやら上手くいったようだ」

俺の後にミュウが続き、最後にルーンが入ってパタンとドアを閉めた。

「上手くいった、ね……」

「む？」

ルーンが何か言いたげだ。

「何か気になることでもあったのか、ルーンよ？」

「気になるもなにも」

手を大きく広げて、

「あんな説明で何も疑問に思わないのはよほどのアホかお前ぐらいのもんだよ」

「なにっ。まさか俺の演技が完璧ではなかったとでも？」

「設定そのものが無茶だつて言ってるの。……あの姫さんは承知の上だろうけどさ、きつと」

手を振りながらルーンが俺の視界を横切っていく。

「何にせよ屋敷に入ることには成功したわけだ。これからどうする？」

「……ふむ」

その物言いにはどうも納得できないものがあつたが、追求しても仕方あるまい。それよりもルーンの言うようにこれからどうするかだ。

俺はクッションの効いたソファに腰を下ろして腕を組んだ。

最終的な目的は言うまでもなく、ルクレツィアの命を狙う犯人を捕まえることだ。その犯人は彼女の12人の姉のうちの誰かであり、もちろん今日会ったあの2人も例外ではないということだ。

「相手の動機はつきりしている。だったらそれを逆手にとってあぶり出す、なんて方法はどうだろうか」

ルーンはひどく意外そうな顔をした。

「お前にしちやまともそんな切り出しじゃないか。それで、具体的にはどうするつもりだ？」

「そうだな、まずは……」

まず、婚礼の儀が済めばルクレツィアは夫であるヴィルヘルム公の屋敷に移り住むことになる。そうなればおいそれと手を出せなくなるだろうから、彼女を狙うチャンスがあるとすれば、婚礼の前か直後　ヴィルヘルム公の屋敷に移る前ということになる。しかしながら、儀式後ならほとんどヴィルヘルム公と行動を共にすることになるし、犯人の動機を考えればヴィルヘルム公を巻き添えにする

ことは望まないだろうから、やはり儀式前に狙ってくる可能性が一番高いと考えられる。

つまり今日と明日、あるいは婚礼の儀の当日である明後日の午前中。この2日半ほどの間、俺たちは彼女の身辺警護をし、犯人の正体を暴かなければならない、ということになる。

「よし。まずは情報を集めることだろうな。ある程度容疑者を絞るところから始めなくては」

奇をてらっても仕方あるまい。まずはセオリー通りにいくべきだろう。

「情報収集といえは聞き込みが基本だ。屋敷で聞き込みといえは使用人しかなかるう。よし。では早速皆で　！」

「ちょ……ちょっと待てよ、ヴェスタ」

意気込んで立ち上がるうとした俺の服の裾をルーンがはしつと掴む。

「む？ どうした？」

「いいから待て。落ち着け。まず座れ。お前、ホントにちゃんと考えてるか？」

やはり呆れ顔をされてしまった。

「失礼な。俺はいつも熟慮に熟慮を重ねてだな」

「じゃあ聞くが、お前、誰に何を聞くつもりだ？」

「誰につて、もちろん執事やメイドではないのか？」

「執事やメイドに何を聞くんだ？ 誰があの色男に横恋慕しているか聞くのか？ 嫉妬してあの姫さんの命を狙いそうな人は誰ですかって尋ねるのか？」

「む……」

言われてみれば確かに難しい。

「しかしルーンよ。それでは何も進展しないではないか」

「だから落ち着けて言っただよ。情報を集めるのは悪くない。

けど、こっちは一応旅の司祭とそのお供ってことになってんだから、すでにかなり疑われてると思うけどさ　　なんて呟きながらルーン

ンは続けた。

「これ以上ボロが出ないように色々練つてから動き出さないと。適当に動いて相手にこっちの正体が知られでもしたら本末転倒だろ」

「ふむ。なるほどな」

確かにルーンの言うことには一理ある。

俺は感心して、

「ルーンよ。お前はなかなか潜入捜査の素質があるな」

「ああ、お前よりはあると思うよ」

真顔で即答されてしまった。

「ともかく。お前らは少しここで待機していてくれ。情報は私が集めてくるからさ」

「む？ 何かいい方法があるのか？ そうなら俺も」

「とりあえず何もしないでくれ。それが一番助かる」

「む」

言い方は気になるが、不思議とルーンがやる気になってくれるようだからとりあえずよしとするか。

「わかった。真打ちは最後に登場するものだからな」

「ああ。じつとしてくれるなら真打ちでも秘密兵器でも何でもいいよ。じゃ」

パタン、と。適当に受け流すような感じでルーンは出ていってしまった。

「ううむ。……ミュウよ。なんだか俺たち邪魔者扱いされてないか？」

「そうですね？」

俺たちのやり取りの間、ずっとマイペースに紅茶の準備をしていたミュウが顔を上げてこっちを見る。

「きつとルーンさんなりに最善を追求した結果だと思います」

「なるほど。そういうことか」

それならば仕方あるまい。

「……ん？ とすると、やはり俺は邪魔者だということに」

「御主人様。紅茶が入りました」

「ああ、すまぬ」

「お菓子も御用意しました」

「む……」

畳みかけるようにミュウが数種類の焼き菓子を目の前に並べる。

……なにか誤魔化されているような気がしないでもないが、深くは考えまい。そう。人生は深く考えたら負けなのだ。

というわけで早速、菓子をいただくことにしよう。

さくつ。

気持ちのいい感触とともに甘い香りが喉の奥から鼻へと抜けていく。

「うむ。美味しい」

お世辞抜きに上等な菓子である。

「上手くなったものだ。少し前までの料理が嘘のようだぞ、ミュウ」
そう言うと、

「御主人様、それはもう……」

ミュウが珍しく恥ずかしそうな表情を見せた。彼女は彼女なりにあの頃のアレが失敗作だったことを理解しているようだ。

に、しても

(随分と愛らしい表情をするようになったものだ)

ミュウは日を追うごとに人間らしい感情を見せるようになってきた。きつと人間の読む本を色々と読ませてきた効果だろう。時

折不可解な言動をすることも増えた気はするが、それはともかく。

気も利くし、料理上手だし、このままあと3、4年もすればどこに嫁に出しても恥ずかしくない娘になる、かもしれない。

父親(代わり)としてはそれが嬉しくもあり少々寂しくもある。

「あとはそれが俺以外の人間にも向いてくれるようになればいいのだが……」

「？」

「いや、なんでもない。なんでもないのだ」

と。

コンコン、とノックの音がした。ルーンにしては随分と早い。あるいはルクレツィアだろうか。念のため咳払いし、声を整えてから返答した。

「どなたですか？」

「司祭様。カディーナです」

「え？」

カディーナ……上の姉だ。俺は少々面食らいながらも、

「ミス・カディーナでしたか。どうぞ」

「失礼致します」

立ち上がって出迎える。ドアの向こうにいたカディーナは相変わらず気の強そうな目を真っ直ぐにこっちに向けながら上品な仕草で入ってきた。別にこちらを威嚇しようとしているわけでもないのだから、その毅然とした姿からは自然と威圧感のようなものが滲み出ている。

カディーナは部屋の中を一瞬で見回して、

「あら、修道士様……ルーンさんとおっしゃいましたか。どちらかへお出になられたのですか？」

「え。ああ、彼だったらご不浄に……」

言ってから、しまった、と思った。いない理由がトイレでは、長く戻ってこないとさすがに不審に思われてしまう。

「そ、それとついでに少々屋敷の中を見学したいと申しております。いや、まだ若いもので屋敷が珍しいようです」

慌てて取り繕ったが、カディーナは特に疑った様子もなく、

「そうですか」

と、言っただけだった。

俺はホッと胸をなで下ろして、

「ええっと……それで、ミス・カディーナ。私に何か御用でしょうか」

「ええ。少々お伺いしたいことがございまして」

ソファに腰を下ろして向き合ったカディーナは見た目の印象どおり無駄なくテキパキとした口調で話し始めた。

「単刀直入にお聞きします。ルクレツィアの先ほどのお話、全て本当のことでしょうか」

「……え」

本当に単刀直入だ。

「な、なななにをおっしゃるのです。聖職者である私が嘘をつくはずがないではありませんか」

ドキドキしながらどうにかそう答えたが、幸いカディーナも何か確信があつて言ったわけではないらしい。少し思案深げな顔をしながら、

「司祭様が嘘をついているということだけではなく、錯誤なさっているという可能性……つまり、ルクレツィアが司祭様を謀っているという可能性も含めてお尋ねしております」

「謀る？ ルクレツィア嬢が我々を、ですか？」

俺は驚いた顔をして、

「……彼女に限ってそのようなことは」

本心からそう言った。それはそうだ。俺たちが嘘をついていることは確かだが、こうして司祭に扮する作戦は俺が考えたことだ。あの可憐で純粋な姫のことである。他人を騙す方法なんて思いつきもしないだろう。

するとカディーナはどこか非難するような目をした。

「司祭様の目にはそのように映っておられますか」

「は？」

見ると、カディーナは初めて視線を斜めにそらした。

「あの子は少し、見た目とは違う面もあるものですから……」

「はあ……」

俺には彼女の言葉の意味がまったく理解できなかつた。疑う余地のない、見たままの可憐な姫だと思っただが

「あら、ルーンさん。どうなさったのです？ 私に何か御用でも？」
そよ風のような可憐な声が妙に気に触るのは、実態がその印象とかけ離れていることを知っているからだろうか。

ルクレツィアは身に纏うドレスとまったく同じ、白を基調とした部屋の奥でやはり白い木製の椅子に腰掛けていた。窓から流れ込むそよ風にカーテンがそよいでいる。

なるほど、何の汚れも知らない純真無垢な子供が見ればそれは確かに可憐で儂い美しい姫の姿そのものだろう。しかし残念ながらルーンは見た目をそのまま信じ込めるほど世間知らずでもなかった。

「用もなしに来るかよ」

やはり彼女は自分と相性の悪い種類の人間のようにだ　と、そこまで考えてルーンは少しだけ可笑しくなった。

本来ならば、隣をすれ違うこともないような相手である。相性がどうか考えること自体がナンセンスだ。

ルクレツィアは手にしていた本をそつとテーブルに置いて音もなく立ち上がった。

「どうぞお掛けになってください。遠慮などなさらずに。あなた方は私の命の恩人ですもの」

「馬鹿丁寧な物言いはやめろよ、気持ち悪い。私相手に猫かぶる必要ないだろ」

ルクレツィアはクスツと笑う。

「疑り深い女性は殿方に敬遠されましてよ。……いえ申し訳ありません。今のルーンさんは修道士様、男性のフリをなさっているのですね」

「……ふん」

扮装するときには有無を言わずこの格好にさせられてしまっただけだ。もちろんヴェスタに悪気がないのはわかっている。

「ヴェスタ様が常識外れにニブい方であるのは承知しております。」

ですが私はどちらかというところ、ルーンさんがどうして間違いを正そうとしないのか、ということの方に興味がありますわ」

「ふん、別に理由なんかないよ。説明するのが面倒くさいだけだ」
言いながらも憚然とした表情を隠せないルーンに、ルクレツィアは楽しそうに目を細めながら居住まいを正した。

「ではそちらについては事件が解決した後にお聞きするとして、今はルーンさんのお話を伺うことにいたしましょうか」

後の機会なんてあるもんか、と、ルーンは心の中で毒づいて、

「私はあんたみたいに回りくどい言い方は嫌いだから単刀直入に聞く」

そう言いながら上品そうな匂いのする椅子にわざと粗雑に腰を下ろす。

「あんたを狙ってるのはどっちだ？ 趣味の悪いオバさんみたいな格好したヤツか？ それとも大人しそうに見えるお嬢さんの方か？」

「あら。以前にも申し上げましたとおり私には12人もの姉がおります。犯人がここに来ていたとは限りませんわ」

「んなわけないだろ。あんたはここで何か起きるとわかっていたからあんな騒ぎを起こして私らを引き込んだんだ。確信がなきゃあんな無茶な芝居を打ったりするもんか。つまり、犯人はこの街にきているあの2人のどちらかだ。少なくともあんたはそう思っている。違うか？」

「得体の知れない……ですか」

ルクレツィアはくすぐるような声で笑った。

「何がおかしいんだ？」

「いいえ。特に可笑しくありませんわ」

笑ったままそう言った。

「……」

いちいち癪に障る。

「ですが、ルーンさんのおっしゃるとおりです。ただ、ヴェスタ様は少々間の抜け……いえ、正直な御方のようでしたので、話すタイ

ミングを計った方が良いのではないかと」

「……ああ」

それについてはルーンも大いに納得した。

あのヴェスタのことである。最初から犯人の名前を聞かされていれば、出会い頭にあっさりボロを出してしまう可能性は否定できない。

「で、どっちなんだ？　ヴィルヘルムとかいうヤツに横恋慕してあんたを狙っているのは」

「それもルーンさんのお考えどおりです。つまり」

「どちらかつてところまで、と？」

「はい」

「……」

本当だろうか。完全に信用はできないが、少なくともここに至って真相を隠す理由はルーンには思い浮かばなかった。

「いずれにしても」

ここでルクレツィアが初めて笑顔を崩した。僅かに斜め下に動いた視線は演技ではなく本当に憂いの色を秘めているように見えた。

こんな性格の彼女であつても、実の姉に狙われていることには本当に心を痛めているのだろうか。

彼女を信用していないルーンですら、ついそう思ってしまう。……

彼女の容姿にはそんな類の魔力が秘められているのかもしれない。いずれにしても、明後日までに動きがあるはずですわ。それまでお姉様方に悟られないようお願いいたします」

「ああ。……とりあえずヴェスタのヤツはあの2人に接触させない方がいいな。それと　なあ」

と、ルーンは少し声を低くして言った。

「約束は大丈夫なんだろうな？」

「約束？　ああ、報酬の件ですか」

ルクレツィアの表情に笑みが戻った。

「それならば御心配に及びません。約束どおり、私の全財産をお譲

りいたしますわ」

「……」

ルーンが今回の話に乗った理由。それはお人好しのヴェスタの主張に流されたから、というわけではない。もつと現実的かつ切迫した止むに止まれぬ事情ゆえ、なのである。

「もつとも、先日も申し上げましたとおり、末の娘ですからそれほどの財産は持つておりませんけれども……身の回りの貴金属などを全て換金したとして、ルーンさんたち3人が数年遊んで暮らせる程度でしょうか」

「充分だよ。けど」

数日後の食事すら保証されていないルーンたちにとっては充分すぎる。

「どうも胡散臭いな。だいたい全財産譲っちゃったらお前はどうするんだ？」

ルクレツィアは可笑しそうに目を細めて笑った。

「本当に疑り深いのですね、ルーンさんは。今回の件が終われば私はヴィルヘルムの家嫁ぐのですから余計な荷物が処分できてかえって好都合ですわ。ヴィルヘルム様とて、私のちっぽけな財産など最初からアテにしております」

「なるほどな」

言ってることは真実なのかもしれないが、やはり疑心は拭えない。「まあいいや、けど、あんまり私を甘く見ないでくれよ」

ルーンは声にドスをきかせてソファから立ち上がった。彼女にそんなものが効くとは思っていなかったが、あまり与し易い相手だと思われするのは都合が悪い。

案の定、ルクレツィアは相変わらずの楽しそうな笑みを浮かべたままだった。

ルーンはまた苛々が募るのを感じながら部屋を出た。

さて。

長い廊下には誰もいない。ルーンは数秒間そこで立ち止まり、こ

れからの行動に思いを馳せた。

ひとまずルクレツィアを狙う人物が、彼女を出迎えた2人の姉のどちらかだということまではわかった。とすれば

(何か探りを入れてくるかもしれないな……)

何しろ彼らはどこから降って沸いたどこからどう見ても怪しげな3人組である。相手が仮に箱入りの世間知らずなお嬢様だったとしても、彼らの芝居を完璧に信じた、なんて都合のいいことはないだろう。

(まずはヴェスタのヤツに余計なことを喋らないよう釘を刺しておくか)

そう決めると、ヴェスタたちが待つ客間に向かって歩き出す。

頼りにならない仲間に胡散臭い依頼主。どう楽観的に考えても上手いくとは思えないが、ダメで元々と考えればいいだろう、と、ルーンは半ば開き直っていた。何しろ、上手くいけば数年分の路銀である。身に危険が及ぶ可能性もないではないが、この別荘には物騒な私兵もそれほど大勢いるわけではない。自分の身軽さには自信があったし、ヴェスタやミュウの力もこういふときばかりは役に立つだろう。

と。

そんなことを考えながら歩いていて、ふと顔を上げた。

「……？」

1つの部屋の扉が開いて、そこから黒髪の女性が姿を見せる。ルクレツィアの姉　大人しそうな下の姉、フローラだ。

「ち……」

咄嗟にそばにあった騎士の彫像のかけに身を隠す。

フローラはその外見のイメージそのままのゆっくりとした動作で部屋の中に一礼し、隠れているルーン存在には気付かず廊下の向こう側へと立ち去っていった。

ホッと胸をなで下ろす。

別に隠れる必要はなかったのかもしれない。が、彼女は容疑者の

1人である。ルクレツィアの部屋の方から戻ってきたのを見て、何かを感じ取るかもしれない。

(……ま、温室育ちのお嬢さんにそこまで考える力があるかどうかはわからないが……)

彫像の影から出て一步。

ピタ、と立ち止まる。

まさか。

フローラが出てきた部屋を再確認してそう思った。

廊下に並ぶ扉の数を数える。

1、2、3……

「……まさか!？」

ルーンはハツとして駆け出した。そしてその勢いのまま、フローラが出てきた部屋の扉を勢いよく開ける

バタン!

「おい、ヴェスタ!」

「ん? おお」

ルーンが戻ってきた。

「随分と長かったではないか。何か悪い物でも食べて腹を壊したか?」

「……はあ?」

おっと。トイレにこもっているというのは便利な嘘の話だ。

「……って、そんなことはどうでもいい! おまえ、今、部屋を出ていったのは……」

「む?」

ルーンの視線が俺の前にあるテーブルに注がれている。そこにあるいは客人がいたこと示す、主を失ったティーカップがあった。

「ああ、先ほどフローラ嬢が訪ねてきてな。楽しく世間話をさせてもらったところだ。しかしさすが良家の姫というのは気品があるだけでなく博識なものだ。人生経験が少ないと謙遜なさっていたがな

かなかどうして聡明で知識の豊富な」

「何を喋った！」

「お、おい、ルーン」

今にも掴みかからんばかりの勢いのルーンに俺は少したじろいだ。ティーポットを片づけようとしていたミュウが不思議そうにこちらを見る。

「ど、どうした、何か悪いものでも食べたのか。も、もしかや1ヶ月前、空腹に耐えきれなくて密かに鍋に投入したあのキノコか！？ あのキノコの毒が今になって回ったのか！？」

「んなわけあるか。って、キノコ！？ 初耳だぞ、そんなの！」

「い、いや、心配ないぞ。色鮮やかでいかにも美味そうなキノコ」

「アホか、お前はッ！！ いや……いや、待て、とりあえずそんなことは後回しだ」

ルーンは咳払いをして気持ちを落ち着けるような仕草をした。

「どうやら最近、彼の神経は少しずつ図太くなってきているようだ。」

「……で？ お前、あのお嬢さんに余計なこと言わなかっただろうな？」

「何を心配しているのかわからんが、ただの世間話だぞ。ま、あの大人しそうな姫が犯人などということはまずないだろうが、一応潜入している身だからな」

するとルーンはようやく少し安心したような顔を見せた。

「根拠もなく信用すんなよ……ま、それでも潜入してる自覚があるように安心したよ」

「それで？ と、ソファに腰を下ろす。」

「世間話って、何の話をしていたんだ？」

「ルーンさん。ホットミルクです。どうぞ」

「お。サンキュな」

ミュウからカップを受け取ったルーンはそれに軽く口をつける。

「主に旅の話だな」

「旅の話？」

「うむ。やはりああいう身分の者は自由に外を歩けないらしいのでな。旅の途中の色々な出来事を話すと興味深そうにしていた」

自己主張の弱そうなフローラ嬢が、そのときだけ食い入るように聞いていたのが印象的だった。無理もない。自らの足で何も無い荒野を何キロも歩く、あるいはたき火をして野宿をする……おそらくあのような姫には一生体験することのない出来事だろう。

「旅の、話？」

「どうした？ ルーン？」

カップに口をつけたまま、ルーンが変な顔をしていた。何事か考えるように視線を左右に揺らし、それからゆっくりカップを下ろす。「ヴェスタ。その旅の話だが……もしかして、このビルア領に入る前の話もしたか？ いや、聞かれたか？」

「む？ うむ、最初は最近の話から始めたのだが、もつと前のことも聞きたいというのでな。ああ、いや、もちろん疑われそうなことは話していないぞ。我々はあくまで旅の司祭とそのお付きの者という事になっていいるのだからな」

「……やられた」

カチャ、と、ルーンはカップをテーブルに置いて立ち上がると、おもむろに部屋のドアを開けて注意深く廊下を覗きこむ。

「む？ どうした？」

「そうかと思うと、」

「いや……そうとは限らないか。単に興味本位ってことも……」
「ブツブツ言いながらすぐに戻ってくる。」

「むむ？ 一体どうしたというのだ？」

「まったくわけがわからない。」

腕を組んだルーンは少し間をおいてチラッとこちらを見た。

「……ヴェスタ。もう遅いかもしないけど、今後はこのビルア領に入る前の話はしない方がいい」

「何故だ？」

すると、ルーンはいつものようにバカにしたような表情で小さく首を横に振る。

「お前にも理解できるように簡単に言うとだな……前のところは、このビルア領とは宗教の力関係が正反対なんだ。つまり、私たちが扮しているクライン教の司祭がああ領地をウロウロするのはあまり自然なことじゃない」

「ふむ、なるほど……む？」

その話を聞いて俺にもピンと来た。

「ということは、彼女たちはそれを確かめるために俺に旅の話させたのではないか、と？」

「それ以外の意味に聞こえるのか？ まあ、必ずしもそうとは限らないが って」

ピク、と、ルーンが眉を動かした。

「ちよつと待て。……お前今、彼女“たち”と言ったか？」

あ。ヤバイ。

とは思ったものの、今さら誤魔化すわけにもいかず、

「う、うむ。なんと言うべきか、つまり、フローラ嬢が訪ねてくる前にだな、その……カディーナ嬢が訪ねて来てだな。彼女と同じように旅の話を」

「……」

ルーンの様子が固まった。

と、そのうち見る見るうちにこめかみの青筋が浮かんでくる。

予感は当たりそうだな。

怒鳴られるであろう、予感

「アホかッ！！ 少しは疑えよ、このバカ ッ！！！！」

キン……と、耳が鳴った。

「ま、待て、落ち着くのだ、ルーンよ。心配はいらぬ。俺の推理によると、フローラ嬢もカディーナ嬢も犯人ではなくてだな……」

「誰もお前のトンデモ推理なんて聞いてないっつーの！！」

テーブルのカップ類が1センチほど宙に浮いてガチャンと音を立てる。

「あー、もう！ これなら1人でやった方がいくらかマシだった！ だいたいお前、あの2人が犯人じゃなかったら誰が犯人だったんだ！？ 言ってみろ！ お前の名推理とやらでとつとと捕まえてみせろよ、ほらッ！！」

「お、落ち着くのだ、ルーン。た、確かに彼女たち2人が怪しくないという根拠はないが俺の直感的なアレがビビッと……」

「テーブルの角に小指ぶつけて死ねッ！！」
それはさすがに無理なんじゃないかと思っただが、反論すると今度は拳が飛んできそうな気配だったので自重した。

「というか、何もしなくてもそのうち拳が飛んできそうだな。ピンと閃く。」

「そ、そうだな！ さっきからご不浄に行こうと思っていたのだ！」
シュタツ、と、ソファから立ち上がる。

「あつ、こら、ヴェスタ！ 逃げる気かッ！！」

「生理現象だけはどうにもならぬ！ というわけでさらばだ！」

我ながら華麗な身のこなしで部屋を飛び出した。

さすがに屋敷の人間に騒ぎを聞かれるのはマズいと思ったのか、ルーンは外まで追ってこなかった。

「……ふう、やれやれ」

ホツと息をつく。

さて、これからどうしようかと考えた結果、せつかくなので本当のご不浄に向かうことにした。

キノコの毒のせいにして1時間ぐらいこもっていようと思う。

（しかしまあ、あんなに怒らなくても良いではないか……）

まあ、ルーンの言うことにも一理あるようには思うが。

（実際、どちらも疑わしくなかったのだから……）

「おや、あなたは」

「へ？」

「ご不浄へ向かう途中、見慣れぬ男性と鉢合わせた。服装からして使用人ではない。」

どう挨拶すべきか迷っていると、男性はスマートな仕草で礼をす
ると、

「ルクレツィアをお助けくださった司祭様ですね。私はヴィルヘルムと申します」

「え、あ、ああ、あなたが……」

不覚にも新郎の顔を覚えていなかったわけである。パレードのとき
に遠目に見たのとは細部で違っていたが、やはりハンサムな青年
だった。

もちろん、この俺ほどではないが。

「お連れの方々は？」

「部屋で休んでおります。長旅と先日の騒動で疲れてしまったよう
で」

うむ。我ながら自然な回答である。
すると、

「そうだ……この機会に……」

ヴィルヘルム公は何事か考え始めた。

「？」

「司祭様」

と、顔を上げる。

「いかがでしょう。たまには男同士でティータイムなど。……いえ、
正直に申し上げますと、司祭様の旅のお話をお聞かせ願えないかと
……」

「……旅の話？」

一瞬、先ほどのルーンの剣幕が頭を過ぎったが、よくよく考えれば
彼は今回の事件のいわば被害者であり、容疑者ではない。今度こそ、
何を喋ってもルーンに怒られるようなことはないだろう。

それに しばらく部屋に戻らない口実としてはあまりにちょうど
良いではないか。

俺は答えた。

「特に面白い話ありませんが、それでよければ」

そう答えると、喜び　というより安堵の表情を見せたヴィルヘルム公によって、俺は彼の部屋へ案内された。

同じ客間の並びにあったヴィルヘルム公の部屋は、間取りも我々の部屋とまったく同じだった。彼が冷遇される理由はないから、きっと我々が厚遇されているということなのだろう。

「ルクレツィアから私のことはお聞きになられているのですか？」

紅茶とケーキを運んできた侍従が部屋を出ると、ヴィルヘルム公はまず最初にそう尋ねてきた。

「とても誠実な方であるということはお聞きしております」

「そうですか……他には？」

「？」

違和感を覚えた。旅の話を……と言っていた割に、それを尋ねてくる気配はまったくといっていいほどない。

「他に、というと？」

「いえ、つまり……」

そう言っただけでヴィルヘルム公は言葉に詰まる。

「本当に結婚する気があるのかどうか、とか……」

「？」

どういう意味であろう。さっぱり話が見えない。

ヴィルヘルム公は黙り込んでいた。

「どういう意味ですか？」

率直にそう尋ねると、ヴィルヘルム公は困ったような顔で視線を左右に動かした。何かを迷っているようであったが、そのうち決心したような顔で軽く身を乗り出すと、

「司祭様が口の堅い方であると信じて、率直に申し上げます」

「む……」

確かに俺は口が堅く信義に厚い人間である。しかしこの青年とは先ほど会ったばかりで信じてもらえる要素など皆無に等しい。

それともこの青年は一発で俺の本質を見破ったというのだろうか。だとすれば、なかなか侮れない人物だ。

「何故私の口が堅いと？」

一応、そう尋ねてみると、ヴィルヘルム公は迷いのない口調で答えた。

「それはもう、司祭様ですから」

「……なるほど」

見た目通りの実直な青年らしかった。どことなく親近感を覚える。司祭様だけにお話しいたしますが……」

そして司祭という肩書きにすっかりこちらを信用しているらしいヴィルヘルム公はとつとつと語り始めた。

「実を言うと……今回の婚礼はルクレツィアの方から申し込んできたものなのです」

「ほう、それは男性として冥利に尽きますな」

俺は素直に思ったことをそのまま言葉にしたが、ヴィルヘルム公は何故かますます困った顔をした。

「ルクレツィアはあのと通りの容姿です。それこそ国中のあらゆる男性から求婚を受けましたが、そのすべてを断ってきました」

「そうらしいですな」

「そのルクレツィアが私に求婚するなど、どう考えてもおかしいのです」

「む？」

いったい、この青年は何を言い出したのだろう。

「そんなことはないのではないか？　じゃなくて、ないでしょう」
思わず素の口調が出てしまった。が、思い悩んでいる様子のヴィルヘルム公はそのことに気付いた様子もない。

俺は言葉を続けた。

「私の目には、あなたにはそのぐらいの資格が充分にあるように見受けられるが……」

だがヴィルヘルム公は何故か頑なに否定した。

「そんなことはありません。彼女に見合う男性などこの国のどこにも……それこそ大陸上に5人いるかいないかでしょう。それに、今回のことは半月前に突然、一方的に決まったものなのです。いくら何でも急だとは思われませんか？」

「……」

彼が何を言おうとしているのかさっぱりである。見合つか見合わないとかではなく、実際に求婚されているのだからそれで問題はないと思うのだが

「ですから司祭様から彼女の真意を確かめて欲しいのです。私はしがない一貴族の嫡子でしかありません。よほどの事情がない限り、ビルア公家の姫から申し込まれた婚姻を拒否する権限などありません。ですから　せめて彼女が本心からこの結婚を望んでいるのかを確かめて欲しいのです！」

ヴィルヘルム公の瞳は真剣だった。

あまりに突然すぎて俺の頭はぜんぜんついていけてなかった。ただ、目の前の青年の訴えが真摯であることだけはわかった。

何が不満なのだろう。

それがあまりにも気になって、俺は率直に尋ねていた。

「結局、あなたは何をどうしたいのだ？」

「……」

しばし考えた後、ヴィルヘルム公は答えた。

「私には他に好きな女性がいます。それは　ルクレツィアの姉のうちの1人なのです」

「……」

なんとも、まあ。

話は着々と、あの宿のオバさんが好きそうな方向に進んでしまっているようだった……

その4

結局のところ、物語の登場人物は4人ということになる。

新婦　もつとも可憐な末の姫、ルクレツィア。

新郎　多くの姫たちから慕われている好青年、ヴィルヘルム。

新郎に想いを寄せ、ルクレツィアの命を狙っている彼女の姉その¹。

逆に新郎が本当の想いを寄せているという姉その²。

そして先日の新郎の告白によると、どうやら彼は未だに“姉その²”への想いを断ち切れずにいて、今回の婚姻は不本意であるとのこと。かつ、ルクレツィアのほうも本来は望んでいない結婚だというのなら、この婚姻はいつたい誰のために設定されたものだというのか。

いずれにしても、可憐な姫と好青年の幸せな結婚、という理想の構図はどうやら崩れ去ってしまったようである。

さて、これから一体どうしたものか

↓花嫁俊いの大量殺戮者^{ジェノサイダー}

「そつだ。花嫁をさらってしまおうって　んなわけあるかっ!!」

「御主人様？」

「なんだよ、ヴェスタ。突然デカい声出して」

「あ、いや」

ふと我に返るとミュウが不思議そうな顔で、そしてルーンは不審者を見るような冷たい目でそれぞれにこちらを見つめていた。

「すまん。なにか今とてつもなく不吉なタイトルコールが聞こえたような気がしてな」

「タイトルコール？」

「おお、ルーンよ。」

「そんな不審者を見るような目で俺を見ないでくれ。」

「まあ冗談はさておき……どうしたものかな。ルクレツィアの真意を確かめるとは言っても、結婚したくもないのに結婚するのかなどと面と向かって聞けるはずもない」

「真意がどうあれ、当たり前だと返されて終わりだろうな」

ルーンは相変わらずナイフを手先で弄んでいる。

「どうやらこの仕草は単に手持ち無沙汰という理由でもなく、常に手に馴染ませておくことが目的らしい。」

物騒な話である。

「でもま。そんなもん、別に聞かなくてもいいんじゃないか」

「？ どういう意味だ？」

意味がわからず問いかけると、ルーンはあっさりとした口調で、「私たちの目的 頼まれたのは、あの姫さんを狙ってるヤツをあぶり出して捕まえることだ。だったらあの姫さんに結婚する気があるうがなかるうが、どうでもいいことじゃないか」

俺は眉をひそめて反論する。

「どうでもよくはないだろう。ヴィルヘルム公もルクレツィアも望んでいない結婚なら、事情を聞いてやめさせなければならん」

「あのなあ……」

ルーンはわざとらしくくらい大げさにため息を吐いた。

「そこまで首を突っ込んで私たちに一体何の得があるんだ？ それを確かめればあの色男が金を出してくれるってのか？」

「お前は、また金、金、金と……。良いか、ルーンよ。世の中には金で買えないものがたくさんあるのだぞ」

「金がなきゃ買えない食料の問題を先になんとかしてくれ」

「づく……」

痛いところを突いてくる。

ルーンは何も言えない俺を小馬鹿にした視線で一瞥すると、「そもそもこの連中と、金以外にどんなつながりがあるってんだ」くるくる、くるくるとナイフを手の中で回しながらそう言い放った。

「むう……」

なんとという冷たい物言いだろう。というか、曲がりなりにも修道士の格好をしておきながらその態度はどうかと思う。

言い返す言葉がなかなか見つからなかったところへ、ミュウが不思議そうな顔をして口を挟んできた。

「御主人様。つまり“ケツコン”とはどのような契約なのですか？」

「む？」

ミュウはほんの微かに首をかしげながら言った。

「多くの文献には互いに望んで交わす契りだと記述してありますが、現在の状況はそれとは矛盾しているように思えます。また、一部の文献にはそれを否定するかのような記述もあって、私にはよく理解できません」

「ふむ、そうだなあ……」

もちろん俺とて世の中には当人同士が望まない結婚が存在していることは知っている。今回の件にそういった類の匂いが漂ってきたことも事実だ。

しかし俺は敢えて答えた。

「ミュウよ。……確かに、場合によっては別の様々な思惑が絡むこともある。が、しかし。結婚とはそれでも、最終的に双方がさらに幸せになるために結ぶ、この世でもっとも尊い契約の1つなのだ」

「……………」
ルーンは何か言いたそうだったが、チラッとこっちの顔を窺っただけで結局口を開かなかった。

「もっとも尊い契約……………」

ミュウは呟き、何事か考え。

やがて俺の顔を真っ直ぐ見上げて言った。

「私にとってもっとも尊い契約は御主人様との契約です。では、私と御主人様の契約も“ケツコン”なのですか？」

「む？」

それは違うと思ったが、ここで否定すると余計に混乱してしまうかもしれない。

俺はそう思って、

「まったく同じというわけではないが、似たようなものかもしれないな」

「そうですね」

納得したのか、ミュウは満足そうに頷いた。

「……」

「ん？ どうした？」

ルーンが、今度は非難の色の混じった視線をこちらに向けていた。が、やはりそれについても特に何も言わず、

「……とりあえず。この件については私のほうから姫さんに探りを入れてみるよ」

意外な申し出だった。

「気が進まないのではなかったのか？」

ルーンは諦めたようなため息を吐いて、

「どうせいくら言ったって無駄なんだろう。だったら論議するだけ時間の無駄だからな」

と、言った。

なんとも可愛げのない物言いだ、まあ余計な言葉を返して話をこじらせる必要もあるまい。

「それに、お前に任せたりしたら余計に話がこじれそうだしな」

「……本当に可愛げがないと。」

ルーンが部屋の外に出ようと、ドアノブに手をかけたときだった。コン、コン。

「はい？」

ノックの音に返事をする、綺麗な模様の刻まれたドアの向こうから、可憐な、そう、何度聞いてもやはり可憐としか表現しようのない姫の声が聞こえた。

「ヴェスタ様。ルクレツィアです」

「ルクレツィア？」

なんとというタイミングであろうか。

「？ なにか御座いましたの？」

ドアを開けて顔を覗かせたルクレツィアは、一同の視線を一斉に集め、不思議そうに首をかしげていた。

俺たちは結局、ルクレツィアに直接事情を聞くことになった。

両手を膝の上で重ねたまま話を聞いていたルクレツィアは、その内容に特に動揺した様子を見せることもなく、何度か小さく頷いて、そして最後に、

「そういうことでしたら答えは簡単ですわ」

と、言った。

「いえ、むしろ今まで黙っていたことをお詫びさせてください。ヴェスタ様。これからお話しさせていただくことは 一部はルーン様のみ、先にお話しさせていただいたことでもありますが」と、ルクレツィアは物憂げな表情を見せた。

「ヴェスタ様。私は貴方様を信じております」

「む……」

可憐な姫のそんな表情は、俺の中にある琴線的なものに触れまくった。

何かを抱えている姫。

その“何か”を解決できるのは世界にたった一人。そう。

この俺しかいないという構図。

俺は胸を張って答えた。

「心配は御無用だ。困っている貴女を救うことこそが俺の喜び。貴女の悩みを解決できるのであれば、たとえこの身が炎に焼かれようとも悔いはない」

「ヴェスタ様……」

ルクレツィアの潤んだ瞳がキラキラと光る。

「……勝手にしろよ、もう」

そんな俺たちのやり取りに、視界の端っこにいたルーンは何故か諦め顔だった。

ルクレツィアはそんなルーンをチラッと見て、

「この先お話しすることは決して、この場にいる以外の誰であつても決して口外なさないください」

と、言った。

それに合わせるように、18時を知らせる鐘の音が鳴り響く。

そしてルクレツィアはとつとつと語り始めた。

「ヴィルヘルム様との御縁は、そう……最初はただ、怪我をした姉の心を動かすための芝居でした」

「姉？ 姉というのは、貴女の命を狙っている者のことではなく……」

……？」

「はい。ヴィルヘルム様が愛しておられた 怪我の跡を気にしてヴィルヘルム様のことを諦めてしまわれた姉のことです。私は、その姉のことを一番慕っておりましたので、どうにか、ヴィルヘルム様と上手くいって欲しいと考えておりました」

「つまり、貴女がヴィルヘルム公と婚約したといえは、その姉が考えを変えるのではないかと？」

「はい。そう でした」

そう言っただけ目を伏せるルクレツィアは相変わらず儂げで、その表情は悲しみに満ち溢れていた。

「ですが、最初は芝居のつもりが……ヴィルヘルム様と長く一緒にいることで、私は」

「本当にヴィルヘルム公を愛するようになってしまった、と」
俺がその先を続けると、躊躇しながらもルクレツィアはしっかりと頷いた。

……なるほど。そういうことであれば婚約の話が突然だったことも、ヴィルヘルム公が勘違いしてしまったことも頷ける話ではある。「姉も私とヴィルヘルム様のことを祝福してくれました。私は姉に申し訳ないと思いつつも、本当にヴィルヘルム様を夫として生涯を生きようと決心したのです。ヴィルヘルム様が姉のことをお忘れになられていないのは承知の上、覚悟の上でした」

「ふむ」

「ただ1つの気がかりは」

「その姉の怪我の原因を作り、そして今、貴女の命を狙っているもう1人の姉、ということか。しかし問題はそれが誰なのか……」

「いいえ」

ルクレツィアははっきりと口調で言った。

「実を言うと、犯人はわかっているのです」

「え？」

「なににい？」

そこで初めてルーンが発言した。

ルクレツィアはルーンのほうをチラッと見て、

「ルーン様には、この屋敷の中にいる2人の姉のどちらかが犯人だとお話しさせていただきました」

この屋敷の2人。

カディーナとフローラのことである。

「ですが、本当はわかっております。……犯人は上の姉。カディーナです」

「なんと……」

俺は思わず言葉を失ってしまった。

太陽をイメージさせる気の強そうな上の姉、カディーナ。激しい気性の持ち主のようだったが、逆にそのような陰湿なことを企む女

性には見えなかったのである。

「し、しかし」

問いかけようとした俺の言葉に、ルーンの声が重なった。

「ちよつと待てよ。そいつはどうしてわかったんだ？」

ルクレツィアは淀みなく答える。

「そもそもフローラ姉様は私の一番の理解者であり、協力者なので。私が命を狙われていることもずっと前から御存知でした。そしてあのパレードの後、私が失踪している間、フローラ姉様はずっとカディーナ姉様の行動を監視してくださいました。そしてはつきりとおさえたのです。カディーナ姉様が、密かに雇った闇の者たちに、私を探し出し、暗殺するようにと依頼した、その場面を」

ルーンは詰問するような口調で、

「……あんだ、あのパレードの騒ぎを起こしたのは自分だと言ったな」

「なに？」

それは俺にとっては初耳だった。

ルクレツィアを見ると、目を伏せたまま申し訳なさそうな顔をしている。

ルーンはそんな俺には構わずに続けた。

「それはつまり、そのための　つまり悪い姉貴の尻尾を捕まえるための演出だった、ってことか？」

「おっしゃるとおりです。ですから私も　運よく皆様に出会えた

あのときは、まだ犯人が誰なのかわかっておりませんでした」

「……それはいいとしても」

ルーンはいまいち信用できていない様子だった。

「どうしてすぐに言わなかった？　あの2人の“どちらか”が犯人だなんて、なんでそんな嘘をつく必要があったんだ？」

「それは」

初めて言いよむルクレツィア。

俺にはなんとなくルクレツィアの気持ちができるような気がした。

ルクレツィアは答えた。

「私も 整理がつかなかったのです。私は別に姉を糾弾したいわけではありません。ただ、馬鹿な行いをやめさせたいだけなのです」
声が微かに震えた。

「そのためにどうすればいいのか、その手段が思いつかない中で、真相をお話しする勇气がありませんでした。その点については本当に申し訳なく思っております」

「……」

ルーンはそれでもまだ彼女を信用しきっていないように見えた。

それはたぶん、彼が最初から抱いているらしい悪い方向の先入観が邪魔をしているのだろう。

「ルーンよ、もうよかろう」

まだ何か言いたそうなルーンを制し、俺は今にも泣き出してしまいたいようなルクレツィアにそっと声をかけた。

「姫よ。本題に入ろうではないか。……そのことを我々に話したということとは、カディーナ嬢の凶行をやめさせる方法を思いついたのであろう?」

「……はい」

震える声で、しかしはつきりとそう口に出してルクレツィアは顔を上げた。

「カディーナ姉様は、ヴィルヘルム様が本当は自分を愛していると頑なに信じ込んでおられます。ですから それが大きな間違いであると、目の前ではつきりと証明することができる、姉上の目を覚まさせることができるのではないかと」
「なるほど」

本来であればヴィルヘルム公自らが直接本人に言えば済むことなのかもしれない。が、主筋の姫に向かってそのようなことを言わせるのは難しいのであろう。

ましてヴィルヘルム公はおそらく今回の騒動の中身をまったく知らないものであり、知らせたくもないのであろうから。

「して、その方法は？」

「それは」

ルクレツィアは躊躇い、そして長いまつげを微かに震わせて俺の顔を見た。

その視線に俺はすぐ彼女の言いたいことに気づいた。

「心配する必要はない。さっきも言ったとおり、俺は貴女を助けるためにここにいるのだ。どんな無茶な要求であろうと遠慮する必要はない」

俺の言葉に。

ルクレツィアはついに決意したようだった。

「それは」

翌日。

婚礼の儀を明日に控え、この日はリハーサルが催される。

リハーサルといってもその内容は予行練習ではなく、一般市民を招待して催される一種の本番、いわば前日祭のようなものらしかった。

この日、新郎と新婦の身内はほとんど参加しない。参加しているのは数日前からこの町に滞在しているルクレツィアの2人の姉、カディーナとフローラだけで、その他の親族は明日の本番を前に今日の夜にこの町にやってくるらしい。

会場に集まった市民は約1000人。一般、とはいつても当然素性のしつかりしたいいわゆる上流家庭以上の市民で、会場の中には多数の警備兵も配置されている。

それ以外はほとんど本番と同じ流れを踏む。

その前日祭。

俺はいわば司会役である。

「あなたは、その健やかなるときも、病めるときも」

この2日の間で必死になって覚えた呪文を口にする。俺にとって幸いだっただのは、このビルア領における結婚式の流儀が、俺の知っているものと大差なかったということだ。

単純に言えば神の前で誓いを立てるだけ。それ以外のことはだいたいの流れさえわかっただけであればあとはアドリブでどうにかなるものである。

会場はしん、と静まり返っている。

100組の瞳は森厳なる儀式をただ黙って見つめていた。

その中にはカディーナとフローラの視線もある。

その視線を集める2人

ヴィルヘルムとルクレツィア。

その2人が並んでいる姿を見ると、なるほど、町中の人々が熱狂するのもよくわかる。絵に描いたような美男美女、おとぎ話の王子様とお姫様。

世界が違いすぎて羨むことすら忘れてしまうのではないか。

装飾の施された天窓が風にガタガタと揺れた。

今日はあいにくの曇り空。

「これを愛し、これを敬い」

ヴィルヘルムは何を思っているのか目を閉じ、どこかに思いを馳せているように見えた。

ルクレツィアはそんな彼を意識している。

これからこの2人はどうなるのであろうか。

たとえ今日のこの日が上手く通り過ぎていったとしても、2人の間にはいくつかの課題が残ることになるだろう。だが、これだけ大勢の人に祝福され、幾人かの愛情溢れる親族に見守られた2人であれば、きつと上手くいくに違いない。

俺はそう信じる。

そうでなければならぬと思う。

「その命のある限り、真心を尽くすことを」

その瞬間を向かえようとした会場はより一層静まり返る。

俺は言葉を止めた。

会場に、ミュウとルーンの姿はない。

なくて当然である。

何故なら、

「 誓いますか? 」

俺たちは今日、この儀式を“襲撃”する手はずになっているのだ。

俺は言葉と同時に天窓を見上げる。

それが合図だった。

ガシャアアアアン!!!

「!?!」

天窓が割れて、荘厳なる空気は一転、混乱の渦へと変貌した。
舞い降りた、白い衣に表情のない仮面の少女。

降り注ぐ幾筋もの光。

そこかしこで破壊音が鳴った。

戸惑いの声。

悲鳴。

怒声。

降りてきた白い衣の少女は破壊の光を四方に放ちながら、ヴィルヘルム公とルクレツィアの間へと降り立つ。

白い衣の少女　もちろんミュウである。

「何者だ!」

動いたのはヴィルヘルム公。

最前列の席に座っていたルクレツィアの姉、カディーナ。

「.....」

ミュウは無言のまま仮面の奥の視線を2人へ向ける。

と同時に、天井から一際太い光の束が降り注ぎ、派手な破壊音を

立てた。

「!？」

ヴィルヘルム公が怯んだ隙に、ミュウは花嫁　ルクレツィアを抱えて壁際へ飛んだ。

「貴様……魔の者かッ！」

叫ぶヴィルヘルム公。仮面を被っていることに加え、出で立ちが違っている。その白い衣の少女がミュウだとは気付いていない。

殺気立った警備兵たちが集まってくる。

ざっと20名ほどはいるだろうか。

会場に集まっていた市民は大半が外へと避難したようだ。

ミュウに抱えられたルクレツィアは気絶している。

いや、気絶したフリをしている。

ここまで、すべてがシナリオどおりだった。

……と。

「ルクレツィアを離さない！」

明らかに人ならざる正体不明の少女に、誰もが挑みかかるのを躊躇している中。

真っ先に飛び出したのは、カディーナだった。

護衛の兵士から受け取った細身の剣を片手に、毅然とした声で前に出る。

凜とした、薔薇のような美しさ。

俺は一瞬、自分の役目を忘れそうになってしまった。ベクトルは違えど、さすがはあのルクレツィアの姉、といったところであろうか。

(……この女性が恋に狂って自らの妹を殺そうとするなど、未だに信じがたい)

いや、だからこそ。

その道を正してやることも正義の味方たるこの俺の役目なのである。

さあ。

いよいよ主役の登場だ。

「……ふははははははははッ！」

会場に鳴り響く正義の雄叫び。

誰もがその声の正体を求め、視線を辺りに彷徨わせる。

「はははははは！ ははははははははッ！」

俺は懐に隠し持っていたミュウとお揃いの仮面を身に付け、隠し持っていた黒いマントを颯爽と身にまとい。

「なッ！？」

ミュウに気を取られていたカディーナに背後から襲いかかると、剣を持つ彼女の右手首を押さえ、左腕だけで軽く女性にしてはやや長身の体を抱え上げ、ミュウとは反対の壁際へと飛び退った。

「大人しくするのだ！ 皆のもの！」

「司祭様！？」

驚愕の表情を浮かべるヴィルヘルム公。

「ふははははは！ まんまと騙されおったな、愚かものども！」

台本どおりの台詞をヴィルヘルム公へと放つ。正義の味方の台詞としてはどことなく引つかかるものがなくもなかったが、それはとりあえず考えないことにした。

「貴様ッ！」

カディーナが抵抗する。女性にしては力があるが、さすがに俺の拘束を振りほどけるほどではない。

「大人しくするのだ！」

俺は逆にその手から細身の剣を奪い取り、祭壇の奥へと放った。

警備の兵士たちが動き出す。

俺はそんな彼らを制止するべく、口を開いた。

「大人しくしろと言ったのが……聞こえなかったのかアアアアアッ！！」

天から降り注ぐ闇色の光。

それは俺と兵士たちの間に降り注ぎ、

ドオオオオオオン！！

と、ミュウのときよりも大きな破壊音を立てた。
悲鳴。

爆風が辺りを支配する。

床材が弾け飛び、土ぼこりが舞った。

(……やりすぎたか?)

少し不安になったが、どうやら兵士たちは全員無事のようだ。

しかもうまくことに、

「

誰もが俺の力に驚いて、容易には動き出せなくなっている。

こうして、場の主導権は完全に俺の手に落ちた。

「ふふふふ……さて」

俺は未だ抵抗しようとするカディーナの体をしっかりと拘束し、
怯んだ兵士たちを無視して、ヴィルヘルム公へと向き直る。

目配せすると、反対の壁際にいるミュウも俺と同じように、気絶
した(フリをしている)ルクレツィアをヴィルヘルム公へ見せ付け
た。

舞台は整った。

「司祭様 いや」

ヴィルヘルム公は大きく頭を振って俺を睨み付けた。

「お前たちは一体」

「我々は国際的な犯罪集団的な秘密結社の者だ！」

我ながら何を言っているのかわからなかったが、まあなんでもい
いのだ。

「そして我々の目的は、この美しい姫をいただいていくことだ！」

一瞬、周りの者たちが呆気にとられたような顔をする。

ちよつと唐突すぎたかと思っただが、現実にかつこの状況になつて
いる以上、この場にいる者たちは俺の言葉を信じざるを得ないであ
ろう。

案の定、ヴィルヘルム公は怒りの言葉を口にした。

「なにを馬鹿な！ そんなことができるんでも」！

それに合わせ、金縛り状態になっていた兵士たちが再び動き出す。
「たああああっ!!」

そのうちの1人　まだ10代だろうか、若い兵士が先陣を切った。その手の槍が俺の体を目掛けて伸びてくる。
が。

その槍が俺の体に届く前に、一条の光が俺と若い兵士の間を横切った。

「な　!?!」

驚いた兵士が足を止め、その場に尻餅をつく。

手にしていた槍は、取っ手の先がまるで蒸発したかのように無くなっていった。

「御主人様に危害を為すことは許しません」

ミュウが相変わらず抑揚のない口調でそう言って、右の手のひらを天に向ける。

辺りに満ちる眩い光。

放射状に飛び散った光の束が、壁と天井をまるで紙細工のように切り裂いた。

天井と壁の一部が派手な音を立てて崩れ落ちる。

「……」

ヴィルヘルム公はポカンとした顔をしている。

俺の腕の中で抵抗を続けていたカディーナもまた、暴れることを忘れたかのように呆然としていた。

警備兵たちも、また。

場の者は今度こそ完全に戦意を喪失したようだ。

「……さて」

ちよつとやりすぎたかもしれない。というか、正義のためとはいえ、神聖な場所をこんなにも破壊してしまつて、天罰的なものとかそういうのは大丈夫なのだろうか。宗教的なものはあまり詳しくないのだが。

「では本題に入ろうか。ヴィルヘルム公よ」

どちらの姫もさらっていくつもりではなく。適当な理由をつけてカディーナも開放する手筈だ。

とはいえ。

人の良いヴィルヘルム公のことだ。いくら花嫁を守るためとはいえ、もう片方のカディーナを見捨ててしまうようなことを軽々と口にはできない。

そこで俺は彼に逃げ道を提示することにする。

「1分だけ時間をやるうではないか、ヴィルヘルム公よ。それを過ぎればどちらの姫も命はないものと思うのだな」

「！」

俺の言葉に合わせて、ミュウが再び力を放つ。

光の筋は誰もいない場所に飛んで椅子や調度品を破壊しただけだったが、俺の言葉に重みを加える効果は十分だ。

その迫力に、辺りの者は皆一様に静まり返る。

……… なんとというか、俺たちはもう役者でも食べていけるのではないだろうか。

(本気で考えてみても良いかもしれんな)

ルックス的にはまったく問題ないのだし。

(……… しかし)

ヴィルヘルム公の返事を待つ間、ふと我に返って辺りを見渡すと、ものすごい惨状だった。

建物はもう本来の姿を思い出せないほど破壊されつくしている。

兵士たちは金縛りにあつたようになっていて、俺へと向けられる殺気は肌に突き刺さるかのようだ。

ヴィルヘルム公は苦渋の表情を浮かべながらも、憎しみを込めた目で俺を睨んでいる。

カディーナ嬢もまた。

……… ルクレツィアは“すべて終わったら自分がその場を治めるから大丈夫”などと言っていたが、本当にこの状況を治められるのだろうか。

(……そういえば)

ふと気付く。

もう1人の姉、フローラの姿が見えない。

儀式の最中は確かカディーナの隣にいたと思ったが、外に避難したのだろうか。

なんとも、まあ。

ここまでほぼ予定どおりに進んでいるというのに、どことなく釈然としない、奇妙な気分だった。

そうして、俺が“1分待つ”宣言をしてから30秒ほどが経った頃だろうか。

静まり返った場を動かしたのは、凜とした女性の声だった。

「情けない！何を迷っておられるのですか！」

半壊した建物の外にまで響き渡りそうな声。

叫んだのは、俺の腕の中にいるカディーナだった。

「ヴィルヘルム様！貴方はルクレツィアの夫となられる御方！何故悩む必要があるのですッ！」

「……？」

意外な発言だった。

彼女はてつきり、ヴィルヘルム公が自分を選ぶ(と勘違いして)のをただ待っているだけだと思っていたのだが。

カディーナの言葉に、ヴィルヘルム公が眉をしかめる。

「し、しかしカディーナ、私は」

「命のある限り、愛し、尽くすことを誓ったのならば、迷わずにそれを貫き通すべきでしょう!!」

「わ……私は」

よるめいて、ヴィルヘルム公が背後のミュウ　ルクレツィアを振り返る。

……どうなっているのだろう。

ルクレツィアから聞いた限りでは、カディーナはヴィルヘルム公が自分を愛していると勘違いしていて、ヴィルヘルム公はそんなカ

ディーナを、口には出さないものの迷惑に感じているはずなのだが、これではまるでいや。

これもカディーナ嬢の、同情を誘うための演技なのだろうか。…俺が見た限り、彼女はそんな性格をしているように思えないのだが、人は見た目によらないと先人も言っていることだし

(ううむ……)

ルーンに意見を求めたいところだったが、残念ながら彼はそばにいない。

そして長い時間……と言っても実際には十数秒程度だろうか。

ヴィルヘルム公が決意の表情を浮かべた。

ついにくる。

俺は次のセリフを用意して、彼の決断の言葉を待った。

そして。

ヴィルヘルム公は言った。

「私は まだ、ルクレツィアに永遠の愛を誓ってはいないッ！」

声を振り絞るようにして叫んだ。

「卑劣な賊めッ！ カディーナを……私のカディーナを離せええ

ッ！」

「……え」

あれ？

「！」

あまりにも予想外の展開に放心したのがまずかった。

カディーナが俺の腕を振り解き、振り上げた足が無防備な俺の急所に直撃する。

「ぐえっ！！」

痛みはそれほどでもなかったが、反射的に前屈みになってしまった。

「カディーナ！」

「ヴィルヘルム様！ ルクレツィアを！！」
カディーナが、祭壇の陰にあった剣を拾い上げヴィルヘルム公のもとへ駆け寄る。

ピンと張っていた空気が途切れ、兵士たちも一斉に動いた。
ルクレツィアを拘束するミュウを取り押さえようと。

その瞬間。

「……やめてください！！」

悲鳴のような叫びに、その場は再び固まった。

「やめて……ください……」

震える、か細い声。

見ると、いつの間にか目を覚ました　というより気絶した演技を止めた　ルクレツィアが、泣きそうな顔でヴィルヘルム公とカディーナを見つめている。

その首筋には銀色に光る刃物が押し当てられていた。

「……ミュウ？」

刃物を押し当てているのはミュウである。

当たり前のことだが、事前に打ち合わせておいたシナリオには無い行動だった。

「うごくといのちはありません」

ミュウが抑揚のない　まるでロボットみたいな口調でそう言った。

「さがりなさい。さもないと、るくれちあを、ころします」

やはりロボットのような口調のミュウ。

「や、やめて……」

涙を流して震えるルクレツィア。

(ど……どうなっているのだ……?)

舞台の主演(級)だったはずの俺が、いつの間にか完全に蚊帳の外だった。

それでもミュウのその脅しは効果があったようで、ヴィルヘルム公もカディーナも、そして兵士たちも動けない。

ミュウはその体勢のままルクレツィアを伴って俺のそばまでやってきた。

「……………」
涙を浮かべたルクレツィアがチラッと俺の顔を見る。

「お、おい、ルクレツィア。……………これはいったいどういう」

「……………ミュウちゃん。適当に騒がしくして」

「はい」

小声でそういったルクレツィアの言葉に素直に頷いて、ミュウが再び光を放つ。

破壊音。

ヴィルヘルム公とカディーナに対し、避難を促す兵士の怒声。

その喧騒に隠れるように。震え、涙を浮かべたままのルクレツィアが、その様子とは裏腹にしつかりした口調で小さく言った。

「……………ヴェスタ様。どうやら私たちの目論見は失敗してしまっただうですわ」

「し、しっばい？」

ルクレツィアはそつと眉をひそめて、

「はい。私にとつても予想外でしたの。まさかヴィルヘルム様が本当にカディーナ姉様を愛しておられたなんて……………」

「……………はあ」

何が何だかわからず、というか、どういう反応をして良いものかわからず、俺は感嘆符のみを漏らし、後に続ける言葉もまるで思い浮かばなかった。

「こうなった以上、ヴェスタ様がこのビルア領を無事に脱出するには、もう私を人質にして逃亡するしか道はないものと思います」

「逃亡？ ……何故俺が逃亡を？」

さっぱり意味がわからん。

だって俺は、ルクレツィアやヴィルヘルム公の幸せのために一肌脱いだのであって、逃亡するどころか周りから賞賛されるべきことを為したのであって

「だってヴェスタ様は」

可憐な姫は、その外見どおりのか細く、儂い声で言った。

「これから花嫁になろうとした一国の姫をかどわかした、極悪人な
のですもの……」

「え？」

「……ごくあくにんなのです」

やはりロボットのような口調で、ミュウがルクレツィアの言葉を
復唱した。

……ああ、神よ。

俺が一体。

一体何をしたというのだ

懺悔をする暇も与えられないまま。

こうしてビルア領全土に指名手配された俺たちの、聞くも涙、語るも涙の逃亡劇が始まったのであった。

その5

人生とはままならぬ。

金も人も、人生に関わるありとあらゆるものが思い通りにはならぬものだ。

だからこそ面白い。

わかりきった未来になどなんの面白みもない。

そう。

だからこそ

『正義の味方を目指していたら、手違いで婚姻間近の姫を誘拐し、国中から指名手配されるような極悪人になってしまった』

なんて。

そんな出来事もいわば日常のスパイスであり、人生という大きな尺度の前では取るに足らぬ些細な誤算に過ぎないのである。

亡命の大量殺戮者ジェノサイダー

「なあ、ミユウよ」

見事な満月の夜。風が強いのはここが山の頂上付近であるということと、周りに遮蔽物がないせいだろう。

ビルア領の北西、ヒンゲンドルフ領との国境付近の山。俺たちは、

人目に付かない夜になるのを待つてその山へと登ることになった。

地元の人間は不気味がつてあまり近寄らない山だという。8合目辺りまでは樹木がうつそうと生い茂つていたが、それ以降は徐々に禿げ上がつていき、頂上近辺は赤茶けた土の地面が辺り一面に広がっているだけだった。

「本当に、やらねばならぬか？」

「はあ」

ミュウは小さく小首をかしげた。

「御主人様がそう、お望みになられましたので」

「いや、俺は確かに　そう。ビルアの兵士に見つからないように国境を越える手段はないものだろうか、と、そう言ったのは間違いないが」

強い風を遮るように、鼓膜をつんざく咆哮が月夜の荒野に響き渡つた。

「……………あれは、その、なんだ」

俺が指差した先では、夜闇の中に溶け込むような蒼褐色の巨大な鳥が大きく翼を広げ、こちらを威嚇するように真っ赤な目をランランと光らせていた。

「聞いていた話より、ずいぶんとデカいではないか……………」

風の三十三族。人類によってその番号を与えられた風の獣魔は、翼のある獣魔の中でもっとも大きな体を持つ。体長は翼を畳んだ状態で7、8メートルにも及び、大人を数人乗せて長時間飛行することも可能だ。ただし非常に気性が荒いため、人はもちろんのこと、力のある人魔ですら手なずけるのは非常に困難である。

……………というのが、つい先ほどミュウが事務的な口調で語つてくれた目の前の生物に対する要略であった。

「7、8メートルどころか10メートル以上ありそうに見えるのだが……………」

ミュウはその方向をチラッと見やつて、ほんの一瞬だけ考えると、「どちらかといえば大きめの個体ですね」

「いやいや。個体がどうこうという問題ではなく」

俺たちとその巨大な獣魔との間はまだ100メートル以上は離れている。が、その距離が実際の何分の一にも思えてしまうほど、相手は巨大だった。

その、向き合っているだけで本能的な恐怖を覚えてしまう相手を、こともあろうに制圧しろというのだ。

善良な一般人であるところの俺がしり込みするのも当然の話であらう。

「……無理だ」

あえて説明はしないが、俺たちは色々な誤解によって周りから追われる身である。だから、どうしても“人目に付かずに国境を越える手段”が必要だった。

そこで耳にしたのが、この国境付近の山に巨大な翼を持つ獣魔、風の三十三族が住み着いたらしいという噂だった、というわけである。

「いや、まあ、仮にだ。仮に俺たちがあの巨大な鳥の化け物を叩きのめすことができたとして」

俺はその巨大な鳥の化け物を指差す。

「アレが、俺たちを素直に背中に乗せてくれるとは思えんのだが……」

「問題ありません」

「……」

どうやらミュウには何らかの秘策があるようだ。

まあ、それはいいとしても。

「……やるしかないのか」

ちなみに俺たちには他に2人の同行者がいるのだが、危険なので8合目近辺で待機している。夜の山だからその辺りも決して安心というわけではないが、まあルーンがついているから大丈夫だろう。

再びの咆哮。

巨大な鳥がついにその両方の翼を広げた。赤褐色の山肌を撫でる

ように強い風圧が産まれ、蒼褐色の巨大な身体が宙に浮かぶ。夜空をすべて覆いつくしてしまうのではないかと思えてしまうほどの、圧倒的な存在感。

「御主人様」

「」

返事をしたつもりだったが、さらに大きい咆哮にかき消された。

夜色の巨大な風が、その赤い目に敵意を漲らせて飛翔する。

「弱点は首の周りです。首の周りだけ体毛と皮膚が薄く、ダメージが通りやすくなります」

「首の周りって」

宙に浮かんだ獣魔が急に羽ばたきを止めた。

次の瞬間。

「！」

その巨大な身体が俺とミュウに向かって効果を始める。

（ 速い！ ）

「ミュウ！」

隣にいたミュウを脇に抱えて横に飛ぶ。

間一髪。

「くッ！」

ミュウの体よりも大きいのではないかと思われる爪が俺たちの立っていた場所 山肌を削り、岩石を破壊する。その巨大な質量に押しつぶされた空気が逃げ場を求めて辺りに風を巻き起こした。

「ちいつ……」

俺は風圧に飛ばされないように足を踏ん張り、ミュウを下ろして両手で剣を構えたが、獣魔は俺が攻撃態勢に入るまえに再び夜空へと飛翔する。

「……あれの首を狙えというのか！？」

夜空に浮かぶその身体は完全に夜に溶け込み、赤い瞳でどうにか顔の位置を特定できるというレベル。加えてあの速さだ。

自分めがけて突進してくる闘牛の首に麻酔注射を打てというよう

なものである。

「はい。ですから」

ミュウは相変わらず起伏の少ない口調で俺を見上げ、言った。

「間違っても首を狙ってははいけません。死んでしまっっては私にもどつすることもできませんから」

「……ミュウよ」

いまいち話が噛み合わない。

「殺す殺さないよりも、まず、俺たちが生き延びることを考えねば」

「

……」

ミュウはチラッと獣魔を見やる。

それから俺の顔を見上げる。

少し考えて、

「てきとーに叩けば大丈夫です」

「……は？」

獣魔の羽ばたきが止まった。

自らの寢床に入ってきた愚かな侵入者をその鋭い爪で破壊すべく、

「てきとーに」

緊張感の欠片も無い。

「くっ……」

こうなったらヤケだ。

あの爪を避け、どこでもいいから一撃を叩き込む。その程度ならば、不可能ではないかもしれない。

再び剣を両手で握り締めた。

じんわりと汗が滲む。

鼓膜を突き破りそうなほどの咆哮。

迫り来る巨大な爪。

(……来る！)

そうして獣魔が再びその巨大な爪を俺たちの方へ向けた、その刹那。

「動きを止めます」

ミュウが右手を上空に向けた。

「！」

右手からほとばしる閃光。

一時的に視力を失ったのか、滑空してきた獣魔の動きが鈍る。

(……ここしかない!!)

「おおおおおお ツ!!」

覚悟を決めて地面を蹴り、俺はその巨大な敵に手の中の剣を振り下ろした。

「……にしても」

月の光を浴びてウェーブがかったブロンドの髪が風にそよぐ。可憐で幻想的な要望も相まって、その姿はまるでおとぎ話の中から飛び出してきた姫のようだ。

「本当に人間ではないのですね」

いや、その人は実際に姫なのだ。そしてその人がそこにいるからこそ、俺たちは今、こうして人目を忍びながら国境を越えようとしているのである。

地上から数百、いや千メートル以上はあるつかという上空。

巨大な鳥の背に乗った俺たちは、今、まさにビルア領を抜け、隣のヒンゲンドルフ領へ入ろうとしていた。

(誘拐犯の汚名を着せられたままというのはどうにも心残りだが……)

仕方あるまい。

いや、今回ばかりは本当に俺は悪くないのだ。

「いよいよ、ビルア領を抜けるのですね」

と、ルクレツィアは少しかすれ気味の声でそう言った。

そんな、期待に胸を膨らませている彼女に水を差すのは少々気が引けたが、

「……ルクレツィアよ」

一言、言っておかねばなるまい。

「しつこいようだが、本当に行くのか？ 考え直すなら今のうちではないか？」

「あら」

こんな上空であるにも関わらず、可憐な姫はまったく臆した様子も無く、巨大の鳥の背から身を乗り出すようにして地上を見つめながら言った。

「ヴェスタ様。今更、私を見捨てて行かれるおつもりですか？」

「いや、そういうつもりではないのだが……」

正義の味方が誘拐犯に間違われるという、あの世紀の冤罪事件からちょうど1週間が経った。

この1週間、俺は何度も何度も、しつこいぐらいに彼女を説得していた。それはそうだろう。国中の誰からも愛される姫が、誤解とはいえ誘拐犯として追われる一味と、今まさに国境を越えようとしているのであるから。

「俺たちの旅は決して安全なものではない。悪いことは言わぬ。家族のもとへ帰ったほうが良い」

「……」

するとルクレツィアは視線を横に流した。

その深く思案するかのような様子に、ようやく説得が通じて考え直してくれるのかと思いきや、

「……ひどい」

「へ？」

見る見るうちにその大きな双眸に涙の粒が溜まり、風に流れて夜空の中にきらりと溶けていった。

「大切なお母様のティアラを売り払ってまで尽くそうという私を、ヴェスタ様は用がなくなっただからといって捨てていかれるおつもりなのですな……」

「な、なにを馬鹿な！」

なんという人聞きの悪いことを。

「そ、そもそもティアラもドレスも貴女が逃げるのに邪魔だと言うから　だ、だいたいあのティアラがそんなにも大事なものだっただけ完全な初耳だ！」

俺がそう主張すると、ルクレツィアは上目遣いにチラツと俺の顔を見て、

「言ってますでした？」

「聞いとらん！」

「……だとしても、あのティアラは二度と戻ってはこないでしょう。ああ、家に戻ったとしても、もうお母様の遺影に顔向けできません。ヴェスタ様に捨てられてしまったら、私はもう帰る場所もありませんわ……」

再び泣き崩れる。

俺はどうしたらいいのかわからなくなっ

「……ルーンよ。何とか言っ

「自業自得だろ」

尻尾の辺りに乗っていたルーンが突き放すように言った。

「だから何度も言っただけじゃないか。そいつは曲者だ、って」

「……あら。曲者だなんて」

顔を上げたルクレツィアはケロツとしていた。

「最高のほめ言葉ですわ」

「……」

呆れるぐらい見事な変わり身の早さである。完全に騙されていた。可憐な天使はその白衣の下に小悪魔の尻尾を隠し持っていたわけだ。やはり人は外見で判断してはいけないということなのか。

「そう、深くお考えにならずともよろしいではありませんか」

と、ルクレツィアは可憐な　もとい、小悪魔の微笑を浮かべて、「ドレスとティアラの代金は約束どおり報酬としてお支払いいたします。私のことも、本当に邪魔だと思われたら人買いにでも売り飛ばしてくださって結構ですわ。きっと良い値で買っただけです」

そんなルクレツィアの言葉に、俺は慚然と言い返した。

「そのようなこと、できるはずがない」

「もちろんヴェスタ様はそういう御方ではないと思っております。ただ、そうなったとしても後悔はない、ということですよ」

平然とそう言うてのけるルクレツィア。

俺はいよいよわからなくなつて、

「……結局、貴女の目的はなんなのだ？」

ルクレツィアは少し思索して、

「大陸の北のほうには、好奇心は猫をも殺す、ということわざがあります。ヴェスタ様は御存知ですか？」

「確か、好奇心はほどほどにせよ、という教訓である」

そのぐらいいは知っている。

が、ルクレツィアは小さく笑つて、

「そのようですわね。……でも私は、その解釈は少し違つてはなにかと思つのです」

「む？ どういう意味だ？」

「それが本望だと、そう考える“ネコ”もいるということですよ。

だいたい、愛のために死ぬのが美学で、好奇心のために死ぬのが愚かだというのは、どうにも納得のできない話だと思いませんか？」

「むう……」

そんなことは考えたことがなかったし、個人的には彼女に賛同する気にもなれなかったが、言いたいことはわかった。

「つまり貴女の目的はその“好奇心”である、と？」

ルクレツィアは嬉しそうに微笑んだ。

「おっしゃるとおりですよ」

「……」

なんとまあ。

そんなことのためにあのような騒ぎを起こし、高貴な身分を捨て、素性のよくわからない男とともに先の見えない旅をしようなどは、

(愚かしい とばかりは言えぬのか)

それを望んでいるネコを憐れむことは侮辱になるのかもしれない。少なくとも彼女はそう考えているのだから、これ以上言うことはあるまい。

と、そのとき。

『御主人様』

ミュウの声が聞こえた。

『まもなく国境を越えます』

「そうか」

どちらにしてももう後戻りはできぬ。それに今更帰したところで俺の汚名が晴れるわけではない。

とすると……もう仕方が無いだろう。

「わかった。貴女がそこまで考えているのであればこれ以上は言うまい」

「感謝いたします。ヴェスタ様」

ルクレティアはニッコリと微笑んで、そして深々と頭を下げた。相変わらずの微笑みは、その一瞬だけ裏のない本当の笑顔になったように見えた。

いや、そう感じてしまうこともあるいは彼女の掌の上なのだろうか。

「ミュウちゃんもルーンさんも、これからよろしくね」

『はい。ルクレティアさん』

「……急になれなれない口調になりやがって」

ルーンは相変わらずの態度である。

対照的にルクレティアは楽しそうだ。

「あら。だって私のほうが年上ですもの」

「同じくらいだろ？」

「だってルーンさんは“13歳ぐらいの男子”でしょう？ でしたら、私のほうが3つは年上ですわ」

「殴るぞ、このヤロウ」

視線で火花を散らし合う2人。

……まあ、なんだ。喧嘩するほど仲が良いという言葉もあるようだし、心配はあるまい。

たぶん。

『御主人様』

「む？ どうした、ミュウ」

『そろそろ、限界のようです』

と、ミュウは言った。

そうそう。言い忘れていたが、ミュウは今、俺たちを乗せたこの巨大な鳥の中にいる。

“中にいる”という表現が正しいのかどうかわからないが、つまりはこの獣魔 風の三十三族と同化し、精神を乗っ取っている状態らしい。

もちろん、彼女にそんな能力があると知ったのはつい先ほどのことで、最初にルクレツィアが“やはり人間ではない”と感心していたのもそのことを指して言ったのだった。

「3人も乗せた状態ではそう遠くまでは飛べぬか。あまり人里に近付くと騒ぎになりかねん。どこか遠くの森か山に下りて、そこから歩くこととしよう」

『はい、御主人様。では 左手の、あの森の中へ』

「うむ」

鳥が少しだけ体の向きを変えて森へと向かう。

「」

「！」

後ろではルーンとルクレツィアがまだ何事か言い合っている。ムキになってまくしたてているルーンと、余裕の表情でそれを流しているルクレツィアは確かに“喧嘩するほど仲が良い”姉弟のように見えなくもない。

ミュウはなんだかんだとルーンとは仲が良いようだし、おそらくはルクレツィアからも可愛がられるだろうから、やはり末妹のポジションだろうか。

その光景を想像すると、少しだけ微笑ましい気分になった。

(……俺も頑張らねばな、色々)

結婚もせずに3児の父となった気分を味わえるというのは、これはこれでなかなかオツなものだ。

「ところで、ルクレツィアよ」

「なんででしょう?」

ふと思いついて声をかけると、ルクレツィアはルーンとのじゃれ合いをすぐに中断してこちらを向いた。

「結局のところ、貴女とカディーナ嬢、それにフローラ嬢とはどのような関係だったのだ? ヴィルヘルム公を巡って命を狙われていた云々……も結局はただの方便だったのである?」

「ああ」

と、ルクレツィアは頷いて、

「フローラ姉様は一番私の“姉らしい”御方でしたわ」

「という?」

「おっとりしているように見えて姉妹一聡明な御方でした。今回の私の企みもお見通しの御様子でしたが、結局目を瞑ってくださいましたようです」

「む……まったくそんな感じには見えなかったが」

俺はあの、おっとりとして気が弱そうな、いかにも深窓の令嬢然とした立ち居振る舞いを思い出しながら言つと、

「それがフローラ姉様の恐ろしいところなのです。おそらく今回の追跡の手が緩かったのも、フローラ姉様が裏で手を回してくださったのですわ。私もフローラ姉様にだけは色々なことを相談しておりましたし」

「な、なるほど……」

そうなのだとすれば、本当に恐ろしい女性だ。ルクレツィアが“もっとも自分の姉らしい人物”と言ったのは、つまりは見た目と本質のギャップという意味なのだろう。

「では、カディーナ嬢は?」

「姉上は……」

と、ルクレツィアは少し考えるように視線を泳がせた。

「腹黒い下の妹2人に振り回されて、いつも貧乏くじを引かされる役でしたわ。基本的に嘘のつけない、直情的で、愚かしいほど正直な方でした」

「……」

不思議とけなしているようには聞こえなかった。

「本当に」

そう言っつて、ルクレツィアは苦笑した。

いくつもの微笑を持つ彼女の、初めて見る苦笑이었다。

「本当に馬鹿正直な姉でしたわ」

「……なるほど」

そこで俺はようやく気付いた。彼女の好奇心を満たすために作られたシナリオの、その裏に隠されたもう1つの目的に。

背後に視線を向けると、ビルア領の国境はすでに夜闇の中に溶けていた。

正面には広大な森が迫っている。

少しずつ高度が下がっていた。

『御主人様』

「ああ、頼む。……2人とも、落ちないようにしっかりと掴まっているのだぞ」

ガサガサと翼が枝葉を掻き分ける音。

こうして俺たちは新たな地、ヒンゲンドルフ領へと降り立ったのであった。

「まだ、お休みになられていなかったのですか？」

ノックの音とともに聞こえてきたそのおっとりとした口調の言葉にカディーナはゆっくりと部屋の入り口を振り返った。シンプルな調度品と明度を落とした照明に包まれた部屋の入り口に立っていたのは彼女の妹であるフローラだった。

パタン、と、フローラは後ろ手に扉を閉じる。

「カディーナお姉様。そうも毎晩思い悩んでおられては、いつか倒れてしまいますわ」

「……」

その言葉には何も答えず、カディーナは再び正面の鏡に視線を戻した。

それからしばし間があつて、

「……何を考えているのかしら、あの子は」

と、カディーナは言った。

「ルクレツィアのことですか？ …… あれは本当にあの子が望んだことなのです。あの子は常日頃から外へ出たい、色々な世界を見て回りたい、と、そう言っていたではありませんか」

「だからって」

カディーナは眉間に皺を寄せ、腹立たしそうに言った。

「あんな騒ぎを起こす必要はなかったわ。ちゃんと相談してくれたなら、父上に掛け合つて、帝都やネービス辺りに留学させることだつてできたじゃないの」

「……」

フローラはゆっくりと部屋の中央に進んで、1人掛けのソファへと腰を下ろした。

カディーナはそんな妹の動きを目で追いながら、さらに続ける。

「なのにあんな無茶をして、ヴィルヘルム様にも御迷惑をおかけして」

「本当に、無鉄砲な妹ですね」

カディーナは腹立たしげに鼻を鳴らして、

「無鉄砲で、大迷惑な妹だわ」

「……………」

少し沈黙があつて、

「……………そんなに心配ですか？」

フローラがそう言うのと、カディーナは小さく握り締めた拳で鏡台の上を叩いた。

「当たり前でしょう！ 襲撃騒動を起こして、無事に帰ってきたと思つたら、今度は誘拐騒ぎ！ あなたは大丈夫だと言つけれど、どこの誰ともわからぬ怪しげな連中と一緒に　ああ、もう！ 今度という今度は愛想が尽きたわ！」

「……………」

フローラはクスツと笑つて、

「カディーナお姉様の愛想は本当に無尽蔵ですわね」

「何か言つた!？」

「いいえ、なにも」

フローラは視線を外へ向ける。

雲一つ無い、見事な満月の夜空だった。目を凝らすと、満月を背に夜空を飛ぶ鳥の姿が見える。……夜に飛ぶ鳥は珍しい。人間界の生き物ではない、魔界の鳥なのかもしれない。

「そういえばカディーナお姉様」

フローラは思い出したように言った。

「その、出来の悪い妹のおかげで大迷惑を被つてしまわれたヴィルヘルム様の件ですが、どうなさるおつもりですか？」

「……………なんのこと？」

少し間があつて、カディーナがそっぽを向いた。

フローラは淡々とした口調で続ける。

「あれだけ大勢の目の前であのようなことになってしまったのですから、何もなかったというわけにはいかないではありませんか？」

「あれは　あのときはヴィルヘルム様も混乱しておられたのよ」

「そうかもしれないけれど、あのような騒ぎになつてしまつてはヴィルヘルム様もお困りでしょう。あの方に懸想しておられた多く

の娘たちも、今回の件で」

「フローラ」

少し強い口調で、カディーナは彼女の言葉を遮った。

「私はもう寝るわ。貴女も部屋にお戻りなさい」

「……」

フローラは窓の外から戻した視線を不機嫌そうな顔の姉へと向ける。

「愚かな妹の不始末の責任をとって、カディーナお姉様がヴィルヘルム様をもらって差し上げるといっても」

「フローラ！」

「……はい。失礼しました」

そう言って深々と頭を下げたフローラは、眉間に皺を寄せた姉の表情に密かに苦笑を浮かべたのだった。

カディーナ姫とヴィルヘルム公が結ばれたと、ヴェスタたち一行がそんな噂を耳にするのは、これより2年も後の話である。

ヒンゲンドルフ領は“帝都”と呼ばれる大陸の中心ヴォルテスト領の東に国境を接する土地である。北には北西から南東に向かって大きく伸びる難所“グリゴラ山脈”がそびえ立ち、大陸の東北部に位置する領地から帝都を目指す人々は山脈を迂回するため、ほぼ間違いないこのヒンゲンドルフ領を通過することになる。

また、南東に国境を接するビルア領とは昔から犬猿の仲で、断絶とまではいかないまでも、国家間の交流はほぼゼロといってもいい状況であった。

「つまり追手の心配をする必要がほとんどないということですね」
見上げると太陽は天空の中心にあった。それでも風は冷たい。

冬の足音。

右隣を歩くルクレツィアは雪のように白い耳当てのついた帽子をかぶり、茶色の紙袋を抱えていた。紙袋の中には真っ赤なリンゴがいくつも入っていて、そのうちの1個が彼女の手の中にある。

「シャリッ、と、音がした。」

「……ルクレツィア。このような往来の真ん中で歩きながらリンゴを丸かじりというのは、高貴な身分の者としてどうかと思うのだが」「あら。その身分を捨てた者にとっては相応しい行いだと思いませんか？ それにリンゴはこのように食べるのが一番美味しいのですわ」

ルクレツィアは紙袋からもう1つリンゴを取り出して、

「ルーンさんも、1ついかが？」

と、後ろを振り返る。

俺たちの真後ろを歩いていたルーンはチラッとルクレツィアの手の中に視線をやって、「

「……もらっ」

「はい。ミュウちゃんは？」

「……」

左隣を歩いていたミュウは伺うように俺の顔を見上げる。
敢えて何も答えないでいると、やがてミュウは答えた。

「いただきます」

「はい。どうぞ」

「ありがとうございます」

ペコリと頭を下げるミュウ。

「……」

ヒンゲンドルフ領に降り立った俺たちは、そこから3日ほどかけて南東部にある小さな町へと辿りついていた。今日、明日とこの町に滞在し、旅に必要なものの買い出しや、これから向かう先について考えるつもりだ。

季節は冬。

（早いものだな……）

俺が記憶を失い、こうして旅をするようになってから半年が経過しようとしている。季節は春から冬へと移り変わり、当初はミュウと2人きりだった旅もルーンとルクレツィアが加わって4人連れに後ろを振り返ってみた。

ミュウとルクレツィアが並んで何事か会話を交わしていて、その少し後ろを歩くルーンが、時折ルクレツィアの発言に突っ込みを入れていたようだった。

ここ数日でわかったことだが、ルクレツィアはこのメンバーに入ると意外にも一番口数が多く、ミュウに対しては世話焼きな一面も見せた。ルーンとは相変わらず口喧嘩をしていることが多かったが、そこまで険悪になることもない。彼女らしい人付き合いの上手さといえるだろう。

意外と、潤滑剤のような性質の持ち主なのかもしれない。

ルーンと、ルクレツィア。

出会いはどちらもトラブル絡みで決して望んだわけではなかったが、改めて考えてみると、この2人と同行することになったのは運命的な何かだったのかもしれない。

歳が近いルーンと、同じ女性であるルクレツィア。

どちらの存在もきつと、ミュウの情操に良い影響を与えてくれるに違いない。

いや、すでに与えつつある、といったほうが良いか。

「御主人様」

その証拠に、ほら。

早足に隣に並んできて、俺を見上げる少女　人形のような少女は、少しずつ、表情で心を表現する手段を覚えつつあった

「……“ハーレム状態”というのはいったいどのような意味なのですか？」

「ぶっー!!」

ミュウの口から飛び出したその言葉に思いっきりむせて、すぐさま後ろを振り返る。

そこには

「ヴェスタ様？ どうなさいました？」

相変わらぬの微笑みを浮かべる少女。

「ル、ルクレツィア！ あ、貴女はミュウにナニを教えているのだ！」

「ナニを、とおっしゃられても」

ルクレツィアは可憐な いや、もう騙されん 人をからかう ような悪魔の微笑を浮かべて言い切った。

「ヴェスタ様の今の状況を端的に表現しただけですわ」

「端的どころか歪曲しまくってるではないかっ！！」

「御主人様」

ルクレツィアに食って掛かろうとした俺の袖を、ミュウがくいと引っ張った。

「ハーレムとは女性の住まう部屋というような意味ですが、御主人様がその状態というのは不思議な状態です。御主人様は男性ですし、体の中に女性が寄生している様子もありません」

「……寄生されてたまるか！」

「あら。でもイメージ的にはとても正しい解釈だと思えますわ」

「貴女は少し黙っていてくれ！」

「？」

不思議そうな顔のミュウ。

……見誤った。

ルクレツィアはもしかしたらミュウに悪い方の影響を与える存在なのかもしれない。

「ああ、もうお前ら、その辺にしとけよ」

最後尾を歩いていたルーンが割って入ってきた。

「こんな往來のど真ん中で騒いでちゃ余所に迷惑だろ。……ほら
呆れ顔のルーンがそう言って辺りを示す。

「む……」

確かに俺たち4人は周りの注目を集めまくっていた。

これはいかん。

「そ、そうだな。すまぬ、ルーンよ。俺もついつい熱くなって我を忘れてしまったようだ」

「いつものことだろーが」

ルーンの冷たい物言いが、このときばかりは頼もしく思えた。

それに　そうだ。

俺はようやく“そのこと”を思い出し、ルクレツィアに向かって堂々と言い放つ。

「よくよく考えてみればルーンがいるのだから、ハーレムどころか2対2ではないか。まったく貴女という人は、なんとという根拠のない言いがかりを　」

ゴスツ！！

「ぐえっ……！」

「さっさと行こうぜ。……おい、先に行ってるぞ、ヴェスタ」

俺の右脇腹の急所に打ち込んだ拳をふっと一吹きし、ルーンは不機嫌そうに鼻を鳴らしてズンズンと先に行ってしまった。

「ル、ルーンよ。急に何を　」

「あらあら。……ヴェスタ様、どうか御大事に」

ルクレツィアはクスツと悪戯っぽい笑みを残し、くるつとブロンドの髪をなびかせてルーンの後についていく。

「な、なんなのだ、いったい……」

ルーンの怒り出した理由がまったくわからず、俺はその答えを求めて、唯一残ったミュウに視線を向ける。

と。

「……その」

俺のほうを見て、そして言った。
「今のは、ちょっとだけ、御主人様が悪い……と、思います」
「え？」

びっくりした。

だが、その言葉の意味を問いかける暇もなく。

「……」

ミュウは小走りにルーンの後を追いかけて行ってしまった。

「……ミュウ？」

乾燥した冬の風がひゅうと吹き抜ける。

ルーンが何故怒り出したのか　こんなことが前にも何回があった気がするが　それについてはまったく理解できなかった、が、今はそのことよりも。

(ミュウが俺のことを非難したのは……初めてではなからうか)　しばし、放心。

といつても、ショックだったわけではない。いや、ショックキングといえばショックキングな出来事なのだが、それは悪い意味などではなく。

空を見上げる。

いくつかの人々との出会いを経て、ミュウは少しずつ俺の望む方向へ成長している。そういえば最近は自分のことを“奴隷”だなんて言い方をするともなくなった。

俺を非難したことが、さらに一歩前進したことの証だとするならば

良いことだ。

ゆっくりと立ち上がり、パン、パン、と、膝についた土を手で払う。

視線を上げると、少し離れたところでミュウが心なしか申し訳なさそうな顔をして俺を待っていた。

その向こうには相変わらずの微笑みを浮かべたルクレツィアと、腕を組んで不機嫌そうなルーンもいる。

人生はままならぬもの。

とはいえ　こういうサプライズならばいつでも大歓迎だ。

俺はこれからの、おそらくは4人で体験することになるであろういくつかのサプライズに想いを馳せながら、透き通った冬空の下、

俺を待つ仲間のもとへと駆けていくのだった。

プロローグ

「風の三十三族、か」

男の足もとには鳥の死骸が横たわっていた。

鳥の死骸　そこに横たわっているものをそう表現することには少々の違和感を伴うかもしれない。何しろその鳥の死骸はあまりにも巨大すぎた。体長は10メートル以上、真っ暗な森の中にうずくまるその様はまるで小さな丘のようにも見える。

“風の三十三族”と呼ばれるその獣魔は、とある冬の日の夜、ビルア領の方角から飛来し、ヒンゲンドルフ領南東部の森林地帯に降り立ったところをごく一部の人間に目撃された。

そして半月後。

男はその森にやってきた。

男は決して大柄というわけではないし、荒くれ者というイメージの外見でもない。身長は160センチを僅かに上回る程度で、その顔には若干の幼ささえ垣間見えるが、その手に携えた大きな剣が獣魔のものと思われる血で真っ赤に染まっていることから、この巨大な鳥型の獣魔を屠ったのがこの男であることには疑いの余地もなかった。

男は獣魔の生命活動が完全に停止していることを確認すると、手にしていた剣を背負い、その獣魔の体を調べ始める。

辺りは静まり返っていた。

普段、この夜の森を賑わせている多数の獣たちも、この巨大な獣魔と男の争いに巻き込まれまいと、辺りから軒並み姿を消してしまつたようだ。

やがて、

「！……これは」

獣魔の背中辺りを探っていた男が“それ”を発見する。

羽毛に引っかかるようにして埋まっていたのは、白い布切れのよ
うなもの。 峯るようにして手に取るとそれはハンカチだった。 綺
麗な刺繍が施されており、今は見る影もないほどに汚れているが、
元はかなり上質なものだろう。

「犠牲者の所有物か いや」

それにしても引っかかっている位置が不自然だった。

遺留品、というよりは、まるで

「この獣魔に跨っていた者の忘れ物、か」

それをポケットへと入れる。

それで男の目的は果たされた。

「……セオ隊長！」

ガサガサと音がして、新たに数人の男たちが 中には1名だけ
女性が混じっていたが 姿を現す。

皆、ヒンゲンドルフ領の紋章を右肩に付けていた。

“隊長”と呼ばれた男が振り返ると、その場に全員が整列する。

「今回の任務、どうやらこれで終わりではないようだ」

示された薄汚れたハンカチを見て、隊員たちの表情が一瞬にして
険しくなる。

誰もがその意味に気付いていた。

風の三十三族 それは獣魔の中でも大いに危険な存在であるこ
とを示すナンバー！

その獣魔を使役する“何者”か。

それがこの場にいる人間たちにとって、これまでにない危険な相
手であることを想像するのは容易なことだった。

「敵はもう、この領内に入り込んでいる。……示さねばならない。

このヒンゲンドルフ領に侵入することの恐ろしさを。 我らグリゴー
ラスが守護するこの地に足を踏み入れることの愚かさを！」

隊員たちの勇ましい復唱の音が、静まり返った森の中に木霊する。
隊長　セオフィラスはその声を聞いて大きく頷いた。

魔の者によると思われるビルア公女拉致の噂は、かの地とまともな交流のないこのヒンゲンドルフ領にも伝わっていた。

そしてその数日後に巨大な獣魔の背に乗って侵入してきた何者か。その目撃情報と、かの噂話の関連性について、疑いを持つにはその時間はかからなかった。

そして、獣魔の背に残された上質なハンカチ。

疑いは確信へと変わる。

ならば、彼らの取るべき道は1つしかない。

その魔の者を探し出し、排除する。

それがこのヒンゲンドルフ領の北方に横たわる山脈の名を冠した彼ら　デビルバスター部隊“グリゴラス”の使命だった。

その1

いったい、なにが起きたというのだろうか。

乾いた地面を撫でる冷たい風。

不吉を奏でる枯れ枝の摩擦音。

天空には清廉の月。

足もとは 複数の死体。

いったい、なにが起きたというのか。

「おい、ヴェスタ！ 逃げるぞ！」

険しいその声色はルーンのものか。

「ヴェスタ様！」

ルクレツィアの言葉も、いつになく張り詰めていた。

「御主人様。どうなさいますか？」

そしていつもどおり抑揚の無いミュウの声。

「いたぞ！ ヤツだ！」

「！」

糾弾の音が急速に迫ってくる。

糾弾？ なにを？ ……決まっている。

足もとに転がる多数の死体。迫ってくる声は彼らの仲間のもの。

その声が糾弾せんとするのは、この俺。

仲間を皆殺しにしたこの俺を糾弾せんとする声なのだ。

「ヴェスタ！」

「ヴェスタ様！」

ルーンのルクレツィアの声は耳元に、しかし遙か遠く。

どうしてこんなことになってしまったのか。

記憶は10日ほど前にまで遡る。

〈家庭円満の大量殺戮者〉
ジェノサイダー

「我輩は父である」

「はあ？」

山肌から吹き降ろす北風は冷たい。

枯れ木の立ち並ぶ道、乾いた風、薄灰色の空。

立ち止まって目を閉じると奇妙な静寂。

まるで自分1人だけが世界に取り残されてしまったかのようなそんな錯覚。

……冬の朝の空気というのはどうしてこつも無性に切ない気持ちになるのだろうか。

冬は人が恋しくなる季節だ。

人。

家族。

そう、家族なのだ。

「そしてお前は息子である」

「だから、なに言ってるんだ」

「いや、なに」

冷たい息子の液体窒素のように冷徹な突っ込みにもすでに慣れっこの俺は、ピツと人差し指を立てて彼に答えた。

「我々の立ち位置だ。一番の年長者である俺が父親であることには議論の余地はあるまい。とすると、一番小さいミュウが娘で、当然お前は息子ということになるではないか」

「……なにからどう突っ込めばいいのかわからんが」

息子 ルーンはこめかみに指を当てて眉間に皺を寄せていたが、やがてキツと俺の顔を睨んだ。

「とりあえず死ね！」

ゴスツッ！！

「~~~~~ッ！」

スネにかかと蹴りを食らった俺はその場でうずくまって悶絶。

これは痛い。

というか、普通の人間だったら骨折しているかもしれない。

「まあ。大丈夫ですか、ヴェスタ様」

と、1人の可憐な少女がその場に屈んで心配そうに俺の顔を覗き込んでくる。

可憐な少女 先日ので我々のパーティに加わった元ビルア公女、ルクレツィアである。

「だ、大丈夫なわけが ル、ルクレツィアよ。心配してくれるのはありがたいのだが……」

俺は彼女の顔を見て言った。

「貴女は何故、そんなにも満面の笑顔なのだ……？」

「もちろん、面白いからですわ
きつぱりと。」

ルクレツィアは満面の笑みを少しも崩すことなくそう言い切った。

……まるで安らいだ気がしない。

「ところでヴェスタ様？」

「……む？」

スネの痛みをこらえながらようやく立ち上がったところで、ルクレツィアが俺の隣に並び、やはり横から俺の顔を覗き込んで言った。
「ルーンさんとミュウちゃんが子供ということは、私はどのような立ち位置になるのですか？」

「そうだな。貴女はさしずめ、あの2人の母親というところだな」
「では」

ルクレツィアは少し首をかしげて、

「つまり、ヴェスタ様の妻ということですか？」

「む？」

俺は立ち止まってルクレツィアの顔を見た。

……儂く可憐な美少女。その瞳の奥に僅かに除く妖艶な女性の色。アンバランスで蠱惑的な魅力。

俺はこの少女が可憐な天使などではなく、悪戯好きな小悪魔であることをすでに知っていたが、それでもその魅力は少しも衰えることがない。

俺は答えた。

「いや、貴女はさしずめ長女といったところか」

そう言つと、ルクレツィアは一瞬だけ呆気に取りられた顔をしたが、すぐに可笑しそうにクスツと笑つて、

「……複雑な事情のある家庭なのですな」

「うむ。複雑なのだ」
などと。

まあ俺も平静を装っていたが、先ほどのルクレツィアの仕草と問いかげに一瞬ドキツとしてしまったことは正直に告白せねばなるまい。

これは別に、俺が彼女に対してそういう感情を抱いているとかそういうことではない。彼女は“そういう性質”の持ち主なのだ。

恋愛感情があつてもなくても、相手が男であつても女であつても、目を見つめて言葉を交わすだけで虜にしてしまう。歴史で語られる“傾国の美女”なんてのはきつと、みんなこのような能力を持っていたのだから。

とりあえず、彼女がそういったことよりも自分の好奇心を満たすことを優先するような性格であつて本当に良かったと思う今日この頃である。

ただ、その矛先が

「でも」

ルクレツィアは再び俺の顔を覗き込んで言った。

視線が絡まり、その奥へと引き込まれそうになる。

「父娘の許されざる関係というのも、なかなか魅力的なお話だと思いますか？」

「……」

その矛先が俺に対する悪戯に向けられていることは 正直、歓迎できない。

「な、なにを馬鹿な」

「御主人様」

それまで黙って俺の後ろを歩いていたミュウが不思議そうに言った。

「お顔が真っ赤です」

「よ、余計なことを言うてない！」

これは仕方ない。

仕方ないことなのだ！

「……おい、いつまで馬鹿やってんだ。さっさと行くぞ」

かなり先を行っていたルーンが呆れ顔をして待っている。

追い詰められつつあった俺にとって、それは渡りに船であった。

「む。そ、そうだな。さあ、行くぞ、ミュウ、ルクレツィア！」

「はい、御主人様」

「お供させていただきませすわ、“お父様”」

「……」

火照った顔に、冬の風はよりいっそう冷たかった。

現在、我々が滞在しているのはヒンゲンドルフ領の北端、大陸の中央に横たわる巨大なグリゴラ山脈の一部を北に眺める小さな町である。

ルクレツィアの参入 というよりは彼女が所有していた宝石類の売却効果により、常に不足しがちだった路銀は現在、この先1年ほど働かなくても過ごせるほどのレベルに回復していた。

そのおかげもあり、このヒンゲンドルフ領に入ってから、我々

は本来の目的　つまりは“人々の役に立つ”ことを目的に各地を歩き回っていて、それをいくつか果たすこともできていた（と思う）。

そして数日前。

この北の小さな町で山賊まがいの連中が時折町の人々に乱暴を働いているらしいという話を聞きつけ、俺たちはこうしてやってきたわけである。

「に、しても」

往来を眺めながら俺は呟いた。

「我々はどうも目立っているようだな」

こうして俺たちが歩くときはだいたい隊列が決まっていて、ルーンが先頭、俺がその後ろに続き、ミュウとルクレツィアがそれぞれ俺の斜め後ろについて歩く。

そんな俺たちの姿はかなり人目を引くようだ。

「まあ、俺のような長身で美形な男が颯爽と町を歩いていれば、それも仕方のないことなのかもしれぬが……」

「……統一性がなさすぎるから目立ってるだけだろ」

「む？」

そんなルーンの言葉に、俺は改めて一同を見回した。

薄汚れた、というよりは使い込まれた旅衣装に身を包んだ、小柄な褐色肌の少年　ルーン。

吸血鬼のような黒ずくめの衣装に身を包んだ長身の美青年　俺、ヴェスタ。

神に仕える巫女のような白い法衣に身を包んだ不思議な雰囲気少女　ミュウ。

そして、決して派手ではないが質の良い洋服に身を包み、いかにも良家のお嬢様然としたオーラを全身から放っている可憐な少女　ルクレツィア。

その光景は、どこからどう見ても

「さしずめ、仮装パレードといったところでしょうか?」

ルクレティアがそう言うと、ルーンは鼻を鳴らして、

「仮想パレード? チンドン屋の間違いだろ」

「あら。ルーンさんにしては上手いことをおっしゃいますね」

「にしては、つてのはどういう意味だ?」

と、ルーンがルクレティアを睨みつけたところで、ミュウが呟くように言った。

「チンドン屋　奇抜な衣装や楽器の演奏で人目を引き、客引きを行く集団のこと。……御主人様?　せつかくですから何か商売を始めてみますか?」

「商売?　なにを売るつもりなのだ?」

不思議に思っただけで質問すると、ミュウはおもむろに白い法衣の中から石ころのようなものを取り出した。

「これです」

「む。それは?」

「これは魔石です」

「魔石?」

「はい。私の力を少しずつ込めたものです。きちんと加工したものではありませんのですぐに壊れてしまいますが　お一つ手にとっていただけますか?」

「うむ」

言われるままに一つを手を取った。石ころ、のように見えたが、まるで宝石の原石のようだ。よくよく見つめてみるとつつすらと透き通っていて、中心が微かに発光している。

「では、それを」

ミュウがキョロキョロと辺りを見回す。

しばらく考えて、悩んだ末、

「あちらに思いっきり投げてください」

「あちら?」

ミュウが指しているのは、真上だった。

「よくわからんが……投げればいいのか？」

「はい。なるべく思いっきり投げてください」と、ミュウ。

よくわからんが とにかくやってみるか、と、上空を見上げる。

「お、おい、ヴェスタ」

ルーンが少し不安そうな声をあげた。

「大丈夫なのか、それ……」

「大丈夫？ なにがだ？」

俺はミュウに促されるまま、全力で投げる体勢に入りながらルーンに聞き返す。

「いや、だから」

「思いっきり投げてくださいね」

ミュウがルーンのことを遮る。

その言葉に、俺の闘争心が燃え上がった。

「任せておけ。雲を突き抜けるほど放り投げてやるうではないか」
体をひねり、投球体勢に入る。

集中。

集中。

集中

「最低でも雲の上ぐらいまで行かないと大変なことになりますから」

「……む？ ミユウよ、何か言ったか？」

ミュウが何事か言ったようだが、極限に集中していた俺の耳にはよく聞こえなかった。

代わりに、ルーンが慌てた声をあげる。

「ちよっ！ ヴェスタ！ 待て！」

「……ふうん！！」

ルーンの声と、俺の気合の掛け声はほぼ同時で。

その日、ヒンゲンドルフ領北部の地方では“もう一つの太陽”の目撃例が後を絶たなかったという。

そして数日後。

「いやあ、本当に助かりました！ まさかこんな小さな町にあの方々が来て下さることになるうとは！」

町の自警団の長だというその40歳前後の男は丸っこい顔に満面の笑みを浮かべ、感激を全身に表しながらそう言った。

「それは……喜ばしいことです、非常に」

頬が引きつってしまいそうになるのをどうにかこうにか我慢して俺はそう答えた。

「あの日の事件があつてからというもの、恐ろしい魔が現れるのではないかと町中が戦々恐々としておりましたが……なに。それが原因である方々が来てくださることになったのだから、これはむしろ怪我の功名といえるでしょう！」

「それは良かった」

俺がそう答えると、自警団長の男はニコニコしながらずっと顔を近づけてきた。

「……ということヴェスタさん。先日のお願いはひとまず撤回させてください。ああ、いえ、山賊を退治してくださいと申し出てくださったことには感謝しております。ただ、かえってあの方々の邪魔になってしまったては申し訳ありませんので。……そうそう。しばらくはこの町に留まってゆっくりと旅の疲れを癒していけると良いでしょう。山賊さえいなくなってしまうえば、この町は非常にどこかで良い町ですからな！ はっはっは！」

と、いつわけで。

「結果オーライということに相成った」

「……」

うっ、ルーンの眼差しがいつにも増して冷たい。

「お役に立てたようでなによりです」

そんなルーンの手前、あまり事情がわからずに喜んでいるミユウを誉めてやることもできず。

町の往来は活気に溢れていた。

先日の“2つの太陽”事件以来、一時は町中がひっそりと静まり返り、大声を出すことすらはばかられる空気が蔓延していたのだが、自警団長のいう“あの方々”が来ると知れ渡ってから以前以上の活気を取り戻しているかのように見える。

「ま、その連中が来ることになったおかげで山賊退治なんて余計な仕事をしなくて良くなったんだ。私にとっても確かに結果オーライだけだな」

と、ルーン。

俺は聞いてみることにした。

「ルーンよ。その“連中” 自警団長は“あの方々” と言っていたが、それは一体何のことなのだ？」

するとルーンは、うーん、と、少し考えて、

「私も詳しいことは知らないけどな。ヒンゲンドルフ領主お抱えのデビルバスター部隊のことだろ、きつと」

「“グリゴラス”ですわ」

「む。ルクレツィア。貴女は知っているのか？」

振り返って一番最後尾を静静と歩いていたルクレツィアにそう尋ねると、

「はい。ほら、あちらに」

と、彼女は真正面を指差した。

再び正面に向き直る。

「ちょうど到着されたようですわ」

見ると、薄緑色の制服に身を包んだ一団が通りを横切っていくのが見えた。

5、6、10……全部で15名ぐらいだろうか。

「あれが、グリ……なんとかか？」

「はい。イメージカラーであるあの薄緑の制服は山脈の語源ともなった獣魔、地の七族“グリゴラ”の肌の色から取ったそうです。デザインした方の頭の中を覗いてみたくなるほど趣味の悪い色ですね」

「そ、そうだな」

最近のルクレツィアは毒を吐くことを隠そうともしなくなってきた。

人間、正直に生きるのが何より……である。

ルクレツィアは続ける。

「同じ領主のお抱え部隊としては、帝都ヴォルテストの“ヴァルマシード”、北の雄ネービスの“ネスティアス”、騎士の国ヴィスカインの“対魔騎士隊”などに比べると量も質も遠く及びません。ただ、今のグリゴラスは“彼”の存在によって大陸でも一目置かれる存在となっているのですわ」

「彼？」

尋ねると、ルクレツィアは再び正面を指差した。

再びそちらに視線を送ると、ちょうどグリゴラスとやらの一団の最後尾がそこを横切ろうとしているところだった。

その、一番後ろ。

魔と戦う部隊だけあって、その集団はほとんどが体格の良い男（中には女性も含まれていたようだ）が占めているのだが、その後尾にいる男性はかなり小柄だった。遠目には女性に間違われても仕方のない、160センチあるかないか。

男性　いや、あるいは少年なのであろうか。

「ヴェスタ様はセオフィラス様のことを御存知ですか？」

「セオフィラス？　いや、知らぬが……ミュウ、知っているか？」

するとミュウは少しだけ考えてから、

「いえ。私の知識の中にはありません」

「そうでしたか」

ルクレツィアはちよつとだけ意外そうな顔をして、思案するかのよう
に視線を泳がせると、やがてルーンのほうを見て、

「ルーンさんは知ってますわよね？」

「……ああ、そりゃあな」

ルクレツィアは満足そうにうなずいて、

「このように、ルーンさんですら知っておられるほどの御方です」

「おい。やっぱりなんか引つかかるな、その言い方」

ルーンがルクレツィアに食って掛かるうとしたが、ルクレツィアは
まったく取り合わずに話を進めた。

「わかりやすく申しますと、セオフィラス様は大陸最強のデビルバ
スターなのですわ」

「大陸最強のデビルバスターだと!？」

その言葉に俺は思いつきり驚いた。

それもそのはず。デビルバスターというのは普通の人間が手も足
も出ない“魔”を退治する者たちのこと。当然、その称号を持つだ
けでもすごいことだし、それは人間離れした強さの証明ともなる。

そんなデビルバスターたちの中で、最強。

それはつまり、この大陸で最強の人間、ということでもあるのだ。
ルクレツィアは頷いて、

「まあ、実際には、大陸最強を噂されるデビルバスターは複数あり
ますので、最強と呼ばれるデビルバスターの中の1人、ということ
になりますわね」

「それでも十分すごい人物ではないか! ……こ、こうしちゃおれ
ん! ミユウ! 何か書くものを持ってないか!？」

「先ほど買ったリンゴの紙袋でしたら」

「そ、それで良い!」

ルクレツィアが怪訝そうに眉をひそめて、

「ヴェスタ様? なにをなさるおつもりですか?」

俺は答える。

「決まっておる！ そのセオフィラス殿にサインをもらってくるのだ！ こんな機会、そうそうあることではないからな！」

「え？」

ルクレツィアが呆気に取られた顔をする。

実は何を隠そう、デビルバスターという職業は俺の憧れである。

俺の、というよりは、世の男たちすべての憧れといっても過言ではないだろう。そのデビルバスターのトップを占める人物に出会える機会など、今後2度とないかもしれない。

「御主人様。お待ちください」

走り出そうとした俺に、ミュウの制止の声。

ルクレツィアがそれに続いた。

「そうですね、ヴェスタ様。いくらなんでも」

ミュウが言った。

「ペンもお持ちになられたほうがよろしいかと思えます」

「む！ そ、そうか！ 興奮のあまりうっかりしてしまった！」

さすがミュウは気の利く娘である。

と。

「……そうじゃないだろ」

呆気に取られていたルクレツィアに代わって、ルーンが呆れ顔をしながら俺の前に立ちはだかった。

「お前、少しは自分の立場を考えろよな」

「む？ なんのことだ？」

ルーンは軽く両手を広げてみせて、

「なんのこと、じゃないだろ。連中は魔を狩るデビルバスター部隊」

一方、お前はアホだが、アホほど強い力を持ったアホな人魔だ」

「……その“アホ”は3回も言う必要があつたのか？」

俺の抗議の声は完全にスルーされた。

「お前の正体がばれりゃサインどころ引導を渡されかねないぜ。…

…ま、こっちに被害が及ばないなら、私は別にそれでも構わないけ

どよ」

「む……」

そうか。

よくよく考えると、俺は“人魔”らしいのだった。興奮して力を出しすぎると元の姿に戻ってしまうこともある。

ルーンの言うことはもっともであった。

「私もルーンさんの御意見に賛成ですわ、ヴェスタ様。……というより」

ルクレツィアは少し興味深そうな微笑を浮かべて、

「ヴェスタ様方がそうだったことに無頓着であったことに驚きを禁じえませんわ。旅の道中にはそこかしこで“検査”があったでしょうに。どのようにしてそれらを潜り抜けられたのです？」

「検査？ ああ……」

大きな町の入り口や各地の検問では確かに、そこを通ろうとする人物が、人間に変化した“魔”でないかどうかを確認するための検査があった。

もちろん俺も何度か受けたことはあったが

「そういえばあまり気にしたことがなかったな。というより、先ほどルーンに言われるまで、自分が魔であることをすっかり忘れていたぞ」

「……」

ルーンが呆れてため息を吐く。

「が、俺の言葉を聞いたルクレツィアの瞳はさらに興味の色を深めた。

声が真剣みを帯びる。

「……魔が人に変化するには3種類の方法があると聞きます。1つめは自らの魔力で変化する方法。2つめは特殊な儀式によって変化する方法。そして3つめは“朧”と呼ばれる特殊なアイテムを使って変化する方法。このうち、通常の簡易検査で見つけられるのは1番目の方法だけ、と言われてますわ」

「ふむふむ」

興味深い話なので俺は黙って聞くことにした。

「どうやら彼女はそういつた方面の知識も豊富であるらしい。」

ルクレツィアは続ける。

「2番目の方法については、別の手段による入念な検査でほぼ発見できますが、特殊な器具と時間が必要となるので通常の検問では実施が困難といわれています。そして3番目の方法については事実上、人間の手による発見は不可能とされます」

「ふむ。俺は簡易検査しか受けたことがない。つまり2番目か3番目の方法によって変化しているということになるのかな？」

「それはありえませんか。だから興味深いのです」

「む？ というത്？」

気付くと、ルーンもその辺の話はそれほど詳しくなかったのか、興味深そうにルクレツィアの話聞いています。

「2番目と3番目の方法については魔の側に制約があるのですわ。」

2番目の方法はあらかじめ効果時間が定められていて自らの意思で解除することができず、変化中は魔としての力を一切振るうことができません。3番目の方法は人間の協力が必要で、かつ、効果は半永久。変化している間は大幅に魔力が制限されます。効果が切れるのは協力者である人間が死んだときか、魔の側が強引に誓約を解除したときですが、これは呪いの一種で、後者の方法を用いた場合、その魔は確実に命を落とすと聞き及びます。……いずれにせよ、どちらもヴェスタ様の現状を見る限り、ありえないことすわ」

「ふむう。いや、感心した。ルクレツィア。貴女は本当に博識なのだな」

俺がそう言うと、ルクレツィアは微笑んで、

「この程度の好奇心がないと、末妹の公女などという退屈な仕事は務まりませんわ」

けるつとそう答えた。

彼女にとって元いたあの場所はよほど退屈だったのだろう。

「……んで？」

と、黙って話を聞いていたルーンが口を挟んでくる。

「結局、こいつはどうやって人間の姿を保ってるんだ？ 今の話を聞く限りじゃ、どれにも当てはまらない気がするけどな」

ルクレツィアは頷いた。

「ルーンさんのおっしゃるとおりですわ。ですからそれ以上のことはヴェスタ様御本人しか御存じないはずなのですが……」

「さっぱりわからん」

「……でしょうね」

ルクレツィアとルーンの両方に、同時にため息をつかれてしまった。

しかし。

確かに興味深いことではある。

記憶を失っているとはいえ、ミュウの話によると俺が魔であることに間違いはない。実際、俺は魔としての力を振るうこともできるし、魔としての姿が顕現してしまうこともある。

(……待てよ)

そう。

ミュウだ。

ミュウならば何か知っているのではないだろうか。

……と。

どうやらルーンとルクレツィアも同じ考えに至ったようで、

「というところで、ミュウちゃん。貴女は何か知らないのかしら？」

「はい？」

ずいぶん静かだと思っていたが、ミュウは道端に屈みこんで小さな野良犬の頭を撫でているところだった。

途中から話を聞いていなかったらしい。

……いや、ちょっと待て。

「ミュウ。お前、何をしておるのだ？」

そう問いかけると、ミュウは子犬の頭を撫でながら俺の顔を見上げて、

「はい。この子がお腹が空いているとのことでしたので先ほど食べたリンゴの芯に残っていた欠片を与えていました。……もしかしていけないことでしたか？ 申し訳ありません」

ミュウが立ち上がるうとしたので、俺は慌てて制止して、

「ああ、いやいや、そうではない。むしろ気が済むまでリンゴを与えてやってくれ」

「？」

不思議そうな顔のミュウ。

それでも俺の言葉に納得したのか、再び野良犬の元に屈みこむ。

「……どうなさったのですか、ヴェスタ様」

「ああ、いや。すまん、ルクレツィア。ミュウに聞くのは少し待ってやってくれんか」

「？」

ルクレツィアは怪訝そうなままだったが、ルーンは俺の想いを察してくれているらしく何も言わなかった。

……そう。こうして動物と戯れるミュウの姿は非常にレアな光景だ。

動物と触れ合うことは、情緒の形成に非常に効果的だと聞く。ミュウが誰に言われるわけでもなく、道端の野良犬に興味を示したことは、おそらく喜ぶべきことだ。

(成長、しているのだな……)

その光景に、俺は少し心の中が暖かくなるのを感じながら、子犬と戯れるミュウの姿をしばし眺めていた。

「セオフィラス様。町に現れる山賊はどうやら山の中腹辺りに陣取っているようです」

町の集会場を貸し切り、そこを仮設の陣としたグリゴラスの隊員16名。

このうちデビルバスターの称号を持つのはグリゴラス総隊長のセオフィラスと、このメンバー中唯一の女性である副官エルダの2人である。

もともとグリゴラスに所属するデビルバスターは全部で9名と、領主が抱えるデビルバスター部隊としては少々心もとない。優秀なデビルバスターの多くが隣国の帝都ヴォルテストに流れてしまうという事情もあるのだが……それはさておき。

それでもグリゴラスが他のデビルバスター部隊に引けを取らない功績を挙げているのは、間違いなく総隊長であるセオフィラスが、デビルバスター数人分、あるいは十数人分という獅子奮迅の活躍を見せているからであった。

「セオフィラス様」

報告を受け、副官のエルダがセオフィラスに声をかける。

「例の森に残っていた痕跡と、数日前の天空の光。その山賊とやらと関係があるのでしょうか？」

「あるかもしれんし、ないかもしれん」

セオフィラスは手元の資料を見つめたまま素っ気無くそう言った。

「ただ可能性はある。我らが動くにはそれだけで十分だ。何しろ

」

そこでセオフィラスは初めて、エルダの顔を一瞥した。

「聞こえてきた噂話、残っていた痕跡、その他諸々を重ねて推測すれば、例の魔は我々が見たことも無いような大物だ。その目的が何であれ、このヒンゲンドルフ領に足を踏み入れたからには見過ごすわけにはいかん。必ず探し出して息の根を止める」

「……ビルア領の公女が人質に取られている可能性もあると聞きますが」

「それこそ」

セオフィラスは不機嫌そうに鼻を鳴らして、

「ビルアと犬猿の仲である我々には関係のないことだ。公女とてそのような形で利用され、屈辱的な扱いを受けるぐらいならいっそ死

なせて欲しいと願っているさ」

「わかりました。セオフィラス様がそういうお考えなのであれば、我々はその魔を滅ぼすことに全力を尽くします」

「頼りにしているぞ、エルダ。今回の敵、あるいは私1人だけの手には負えないかもしれん」

セオフィラスは再び資料に視線を落とし、彼女の顔を見ずにそう言ったが、エルダはその言葉に嬉しそうな表情を浮かべ、姿勢を正して敬礼をしたのだった。

その2

きつとわかりあえるはずである。

立場は違えど平和を思う心は同じ。弱きを助け、強気をくじく。その志が同じであれば、互いの立場の違いにどの程度の意味があるというのだろうか。

しかしながら。

難しいのは互いを分かり合うことである。同志であり、相容れる者であると理解することこそが難しい。

ならばどうするのか？

それは簡単だ。

示すのだ。

敵でないことはもちろんのこと、互いに手と手を取り合い、協力し合える仲であることを。それも誤解や疑いを生じやすい言葉によってではなく、態度　つまりは行動によって。

「ようし、皆！　我々も山賊退治に協力しようではないか！」

「……………はあ？」

その間の長さがルーンの心境のすべてを物語っているかのようだった。

（逃亡の大量殺戮者）
ジェノサイダー

グリゴラスがこの町にやってきた翌日の夕方。

冬の空気は相も変わらず冷たいものの、見上げれば切れ切れの雲の谷間から橙色に染まった太陽が顔をのぞかせている。日向の下を歩いていると、太陽から与えられる恵みの豊かさを全身で再確認するとともに、まだ遠い春にほんの少し想いを巡らせることができる。……今日はそんな、冬の陽気に溢れたのどかな1日であった。

であったのだが

「まったく……」

そんな温もりの残照が微かに残るのどかな町の夕暮れの中を、俺はぶつくさと文句を言いながら歩くこととなっていた。

原因はもちろん、先刻のルーンとのやり取りである。

「ルーンもルクレイシアも冷たい。そうは思わんか、ミュウよ」

「はい。それはおそらく、私たちが徐々に北上していることと、季節が冬になったことが主な要因だと思います」

「……うむ」

まったくもって噛み合っていなかった。

吐いた息が白くなり、ゆっくりと空へ上っていく。

道端の水たまりには薄氷が浮かんでいた。

隣を歩くミュウを見る。

俺と違い、ミュウは白い息を吐いていなかった。

「ミュウよ。お前はと思う？」

「なにがですか？」

お、このやり取りは久しぶりだな。

「つまりだ」

俺は立ち止まってミュウに向き直る。

「デビルバスターは確かに魔を退治するのが仕事だ。そして俺もお前も、その退治されるべき魔だ。不本意ながらな。しかし、だからといって何もせず最初から無条件に敵対するものだとそう決め付けてしまうのはいかなものだろうか」

「はあ」

「ミュウよ。お前は人間が嫌いか？」

「いいえ。私は御主人様を敬愛しています」

「……いやいや。それはそれで嬉しいが、そうではなくてだな」

「？」

「ふむ」

情緒が芽生えてきたとはいっても、まだ感情を表現するには足りない。

「じゃあ……そうだな。ミュウよ。お前、ルーンとルクレツィアのこととは好きか？」

ミュウはちよつと考えて答えた。

「ルーンさんは現在のところ御主人様に害を及ぼす確率は低いと考えられます。また、ルクレツィアさんは御主人様に害を及ぼす技術を有さないものと分析されます。結論としてはどちらも排除する必要はないものと思います」

「それでは答えになってないぞ、ミュウよ」

「はあ」

俺がそう言うと、ミュウは少し考えて再び口を開いた。

「ルーンさんは旅に関する幅広い知識を持っていて、人間界における金銭の使い方にも長けています。また、ルクレツィアさんは私が所有していない人間の常識や人間の営みなどの知識について非常に丁寧に説明をしてくれます」

「それで？」

「それで」

それ以上の言葉は考えていなかったようだ。ミュウは少しだけ眉間に皺を寄せて、それでも俺の問いかけに答えようと一生懸命に考えているようだった。

2、3分ほどもそうしていただろうか。

やがて、何事か思いついた様子でミュウは言った。

「ルーンさんとルクレツィアさんは、お二人とも、御主人様と私にとって好ましい人間だと思います」

「…………ふむ」

俺は満足して頷くと、言った。

「ミュウよ。お前が今感じているのが“好き”ということだ」

「え？」

ミュウはきよとん、とした顔をする。

俺は続けて言った。

「では、もう一度尋ねるとしようか。…………ミュウ、お前はルーンとルクレツィアのことをどう思う？」

「…………」

ミュウは躊躇った。

俺の言葉を消化しきれていないようだった。

俺は待つ。

ただ、ひたすらに。

やがて

「…………私はルーンさんとルクレツィアさんが好き、です」

「…………」

躊躇いがちに。

だが、はつきりと。

多少の困惑と、そしておそらく本人も自覚していないであろう照れの入り混じった表情が、まるで恋を覚えたばかりの少女のようで何とも愛らしい。思わず抱きしめたくなってしまったのも無理からぬことだが、何とかそれを押しとどめた。この往来でそんなことをすれば最悪誘拐犯か変質者に間違われかねない。

「ですが」

と、ミュウは真っ直ぐに俺の顔を見つめて続けた。

「それだったら私は、御主人様が一番、好きです」

「…………」

むぎゆう。

「ご、御主人様？」

しまった。あまりの愛らしさに反射的に抱きしめてしまった。

いや、まあ……アレだ。もし通報されたら、父親が娘を抱きしめて何が悪いのか！と、堂々と主張することにしよう。

(いやあ、それにしても成長したなあ)

出会った頃 何を言っても笑うことすらなかったあの頃の彼女ならば考えられないことである。

「あ、あの。御主人様……」

戸惑ったミュウの言葉に、俺はようやく我に返った。

(……っと。本題本題)

そう。

危つく目的を忘れそうになってしまったが、今の話は別にミュウに“好き”と言わせて俺が身悶えするためのものではないのだ。

俺はミュウから離れて、ピツと人差し指を立てた。

「ではミュウよ。ここで衝撃の事実が発覚する」

「？」

不思議そうな顔のミュウ。

俺は大きく息を吸って、止めた。

緊迫感を誘うバツクミュージックが脳内に流れる。

十分に溜めを作って。

立てた人差し指をびしっとミュウに突きつける。

そして俺は言った。

「な、なんと！ ルーンとルクレツィアは、実はデビルバスターだったのである！！」

どおおおん！

ガヤガヤガヤ！

なんて、そんな効果音や観客のどよめきがあったかどうかはともかく。

「……」

ミュウはきよとん、としたままだった。

そして言った。

「御主人様。ルーンさんもルクレツィアさんも、身体能力を見る限

りデビルバスターの称号を所有している可能性は無いと思います」
真顔だった。

「あー……」

少し恥ずかしい。

ここが人通りの少ない通りであったことは不幸中の幸いであった。

「……コホン」

ミュウに突きつけていた人差し指をグーにして、口元に当てて咳払い。

仕切り直す。

「まあ、もしもの話だ。もしもそんな事実が発覚したとしたら、お前は どうする？ ルーンやルクレツィアと敵対するか？」

「はあ」

ミュウは少し考えて、それから少し困ったような顔をした。

「もしものルーンさんと、もしものルクレツィアさんは、御主人様に害を及ぼすのですか？」

「いや、そこは本物と変わらないと仮定する」

「でしたら戦う必要はないものと考えますが……」

今度は考えることなくそう答えた。

「だろう？ 結局のところ、俺が言いたいのはそこなのだ。デビルバスターとはいえルーンやルクレツィアと同じ人間。ならば、俺たちと仲良くなれる可能性も十分にあるとは思わんか？」

「……よく、わかりません」

「むう」

やはり少し難しかったか。いや、俺とルーンの間でさえ意見が分かれるような話なのだから、ミュウにいきなりその正否を判断しろというのは最初から無理があつたのかもしれない。

しかし……さて。どうしたものか。

グリゴラスに協力して山賊退治をするという俺の案に、ルーンは大反対のようだったし、ルクレツィアもルーンほどではないにしてもあまり肯定的ではなかった。ミュウを別にすると2対1。民主

主義の考え方からすると、これはどうにも分が悪い。

何か、こう……突発的なアクシデントか何かでグリゴラスに聞
わらざるを得なかった、なんて言い訳ができる状況に運良く出くわ
したりしてくれればいいのだが。

「ん？」

ふと気付くと、通りの一角が騒がしい。

見ると、果物売りの露店で3、4人の男たちが何やら揉めている
ようだった。

「困ります！ きちんと御代をいただいて帰らないと私が叱られて
しまいます！」

果物を売っているのは10代前半ぐらいの、まだあどけなさが残
る少年。

「あー、だからさ。明日払うって。今、持ち合わせがないんだよ。
ほら、どうせ明日も同じ場所で店開くんだろ？ そのときにきちん
と払うからさ。いいだろ？」

そう言った男は20歳前後だろうか。店の売り物らしき林檎の入
った大きな籠を片手にぶら下げている。

「で、でも、本当に払っていただけるかどうかわかりませんし……」
と、少年が躊躇いがちにそう言うと、仲間らしき別の男が少し声
を荒らげた。

「はあ？ てめえ、俺らを嘘つき呼ばわりする気かあッ？」

「ひっ……！」

少年がびくりと身を竦める。

「まあまあ。そう凄んじや可愛そうじゃねえか。それに、ほら。ど
うやら考え直して、俺たちのことを信用してくれたらしいぜ？ な
？ 明日払うってことでいいんだよな？」

「……」

周りを囲む大柄な男たちに、少年はただ怯えるばかりで何も言い
返せない様子だった。

……なんともけしからん。

残念なことにはここは人通りの少ない道で、他の彼らを注意する者はいないようだ。

ならば、仕方あるまい。

「ミュウよ。ここで少し待っている」

「御主人様？」

こんな非道を黙って見過ごしたのでは正義の味方の名が廃るというものだ。

そうして俺は、肩を怒らせながらその、何やらセンスの悪い

どこかで見たような気もするが思い出せない　薄緑色の制服を着た3人の男たちに向かっていくのだった。

「……ったく。ホント、ロクなこと考えねーよな、あいつは」

「ヴェスタ様のことですか？　私はなかなかユニークな発想だと感心いたしましたけれども」

「ユニークすぎんだよ、あいつは。自らあの連中に近付こうなんて、エサの入ってないネズミ捕りにわざわざ突っ込んでいくようなもんじゃねーか」

「あら、上手いことおっしゃいますね。ルーンさんにはユーモアのセンスがありますわ」

「お前の発言はいちいち馬鹿にしてるようにしか聞こえねーな……」
クスクスと笑うルクレツィアに不快そうな視線を送って、ルーンはゴロンとベッドに仰向けに転がった。

足もとにはまともめかけて放ったままの旅の荷物がある。

それを見て、ルーンは再びため息。

ヴェスタがあのような提案をしなければ、明日の朝にはこの町を発つはずだった。……いや、ルーンは今でもそのつもりでいる。ヴェスタが戻ってきたら、もう一度そのように説得する予定だったが、どうだろうか。

約半年ほど一緒に旅をしてきて、ルーンは彼が、一度言い出した
らなかなか曲がらない頑固者であることを身に沁みて感じている。
「だいたいあいつは自覚が足りねーんだ。魔のくせに、ちよっと気
を抜くと普通の人間のつもりで行動しやがる」

ルクレツィアは鏡台の前で長い髪を櫛に通しながら答えた。

「そうはおつしやいますが、ヴェスタ様が人魔らしい人魔であつた
とすれば、私も貴女もここにこうしてはいられないではありません
んか？」

「んなこたあわかつてるよ。そうなら、私がとづくにぶつ殺してい
るはずだからな。つたく、調子狂うぜ」

「……ああ。ルーンさんはヴェスタ様を、故郷を滅ぼした“黒ずく
めの人魔”かもしれないと疑っておられるのでしたね」

「……」

何も答えず、ルーンは不機嫌そうに天井を見上げた。

そう。元はといえばそれが目的だったのだ。

しかし

「なら、絶好の機会なのではありませんか？」

「なにがだ？」

その言葉に、ルーンは寝転がったまま視線だけを彼女に向ける。

「客観的に見て」

手にした櫛を鏡台の上に置き、膝の上に手を置いた体勢でルクレ
ツィアはゆっくりとルーンを振り返った。

「貴女がヴェスタ様をぶつ殺すのはまず不可能でしょう。ビルアで
の御活躍を見る限り、ヴェスタ様はかなりの力を持った魔です。そ
れは彼に付き従うミュウちゃんの力。先日の騒ぎの元となった魔
石の力を見ても明らかですわ」

その言葉に、ルーンは上半身を起こしてルクレツィアを睨みつけ
る。

明らかに不服そうだった。が、反論が無いのは、ルクレツィアの
言葉が至極もつともな指摘だったからだろう。

「で、あれば、今のこの状況を天から与えられた好機とお考えになつてはいかがでしょうか？ グリゴーラスの方々を利用し、ヴェスタ様をぶつ殺させるというのは貴女の復讐にとつてとても効果的な作戦だと思えるのですが」

そう言つて可憐に微笑んだルクレツィアに、ルーンは少し頬を引きつらせて、

「……お前、表情とセリフの中身がぜんぜん合つてねえよ」

「この顔は生まれつきですわ」

ニツコリと愛らしい笑顔を浮かべるルクレツィア。

そんな彼女を見て、世の中はとてつもなく不公平にできているのだと再認識したルーンは、再びベッドの上にゴロンと仰向けになつて、独り言のように呟いた。

「私は仇を探してるんだ。ヴェスタのヤツが仇じゃないなら、そんなことする必要ない」

そう言つたルーンに、ルクレツィアは少し首をかしげて言った。

「ヴェスタ様の記憶喪失が本当のことだとするならば、それを確認する手段はとつくに失われていると思ひますが……ルーンさんだつて、彼の記憶喪失が演技でないことはとつくに気づきになられているのでしょうか？ ……そもそも彼ほどの魔であれば、あなたの復讐を恐れて善人のフリをするなど、ただ面倒なだけでなんのメリットもないことでしょうに」

「……」

「となると、本来ルーンさんの探るべき道は2つ。ヴェスタ様のこととは諦めて別の手がかりを探るか、あるいはヴェスタ様を仇であると断定しその命を狙うか。後者を選ぶのであれば、むしろ先ほどのヴェスタ様の提案は歓迎すべきことではありませんか？」

「ふん。もつともらしいこと言いやがつて」

ルーンは吐き捨てるように言った。

「お前が何を考えてそんなこと言つてんのか知らないけど、私は今のところどっちも選ぶつもりはないぜ。だいたい確認する手段が無

いなんて、どうして断定できる？ あの馬鹿に記憶がないとしても、たとえば記憶を取り戻すとか、あるいは昔のあいつを知る連中が接触してくるとか、可能性は色々考えられるじゃないか」

するとルクレツィアは少しだけ意外そうな顔をした後、

「あら。何も考えていなさそうな顔をして、案外そうでもないのですね」

「……おい。あんまり人を馬鹿にしてると痛い目見るぞ。お前はもう、偉いお姫様でもなんでもないんだからな」

ルーンはそう言って凄んだが、ルクレツィアは涼しい顔で返す。

「私はただ仲間として、ルーンさんがこの旅にくっついてきている理由を知りたかっただけですわ。……しかし、それにしても」

と、ルクレツィアの視線が窓の外へと移動する。

つられて、ルーンは上半身をベッドの上に起こし、その視線を追った。

冬の陽は短い。窓の外の夕日はもうほとんど沈みかけている。

「ヴェスタ様とルーンちゃん、ずいぶん遅いと思いませんか？」

「……」

その言葉を聞いた瞬間、ルーンの背筋に嫌な予感が走る。そして非常に残念なことに、ヴェスタたちと一緒に旅をするようになってこの方、悪いほうの予感の外れたことのほうが少なかった。

「……まさか、勝手にグリゴラスと接触しようとしてるんじゃないや、あいつは変に律儀なところあるし、それはないか。けど……」

ルクレツィアは言った。

「意図せずして、何かに巻き込まれている、という可能性は大いにありますわね。ヴェスタ様のことですから」

「……」

ルーンは無言でルクレツィアを見る。

短い付き合いにもかかわらず、ルクレツィアもまた彼の特性をよく理解している。

嫌な予感が加速する。

ルーンはベッドから降りた。

「ちよつと探してくる。ルクレツィア、お前は」

「もちろん私も一緒にしますわ。入れ違いになったときのことを考えて、ここには書き置きを残していきましょう」

「……」

機先を制されて拒否する理由も見つけられなかったルーンは、無言のままにルクレツィアを引き連れ、急速に暗闇に包まれつつある冬の町へと飛び出していったのだった。

そして場面は、前話の冒頭へと巻き戻る。

「おい、ヴェスタ！ 急げ！ 早くこっちに来い！」

「ヴェスタ様！」

逃亡を促すルーンとルクレツィアの声に、呆然としていた俺の思考はようやく現実世界へと舞い戻ってきた。

迫りつつある糾弾の声はもはや話し合いの提案を挟み込むほどの隙間もなく。

足元に転がる死体。

その傍らには、赤い外果皮をどす黒い血で化粧した林檎の実がいくつも転がっている。

「く……」

殺気立った追求の声。そのまま立ち止まれば、俺自身はおろか、連れの皆の命さえ保障できるものではなかった。

仕方ない。

不本意ながら俺はミュウの小さな体を右腕で抱え上げ、漆黒のマントを翻して、その場に背を向けることにした。

「逃がすな！ 町の出入り口を封鎖！ 隊長へ報告だ！」

背中に聞こえた声。

どうやら俺は一瞬のうちに、町のお尋ね者になってしまったらしい。

「……どういうことだよ！ ヴェスタ！ お前、いったい何をやら
かしたんだ！！」

隣に並んだとたん、ルーンが激しい口調で詰問してきた。

「い、いや、それが俺にもさっぱり」

「ルーンさん、ヴェスタ様。今はそれよりも逃げることに集中いた
しましょう」

と、ルクレツィアが口を挟んだ。チラリと後ろを振り返って、

「ヴェスタ様はともかく、私とルーンさんの足では追いつかれるの
も時間の問題ですわ。何か策を考えませんと」

「一緒にすんな！ 私は1人でも逃げ切れるっての！！」

「そうですか。では……」

と、ルクレツィアは俺の左隣に並ぶと、

「ヴェスタ様。お願いいたしますね」

ぴよん、と。

「うお……つとお！！」

いきなり左半身にしがみつかれて、思いっきりバランスを崩しそ
うになる。

が、どうにかこうにか踏み止まった。

「ル、ルクレツィア！ いきなり危ないではないか！！」

「ヴェスタ様なら大丈夫ですわ」

「……う、うむ」

ニッコリと愛らしい笑顔を返されて、俺は何も言えなくなっ
てしまった。

可愛い女性に頼られると無理をしても頑張ってしまう。それは
悲しき男のサガなのである。

「ようし、ルーン！ 遅れずに付いてくるのだぞッ！！」

右腕にミュウ。

左腕にルクレツィア。

2人の少女を抱えたまま前傾姿勢になる。

「えっ！？ ちょっと、おま、ま、待て、ちょっと　！！」

「行くぞ!!」

思いつきり地面を蹴る。

地響きが鳴るほどの衝撃。

漆黒のマントが水平にたなびいて、夜の冷たい風を切り裂く。

全力疾走。

「おいしいっ！ 私を置いていくんじゃないいいいい!!」

「情けないぞ、ルーンよ！ 男なら足が千切れ飛んでも付いて来るのだ!!」

「ふ、ふざけんなああああッ!!」

ルーンの悲痛な叫び声が、暗い夜の町に響き渡った。

「黒ずくめの男に、白い法衣の少女？」

「はい」

副官エルダよりもたらされた部下の死と、その犯人らしき男たちの情報に、セオフィラスは動じた様子も無く視線を上げ、自分よりも背の高い女性副官の顔を見上げた。

「町で情報収集に当たっていた隊員3名、及び、騒ぎを聞いて救援に駆けつけたと思われる隊員3名の、計6名が殉職しております」

「……」

「また、敵は町の出入り口が封鎖されていることに気付き、どうやら山のほうへと逃亡した模様です」

セオフィラスは無言のまま、エルダの差し出した1枚の紙を受け取り素早くそれに目を通す。

「その他に同行していたらしい2人の人物というのは？」

「はい。1人は10代半ばと思しき少女。もう1人も同年代ですが遠目だったために性別は不詳とのことですよ」

「前者の性別はどうしてわかった？」

「良家の娘が着るような上質の洋服を身にまとっていたとのことよ」

す」

「良家の娘？　そうか……」

頷いて、少し考え込むセオフィラス。

エルダはそんな彼の表情を見て、何事か思いついたように目を大きく見開いた。

「……連れ去られたビルア公女の可能性があるとお考えですか？」

「可能性はな。黒ずくめの男に白い法衣の少女であれば、ビルア領に出現したという魔の噂ともピッタリ合致する。ビルア公女の件はともかく、連中が我々の探していた魔である可能性は高いだろう。

……よし」

ゆっくりと椅子から腰を上げるセオフィラス。

傍らに置いてあった抜き身の大剣　荒れ狂う風の名を付けられた神剣“狂嵐”の柄を右手で握り締める。

「セオフィラス様……」

「包囲網を敷いて敵の行動範囲を限定させつつ、決して手を出さないように通達しろ。噂に聞くほどの魔であれば、俺とお前以外の武器は魔力の壁に阻まれる可能性が高い」

「しかし……それほどの魔であれば、強行突破される可能性はないでしょうか？」

「それができるのなら最初から山へ逃げ込んだりはしない。一緒にいるのがビルア公女であるかどうかは不明だが、少なくともその存在を無視して強行突破できなかった事情はあるのだろう。とすると、刺激を与えすぎなければ強硬手段に打って出る可能性は低い」

「わかりました。全隊員に通達します」

敬礼し、エルダは足早に部屋を出て行った。

「……」

その後姿を見送って、セオフィラスは愛剣の柄を両手で祈るように握り締め、ゆっくりと目を閉じる。

「黒ずくめの魔　将魔か、あるいは王魔か。いずれにしても……」
締め切った部屋の中で、微かに風が渦巻く。

“狂嵐”の抜き身の刀身がぼんやりと緑色の光を纏った。

空気が重く、沈みこむ。

微かに幼さを感じさせるその容姿からは想像もできない、そこから発せられるその強烈な威圧感とは“最強の1人”の呼び声が誇張でもハツタリでもないことを示すのに十分すぎる。

「私のいるこのヒンゲンドルフ領で好き勝手なことはさせない……絶対に」

鋭く見据えるその視線の先には、夜の帳に包まれ不気味さを増したグリゴラ山脈の山肌が映っていた。

ほー、ほー。

ほー、ほー、ほー。

外から微かに聞こえてくる鳴き声は、フクロウだろうか。

「鳥の鳴き声を子守唄に夜を迎えるというのも、なかなかオツなものだな。こう、我々人間が自然界の一部であり、かつ自然界の一部ではないことを再認識させられるといふかなんというか。……なあ、ミュウよ」

「“ふうりゆう”というやつですね、御主人様」

「うむ。風流だなあ」

「……」
愛らしいミュウの相づちの後にチクチクと刺さってくる視線がある。

「自然の中で迎える夜。町の喧騒を忘れ、森の静寂に耳を澄まし、大地と風の声を聞く。これこそアウトドアの醍醐味だなあ」

「“だいごみ”ですね、御主人様」

「……」

「……」

ああ。

うーん。

……ダメだ、耐え切れん。

俺は現実から逃避することを諦め、先ほどから視線で俺を射殺さんとばかりに睨み付けてくるルーンへと向き直った。

「どうしたのだ、ルーンよ。そんなおやつを取られてしまった子供のような顔をして」

「んな生温いもんじゃねーっつもの！」

キーン……と。

辺りが静かなものだからその声は余計に大きく俺の鼓膜に響いた。

「ルーンさん。あまり大声は出さないほうがよろしいかと」

ルクレツィアが、今にも俺に掴み掛かってきそうな勢いのルーンを宥める。

が、援護射撃かと思ったのもつかの間、

「ですが、ヴェスタ様。そろそろ事情のご説明をお願いいたしますわ。私、追いかけること自体は嫌いではありませんが、事態が自分の手の内に無いというのはどうにも落ち着かなくて気分が悪いのです」

「ってゆーか、さ……」

ルーンが急に低い声を出す。

「あの連中、お前が殺したのか？ 確認はしてないけど、死んでた

よな、あれ……」

「ば、馬鹿な！ いきなり何を言い出すのだ、ルーンよ！」

俺はルーンに信じてもらえていないという悲しみを込めて訴える。

「俺が彼らを殺したなどと……俺がそんなことをするような男に見えるというのか!？」

「見た目はそう見えるし、それができるだけの背景もあるだろ、お前には。……普段のお馬鹿な行動からはそう思えないけどさ。でも

—

そう言ってこちらを見たルーンの視線は、いつになく真剣で、微かに困惑の色が入り混じったものだった。

「記憶を失う前のお前が大量殺戮者だったってのは、自分で言っていたことじゃないか。そんなお前が、たとえば急に記憶を取り戻してそういうことをしたって、それって不思議なことでもなんでもないだろ」

「な……いや」

静かなルーンのその言葉は、予想以上に俺の心をえぐった。

確かに。身に覚えがないとはいえ、俺が過去にそのような罪を犯してきたことはおそらく事実である。となれば、今、再び身に覚えのないところで同じ罪を犯す可能性がないとは言い切れない。

だから……そう。

ルーンがそうやって俺を疑うことも、当然といえば当然のことなのだ。

俺は言葉に詰まった。

いや、しかし。

ひとまず言うべきことは言わねばならない。

そして俺は口を開く。

「それは」

「そんなのはどうでもいいことですわ」

「え!？」

あっさり。

そう言い放ったルクレツィアに、俺もルーンも驚きの視線を送った。

「どうでもいいって、お前」

食って掛かるうとしたルーンを、ルクレツィアはうるさそうに片手で制止して、

「ヴェスタ様が記憶を失くされた経緯は存じませんが、記憶なんてそう簡単に蘇ったりまた失くしたりするものでもないでしょう。仮に、一時的に記憶が復活するというようなことがあるのだとしても

」

そう言って俺の顔を見る。

「今日のヴェスタ様は、別にその時の記憶が飛んでいるとか、そういうことではないようですし、今、私たちの目の前にいるのは、私たちの知っているヴェスタ様なのでしょう？　でしたら、昔のヴェスタ様が人間をたくさん殺したとか、記憶が蘇ったらまたやるかもしれないとか、そんなものは私にとってはどうでもいい、まさに糞食らえな議論ですわ」

「な」

そんなルクレツィアの言葉に、俺は気色ばんで声を張り上げた。

「なにを言うのだ、ルクレツィア！」

「なにか？」

あくまで涼しい顔のルクレツィアに対し、俺は声を大きくして言った。

「若い娘が“糞食らえ”だなどと、そんな汚い言葉を使うものではないッ！」

「……そっち、ですか」

何か予想外の言葉だったらしく、ルクレツィアはちょっと言葉に詰まった後、そう言って苦笑した。

「……しかし、まあ」

と、俺はルーンのほうを見る。

ルーンはなんだかバツの悪そうな顔をしていた。ルクレツィアの言葉に何か思うところがあつたのかもしれない。

「俺の過去のこととはともかくとして、今日の出来事に関していえば、俺はもちろん彼らを殺してなどいない。ただ」

と、俺は先ほど露店の前で起きた出来事を2人に話した。

「……そこで見かねた俺は、その3人をちよつと、こう……懲らしめてやったわけだ」

「ああ……なるほど。グリゴラスの連中とトラブルを起こした、つてところは間違いないんだな」

ルーンの呆れた視線がとてつもなく痛かった。

「ま、まあそうだが……し、仕方あるまい！　そのときは連中がグ

リゴラスの一員だと気付いていなかったのだし、あの状況で黙っていられる正義の味方がこの世界にいるというのだ！」

「自分を正義の味方と勘違いしてる馬鹿野郎なら私の目の前にいるけどな」

「うぐ……」

「で？」

「う、うむ……」

気を取り直して、俺は説明を続ける。

「3人の悪漢を軽く追い払った俺は、露店の少年から感謝されつつも名乗ることもないままに漆黒のマントを翻し、沈み行く夕日を追いかけるように、夜の帳に包まれつつあった町の通りを颯爽と」

「余計な情景描写はいらん！」

今日のルーンは突っ込みが厳しい。

「そ、そうか……つまり、その、宿へと引き返そうとしたわけなのだが、すぐに背後から叫び声と争うような音が聞こえてな。それでその現場に引き返したところ」

「グリゴラスの隊員たちが死んでいた、ということですね？」

と、ルクレツィア。

「うむ。応急処置をしようと思ったのだが、全員手の施しようがなくてな。それで呆然と立ち尽くしていたところに、貴女たちとグリゴラスの他の隊員たちが現れたというわけだ」

「……はあ」

深く、なんともいえない情感のこもったため息がルーンの口から漏れた。

「見事なトラブルメーカーっぷりだよ、ホント。私にや真似できないぜ……」

「……」

言い返す言葉もない。

ルクレツィアが言った。

「その出来事自体に色々疑問点がありますが　とりあえず、これ

からどうするか考えましょう」

と、周囲を見回す。

「この山小屋、冬の寒さを凌ぐという意味ではうってつけですが、身を隠すのに適しているとはいえませんが。小屋の存在は町の人を知っているでしょうし、グリゴラスもすでに把握していると考えて間違いはないでしょう」

ルーンが厳しい表情で、

「つまり、連中がここに来るのは時間の問題、ってことか……」

「食料もなしにここで籠城できるわけではありませんから、時間のあるなしはこの際問題ではありませんが」

そう言っただけでルクレティアは小屋の隅っこでぼんやりと外を眺めていたミュウに声をかける。

「ミュウちゃん。前みたいにあの大きな鳥を操って逃げたりってことはできないの？」

ミュウはゆっくりとこつちを振り返って、

「それはできません。あの風の三十三族はとくに私の支配から解放されていますし、この周辺に皆さんを背負って空を飛べるような獣魔の気配は感じません」

「そう……ヴェスタ様。私たちを守りながら強行突破……なんてことは不可能ですわね」

俺が答える前に、ルクレティアは自分で結論を出してしまった。

まあ間違っただけはない。何しろ向こうには最強と称されるデビルバスターがいるのだ。彼女たちを守りながらの強行突破など、許してくるはずもない。

「出頭して正直に話してみるといいのはどうだろうか」

俺がそう提案すると、ルーンはやはり呆れたように首を横に振って、

「捕まったら間違いなく“精密検査”だ。魔だつてことがバレたら最後、どんな言い訳をしたって信用なんてしてもらえねーよ」

「万事休す、ですわね」

「……」

何の策も思い浮かばず、俺とルーンは揃って沈黙する。

「ほーほーほー」。

フクロウの鳴き声。そこに混じって聞こえる微かな気配は、風か、獣か、はたまた俺たちを追い詰めんとするグリゴラスの足音か。

「御主人様」

と。

そこへ、相変わらず外を眺めていたミュウが呟くように言った。

「たくさんの気配が近付いてきます。どうなさいますか？」

「……」

「……」

「……」

緊張が走る。

ルーンがミュウのそばまで行って同じように外を眺めた。

「……私にはまだわかんないけど、かなりの数がいそうだな。20、

いや、30はいるか。もしかするとそれ以上かもしれない」

張り詰めたルーンの声。

しばしの逡巡の後。

俺は言った。

「ルーン。ルクレツィア。……こうなつては仕方がない。ここで

「

「分かれよう、つてのは無しだ」

言いかけた俺の言葉を遮って、ルーンがそう言った。

「し、しかし……お前たちだけなら、たとえ捕まったとしても、俺に脅迫されて無理やり連れてこられたのだと言えば」

俺がそう言つと、ルクレツィアが小さく首を横に振って、

「それでは、私たちが再会できる見込みはほとんどなくなつてしま
いますわ。ルーンさんはそれでもしばらく監視下に置かれるでしょ
うし、私は素性がバレればビルア領に強制送還されてしまうでしょ

「う」

「し、しかし」

「忘れるなよ。私はまだお前のことを信用したわけじゃない」

窓の外から視線を戻し、ルーンが不機嫌そうな顔で言う。

「お前がシロだと確信するまで逃がしはしない。私はそのためだけにこれまでお前に付いてきたんだからな」

「要約すると、ヴェスタ様たちと離れ離れになるのが寂しいということですわ」

「違うッ！ー！」

からかうような口調のルクレツィアに、ルーンが少し顔を赤くして食って掛かる。

「……いや、まあ。」

それがルーンの本心なのだとすれば、それはものすごく嬉しいことなのだが

「しかし、この場を切り抜ける方法は他に」

俺がそう言うと、ルクレツィアが何事か思いついた様子で言った。

「ミュウちゃん。あなたヴェスタ様とは “契約” とかいう力で結びついているのよね？」

ミュウは頷いて、

「はい。私と御主人様は契約によって結ばれています」

「それって……たとえば、ヴェスタ様がどこにいてもわかるとか、そういう力もあるの？」

「はい。ある程度であれば、方角、距離を感じ取ることが可能です」

「なるほどね。ヴェスタ様」

「む？」

「お一人であれば、この包囲網を突破することができます？」

「……やってみなければわからぬが……」

「やってみる価値はある、ということですね。では時間もありませんし」

と、ルクレツィアはくるりとその場にいる一同を見回した。

「先ほどのヴェスタ様の案を採用することといたしましょう。ただし分かれるのはヴェスタ様一人で、しかもおとり役を務めていただきますわ」

「む……しかしそれでは、お前たちのほうがかえって危険なのではないか？」

「問題ないでしょう。このメンバーでは誰がどう見てもヴェスタ様が主犯ですもの。向こうの主力は必ずヴェスタ様を追うはずです」

「しゅ、主犯とは……なんとも嫌な言葉だな」

俺が眉をひそめて嫌な顔を見ると、ルクレツィアはさらりと、

「仕方ありませんわ。そのとおりですもの。……さて、もちろんそれでこちらがノーマークになる、というわけではないでしょうけれども……」

そういつて、手近にあつた細長い角材を手に取った。

「私、公女のたしなみとして、棒術を学んでおりましたわ。こう見えて免許皆伝の腕前です」

「ぼ、棒術う！？」

またもや、俺の中の可憐な姫のイメージが崩れてしまった。

ああ、いや、今はそんなことを言っている場合ではないが。

「しかしそうだとしても、向こうは……下手をすればデビルバスターそのものを相手にすることになるのだぞ？　いくら棒術を心得ているといつても」

「そのときはミュウちゃんの力をお借りします。それと」

ルクレツィアはミュウへと視線を向ける。

「ミュウちゃん。あの日使った魔石って、あと何個くらい持っているの？」

「6個、あります」

白い法衣の中から、先日の事件の元凶となった石ころを取り出すミュウ。

ルクレツィアは満足そうに頷いた。

「それ3個ずつ、私とルーンさんに預けてもらっていいかしら？」

「……御主人様？」

許可を求めるミュウの声。

「……」

これを認めてしまえば、ルクレツィアの作戦そのものを認めてしまつことになってしまう。

危険だ。

危険極まりない。

が、しかし

「……わかった」

最後には折れざるを得なかった。

なにより、この4人が再び一同に会するためには、それ以外の方がが思いつかなかつたのだ。

ルクレツィアは頷いて、ルーンを見る。

「ルーンさんは、それでよろしいですか？」

「いいも悪いも、それしかないんだろ」

「ミュウちゃんは？」

「……」

ミュウはチラツと俺の顔を見た。

俺は黙って頷く。

それを確認したミュウは、ルーンとルクレツィアの顔を交互に見つめて言った。

「私も、また皆さんと一緒に旅をしたいです。ですから、ルクレツィアさんの作戦に賛成です」

はつきりと、そう言った。

「……」

「……」

むぎゆう。

「ルーンさん、ルクレツィアさん……いい、痛いです……」

2人に同時に抱きしめられて、さすがにミュウが苦しそうな声を

出す。

……どうやら、この得体の知れない衝動は俺たち共通のものだったらしい。

さて、とにもかくにも 方針は決まった。

「それでは行くか！」

ミュウから受け取った長剣を手に小屋の出口へ立つ。

感じていた気配は小屋の周囲に広がりつつあった。

この多数の気配を引き付け、かつ逃げ切るのが俺に与えられた使命だ。

客観的に見て正義の味方の立場と言い切れないのが微妙なところであるが、仲間たちと再び出会い、揃ってまた旅をするためだと考えれば、

心が、燃える。

燃えたぎる。

自然とこぶしに力が入った。

「皆、気合を入れるよ！ 行くぞおおおッ！」

と、俺が鼓舞の叫びをあげると、

「言われなくてもわかってるっっーの」

「私、基本的にそういうキャラではありませんし」

「……」

いまいち乗り切れない仲間たちであった。

唯一、ミュウだけが俺の言葉に大きく頷いて、言った。

「あんな人たちは“くそくらえ”です」

「……」

そんな彼女の将来に一抹の不安を感じつつも。

俺は小屋を飛び出し、夜の森へと飛び出していくのだった。

その3

作戦というのはそこにある程度の理屈が存在し、筋が通っていると、これで大丈夫、これで上手くいくはずだといった信じ込んでしまうものだ。

先ほどもそう。それを提案したのがいまいち好きになれない相手であったにもかかわらず、語る言葉にはそれなりの筋が通っており、その場にいた誰もが、おそらく敵はその通りに行動するであろうと信じて疑わなかった。

しかし、である。

現実はその甘くなかった。

敵がどう考えてそのような選択をしたのか、今、この場ではわからない。こちらの考えを読んだとか、まったく別の理由があったとか、あるいは何も考えていなかったとか、はたまた、こちらがおとりとして考えていた人物の存在に気付かなかったという可能性すら考えられる。

つまり完璧に思える作戦なんて、所詮はその程度のものでしかないのだ。全知全能、すべての運命を掌握し、すべての不確定要素を予測できる神のごとき存在でもない限り、必ず上手くいく作戦なんてあり得ない。

その結果が　　これである。

「……おい、ルクレツィア。確かお前、棒術の免許皆伝とか言ってたよな？」

「創作物の読みすぎですわ、ルーンさん。私のような若輩者が免許皆伝だなんて、世の中そんな簡単にいくはずないではありませんか」

「で？　実際はどのぐらいやれるんだ？」

「物干し竿も持ったことありませんわ」

絶望的だ。

辺りには彼らを追ってきた複数の気配。

そして視線の先には、暗闇の中、ぼんやりと浮かぶ薄緑色の光。ゆっくりと近付いてくるそれが大きな剣の形であると気付くまでにそれほど時間はかからなかった。

やがて姿を現すその持ち主 生い茂る木々の隙間に、大陸最強と謳われるデビルバスターの姿を見て、ルーンの心はさらなる絶望感に包まれた。

（デビルバスター VS ジェノサイダー 大量殺戮者）

これはさしずめキツネ狩りであろうか。

視界が極端に制限された暗闇の森を駆け抜けながら、俺はそんなことを思った。

俺の役目は敵の目を引き付けることにあるから、あまり本気で逃げるわけにはいかない。追いつかれないように、引き離し過ぎないように、加減することが大事だ。

なんて。

最初はそんなことに気を遣って走っていたのだが、途中でふと気付いたのである。周りを囲む複数の気配は一定の距離を保って追いかけてくるばかりで、仕掛けてくる様子がまったくない、ということに。

俺も向こうを傷つけたくなかったのでそれはそれで良かったのだが、それでふと、猟犬に追い立てられるキツネのような気分にな

ってしまったのだ。

向こうが手を出しあぐねているというだけならばいいのだが、何か思惑があつてそうしているのではないかという一抹の不安が鎌首をもたげてくる。

(どうしたものか……)

小屋を飛び出してから30分以上は経っている。ミュウたちも今頃逆の方向に逃げているに違いないのだが、正直なところ、俺自身今どちらの方角に向かつて逃げているのかわからなくなっていた。

自分でも忘れかけていたが、俺はそもそも方向音痴なのである。町の中ですら迷子になってしまうのだから、こんな目印のない森の中で、辿った道を記憶しながら逃げ回るなんて器用な真似ができるはずもない。

そう考えると、周りを囲んでいるであろうグリゴラスの人々の存在は、俺にとってむしろ光明といえるのかもしれない。もしも彼らが突然、俺を追い詰めることをやめて撤収でもしてしまえば、俺はここで遭難したまま餓死してしまうかもしれないのだ。

いや。

それはともかく。

(……嫌な感じがする)

不安は消えない。

俺が抱えている不安というのはつまり、敵に俺たちの思惑が見抜かれていること。早い話、一定の距離を保とうとしているのは相手も同じ考えで、こうして時間を費やしている間に、ミュウたちのほうへ追っ手が向かっているのではないか、ということなのだ。

そもそも俺を標的にしているのであれば、こうして30分以上も仕掛けてこないのはいかにも不自然なのである。

「……」

それから少し迷った結果。

俺は決断した。

確かめる必要がある。

……どうやって？

その方法は簡単だった。

右足を土の地面に突き立てるようにして急ブレーキをかける。

ぞ……ぞね……

取り囲むように追いかけてきていた周囲の気配が動きを緩める。

やがて俺が立ち止まったことを確認したらしく、向こうの動きも変わった。

戸惑ったように気配がざわつく。

……が。

待てども待てども仕掛けてはこない。

悪い予感は当たっていきそうな気がした。

さらに敵の動きを確認するべく、俺は大声を張り上げた。

「やめた！ 俺はもう逃げも隠れもせんぞ！ 話し合おうではないか！」

ぞわ。

ぞわ……

風の音か、人の気配か。周囲の草木がしきりに擦れあい、ざわめく。

じつと待つ。

動きはない。が、気配はある。

あるいはこちらから仕掛けるべきなのかもしれない、が、反射的に攻撃してくる可能性を考えると、なるべくならそれは避けたい。

俺に戦う気はないのだ。

結局、俺はさらに声を張り上げることにした。

「話し合おうと言っているのが聞こえるのか！ こちらには濡れ衣を晴らす準備があるぞ！ 責任者出て来い！」

ぞわ。

ぞわ……

(……ダメか。ならば)

と、そう思った矢先のことだった。

「何を言い出すかと思えば……話し合う？」

突如、薄暗い木々の隙間から浮かび上がるように、人の気配が現れた。

「む……？」

見覚えのある薄緑色の制服。グリゴラスの一員であることは間違いなさそうだが、意外だったのはその人物が女性だったということである。

歳は20代前半ぐらいだろうか。黒髪のショートボブ。やや大きめの理知的な瞳。いかにも頭が良さそうで、なおかつ比較的優しそうな印象の女性。

どうやら話を通じそうな相手だった。

が セオフィラスというデビルバスターの姿はない。

「話し合う、というのはどういうことだ？」

口調がやや男っぽいのは職業柄だろうか。

手には抜き身の剣を携えたままだ。

俺は言った。

「貴女が責任者か？ まずは名乗らせてもらいたい。俺の名はヴェスタという」

そう言うと、女性は律儀にもすぐに返答した。

「私はエルダ。セオフィラス様の副官だ」

「副官か、なるほど。それではエルダ殿。貴女に伺いたいことがあるのだが」

「お前と分かれて逃げた3人のことか？」

あっさりと。

「う、うむ。そのとおりだ」

「なるほど。やはり我々の目をこちらに引き付けて、まずは向こうを無事に逃がす算段だったか」

「……むう」

やはりバレていた。

エルダという女性は少しだけ笑った。

「残念だったな。どういふ事情か知らないが、セオフィラス様は前がああ連れを見捨てないであろうことをすでに見抜かれていた。ならば向こうを先に押さえ、あとは全戦力をもってお前を討ち取ればいい、とな」

「……」

わざわざ説明してくれるとは、見た目通りの親切な女性なのかもしれない。

俺は尋ねる。

「あの3人は無事なのであろうな？」

「どうか。ただ、セオフィラス様は殺生を好む方ではない。少なくとも誰がお前に従い、誰がお前に脅されていたのか、それが判明するまで命を奪うことはないだろう。……無駄な抵抗さえしなければな」

「……」

その辺、ルクレツィア辺りならば上手くやるだろう。ルーンもただの人間の少年だし、ミュウのことが心配ではあったが、一目で魔だと気付かれるようなことはないはずだ。

とすれば、仮に先に捕まっているのだとしても、ひとまず現時点では最悪の事態は免れていると考えていいだろうか。

「しかし……」

腑に落ちないことが1つあった。

「貴女の今の説明が本当だとすると、理にかなわぬことがある」

「なんだ？」

エルダは微笑んだままだ。

俺は言った。

「先ほども言ったように完全なる濡れ衣とはいえ、貴女たちは俺のことを、仲間を殺した犯人だと思っているはずだ。そうであろう？」

「濡れ衣？ 誰がそんなことを信じると？」

まあ、それはそうだろう。あときあの現場にはすでに俺しかいなかったし、真っ向から申し開きのできない事情があったとはいえ

あの場から逃げ出してしまったのだから、彼らが俺のことを犯人だと考えるのは当たり前のことである。

犯人は俺ではない。

しかし、俺は誰が彼らを殺したのか説明することもできないのだ。だから今はとりあえずその話は置いておくことにして、

「いやつまり、貴女の説明どおりなら、そちらは全力をもって俺を討ち取る予定だったのではないのか？　しかし見たところ　その辺りに部下を待機させているのかもしれないが、俺の目の前には貴女しかない。少なくとも、大陸最強と謳われるセオフィラス殿が戻ってくるのを待たなくては、その計画は意味がないのではないか？」

と、俺は言った。

至極当たり前のことである。

そんな俺の疑問に対し、エルダはすぐに答えた。

「部下たちがここに姿を見せない理由は簡単だ。……部下たちではおそらくお前に傷を付けることはできない。彼らを連れてきたところで無駄な犠牲を出すだけだからな」

「……ふむ」

傷を付けられないかどうかはともかくとして、とりあえず向こうはそのように考えているらしい。それは理に適っている。

しかし。

向こうがこちらを過大評価しているのだとすると、ますます腑に落ちない。

彼女がセオフィラスの到着を待たずに俺の前に姿を現した理由。

……腑に落ちないといえば、もう1つある。

いったい誰が、グリゴラスの隊員を殺したのか。

2つの疑問。それらには、何か関連性があるのだろうか。

ふと、そんなことを思った。

一見無関係に見える2つの疑問。それらが実は裏で繋がっていたなんてのは、ミステリものの定番でもある。

とすると

俺はまっすぐに目の前の女性 セオフィラスの副官エルダを見つめる。

理知的なその表情が、一瞬、深慮遠謀を企む策略家のようにさえ思えた。

「ではなぜ」

俺は尋ねた。

その、変わらぬ微笑みを浮かべる女性に向かって。

「なぜ、貴女はわざわざ俺の前に姿を現したのだ？」

「それはもう、察しておられるのでしょうか？」

女性の浮かべていた微笑が、ほんのわずかに喜色を増した。

俺の心の中で警告音が鳴り響く。

(まさか、この女性)

そんな俺の警戒を涼しい顔で真正面から受け止めて。

そして、エルダは言った。

「セオフィラス様を待たずに私が1人で出てきた理由はただ1つ。

……1人でお前を退治し、セオフィラス様に褒めていただくためだ

「！」

「……」

「……」

「……？」

一瞬。

相手が何を言ったのか理解できなかった。

「……すまぬ。今、なんと？」

「聞こえなかったのか？」

と、エルダは相変わらずの毅然とした態度で繰り返す。

キリツ、という擬音が聞こえたような気がした。

「お前を1人で退治し、セオフィラス様にお褒めの言葉をいただくため。そしてナデナデしてもらったためだ！」

「……」

俺の中で勝手に固まりつつあった、目の前の理知的な女性のイメ
ージが一瞬で崩れ落ちた。

「そ、そうか……ナデナデか……」
いや、待てよ。

その“お褒めの言葉”とか“ナデナデ”とかはもしかするとグリ
ゴラス特有の何かの隠語で、彼女の将来とか出世とかさういった
ものに多大な影響を及ぼす事柄なのかもしれない。

例えば彼にナデナデされた部下は出世が約束されるとか、運気が
上昇して幸せになれるとか、肩こりが治るとか　きつとさういう
ご利益があるに違いないのだ。

だから、笑ってはいかん。
笑ってはいかんのだ。

……と。

必死に笑いをこらえる俺に気付かず、エルダは話を続けた。

「どれほどの力を持った魔か知らないが、お前ごときは私1人の力
で十分。セオフィラス様は心配しすぎなのだ」

カチャ、と、エルダの剣の切っ先がこちらへと向けられる。

どう見ても戦う気満々のようだったが、俺は一応聞いてみた。

「エルダ殿、話し合いは……？」

「問答無用と言っただろう！」

「やはりそうくるか……」

俺とて、ここまで来て戦いを避けられると本気で思っていたわけ
ではない。

それにこちらとしても、主力があちらに向かったという事実が判
明した以上、ミュウたちを助けに戻らねばならない。町に連れ帰ら
れ魔を判定する精密検査にかけられれば、ルーンやルクレツィアは
ともかく、ミュウは間違いなく処刑されてしまう。

不本意ではあるが、ここは戦うしかあるまい。

幸い、敵は無駄な犠牲は出たくないという考えから、集団でか
かってくる気はなさそうだ。つまり目の前のエルダという女性さえ

制圧すればこの場を抜け出せるということになる。

無駄なけが人を出したくないというのはこちらも同じ考え。
ならばここだけ、全力でやるしかないだろう。

俺はそう決意し、手にした長剣を正眼に構える。

これで相手が大陸最強を謳われるデビルバスターであれば絶望的だが、そうではない。それにセオフィラスという男の本来の作戦は、先に向こうの3人を押さえた後、自分が合流してから俺に仕掛ける、というものだったようだ。そこから逆に考えると、この状況はこちらにも勝ち目が十分にあるということだろう。

それなら

「!?!」

直後。

風を切る音に、体が反射的に動いた。

キィ……ン、という甲高い金属音。

「……受けた、か」

「な」

コンマ数秒前まで、数メートル先に立っていたはずのエルダがすぐ目の前にいた。

「な、に……?」

僅か十数センチ。彼女の剣は俺の首元に迫っている。受け止めていなければ、今頃俺の頭は胴体とお別れしていたに違いない。

背中に汗が滲んだ。

この女性　　只者ではない。

「セオフィラス様がいなかったら、油断していたか?」

剣を重ねたまま、女性は微笑んだ。

「む……うぐ……」

力を込めて押し返そうとしてもビクリともしない。

その力。

とても女性とは……いや、普通の人間とは思えなかった。

「まさか、貴女もデビルバスターなのか……?」

奥歯を噛み締め、両腕に力を込めながら俺は言った。

「言っただろう？ 部下たちならお前に傷を付けることはできない、と。それはつまり、私ならばお前と十分に戦えるということだ」

「……ふうん！」

渾身の力を込めて剣を弾き返す。

押されて いや、自らそうしたのか。離れて数歩後ずさったエルダの顔には余裕の表情が浮かんだままだった。

「さあ、邪悪なる魔よ。私の剣の錆となるがいい」

エルダは手にした剣をくるりと回し、芝居がかった大仰な言い回しをする。

デビルバスター。

それはほんの一握りの人間しか得ることのできない称号。

魔を退治する者であり、そして最強の戦闘能力を持つ者たちの証。

まさか、自分が本当にそんな連中を相手にすることになるとは思ってもいなかった。

(……どうするか)

逃げるか いや、それはない。ミュウを助けに行くならば逃げ回っている暇など無いし、この距離で背を向けて逃がしてくれるほど楽な相手でもないだろう。かといって、デビルバスターを相手に剣だけではどう考えても勝ち目は無い。

ならば。

甚だ不本意ではあるが、力を使うしかない。

「……ん？」

剣を逆の手に持ち替えた俺の行動を見て、エルダは怪訝そうな顔をした。

「なんのつもりだ？ まさか本当の利き手は逆で、手加減をしないたつても言っつもりか？」

「……そんなはずはあるまい」

が、当たらずとも遠からずといったところか。

確かに利き腕のほうがコントロールしやすいのだ。

剣も。

闇の力も。

……チリチリ。

手の平に感じる、微弱な電気のような感觸。

人間をターゲットにするのはこれが初めてだ。

細心の注意を払う必要がある。

……チリチリ……チリチリチリチリ！

急速に膨れ上がる、その力。

それを見たエルダが、驚きの呟きを発した。

「黒い……光？　闇の魔族とは珍しい……」

その呟きが、ひどく遠く聞こえる。

それもそのはず。

(く……うむむむむ……！！)

俺はその力を制御するのにすべての神経を注いでいた。気を抜けばあつという間に膨張しそうな力を押さえ、少しずつ、少しずつ、スケッチブックの上に色鉛筆を塗り重ねるときのように、薄く、薄く束ねていく。

いつかのように森を消し飛ばすわけにはいかない。

あれから約10ヶ月。

密かに行っていた特訓の成果を見せるときだ。

そうして　全神経を費やしていた俺にとってはかなり長く思えた時間。

た時間。

実際にはほんの数秒。

「……むん！」

右手の中で闇色の光が収束した。攻撃的なエネルギーを内包したまま、球体の形となって安定する。

どうやら上手くいったらしい。

ふう……と、大きく息を吐いて、その手をエルダへと向けた。こちらの意図を悟ったらしい彼女はすでに地面を蹴って横に動いていたが、全神経を研ぎ澄ませていたおかげか、最初の一手と違い、今

度は彼女の動きを目に捉えることができる。

(……まともにとたらんでくれよ！)

ギリギリ掠めるとか、そういうことを考えていられる相手ではない。当てる気で撃つて、後は向こうが凌いでくれることを祈るばかりだ。

手の平がエルダの動きを捉える。

距離は約5メートル。

緊張する。だが、もう躊躇はしない。

(よし……行けッ!!)

心の中でトリガーを引くと、手の平に収束していた力が闇色の光となって閃く。放出された力是一条の束となり、エルダを捉えんと迸った。

が、しかし。

「この程度か！」

「！」

俺の放った闇の力は、エルダの剣の一閃によってあっさりと四散してしまった。

驚愕。

一瞬の隙。

それが命取りだった。

「!?!」

瞬時にエルダの剣が迫ってくる。

「くッ……」

手にした剣で防御に回ろうとするも、相手の剣が早い。

受け切れない。

(このままでは)

薄暗い視界の中、微かな月明かりを反射しながら迫り来る白銀色の切っ先。

(死ぬ ?)

死。

その言葉が脳裏に焼き付いた　その瞬間。

「！」

ドクン……ツと。

異質な鼓動音が体の中心で鳴り響いた。

「あ……うお……」

心臓から押し出された灼熱のような血液が一瞬にして全身を駆け巡る。

体が沸騰する。

頭の中のどこかが焼き切れたような、そんな感覚があった。

あふれ出す力。

止まらない。

止められない　！

「なに……ッ!？」

誰かの驚愕の声。

そして、

「……おおおおお　　ッ!!!」

喉を付いた獣のような咆哮。

そして迸った闇の光は、まるで神に反逆する者の上げた狼煙であるかのように、夜の帳に包まれた天空を切り裂いていった。

「……御主人様？」

山を震わせる振動。

恐怖に飛び立つ鳥たち。

遠くで響いていた獣の遠吠えが一瞬で静まった。

「おい、ミュウ……」

木々の隙間から確かに見えた、天空へと登っていく一条の黒い光。

それを視線で追いかけて空を見上げるミュウに、ルーンは問いかけた。

「今の地震みたいの、まさかヴェスタのヤツか？」

「……」

ミュウは無言で頷いた。

「マジかよ……」

驚愕の眩きとともに、ルーンもまた、ミュウと同じく黒い光が登っていった上空を見上げる。

ルーンとて、ヴェスタが強い力を持つ魔であるのは知っていたが、しかし。

この巨大なグレゴリ山脈を震わせるほどの強大な魔力。

こんなにも遠くにいるのに、息が詰まってしまっほどの圧迫感。

(化け物か、アイツは……)

それはルーンの想像を遥かに超えるものだった。

「どうやらヴェスタ様も交戦状態にあるようですわね」

同じく、その方角を見つめていたルクレツィアがポツリと言った。落ち着いている。

いや、そう装っているだけかもしれない。

そしてルクレツィアは続けた。

「今の力を見てもなお、ヴェスタ様との戦いを望むおつもりですか？ 大人しく引き下がったほうがよろしいのでは？」

場違いなほどに穏やかなルクレツィアの言葉。

向けられた先にいたのは、もちろんルーンたちではなかった。

「いかがです？ セオフィラス様？」

「想定範囲内です。ビルア公女、ルクレツィア様」

その場においてたった1人、天空へ登っていった黒い光に見向きもしなかった人物。セオフィラスの口調もまた、平静を保ったままだった。

「……」

ルーンは自分たちの置かれていた状況を思い出し、首筋に浮かん

だ冷や汗を拭いもせず正面に立ったその男を見つめる。

彼女たちとそう変わらぬ背丈の小柄な男。だが、その体格に似合わぬ巨大な剣はまだ背中に抱えたままで、表情も佇まいも先ほどまでと微塵も変わらない。

平静な態度は、虚勢ではないのだろう。

(……こいつも、化け物か)

ルーンとてこれまでの人生、おそらく同年代の少年少女たちと比べれば遙かにたくましく生きてきた。その辺のチンピラ程度なら、たとえ大人の男が相手であっても負ける気はしない。

が、しかし。

そんなルーンであっても、この異常な状況に、まるで丸腰のまま猛獣の檻の中に投げ込まれてしまったかのような、そんな錯覚に陥ってしまっていた。

セオフィラスがチラッとルーンを見る。

「！」

背筋が凍る。

だが、セオフィラスはすぐにルクレツィアへと視線を戻した。

「しかし……ルクレツィア様。こちらも部下が先走ってしまったようであまり時間がない。こちらの質問に速やかに答えていただきたい
い
い」

「なんでしよう?」

「あなたは いや、あなたを含めたそちらの3名は、そのヴェスタという魔に自ら付いていつているのですか?」

「さあ、どうでしょう? だとしたらどうします? 女性を3人も侍らせてけしからんと、ヴェスタ様を断罪なさいますか?」

含み笑いを浮かべてルクレツィアはそう答えた。

大陸最強のデビルバスターを相手に、まるで人を食ったかのような言い返し。

ルーンは自分のことをそれなりに度胸のある人間だと自負していたが、ルクレツィアのこういうところは到底真似できそうにない。

「……おい、ルクレツィア。どうするつもりなんだ」

ルーンは相手に聞こえないよう、小声でルクレツィアの脇腹を突付いた。すると、ルクレツィアはチラッとルーンを振り返り、やはり小声で答える。

「……どうしようもありませんわ。セオフィラス様はここで私たちを皆殺しにしてしまうような野蛮な方ではありませんが、捕まって検査を受けることになればミュウちゃんの身が危険です。ルーンさんも、魔の協力者とみなされればただでは済まないでしょう」

「だったら……」

「今は少しでも時間を稼ぎ、ヴェスタ様が来てくださることに望みを託すしかありませんわ」

「時間を稼ぐと……」

これ以上はどうしようも　と、そう言いかけたルーンは途中で口を噤んだ。

「時間を稼げばいいんですか？」

と、それまで黙って2人の会話を聞いていたミュウがそう言って前面に歩み出たのである。

「では、あの人間を動けないようにします」

「お、おい、ミュウ……」

「それは危険よ、ミュウちゃん」

さすがにルクレツィアも少し慌てた様子だった。

だが、2人の制止にもミュウは眉一つ動かすことなく、

「平気です」

そう言ってセオフィラスと向かい合う。

「……」

セオフィラスはそんなミュウに何かを感じたのか。無言のまま、背負った大剣の柄に初めて手をかけた。

「ちよつと待てよ、ミュウ」

「いきます」

さらに制止しようとしたルーンの言葉と、ミュウの両手が光を放

ち始めるのはほぼ同時だった。

止める間もない。

「！」
眩い閃光。

そのあまりのまぶしさにルーンは思わず目を逸らした。

ミュウの両手から放たれた幾筋もの光の束が、螺旋を描きながらセオフィラスの体を捉えんとする。

「……」
セオフィラスが目を細める。

大剣を持つ手に力がこもった。

そして、その唇が“呪文”を紡ぐ。

「吹き荒れる、狂王の風」

傍目に見ればそれはただの一太刀。

背負った剣を振り下ろしただけの動作に過ぎなかった。

しかし“それ”がもたらした結果は、その大剣の冠する名のこと
く。

その剣の名は “狂嵐”。

「え？」

一瞬の無重力。

何が起きたのかわからなかった。

「……」

そして数瞬後に気付く。

ルーンの体はいつの間にか、まるで木枯らしに吹かれた枯れ葉が何かのように宙を舞っていたのだ。

「ッ」

反射的に伸ばした手が、隣にいたルクレツィアの手を掴む。彼女の体も同じように宙に浮かんでいたが、彼女はルーンよりも遙かに今の状況を理解できていないようだった。

(……頭でも打ったら！)

ルーンは咄嗟にルクレツィアの体を引き寄せて抱え込む。

受け身。

どっちが空でどっちが地上か、それすらもはっきり認識できない中、ルーンはルクレツィアの体を抱えたまま、かるうじて受け身の体勢を取ることに成功した。

そのまま、落下する。

「うぐ……ッ！」

「……ルーンさん!？」

腕の中でルクレツィアの悲鳴のような声が聞こえた。

……こいつ、こんな声も出せたのか　なんて、そんなことを考える余裕がルーンにあったのは、背中から地面に叩きつけられたことで息が詰まりはしたものの、衝撃は想像していたほどのものではなかったからか。

どうやらそれほど高く吹き飛ばされたわけではなかったらしい。体は動く。

どこにも大きな痛みはない。

「大丈夫だ……それより」

ルクレツィアの体を下ろし、自分も上半身を起こしたルーンは、ようやく自分を吹き飛ばしたものがとてつもない質量をもった“風”であり、それを起こしたのがセオフィラスであったことを悟る。

ルーンはすぐにミュウの姿を探した。彼女たちよりも前にいたミュウは、その風の影響をもっとも大きく受けているはずだった。

視界に最初に入ったのは剣を振り下ろした体勢のセオフィラスだ。彼の頭上は、まるで丸く切り取ったかのように枝葉がすべて消し飛んでいる。

が、

「ミュウ……?」

ルーンたちとセオフィラスの間にはたはたのミュウの姿はどこにもなかった。

嫌な予感がして、辺りを見回す。

そして、見つけた。

「……ミュウ!?」

「……」

ミュウはルーンたちの後方にいた。そこにあつた大きな木の根元に座り込んで　いや、その状況から察するに、そこに叩きつけられたのだらう。体を斜めにして座り込み、首はぐったりと後ろへ垂れている。

まるで死んでいるかのように見えた。

「おい……おい、ミュウ!!」

嫌な予感が胸を過ぎり、ルーンは慌ててミュウへと駆け寄った。

だが、

「……平気、です」

ミュウがそう言つて、ゆっくりと正面を向く。

……どうやら無事のようだ。

ルーンはホツと胸を撫で下ろした。

が、

「それよりも……ルーンさん。ルクレツィアさん。下がってください
い
「い

「お、おい、ミュウ……」

ミュウはまるで油の切れたカラクリ人形のようにぎこちない動きでゆっくりと立ち上がる。

白い法衣はどす黒い土に汚れていた。

足に力が入らないのだろうか、膝が小さく震えている。

いつもと変わらぬ無表情。

だが、その口元には薄っすらと血のようなものが浮かんでいた。
それでも。

「下がってください」

ミュウはもう一度そう言つて、ゆっくりとルーンとルクレツィアの
前に進み出る。

「ミュウ、お前」

その後姿にルーンは叫んだ。

「無茶だ！ そんな体で！」

ミュウの様子はどう見ても平気ではなかった。あの風を受けて背中からまともな大木に叩きつけられたのだから、それも当然だろう。ルーンは彼女がどういう類の魔であるか知らないし、体の構造が人間とどう違っているのかも知らないが、普通なら背骨がポツキリ折れてしまってもおかしくはない、それほどの深刻なダメージのはずだ。

だが、ミュウは下がらず。

相変わらずの抑揚のない口調で言った。

「……御主人様はこの先も皆さんと一緒に居ることを望んでいます。そんな御主人様の期待を裏切るわけにはいきません」

両手に光を集め始める。

「そのためなら、この程度のことは“くそくらえ”です」
そして放つ。

圧倒的な力を持つ光の束。普段ならその辺りの名も無き戦士が紙切れのように一斉に吹き飛んでしまうほどの強烈な魔力。

しかし 今回ばかりは相手が違いすぎていた。

「……」

セオフィラスが大剣“狂嵐”を振るうと、彼女の放った力はいとも容易く四散する。

「この程度のことは」

それでも諦めず、立て続けに2度、3度

そのたびにミュウの呼吸は乱れた。

そして4度目……誰の目にも無駄であることが明らかかな攻撃を放った後、ついにミュウは膝から地面に崩れ落ちた。

「……？」

ミュウは小さく首をかしげ、自分の足元を見つめる。

膝に力を入れる。

少し動いて、また崩れる。

その繰り返しだった。

「……………」
その行動を10回ほど繰り返した後、ミュウは地面に視線を落と
して動きを止める。

やがて、ポツリと呟くように言った。

「すみません。ルーンさん。ルクレツィアさん。……私、動けない
みたいです」

「……………」
ルーンは無言で、後ろからそっと彼女を抱きしめた。

「……………すみません」

「いい。気にすんな」

そう言っつてルーンはミュウの頭を撫でた。

責められるはずもない。そもそもこの作戦は、敵がこちらの思惑
を読んで主力をこっちに向けた時点で破綻していたのだ。

「謝らなきゃなんないのは、そもそもこの騒ぎのきっかけを作った
あのアホか、この作戦を立てたあっちの性悪女か」
ぎゅっと力の抜けたミュウの体を抱きしめる。

「口ばっかで結局何の役にも立ってない、この私だ」
「……………性悪だなんて、失礼ですわね。それに作戦なんてものは所詮
確率の問題ですわ。結果論で語ることはあまり好きではありません
の」

歩み寄ってきたルクレツィアが不満そうに言った。

「ですが、ミュウちゃんに責任がないというのは同意ですわ。……
さて、と」

そう言っつてルクレツィアが静かに目を閉じる。

「こうなつては私も覚悟を決める必要がありますわね」

「……………ルクレツィア？」

怪訝そうなルーンの問いかけには答えず、ルクレツィアは視線を
横に動かした。

その視線の先には、その場から微動だにしないセオフィラスが立
っている。

ルクレツィアは言った。

「セオフィラス様」

「……なにか？」

真正面に立ったルクレツィアに、セオフィラスがほんの少しだけ表情を動かす。

そこに浮かんでいたのは、困惑、だろうか。

ルクレツィアは続けた。

「こうなってしまった以上、はぐらかしても仕方ありませんので白状いたしますけれども、私は 私たちはいずれも、自らの意思でヴェスタ様と行動を共にしております」

「……自分が何を口走っているかわかっているのですか？ それはつまり魔に加担する者 デビルサイダーであると告白しているようなものですよ」

「解釈は御自由になさってください。いずれにしろ」

と、そう言って、ルクレツィアは懐から例の魔石を1つ取り出すと、いきなり上空へ向かって放り投げた。

「そういうことです。貴方が私たちを見逃してくださいさらないのであれば私は死ぬまで抵抗することになるでしょう。……幸い」

上空で魔石が弾け、一瞬、眩い光がその場を支配した。

「……」

セオフィラスが目を細める。

そんな彼を見据えたまま、ルクレツィアはさらに2つめの魔石を取り出した。

「ご覧のとおり、私たちはそのために必要な力を一時的に所持しておりますわ」

「ハツタリではない、と、そう言いたいのですか？」

「ええ」

「私がああなたの肩書きに遠慮をしても？」

「まさか」

ルクレツィアはこの状況にもかかわらず、天使のような小悪魔の

微笑みを口元にたたえた。

「私は貴方自身と、そして自らの強運に賭けているだけですわ」

「……」

セオフィラスは微かに俯いた。

笑ったように、ルーンの目には見えた。

「私に期待をされるのは迷惑だが、あなたがあなたの運に賭ける」とは勝手だ。さあ」

顔を上げたセオフィラスが真つ直ぐに正面を見据える。

「それでは結果を見てみるとしましょうか。美しきビルアの末姫様」

セオフィラスの体に満ちる闘気を感じて、ルーンも懐から魔石を取り出した。

残弾は3つ。

ルクレツィアの持っている分と合わせて5つ。

ミュウの直接攻撃さえ通じなかった相手に、それが役に立つとは到底思えない。

が

(何もしないより、マシさ……)

ルーンは心の中でそう呟いた。

腕の中の小さな温もり　小さな体でこれだけ頑張ったミュウの心を感じて、ルーンの胸にも勇気が沸いてくる。

(別にヴェスタのヤツのことなんざどうでもいいが　)

ゆっくりと立ち上がる。

そしてルーンは叫んだ。

「ここで引いちゃ、女が廃るってもんだ！　なあ、ルクレツィア！」

「……あら。ご自分が女だとちゃんと覚えてらしたのですね」

「うっせーよ、この性悪！」

空元気。

それでもないよりはマシだと、自らに言い聞かせて。

ルーンは目の前の絶望的な敵へ立ち向かう決意を固めたのだった。

「……」

そんな彼女たちを見つめていたセオフィラスの視線。

一瞬緩んでいたそれが、これまでになく厳しく、鋭く引き絞られる。

そして、

「……動くな」

低く、鋭く。

セオフィラスの足が地面を叩き、凶悪な力を秘めた大剣“狂嵐”が振り下ろされた。

その4

……やってしまった。

暴発した力は周囲のあらゆるものを吹き飛ばし、枯れ木の枝で埋め尽くされた森の天井に大きな風穴を穿っていた。

いつかの再現。

眼前に煌いた白刃。喉もとに感じた死の匂いに、俺の制御の枷はあっさりと外れてしまっていた。

罪なき人を二度と傷つけぬよう、罪なき人を理不尽な暴力から救えるよう、そのためにこの力を制御しようと密かに続けた努力。

それも結局はすべて無駄だったということか。

弱い。

俺は弱い人間だ。

こんなことでは、贖罪など夢のまた夢。

これでは 俺は大量殺戮者のままだ。

足元からゆっくりと視線を上げる。

少し離れた場所に、人間だったらしきものの下半身が転がっていた。

胴体から上はどこにも見当たらない。

それが 先ほどまで俺と戦っていた女性のものであることに疑いはなかった。

史上最悪の大量殺戮者^{ジェノサイダー}

「すまぬ……俺が、力を制御できなかったばかりに」
ガクリと膝から崩れ落ちる。

急速にあふれ出す力を抑えきれないと判断し、せめて目の前のエルダに被害が及ばないようにと力の向きをとっさに上空へと変えたつもりだった。

が、しかし。

暴発したその力は俺が想像していた以上のものだったらしい。

目の前にいたエルダは 胴体から上がない無残な姿となって俺の目の前に転がっていた。
いや。

正確に言うと俺の目の前に逆立ちしていた。

……逆立ち？

胴体がないのに逆立ちというのも変な話だから、逆さになって地面に着地しているというべきか。

ああ、いや。

下半身が綺麗に着地しているとか見事な月面宙返りを決めたとか、そんなことはどうでもいい。

「……」
ここで重要なのは、俺がこの罪深き力で再び犠牲者を出してしまい、それを後悔しつつも二度と犠牲者を出すことがないようにと決意を新たにすることなのである。

では、最初から。

「すまぬ。俺が力を制御できないばかりに……」

「……」
「む？ 今、なにか声が聞こえたような気がしたが」
「キョロキョロと周りを見回してみる。が、辺りには人の気配どころか草木に潜む虫の気配すらない。それらもすべて暴発した俺の力によって死滅してしまったようだった。」

人の声など聞こえるはずもない。

いや、あるいはこれは、志半ばに散ってしまったエルダの怨念の
声なのだろうか。だとすれば、俺にだけ聞こえるというのも納得だ。
と思ったら、突然、地面から生えたエルダの下半身が動き出した。
「おおっ!? これはまさか怨霊の仕業か!」

「……………」

「……………ふむ」

うめき声らしきものはその下半身のさらに下の地面から聞こえて
いるようだ。

試しにジタバタ暴れている足をつかんで引っ張ってみる。

すると、

「……………ぷはぁッ!!!」

ズボツという音がして、地面の中から泥まみれになったエルダの
上半身が現れた。

「おおっ」

なるほど。どうやら下半身が着地を決めていたわけではなく、上
半身が土の中に埋まっていただけらしい。そういえば俺がさっきま
で立っていた辺りはかなりの量の土が抉れて吹き飛んでいたし、吹
き飛ばされて転倒したところに大量の土が降ってきて埋まっていま
ったのだろうか。

「そうかそうか。どうやら俺の努力は無駄ではなかったようだな」
エルダの足を持ち上げたまま納得していると、逆さで宙吊りにな
ったエルダはしばらく状況を理解できなかつたらしく、視線だけを
左右に動かしていた。

が、やがてそれを下に いや、逆さになっている彼女から見て
下だから、実際には上か つまりは俺の顔に止めると、いきなり
暴れだした。

「キッ、貴様ッ! これはいったいなんの真似だ!! 離せ!!」

「うおっ、ちょ、ちょっと待つのだ! そんなに暴れたら
パッ、と、手が離れる。」

「…………え？」

直後、ゴキツといういい音がエルダの首の辺りから聞こえた。

「……………！！！」

悶絶して地面を転げ回るエルダ。

「きつ……………貴様、私を殺す気がッ！！！」

「い、いや、決してそんなつもりは。というか今のは貴女が暴れたから……………」

言い訳が必要なのかどうかも微妙だったが、一応そう弁解すると、エルダは左手で首を押さえながらゆっくりと立ち上がり、右の人差し指を俺に向けて言った。

「ふふふ、しかし残念だったな！ 今の決定的な機会に私を殺せなかったこと、後悔することになるぞ！」

「む……………そ、そうか」

「さあ、今度こそ死んでもらおう！ ……つて、ああ！ 私の武器が無いッ！！！」

「……………」

「くッ、あの破魔具がなければ魔力の壁を破れない。万事休すか……」

がくりと膝をつくエルダ。

……………なんだろう。そんな彼女の独り芝居を見ると、今まで英雄のような存在だと思っていたデビルバスターがとても身近なもののように感じてきた。

（しかし魔力の壁、ねえ……………）

“魔力の壁”というのは、すべての魔が持つとされる体を覆うバリアのようなものだ。人間は“聖力”と呼ばれる力と、それを増幅する“破魔具”あるいは“神具”という武具を用いて魔力の壁を破る。エルダはその“破魔具”の力がなければ俺の魔力の壁を破ることができないと、そう考えているらしい。

が、

（俺にそんなものあるのだろうか……………）

あまり自覚がない。

というか、ルーンの蹴りとか結構頻繁にクリーンヒットしたりしてるので、そんなものないんじゃないかという気がしているのだが
まあ、事実にせよ勘違いにせよ、彼女が戦意を喪失してくれるのであれば有難い話である。

結果的にはあの暴発も無駄ではなかったということだろう。

(さて、と)

それでは予定どおりミュウたちを助けに行くのでしょうか。もう一人のデビルバスター……最強と謳われるセオフィラスという男は、おそらく一筋縄ではいかないだろう。

話し合いで解決できればそれが一番いいのだが

「ま、待て！ 貴様、どこへ行くつもりだ!？」

踵を返した俺の背中にエルダの声が聞こえてくる。

「知れたこと。仲間を助けに行くのだ」

顔だけ振り向いてそう答えると、エルダはゆっくりと立ち上がって膝の泥を払いながら、言った。

「馬鹿な。私に勝てたからといって、セオフィラス様にも同じように勝てるでも思っているのか？ セオフィラス様は私のようなひよっことは比べ物にならない強さだぞ」

「別にそんなことは思っていないが、あの三人は俺の子供たちだ。勝てないからといって見捨てられるものではあるまい」

「子供……?」

エルダは怪訝そうな顔をした。

俺の言葉を額面どおりに受け取ってしまったのだろうか。

「正確に言えば、俺が腹を痛めたわけではないが」

するとエルダはあからさまな嫌悪感を顔に浮かべて、

「つまり攫っていった人間の女に無理やり産ませた子供ということか。……まさか私もその毒牙にかけようというつもりでは」

「……違っわあああッ!」

場を和ます冗談で言っただつもりが斜め上に曲解されてしまった。

……というか、どこまで俺を鬼畜外道に落とすつもりなのだ、この女は。

コホン、と、気を取り直して。

「子供のようなものだという意味だ。苦楽を共にする旅の仲間だからな」

「……意外だな。貴様がそんなことを言うなんて」

「いやいや。意外も何も貴女は俺のこと何も知らんではないか」

俺がそう突っ込むと、エルダはフンと鼻を鳴らして、

「直接はな。しかし……」

そう言いながらゆっくりと左右に視線を動かした。武器を探しているらしかったが、どこか遠くに飛ばされたか、あるいはその辺の土の中に埋まってしまったのか、見当たらないようだ。

「“黒づくめの魔”のことは知っている」

「……黒づくめの魔？」

その単語を耳にするのはとても久しぶりだ。

そしてルーン以外の人間の口から聞くのは初めてのことだった。

エルダは続ける。

「たった一人の従者とともに多くの町と村を滅ぼした恐るべき魔のことだ。貴様がその魔であるならば、ここで息の根を止めなければならぬ。……少なくともセオフィラス様はそうお考えだった」

「……」

それは俺のことではない　と。

そう言いたい。

言っただけが

と。

「……？」

ガサ、と。

静寂の中、微かに葉の擦れる音が聞こえた。

エルダの仲間か　と、咄嗟にそう考えたが、どうやらそうではない。

(この殺気)

その、向けられている先。

それに気付いた俺はすぐに叫んだ。

「エルダッ!!」

その直後。

一閃の雷鳴。

暗闇に包まれた森が一瞬だけ真昼のように白い光に照らされた。

鬱蒼と生い茂る木々の合間を縫うようにして奔った幾筋もの稲妻が、エルダを目掛けて飛んでいく。

「ッ!!」

しかしそこはさすがというべきか。エルダは森の奥に潜む何者かの動きにとくに気付いていたらしく、体の動きだけで稲妻を捌きつつ懐から二本のナイフを取り出すと、暗闇目掛けてそれを放った。うっ、という、うめき声。

エルダはさらに懐から短剣を取り出して構えながら、うめき声のした方角へと駆けていく。

「お、おい!!」

成り行きで、俺もその後が続くことにした。

マントに引つかかる枯れ枝に苦戦しながらも、エルダの薄緑色の制服を追いかけていくと、三十メートルほど進んだところで彼女に追いついた。

「いったい何が!!?」

そう言つてさらに駆け寄ろうとすると、

「止まれ!!」

「!!?」

振り返りざま、エルダの手元で白刃がきらめく。驚いた俺がその場に急停止すると、その鈍色の輝きは俺の喉元を指したところでピタリと止まった。

「エルダ殿……」

「貴様の仲間か？」

「なに？」

「答える。貴様の仲間か？」

言いながらエルダが足元を示す。

「……」

見ると、そこには若い男が倒れていた。

「魔、か……」

稲妻を放った雷魔だろう。エルダの放ったナイフは首と背中深く突き刺さっていて、どうやらすでに事切れている。ナイフの刺さっている角度からすると、攻撃して逃げようとしたところにナイフが飛んできた、というところだろう。

もちろん俺には見覚えのない男だった。

「俺は知らぬ。仲間などではない」

信じてもらえるかどうか疑問だったが、エルダは案外あっさりとな納得して、

「……だろうな。あの状況でこんな小物に不意打ちをさせてもおそらく意味はない」

と、短剣を俺の喉元から下ろした。

「しかし、だとするとこいつはいつたい……」

独り言を呟き、雷魔のもとに屈みこんで死体を調べ始める。

「……」

俺は念のために周囲を警戒することにした。

辺りは相変わらず静まり返っている。

気配は感じない。

「エルダ殿？ なにかわかったかな？」

「……」

「エルダ殿？」

返事がないので振り返ると、エルダは雷魔が着ている服の襟元を覗き込んだままで固まっていた。

「？ どうした？」

あまりにも動かないので、俺は彼女へと また短剣を向けられ

たらたまったものではないので、ゆつくりと、恐る恐る近付いていった。

「……」

手が届く距離まできても彼女は動かない。

その体勢のまま気を失っているのではないかと、そんなことを考えてしまったほどだ。

「エルダ殿？」

三度目の呼びかけ。

それでも反応がないので、俺はついに彼女の肩に手を伸ばす。

そして俺の指先が彼女に触れるか触れないか。

そこでようやく彼女がポツリと口を開いた。

「……ディセニウスの紋章だ……」

「む？」

聞きなれない名前だった。

「ディセニウス？ なんなのだ、それは？」

問いかけた声にゆつくりと振り返った彼女の顔は、

「……エルダ殿？」

この暗闇の中でもはっきりとわかるほどに青ざめていた。

「……しかしどうして。……いや、例の山賊とやらに偽装していた

のか？ とすると、町で部下たちを殺したのも」

呆然とした表情でそう呟くと、エルダはゆつくりとした足取りで

再び木々を掻き分けて森の先へと進んでいく。

「エルダ殿？」

「……」

わけがわからずに彼女を追いかける。

ミュウたちを助けに行かなければならないことはもちろん頭の中にあつたが、エルダの曲がりなりにもデビルバスターである彼女の尋常ではない様子に、嫌な予感が胸の中で膨れ上がりつつあつた。

静寂の暗い森をしばらく進んでいくと、彼女の姿はすぐに見つか

った。

そして

「なっ……!?!」

その光景に俺は愕然とした。

そこにも人が倒れていた。それも一つではなく、二つ、三つ

全部で七名。ただしそこに倒れていたのは魔ではなく、薄緑色の制服に身を包んだグリゴラスの隊員たちだった。

辺り一面に漂う血の匂い。

「これはいったい!?! エルダ殿! デイセニウスとはいったいなんなのだ!?!」

「……」

ゆっくり。

ゆっくりと、エルダは俺を振り返る。

その顔面はやはり蒼白。

そしてエルダは呟くように言った。

「……デビルバスター・ハンターズだ」

冬の夜空に怪鳥の鳴き声が響き渡った。

このヒンゲンドルフ領では“夜中に鳥の鳴き声を聞くと不吉が起きる”という言い伝えがある。この近辺には夜中に鳴く種類の鳥がそれほど生息しておらず、いるとすればほとんどがこのグリゴラ山脈に住み付いた鳥型の獣魔のものであったから、その言い伝えは単なる迷信というより、それなりの根拠に基づいた、危険を回避するための先人の知恵ということになる。

そんな言い伝えのせいか、ヒンゲンドルフ領に住む人々は昼間であっても鳥の鳴き声を聞くと反射的に嫌な顔をするのだと聞いたことがあった。

とはいえ。

セオフィラスはもともとヒンゲンドルフ領の出身ではない。ここに来たのはすでにデビルバスターの称号を得た後だったし、その言い伝えを知った後も、獣魔といえれば彼にとってむしろ追いかけて倒すべき存在であったから、不吉の象徴だなどといわれてもいまいちピンとは来なかった。

が、しかし。

「はじめまして、セオフィラス様。私は風の将魔ガラティア。このデイセニウスのまとめ役をやらせていただいている者です」

焦げ茶色の洋服をベースにおびただしい数の色とりどりの羽を装飾とし、肩に小さな鳥型の獣魔を乗せたその小柄な女性の言葉を聞いて、なるほど、言い伝えはどうやら領外から来た人間にとっても有効なものであるらしい、と、セオフィラスは思った。

不吉な者ども　　デイセニウス。

現存する中ではもつとも古い歴史を持つデビルバスター・ハンターズとして名を馳せる彼らの存在は、もちろんセオフィラスもよく話に聞いて知っていた。

十数年に一度だけ表舞台に現れ、おおよそ一人か二人のデビルバスターを標的とする。

標的を仕留めそこなったことはこれまで一度もないという。

さもありません

セオフィラスはガラティアと名乗った風魔の後ろに視線を送る。

その視線に気付いたガラティアが慇懃な口調で言葉を続けた。

「ご紹介いたします。右にいる彼は地の将魔サルヴァトス。左の彼は同じく地の将魔クエンティン。そして後ろの彼は氷の将魔イーニアスです」

「……」

ガラティアを含めて四人の将魔。それだけでもたった一人のデビルバスターを仕留めるには十分すぎる戦力だ。

加えて

「彼らが率いているのはすべて上位魔たちです。数は全部で十三名。

デイセニウスには他に下位魔たちも多数所属しているのですが、偵察や監視、あるいはあなたたちを誘き寄せるための工作などが主な任務でして、戦闘には加わりません。また、私はいわば審判員ですので、他のメンバーが全滅するか、セオフィラス様が故意に攻撃してこない限り戦闘には参加しません」

「……」
「また、こうして私が説明している間に背後から不意打ちする、というようなこともありません。私がセオフィラス様にもわかるような開始の合図をして、それからようやく攻撃を始めることになりま

す。毒の類を用いることもありません。……それと」
ガラティアは少しだけ顎を上げ、セオフィラスの背後の暗闇に視線を送った。

「先ほどあなたが逃がした方々を追いかけて人質にするようなこと
もありません。これらはすべて我々が自ら定めたルールです」
もつとも と、付け加える。

「あなたを仕留めた後で、ついでに片付けてしまうことはあるかも知れません。ですから、あなたが頑張れば頑張るほど、彼女たちの生存率は上がることになるでしょう」

「……」
「さて。何かご不明な点はございますか？」
そう言っ

てガラティアは微笑んだ。
目の周りの筋肉がまったく動かない、無表情な鳥の目を想起させる不気味な笑みだった。

セオフィラスはデビルバスター・ハンターズの類に接触するのは初めてだったが、彼らがそれぞれにいくつかのルールを定め、それを破ることは決していないという話を聞いたことはあった。

ガラティアの話を聞く限り、それはどうやら本当だったようである。

「……一つだけ」

そして初めて、セオフィラスは彼女に対して口を開く。

「どうぞどうぞ。なんなりとご質問ください」

慇懃に微笑むガラティア。

そんな彼女に対し、セオフィラスは言った。

「お前たちは本気で私を狩るつもりなのか？」

「何を言うかと思えば……」

ガラティアは可笑しそうにクスクスと笑った。

「ここまでのお膳立てを冗談でやったとでも？ 我々はもちろん本

気ですよ、セオフィラス殿」

「そうか」

馬鹿にしたような彼女の言葉にも、セオフィラスは変わらぬ淡々とした口調で、

「……そうか。本気か。本気でこの私を殺すつもりか」

そう言って、手にした愛剣“狂嵐”を軽く握り締めた。

空気が動く。

微かな風が周囲を渦巻き、小柄なセオフィラスの全身が鬨気をまとう。

ゆっくりと顔を上げ。

睨む。

口元がゆっくりと歪んで、それは最終的に狂気 of 笑みを象る。

そしてセオフィラスは、喉を鳴らすようにして笑った。

「……その程度の戦力で？」

「！……サルヴァトス。クエンティン、イーニアス」

ガラティアが目を細め、右手を小さく上空に掲げた。

そしてゆっくりとセオフィラスに向かって振り下ろす。

「開始です。見事、あの獲物を仕留めてみせなさい！」

その言葉を合図にして。

三人の将魔。そして十三人の上位魔。

それらが持つ殺気のすべてが一人の男に集約された。

「……しかしエルダ殿。セオフィラス殿は大陸最強のデビルバスターではないか。そのような連中にやすやすと倒されるようなことはないのではないか？」

「……」

エルダはそんな俺の言葉に何も答えようとはせず、微かに盛り上がった土の中にキラリと光るものを見つけ、それを握り起こした。

彼女が持っていた剣だ。

そのまま、再び暗い森の奥へと進んでいく。

どうやら加勢に行くつもりようだ。

(……どうしたものか)

彼女の話によると、デビルバスター・ハンターズというのはゲームのような感覚でデビルバスターを狙う頭のイカれた連中らしい。デビルバスターを狙う以上、その連中にも犠牲が出ることが大半なのだが、そういったことはまるで意に介さない。

彼らが何故そのような行いをするのかは定かではないが、一説によれば“デビルバスターとはいえ我々が本気になればいつでも殺せるのだぞ”という、魔としての力の誇示が目的ではないかと言われているらしい。

つまり“人間ごときが調子こいてんじゃねーぞ、コラ”というわけだ。

実につまらん理由だ。が、それを実行しているというのだから、腹立たしい限りである。そういう連中がいるから、俺のようにたま魔だったりしただけで何の罪もないさわやか好青年があらぬ疑いをかけられたりするわけで、つまり俺がこんな面倒くさい状況に陥っているのはすべてそういう連中のせいなのだ。

が、まあ。

そいつらが腹立たしいのはひとまず置いておくことにしよう。

俺はエルダの背中を追いかけながら、

「貴女がセオフィラス殿を慕っているのはわかっているし、加勢に

行きたいという気持ちもわからんではないが、貴女は俺との戦いで怪我をしているではないか。その体で戦いに赴くのはかえって危険ではないか？　ここはセオフィラス殿を信頼して彼に任せるといのも
「

「……変なヤツだな」

ようやくエルダは反応した。

先ほどまでは顔面蒼白になって少々取り乱していたが、さすがはデビルバスターといったところか、早くも平常心を取り戻している。「私のことなど放っておけばいいではないか。こうなると町で部下たちを殺したのもディセイニスである可能性が高い。貴様らは無罪かどうかはまだわからんが、いずれにせよ今の我々には貴様らをどうこうする余裕はない。ボロが出ないうちにこのヒンゲンドルフ領を出ていくのが身のためだ」

「それは有難いのだが、俺が言いたいのはそのうちのことではなくてだな……」

俺がさらに食い下がると、エルダはぴたりと足を止めてこちらを振り返り、少しだけ眉をひそめて俺の顔を覗き込むようにする。

「それともまさかアレなのか？　いい人のフリで安心させた挙句、事業を始めるとか結婚するのに借金を返す必要があるとかわけのわからん理由を付けて私の財産を搾り取るうという魂胆か？」

「……貴女はどれだけ俺を悪党に仕立て上げたいのだッ!？」

本当にもう……真面目なのかふざけているのか本気なのか冗談なのか、まったくわからん変な女である。

エルダはそんな俺を一瞥すると、ぷいっと正面を向いて、

「なんでもいいさ。私はこう見えて浪費家だからそれほど財産を持っていないしな。どうしてもというならデートの一回ぐらい付き合っつてやっても良いが」

「それはいいのか……」

まったくわからん。

ふん、と、エルダは鼻を鳴らして再び歩き出す。

「ま、どちらにせよその機会はおそらくないだろう。……貴様はさつさと仲間を探しに行くがいい。連中の標的はセオフィラス様だろうが、気まぐれで貴様の仲間が殺されないとも限らないからな」
「だから先ほどから言っているではないか。セオフィラス殿ならばそんな連中にやられたりしないのではないかと」と

「……」
少しの沈黙。

エルダは俺に背を向けたままで言った。

「セオフィラス様は最強かどうかまではわからんが、間違いなくトップクラスのデビルバスターだ。たかがデビルバスター・ハンターズごときにやすやすと殺されてしまう方ではない」

「だろう？　ならば貴女が行くとかえって」
「だが」

俺の言葉を遮ってエルダは続けた。

落ち着いた口調。

しかし

「デイセニウスは、その“たかが”の枠には収まらない」

口から出る悲観的な言葉とのギャップに、隠し切れない違和感を感じた。

「やつらは十数年に一度、その時代でもっとも名を馳せているデビルバスターを常に標的としてきた。……にもかかわらず仕損じたことは一度もない」

小さくそう呟き、エルダは肩越しにこちらを振り返った。

「言うなれば、そう。ヤツらは“史上最悪”のデビルバスター・ハンターズだ」

「史上最悪……だと……？」

使い古されたその表現。

それが事実と一致する場合が、果たしてどれほどあるだろうか。

しかし俺は彼女の態度から、それが脅しても誇張でもなく、おそらくは真実であろうということを感じていた。

そしてその瞬間、俺は悟る。

その落ち着きは覚悟を決めたが故。

彼女は死ぬつもりなのだ、と。

「しかし、それが本当なら貴女が行ったところで」

エルダは視線を斜め下に落として、

「私ごときで力になれるかどうかはわからんが、それでも私はセオ
フィラス様の副官だ。生も死も、すべてを共にする義務がある。だ
から私は行く」

ゆっくりと歩き出す。

悲壮な決意。

彼女の語る敵の姿が本当だとするならば。

彼女の死もまた、その言葉どおり避けられぬものとなるだろう。

「エルダ殿」

と、俺はそんな彼女を追いかけようとして、

「……いたぞ！」

「!?!」

静寂の森に突然響いた叫び声に、俺は心臓が飛び出るほど驚いて
振り返った。

左肩が裂ける。

右の太ももから血が流れ出す。

しかし、それらはいずれも軽い。致命傷となるはずだったダメー
ジを紙一重で大幅に軽減した結果であり、しかもセオフィラスはそ
れと引き換えに大きな成果を得ていた。

「……化け物か、貴様……!!」

「化け物はお前たちのほうだろう」

その傷と引き換えに放った斬撃は荒れ狂う風を刀身に纏い、氷の
将魔イーニアスの右わき腹から右肩辺りまでを一太刀のもとに吹き

飛ばしていたのだ。

確認するまでもない、致命傷だった。

「人間と侮ったお前の愚かさだ。氷の将魔よ」

「……」

頭部と左半身だけ残ったイーニアスの体が、糸の切れた操り人形のように力なく地面に崩れ落ちる。

それで、ちょうど十六人目だった。

「さて」

辺りは一面、どす黒い血の海。

三人の将魔と十三人の上位魔の死体。自らが流した血の数十倍の返り血を浴びてもセオフィラスは眉一つ動かすことなく、紡ぐ言葉には少しの乱れもなかった。

そして、

「次はお前の番だ」

その戦いの元凶である傍観者に向けた眼光は依然衰えず。

「……強い」

そんなセオフィラスの視線を受けた風の将魔ガラティアは、額に微かに冷や汗を浮かべ、予想外といった表情で引きつった笑みを浮かべていた。

「人間と侮った……確かにそうかもしれませんが。見込み違いであったことを認めましょう。私はこのディセニウスを引退した父から譲り受け、まだ八年しか経っていない。これが私の初陣なのです」

「……」

「貴方の足もとに倒れているイーニアスは、昔、父がこの日のためにさらって育ててきた子供でした。私は七つになるまで彼が本当の弟だと信じていました。氷魔である彼が私の弟であるはずはないのです」

「お前たちの内情に興味はない」

傍目にはそれとわからない態度でセオフィラスは息を整える。

三人の将魔と十三人の上位魔を相手にして、造作もなかったとい

えばそれは嘘だろう。彼自身もかなりの血を流していたし、平静を装っていても体はかなり疲労している。

しかしそれを表には出さない。

出さずに少しでも回復を計る。

残り一人とはいえ、目の前に居るその女は将魔族だ。どれほどの実力者が読みきれなかったし、万全を期すに越したことはない。

それに

まったく表情を動かさずに、セオフィラスはガラティアの一挙手一投足を注意深く見つめていた。

腑に落ちない　と、セオフィラスはそう感じている。

「興味はない、ですか。それは残念です」

そう答えるガラティアの態度には余裕がある。劣勢に追い込まれているという空気を微塵も感じない。

所詮頭のおかしな連中だから、そういうものなのだろう　なんて。セオフィラスは物事をそんなに楽観的に考えられる性分ではなかった。何の利益も求めず、ただ単にデビルバスターを殺すことを目的とする彼らの行動はセオフィラスにとって理解に苦しむものだが、それでもデビルバスター・ハンターズを名乗り、それに命を賭ける以上は、その行為に何らかの価値を見出しているはずである。目の前の女の態度には、それが潰えたという悔しさが微塵も見えない。

それが何を意味するのか。

楽観的ではないセオフィラスは、その答えをすでに持っていた。

それは至極簡単なこと。

目の前の女は、一対一の戦いでも十分に勝機があると思っている。あるいは

「……」

セオフィラスはほんの僅かに視線を上げた。数メートル先に立つガラティアの肩越しにその先の暗闇を見据える。

ガラティアがふふ、と笑う。

「気付きましたか？」

「……」

その背後に広がる無限の暗闇。

「……まだ、仲間がいたか」

そこに複数の気配があった。

その暗闇からぼんやりと人の輪郭が浮かび上がってくる。

「ご紹介いたしましょう」

そして再び。

慇懃な口調でガラティアは少しだけ声を張り上げた。

「右の彼は地の将魔ギリル。先ほど貴方が殺したサルヴァトスの実弟です。左の彼女は水の将魔フィロメーナ。そして後ろの彼が、雷の将魔レナックスです」

「……！」

「そして」

セオフィラスの表情が微かに動いたのを見て取ったのか、ガラティアが喜悦の笑みを浮かべた。

「彼らが率いる十三名の上位魔たちです」

「……なるほど」

細く、長く、セオフィラスはゆっくりと息を吐いた。

「余裕の根拠はそれか。……しかし愚かな」

愛剣“狂嵐”を構え、その表情が再び笑みを刻む。

息は整っている。

体はもちろん万全ではないし厳しい戦況であることにも違いはないが、まだ十分に戦える状態だ。

セオフィラスは言った。

「わざわざ戦力を二分するとは。最初から全力でかかればお前たちにもまだ勝機があったものを」

「二分？」

だが、ガラティアは少しも態度を変えずに言い放つ。

「二分というのはなんのことですか、セオフィラス様？」

そして今度こそ、セオフィラスの顔に微かな動揺が走った。

「！」

わわわ。

わわわ。

底なし沼のような暗闇がしきりに波立つ。

ピリピリと肌が痺れる。

無数の気配。

無数の殺気。

十や二十ではない。

もっと、もっと。

目の前にいる十六人よりも遙かに多い。

視線、視線、視線

「……」

その光景は、セオフィラスの不動の心にさざ波を走らせた。

見たこともない数の魔。

見たこともない数の敵

「この巨大なグリゴラ山脈に例えるのであれば」

そしてガラティアは微笑んだまま言った。

「貴方はようやく裾野を登り切ったところですよ。……では、本当の

山登りを始めましょうか、セオフィラス様？」

「」

ほんの一瞬だけ目を閉じ。

無言のまま、セオフィラスは戦いの姿勢を取った。

その5

“最強”と呼ばれるようになったのはいつの頃だったろう。

デビルバスターになったのが八年前。グリゴラスの隊長となつたのが三年前。初めてそう呼ばれたのはその少し前だったから、そう呼ばれるようになったのはおよそ三年半ぐらい前のことか。

自分より優れたデビルバスターの存在をすでに知っていたから、自分が本当に最強だと思つたことはないし、そう呼ばれたいと思つたこともないが、同時に、そう呼ばれることを拒否したことも一度もなかった。

周りが最強であることを自分に期待するのであれば、そう振る舞う。

呼び名に見合うだけの働きをする。

そう心がけるだけ。

この状況になつてもそのことは忘れない。

“最強のデビルバスター”は“最強の人間”ということでもある。ならば、人間の底力を示すのも自分の役目だ。

精魂尽き果てたかに思えた体に再び血が駆け巡る。

肩の腱が切れて左腕が上がらなくなつても。右足が重度の凍傷で満足に動かなくなつても。

愛剣を振るう右腕が動く限り戦い続ける。

最強の呼び名に恥じることはないように。

“狂嵐”を振るう。

同時に飛び掛つてきた三人の上位魔が一撃で地面に崩れ落ちた。引き換えに左手首辺りに痺れるような痛みが走ったが、左腕はとうに捨てている。問題はない。

そうして、すぐに正面にいる二人の将魔に注意を向けた。

周囲には無数の死体。もはや数えるのは止めていたが、将魔が七人、上位魔がおそらくは三十人前後。今相手をしている連中で三セツト目だったが、それでも周囲には多数の気配が潜んでいる。相変わらずの敵の余裕から考えてもまだ半分も行っていないのだろう。

どこまで行けるだろうか

一瞬頭を過ぎったその考えを掻き消す。

考える必要はない。

行けるところまで行くだけだ。

何度目になるかわからない、体中に残った搾りカスのような力を引きずり出す。

まだ、戦える。

まだ

その、瞬間だった。

「……ッ!!!」

右腕に抉られるような痛みが走って鮮血が噴き出した。

油断というべきか。

あるいは限界というべきなのか。

袈裟懸けに切り落とされ、足元で絶命していたはずの上位魔がニヤリと笑みを浮かべて見上げている。

その手から伸びた剣が、彼の右腕に深々と突き刺さっていた。

「……!!!」

激痛に奥歯を噛み締めながら、剣を逆手に持ち直して足元に突き立てる。

うめき声とともに鮮血が飛び散った。

だが、突き刺した感触は手の平に返ってこない。

これまでか。

右手首から先の感覚がほとんどなかった。剣は不思議と手の中に収まったままだったが、逆手にしたそれを持ち直すこともできない。これでは 戦えない。

セオフィラスはついに観念して夜空を見上げた。

そして、見る。

「

「……アレ、は」

夜天を覆いつくす、漆黒の闇。

「……アレ、は」

夜鳥の鳴き声よりも遙かに不吉なその兆しに、セオフィラスは世界の終焉を予感した。

「……いたぞ！」

「危機一髪ジェノサイダーの大量殺戮者」

「……いたぞ！」

と、いうその声に、敵かと思って振り返った俺の目の前に現れたのは、見慣れた褐色肌の少年だった。

「ヴェスタ！ よかった、無事だったのか！」

「ルーン!?」

その姿を見た瞬間、俺がどれだけ安堵したことか。エルダの話聞いて積もりに積もっていた不安が、熱湯をかけられた氷のようにすうっと消えていった。

さらに、そんなルーンの後ろからルクレツィアも姿を現す。

「……ヴェスタ様! はあっ……」

「ルクレツィア! おお、貴女も無事であったか!」

俺は喜びのあまり、二人に駆け寄っていく。

そのままいつぺんに抱きしめてやるうかと、そう思ったのだが。

「!」

途中で、止まった。

視線をルーンの背中へと移動させる。

そして、

「ミュウ!?」

ルーンに背負われたミュウが力無くぐったりと目を閉じているのを見て、背筋が凍りついた。

俺は思わずルーンの肩を掴んで、

「ル、ルーンよ! いったいなにがあった!? ミュウは! ミュウは大丈夫なのか!」

「うわあっ、お、落ち着けよ、ヴェスタ! ちゃんと生きてるって

ああ、もう! おい、ルクレツィア! 説明してやってくれ!」

「……はあっ、人使いの、はあっ……荒い方ですわね……ほんとに、もう……」

肩で大きく息をしながらルクレツィアがゆっくり顔を上げる。

「まずは……落ち着いてくださいませ……ヴェスタ様……」

「う、うむ……すまん」

ルクレツィアにそう言われ、ルーンの肩を離す。

そうして俺は改めて彼らの姿を見た。

ルーンはいつも使い古した服を身に着けているので目立たなかったが、ルクレツィアを見ると、身に纏っている上質な洋服は泥や引

つかかった枯れ枝やらで見る影もないほどボロボロになっていた。
そしてルーンに背負われたミュウ。

彼らがどんな状況でここまでやってきたのか。
だいたい想像することができる。

「ヴェスタ様。実は」

ようやく息が整って、ルクレツィアはチラツと俺の後ろのエルダを一瞥し、すぐに俺の方へ視線を戻して言った。

「ヴェスタ様と別れた後、私たちはセオフィラス様に追いつかれてしまい、一時は対峙したのですが……そこを突然、正体不明の魔に襲撃されたのです」

「正体不明の魔……だと！」

エルダを振り返ると、彼女は無言のままに頷いた。

デビルバスター・ハンターズ。

おそらくその連中に間違いないだろう。

ルクレツィアは続けた。

「私たちはセオフィラス様にその場から逃がしていただいて、それでヴェスタ様を探して、ここまで来たのですわ。ミュウちゃんもつい先ほどまでは意識があつたのですが、ヴェスタ様の姿を見て安心してしまつたのかもしれないわね」

「……そうか。セオフィラス様はお前たちを逃がしたか」

エルダがポツリとそう呟いた。

複雑そうな、それでいて納得したような、そんな呟きだった。

エルダの視線がルーン、ミュウ、そして最後にルクレツィアを捕らえる。

「ならば……セオフィラス様のおかげで救われたその命、せいぜい大事に使うことだな」

「……」

俺はルーンに背負われたミュウに顔を近づけた。

彼女の体が呼吸しているのがわかる。

ルーンの言つたとおり、生きていた。

「ミュウ……」

自分の目でそれをまず確認してひとまず安堵した。次に、視線を彼女の全身へと移動させる。

いつも真っ白な法衣は黒く汚れていた。泥だけではない。血の乾いた跡のようなものもある。返り血ではなくミュウ自身の血だろう。その証拠に、幼く見えるその顔には多数の擦り傷や血の跡が残っていた。

痛々しい。

幼い外見の彼女だからこそ、余計にそう感じてしまう。

ポツリ、と、ルクレツィアが言った。

「ミュウちゃんは、私たちを守るために一生懸命戦ってくださいましたわ」

「……そうか」

そんなにも頑張ったのであれば、あとで誉めてやらねばなるまいが。

今はそれよりも

「エルダ殿」

俺は一人で先に進もうとしていたエルダを呼び止めた。

「……」

無視されるかもしれないと思ったが、エルダは立ち止まってこちらを振り返る。

「なんだ？」

俺は問いかけた。

「セオフィラス殿はどうしてこの子らを逃がしてくれたのだろうか？」

「……ディセニウスを知って、貴様らが無実であると悟ったのだろう。さつきも言ったように、セオフィラス様は無用な殺生を好まれる方ではない」

「つまり我々は無罪放免ということではよろしいのかな？」

「ひとまずはな。さつきも言ったが、我々にはもう貴様らに構って

いる余裕がない」

「それを聞いて安心した」

俺はホッとして笑った。

「……ヴェスタ？」

「ヴェスタ様？」

背後でルーンとルクレツィアの怪訝な声上がる。

俺はそんな二人にチラッと視線だけ向けて、再びエルダのほうへと向き直った。

「エルダ殿。貴女はセオフィラス殿の加勢に行かれるつもりのようにだが、どうせ死ぬつもりなのだろう？　ならばその命、もっと有意義なことに賭けてみないか？」

「有意義なこと？」

怪訝そうなエルダ。

俺は深く頷いて、

「うむ。我が家には“受けた恩は借金してでも返せ”という家訓があつてな」

「……ひでえ家訓だな」

ルーンの突っ込みが入ったが、ひとまずさらりと流しておく。

「エルダ殿がその命を今、俺の娘たちを守るために使ってくれるのであれば、セオフィラス殿から受けた恩と合わせ、大いに報いてみせようではないか」

エルダはしばし思案するような表情を見せて、

「……回りくどい言い方だな。つまり、言つとおりにすれば貴様がセオフィラス様に加勢する、とても言いたいのか？」

「味気なく言えば、そのとおりだ」

「馬鹿馬鹿しい」

取るに足らないという表情でエルダはそう言った。

「行ったところで無駄に命を落とすだけだ。それに、デビルバスターでもない貴様がディセニウスと争う理由はあるまい」

「理由ならある。……知らぬのか？」

そんなエルダに、俺は手にした長剣を肩に乗せて言った。

「俺たちはもともと山賊退治をするためにこの町までやってきたのだ。それを後から来たあなたがたがゴチャゴチャと掻き回しただけ。山賊とやらの正体はどうやら何とかいう魔の集団だったようだが、そんなことは関係ない。いわば、これは最初から俺の領分なのだ」

「馬鹿かお前は」

「馬鹿ではない。ヴェスタだ。強いて付け加えるなら正義の味方の、な」

「エルダが返す言葉に詰まった隙に、俺はさらに続ける。

「ついでに、この子たちを逃がしてくれたセオフィラス殿への恩と

俺はそう言つて、寝息を立てるミュウの頬をそつと撫でた。

乾いた血の跡。

一瞬だけ、沸騰しかける。

「……可愛い娘をボロボロにしてくれた恨みも、倍にして返してやらねばならぬのでな」

「おい、ヴェスタ」

ルーンがいつになく心配そうな声を上げる。

「お前、本気なのか？ 奴らとんでもない数だったぜ。いくらお前でも……」

俺は少し意外に思つてルーンの顔を覗き込む。

「心配してくれるのか、ルーンよ？」

「そういうわけじゃねえけど……」

いつもなら即座に否定するはずのルーンの歯切れが悪い。どうやら本当に心配してくれているようだった。

「心配いらぬ」

その気持ちを感じるだけで体の底から力が沸いてくる。

「けど」

「何故ならば……正義の味方は必ず勝つものだからな！」

漆黒のマントを翻し、俺は胸を張って歩を進める。
心配はない。

俺は決意する。

“最悪”の連中が相手だというのであれば。

同じく“最悪”のこの力を存分に振るってみせようではないかと。

「……誰かが近付いてくる？」

第一報がガラティアの耳に入ったのは、フィロメーナの率いる第二部隊の敗色が濃厚となりつつあった頃だった。

何者かがこの狩場に近付いてきている。

それは気持ちよく狩りを楽しんでいたガラティアにとって、決して気分の良いものではなかった。

「おそらくは一緒に山に入っていたもう一人のデビルバスターですね。……さて、どうしたものでしょうか」

ガラティアは肩に乗せた黒鳥の首筋を人差し指で軽く撫でながら思案する。

第一部隊で十分にセオフィラスを討ち取れるものと見込んでいた彼女にとって、今、第二部隊をも全滅させようとしている彼の抵抗はまさに想像以上のものだった。

が、しかし。
それは単に想像以上だった、という、ただそれだけのことに過ぎない。

今世代のデイセニウスが戦闘要員として集めたのは、二十一人の将魔と九十三人の上位魔たちだ。

これは、小国が相手なら人間の国に戦争を仕掛けることさえ難しくないほどの戦力であり、セオフィラスに追い詰められつつある第二部隊が仮に全滅したとしても、被害はまだ全体の三割にも満たな

い。

一方のセオフィラスはといえば、最強のデビルバスターの名に恥じることはない戦い振りをここまで見せてはいるが、すでに限界の色が見え始めている。どう転んだとしても次の第三部隊を乗り越えることは叶わないだろう。

後ろを振り返る。

第三部隊から第七部隊までを率いる将魔たちがそこで出番を待っていた。

ガラティアは言った。

「……アースラ。良かったですね。貴方にも出番がありそうですよ」

声をかけた相手は、第七部隊を率いる氷の将魔、銀色の髪の少女アースラだ。

「我々にとつては少々物足りない相手ですが、向こうもデビルバスターであることに変わりはありません。行ってきなさい」

「……」

ガラティアの言葉にアースラが無言で頷くと、周囲がざわめき、やがてその音は波が引くようにして離れていった。

邪魔者を排除するために。

「……さて」

ガラティアが視線を戻すと、第二部隊最後の上位魔がセオフィラスの剣に胸を貫かれて絶命したところだった。

彼らの被害はこれで、将魔六人、上位魔が二十六人となる。

しかし。

「……」

死体の海の中に立つセオフィラスは、最初と変わらぬ様子でそこにたたずんでいる。遠目には呼吸を乱している様子もないし、まだまだ健在、というように見えなくもない。

だが、実際の戦いぶりを見ていればわかる。

彼がどれだけ傷つき、どれだけ消耗しているのか。

ガラティアは言った。

「どうやら貴方の手柄となりそうですね、アンブロウズ」

第三部隊を率いる炎の将魔、燃えるような赤短髪の少年アンブロウズは、デイセニウスの中でも最年少で、まだ十三歳だった。幼いながらも将魔としての力はデイセニウスの中でもすでにトップクラスで、これからの成長分を見込めば、十数年後、彼が次代のデイセニウスを率いるようになっていくかもしれない、と、ガラティアは考えている。

そういう意味でも、彼がここでセオフィラスを仕留めるというのは、なかなかよくできたシナリオだった。

が、

「……」

最年少の少年はガラティアの言葉に反応せず、あらぬ方向を見つめていた。

いや。

あらぬ、ではない。

彼が見ているのは、アースラ率いる第七部隊が向かった方角、つまり何者かがやってくる方向だった。

「アンブロウズ？ どうしました？」

「……ガラティア様。その手柄、第四部隊のレイノルドにお譲りします」

「なんですって？」

「嫌な予感がします」

怪訝な顔のガラティアに、アンブロウズは真っ直ぐに彼女を見つめて言った。

「私をアースラの援護に向かわせてください。ガラティア様もご存知のとおり、この辺りには正体不明の魔がうるちよろしています。相手がデビルバスター一人でなかった場合、彼女の部隊だけでは“万が一”があるかもしれません」

「その可能性は確かにありますが、でも本当に良いのですか？ 十

年に一度のことですよ？」

「私には“次”がありますので」

「……いいでしょう」

“次代”を意識したアンブロウズの発言に、ガラティアは逆に満足して彼の要望を受け入れることにした。

アンブロウズが頷いて第三部隊がその場を離れ、入れ替わりにレインルドの率いる第四部隊がセオフィラスと対峙する。

シナリオは少々変更となったが、いずれにしても、これが最後になることに変わりはない、と、ガラティアは思っていた。

“最強のデビルバスター”セオフィラスは、もう満足に足を動かすこともできなくなっていたし、剣を振るう右腕はまだ健在だったが、それももう時間の問題だ。

だから、さらに第四部隊の将魔が一人討ち取られたとき、ガラティアはセオフィラスの底力に心の底から感服し、しかしそれでも、第四部隊が最後になるだろうという予測が変更になることもなかった。

事実

「ッ！」

セオフィラスが初めて上げた苦痛の声。

一人の上位魔が死の間際に放った一撃。

右腕を深々と貫いた剣。

その光景に、ガラティアはこのゲームの終局を確信したのだ。

が、しかし。

ふと不穏な気配を感じ。

見上げた空に、ガラティアは見た。

「な……」

星屑の空を覆い尽くす、魔界の夜よりもさらに深い暗夜の帳。
すべての破滅を予感させる、真闇の光。

「……レイノルド！ 下がりなさい！！」

ガラティアがそう叫ぶのとほぼ同時に。

闇はガラティアたちとセオフィラスの間を分断するように墜ちてきた。

刹那の無音。

そして 破裂。

「……！！」

耳を引き裂く衝撃。

大地を震わす爆風。

それは落下の中心点だけではなく、離れた場所にいるガラティアたちの方にも及んだ。

「くっ……」

ガラティアは風の壁を周囲に展開してそれを凌ぐ。

そばに控えていた将魔たちもそれぞれにやり過ごしていたが、周りにいた上位魔たちは大半がその衝撃をこらえ切れずに吹き飛ばされていった。

吹き飛ばされた？

その事実を再確認して、ガラティアは思わず笑った。

いや、笑うしかなかった。

彼らは上位魔だ。

人間の女子供ではない。

それが今、目の前でまるで紙くずか何かのように吹き飛ばされているのだ。

しかも彼らが被ったのはあくまで余波。

中心地から漏れ出した余剰分の力に過ぎない。

にもかかわらず

あまりの荒唐無稽さに、ガラティアは笑わずにいられなかったの

である。

やがて 衝撃が止む。

「……」

ガラティアは風の壁を解いてその中心地の状況を見た。

その場にいたレイノルドたち第四部隊の姿はどこにもない。それも当然だろう。離れたところにいるガラティアの周りですえこれだけの被害が出たのだから、直撃を受けた彼らが無事であるはずもなかった。

少し視線を上げる。

セオフィラスがさつきまでと同じ位置に立っていた。ガラティアたちよりもその中心地に近い彼が無事であるということは、力のベクトルが完全にガラティアたちの方向を向いていたことを示している。

それはつまり

「アンブロウズの予感が当たったということですね……」

ガラティアはさらに口を歪めた。

「面白い。ゲームというものはこうでなくては」

視線を戻す。

中心地。

その力の発生源となったその場所に、一人の男が立っていた。

漆黒の衣装。

漆黒のマント。

最悪を自称する彼らですら、不吉を感じずにはいられないその力の持ち主。

終局を迎えるはずのゲーム盤をひっくり返した、破滅の使者

黒衣の男は、左手に持った大きな剣を肩に乗せ、右手の人差し指を真っ直ぐ彼らに向けると、声を張り上げてこう叫んだのだった。

「そこまでだ、外道の者ども！ この大陸に悪の栄えた試しなし！
平和を守る正義の使者、ヴェスタ＝ランバート、ここに見参
！！」

その6

破滅の大量殺戮者シエノサイダー

「ヴェスタ＝ランバート、ここに見参!!」

……決まった。

圧倒的な数の敵を前に大ピンチに陥った仲間。絶対絶命となったそのとき、颯爽と現れる我らがヒーロー。使い古されていながらも決して色あせることのないお約束の展開だ。もちろんそれに続く敵の言葉も決まっている。

突然現れたヒーローに驚愕する敵。

そして狼狽しながら口にする言葉は

「はじめまして、ヴェスタ様。私はこのデイセニウスのまとめ役をやらせていただいております、ガラティアと申しま」

「違ああああうツ!!」

「……え？」

俺はそのガラティアと名乗った女性にビシツと指を突きつけて言った。

「そのセリフは『一体何者だ!?』しか認めん! やり直しを要求するツ!」

「……」

ガラティアという女は何故か困惑の表情を浮かべた。

もしかするとこのロマンは男にしかわからないのかもしれないかもしれん。

……ん? 女?

俺は後ろのセオフィラスを振り返って尋ねた。

「もしかしてあの女が敵のボスなのか? ……ラスボスが女という

のは俺としてはなんとというか、こつ、いまいち盛り上がらないのだが……」

「お前が言っていることの意味はよくわからないが」

セオフィラス 想像していたよりずっと小柄な青年だった

は、全身血だらけ傷だらけの割には案外平気そうな顔で答えた。

「あの女がまとめ役であることはおそらく確かだ」

「ふむ……まあ、それならば仕方あるまい」

ちよつと肩を落として敵に向き直った俺に、セオフィラスは言う。

「それよりも、ヴェスタ、といったか。私を助けるつもりか？」

「む？」

そのセリフに、俺のやる気ゲージがみるみるうちに上昇した。

俺は彼に背を向けたまま、

「確かに昨日までの我々は互いにいがみ合う敵同士だったかもしれない。……しかし、もともと我らは平和を守るために戦う、いわば同志ではないか」

「勝手に決めているようだが、私は平和とかいうものを守るために戦っているつもりは」

「さあ、今こそ手を取り合って巨大な悪を打ち倒そうではないか！」

同じ男で、このロマンをわかってくれるはずのセオフィラスにも何故か困惑されてしまった。

どうやらビルア領と違い、ヒンゲンドルフ領のノリは俺と感性が合わないようだ。

「私はもともとビルア領の出身だが」

「とにかくやるぞ、セオフィラス殿！ いや、同志セオフィラスよ

！……」

こつなつてくると演出もクソもない、やけっぱちである。

いや、そもそも演出とかどうでもいいのだ。

俺は彼を助けにきた。ただそれだけだ。

だから、その……まあ良いではないか。

で。

あるいはセオフィラスも、エルダのように助けを拒否するかと思
ったが、

「……よくわからないが、今の私にお前の助けを拒否する理由はな
い」

そう言っつて逆手にしていた右手の剣をゆっくりと持ち直した。

「魔であるお前が血迷って我々人間の味方をするというのであれば、
せいぜい利用させてもらおうとしよう」

「……むう」

なんとも助け甲斐のない男である。が、ヒーローというのは見返
りを求めたりしないものだし、いがみ合いながらも協力して敵と戦
うというのも、これはこれで燃えるシチュエーションといえなくも
ない。

と。

「！」

ざわ、と、空気が俺たちの周りで渦を巻いた。

螺旋を描くようにして流れるその風の行方を目で追う。

すると、

「本来はルール違反なのですが……」

その風はガラティアと名乗ったディセニウスのボスである女の手
元へと集結しつつあるようだった。

「ゲームの難度が著しく変化するほどの障害が発生した場合、全力
をもってその障害を排除することが認められています。つまり」

その手の中で風の渦が球体状に凝縮される。

「ヴェスタ様。我々はまず全力をもって貴方をこのゲームから除外
します。……今なら自ら退場することも認めますが、そのつもりは
ないのですよね？」

「ゲーム？ なんのことだ？」

俺はその言葉の意味するところがわからずにガラティアへとそう
問いかける。

ガラティアは微笑を浮かべて答えた。

「もちろん大陸最強のデビルバスターであるセオフィラス様の命を狩り取るゲームです」

「……」

彼女のその笑みを見ただけで、俺は悟る。

(これが、デビルバスター・ハンターズか……)

彼女に　いや、彼女たちにとって、これは正真正銘の“ゲーム”なのだ。生きるためでもなく、主義主張に則ったものでもなく、ただ娯楽としての狩り。一部の人間が動物相手にやるあの“狩り”を、彼らは人間の、それもデビルバスターを相手にやろうとしている。

俺はその事実を悟り、目の前にいるその魔が女性であることを忘れることにした。

ここに至れば性別なんて関係ない。

人の世の平和を守るため、彼らはここに居てはならない存在だ。ガラティアは言葉を続ける。

「先ほどの力を見る限り、貴方は王魔のようですね。最強のデビルバスターと一緒に希少な闇の王魔も狩れるとは、私たちはとても運が良い」

そして、この余裕。

出会い頭の一撃でかなりの数の敵を戦闘不能に陥れたはずだが、まったく動じた様子もない。

敵の予想外の反応に、俺の背中には冷や汗が浮かぶ。

相手の力量も考えずにこうして出てきてしまったが、少々無謀だったか　と。

引き下がるつもりは毛頭ない。

が、しかし

エルダとの戦いで感じた、死と隣り合わせの嫌な気配。

それと同じ匂いが、ガラティアの手の風の渦から薫っていた。

「……あの、女」

セオフィラスがポツリと呟く。

「ただの将魔じゃない」

「む？」

聞き返そうとしたが、その呟きの意味は、すぐに身をもって知ることとなった。

「最期にご紹介しておきましょう」

と、ガラティアが左手を右肩へ添える。

「……？」

今まで暗くて気が付かなかったが、黒い小さな鳥が彼女の右肩にとまっているのに気付いた。

「この子は風の契約者で“眠鳥”と呼ばれる種族です。名前はパールといいます」

「……契約者？」

“契約者” 久しぶりに聞くその言葉は、魔界に住んでいながら、魔界に住む者ですら滅多に見ることがないという、人と獣の特性を併せ持つ つまりはミュウのような存在を指す言葉だ。

つまり

ガラティアは指先でそつとその鳥の首筋を撫でた。

「この子はその通称どおり普段は眠ったままなのですが、主が力を振るうときにだけ目を覚まし」

ゆっくりと。

黒い鳥の目が開く。

その、瞬間。

突風が周囲で渦を巻き、天に昇った。

「な……ッ!!」

たちまち完成する、俺たちを外界から隔離するかのような分厚い風の壁。そばにある大人数人分はあるつかという太さの木々が、まるで爪楊枝か何かのようにポッキリと真っ二つに折れ、次々となぎ倒されていく。

重たく、厚い、風の津波。

「く……ッ！」

まともに目を開けていられない。

視界がほとんどゼロになった。

鼓膜を襲う轟音に、聴覚もおかしくなる。

その場から一步も動いていないのに、方向感覚さえ狂ってきた。

「……ッ！」

立っていることさえままならず、セオフィラスが片膝をついたのがわかった。

そしてどこからか、ガラティアの声だけが響いてくる。

「このとおり“眠鳥”は主の風の力を増幅してくれます。私は戦うことは苦手なのですが、この子のおかげで、あなたがた王魔ですら凌駕するほどの魔力を振るうことができるのです」

「……ッ！」

この力を見ればそれがハツタリでないことはすぐにわかる。

つまり、それが彼女の余裕の理由。

彼女は一人でもその“ゲーム”を攻略できるほどの力を隠し持っていたのだ。

(冗談抜きで、ヤバい……ッ！)

周囲は風の壁に囲まれ、逃げ出すこともできない。

ならば　とにかく力の限り抵抗するしかないだろう。

やがて来る敵の攻撃に備え、俺は腹の中心辺りに力を込める。

そこからあふれ出す力。

エルダとの戦いときは懸命に抑えようとしたその力を、逆に体の底から搾り出す。

チリ、チリ……チリチリチリチリ……

痺れるような力の奔流が全身に広がり、やがて右腕に収束する。

小細工はしない。

する余裕もない。

……あとは祈るのみだ。

この体に宿る力が、この死地を乗り越えてくれることを。

視界ゼロの暴風の中。

やがて“何か”の弾ける気配が、耳と、肌と　五感のすべてに
伝わってくる。

迫り来る。

天地を二つに引き裂く、禍き凶将の風。

俺は、吼えた。

「……………おおおおおお　　ッ！！！」

右腕に宿したありったけの力を闇雲にそれに向けて叩き付ける。
迸る黒き閃光。

人智を超えた二つの力はやがて激突する。

衝撃の波。

大地が沈み。

天が震える。

「

残っていた幾人かの将魔たちも。

「ッ

傷ついた最強のデビルバスターでさえも。

いずれも身動きすることすら叶わず。

ただ黙って見つめるしかなかった。

二つの力が激突するその瞬間を。

そして拮抗した二つの力は　いつ果てるとも知れぬ綱引きのよ
うに

……………は、ならなかった。

「……………え？」

惚けたような眩きが誰のものかよくわからなかったが、女性の声
だったのでおそらくはガラティアのものだろう。

その彼女の眩きは、そのまま俺の心の声でもある。

呆気なく。

あまりにも呆気なく、死の匂いを撒き散らしていた禍禍しき風は、俺の放った黒い光とぶつかった瞬間、まるで空気中に溶けるように四散していた。

そして、

「嘘……………」

蘇った視界の中、ぽかんと口を開けた、まるで子供のようなガラティアの表情が妙に印象的だった。

そして、

……………ちゅどーん。

と、いう音が鳴ったかどうかは定かではないが、最悪のデビルバスター・ハンターズ“ディセニウス”は一瞬にして壊滅したのだった。

「くそくらえ、でしたね」

と、ミュウが言った。

「……………うーむ」

そんな簡単なものでもなかった気がするのだが、結果だけ見るとそういうことになるのだろうか。

事件から三日後の昼。

よくわからんが、ガラティアたちディセニウスのメンバーは数名が命を取り留めて、今はグリゴラスの用意した魔力を封じる特別な牢屋の中にいるそうだ。これだけ多くの将魔を生きたまま捕らえることは歴史上でもかなり稀なことらしく、謎に包まれていたデビルバスター・ハンターズたちの姿が多少なりとも解明されるのでは

ないかと期待されているらしい。

まあ、その辺りのところは専門家に任せることとして。

山賊退治という当初の任務を終えた俺たちは、ミュウが怪我をしていたことと、その影響なのか彼女にしては珍しく体調を崩してしまったこともあって、事件以降も町の宿に留まり続けていたのだ。た。

「その、俺は死ぬかもしれないという覚悟で戦っていたつもりなのだが……」

なんだか壮大な肩透かしを食った気分である。

これが英雄譚だったなら、歌い手の吟遊詩人は観客から総スカンを食らうこと請け合いだろう。

「御主人様がそんなくそくらえな連中に負けるはずはありません」
ミュウは相変わらず地味に毒舌だった。……というか、いつの間にか“くそくらえ”が口癖になってたりするんじゃないかと、お父さんは少し心配である。

「結局大した敵じゃなかった、ってことでいいのか？」

ルーンが不可解そうな、物の怪に化かされたみたいなお顔でそう言った。

それにルクレツィアが異論を唱える。

「そんなはずありませんわ。……ミュウちゃん、ようやく熱も下がってきたみたいね」

ミュウが横たわるベッドの横に座った彼女は、この三日間ほとんど彼女のそばを離れずに、まるで実の妹の看病をする姉のように献身的だった。

本当はルーンが最初にそれを申し出てくれたのだが、やはり女性の看病は女性に任せるべきだろうと俺が主張し（その後、何故かルーンに蹴られた）、結局その大半をルクレツィアに任せることとなったのである。

ミュウもそんな彼女には感謝しているようで、

「もう平気です。ルクレツィアさんのおかげです」

「そう？ でも今日いっぱいは横になってたほうがいいわ」

身を起こそうとしたミュウの肩を優しく押して、ルクレツィアはルーンのほうへと向き直った。

「先ほどの話ですけれど……私も一般的な知識しかありませんが、デビルバスター・ハンターズというのはいずれも危険な存在ばかりです。つまり敵が大したことなくあったわけではなく、ヴェスタ様が強すぎただけですわ」

「なんだよ。ミュウと同じこと言ってるだけじゃんか」

「そうとしか言いようがありませんもの」

澄ました顔でルクレツィアがそう言うと、

「……ふん」

ルーンは何故か面白くなさそうに鼻を鳴らした。

……と。

コン、コン。

ノックの音に、ルクレツィアが即座に返事をする。

「開いてますわ、エルダさん」

「む？」

何故、エルダだとわかったのか、と、そう質問する前にドアが開く。

するとそこには、ルクレツィアの言葉どおりの人物 見慣れた

薄緑色の制服に身を包み、腰に剣をぶら下げたエルダが立っていた。

「おお、エルダ殿。元気であつたか？」

思いもかけぬ来訪者に俺が歓迎の意を示すと、エルダはチラッと俺を一瞥するなり、すぐにルクレツィアへと視線を向けた。

「何故、私だとわかった？」

ルクレツィアはリングゴの皮を剥きながらにこやかに答える。

「貴女以外にここを訪れる客は考えられませんもの」

「宿の人間だとは思わなかったのか？」

「そうだったとしたら、人違いでしたとお茶目に舌を出すだけですわ」

と、ルクレツィアはその言葉どおり、エルダに向かって小さく舌を出してみせた。

エルダは目を細めて、

「……聞いたとおりのしたたかなお姫様だな」

「いいえ。見たとおり一人では何もできない、か弱き乙女です」

「まあいい。……今日はそっちの娘の様子を見に来たのだ」

エルダはベッドの上のミュウを見る。

「そっちへ行っても構わないか？ ……ああ、心配であれば剣は誰かに渡そう」

と、腰の鞘を外し、入り口付近にいたルーンへそれを差し出す。

俺は言った。

「無用だ。いまさら貴女が我々に危害を加えて得をすることは何もなからう」

「私はデビルバスターだからな」

外した鞘をルーンに押し付けるようにして渡し、エルダはこっちに近付いてきた。

ルクレツィアが席を空ける。

「……」

ミュウは無言のまま、近付いてくるエルダを見つめている。

無表情だった。

警戒しているのか と、一瞬そう思ったがすぐに考え直す。

……これはもともと彼女が持っていた普通の表情だろう。違って見えたのは、ミュウがルクレツィアやルーンに対してそれとは違う表情を見せるようになっていたから。むしろそっちが特別なのだと考えるべきだ。

エルダがベッドの脇に腰を下ろす。

無表情に彼女を見つめ返すミュウ。

「ミュウ、といったな」

「はい。何の御用ですか？」

エルダは何か確認するように、ミュウの体の上で視線を小さく動

かした。

ミュウは微動だにせずエルダを見つめている。

やがて、

「……なるほど」

エルダは小さく頷いた。

俺は怪訝に思っ、

「エルダ殿？ どうしたのだ？」

「いや」

エルダはチラッと俺を振り返って、

「私は今でこそデビルバスターが本職になっているが、もともとは魔界学者でな」

「魔界学者？」

「魔のことはもちろん、魔界の環境、社会構造などありとあらゆることを研究する学者だよ。昔は研究するだけで魔の側に立つ者だと迫害されたらしいが 昔の人間は何故か、魔を研究することが連中に対抗する一番の近道だということに思い至らない者が多かったらしい」

「ふむ」

あまり耳にしたことがないので、おそらくは今も一般的とはいえない分野なのだろう。

「それで、貴女が魔界学者だったこととミュウを見つめていたこととはどういう関係が？」

俺がそう質問すると、エルダは答えた。

「別に関係ない」

「関係ないんかい!!」

何のための説明だったのだ、今のはと。

脱力した俺をよそに、エルダは再びベッドの上のミュウに視線を戻す。

そして呟いた。

「やはり、な」

「む？」

「可愛い」

「は？」

聞き返す間もなく。

……むぎゆうううううう。

唐突にミュウを抱きしめるエルダ。

「むぐつ……ご、御主人様、く、苦し……」

「だああああ　ッ！」

エルダを無理矢理ミュウから引き剥がす。

「……ああん」

「ああん、ではない！　貴女はいつたい何がしたいのだッ！」

近所迷惑も顧みずに俺がそう怒鳴ると、エルダは胸を張って言った。

「私は男も女も可愛い子が好きだ。それがなにか？」

「聞いとらんわッ！！」

「……でも、確かにセオフィラス様は小柄で童顔ですわね」

何故か納得顔のルクレツィア。

エルダは大きく頷いて、

「わかつているではないか。あの見た目で三十歳とかもう考えただけで涎が　」

俺は悲鳴を上げる。

「わかった！　わかったからもうやめてくれ！　これ以上デビルバスターに憧れる少年の夢を壊さないでくれ！！」

俺の中のデビルバスター株は完全にストップ安である。

「そうか？」

エルダは少し不満そうだったが、

「そこまで言うなら、セオフィラス様のチャームポイントの話は置いておくか。ああ見えて既婚者だしな。略奪愛は不道德だからな」

「……」

俺にはこの女性の思考が何一つ理解できない。

「では、邪魔したな」

やがて、エルダは椅子から立ち上がりベッドから離れた。

「……結局、何しに来たのだ……」

「だから言ったではないか。その子を見に来たのだ」と。

エルダはふと思い出したように振り返って、

「この町にはいつまで滞在するつもりだ？」

「む？」

初めてまともな質問をされた気がする。

俺はチラリとミュウを見て、

「調子を見つつ、だが……あさつてぐらいには発つことになるだろうな」

「あさつてか。早いな。……そうそう。その娘は大事にしてやるのだぞ。セオフィラス様相手にずいぶん頑張ったようだからな」

そう言い残し。

エルダはさっさと出て行ってしまった。

「……なんなのだ、あの人は」

結局、なにがなんだかさっぱりである。

「……けほっ」

軽く咳き込む声に、俺はベッド上のミュウへと視線を戻すと、

「ミュウよ。平気か？」

「あ、はい。……あの、御主人様」

ベッドの上からミュウが俺を見上げる。

「どうした？」

「あの人が今言っていました……私、御主人様のお役に立ててましたか？」

「む？」

言われて思い出す。

彼女の頑張りを労ってやるのをすっかり忘れていたのだ。

「……」

ミュウは少し不安そうな顔をしていた。

まるで捨てられることを恐れる小動物のように。

……そんな顔をする必要はこれっぽっちもないというのに。

「もちろん役に立っていただけとも……な、そうだろう？」

そう言っただけで俺が他の二人に水を向けると、ルーンが真っ先に答えた。

「まあな。お前がいなきゃ私も姫さんも死んでただろうし……発端がその馬鹿だったってことは置いといてな」

相変わらず一言多かった。

「ま、そういうことだ、ミュウよ」

俺がそう言うと、ミュウは少しだけホッとした表情をした。

「ですが、私、今回は最後まで御主人様のお力になることができませんでしたから……」

「気にすることはない」

俺は彼女にそっと手を伸ばす。

ほん、と、頭に手を乗せて撫でてやると、ミュウは少しだけ目を細めた。

「お前はよくやってくれた。俺の方こそ、お前にこんな怪我をさせてしまったことを謝らねばならぬ」

「そ、そんな、御主人様が私に謝ることなんてあり得ません。……でも」

そう言っただけ。

ほんの少しの躊躇。

ミュウは上目遣いに俺を見た。

「もしも誉めていただけるのであれば……御主人様」
「む？」

何かをねだるような表情。

ミュウがこんな顔をするのは初めてのことだった。

俺は少し嬉しくなって、

「どうした？ 遠慮せずに言ってみる」

「……」

おぼろに躊躇。

「……あの、さっきの」

「む？」

「……」

ミュウは少し視線を伏せて言った。

「ぎゅっ……って、してください」

「……」

その言葉を聞いた瞬間、考えるよりも先に体が動いていた。華奢なミュウの体をそっと抱きしめる。

と。

「……」

「……」

いつの間にかルーンとルクレティアも集まって、同じようにミュウを抱きしめていた。

「むぐ ……」

ミュウは少しだけ苦しそうな声を出したが、

「……」

確かめるように、ルーンの手、ルクレティアの手。最後に俺の手に触れて。

「……御主人様」

嬉しそうに微笑む。

そして俺は改めて思った。

ああ、皆が無事でよかった と。

そして、俺たちの旅は、これからも変わらずに続く。

「……セオフィラス様」

「エルダか。ご苦労だった」

あの戦いから三日目。

町に戻ってすぐに医師の治療を受けたセオフィラスはまだ自力で満足に歩くこともできない状態だったが、それでも後始末のため、この日から執務に復帰していた。

執務室に入ってきたエルダは、いつものとおり直立不動で敬礼をする。

「四点、ご報告があります」

「ああ。頼む」

短く先を促すセオフィラス。

エルダが口を開く。

「一点目については、順調に回復している模様です。心配はありません」

「……」

セオフィラスは何も答えなかった。

エルダもそれについて深く説明することはなく、

「二点目、ディセニウスについてはですが、生け捕りにしたメンバーから聞き出せた範囲での話で推測も多分に含まれております。……アンブロウス、アースラという二名の将魔が姿を消していたようです。事実だとすれば、いずれディセニウスは再建されることになるかもしれません」

「そうか」

セオフィラスは短く呟いた。

この機会に“最悪のデビルバスター・ハンターズ”の歴史を終結させられればと願っていたが、どうやらそれは叶わない可能性が高

い。

セオフィラスが視線で先を促す。

「三点目、ガラティアに憑いていた風の契約者はいずこかへと消えたようです。……契約者は命を落とすと塵のように消滅するという説があります。死亡したとも考えられますが」

セオフィラスは小さく頷いて、

「契約者はそう容易く主人を変えないと聞く。生きているにしろ死んでいるにしろ、無理に追跡する必要はないと考えるが、魔界学者である君の意見は？」

「私も同じ考えです」

「そうか。ではそれでいい。四点目は？」

少し、間があった。

「もう片方の契約者のお話です」

「……あの娘、やはり契約者か？」

セオフィラスの問いかけにエルダは頷いて、

「確認してきました。左右の肩甲骨に小さな四つのしこり。四枚の羽。かなり古い文献にしか名前がありませんが、その記述が正しいとすれば“感応幻蝶族”と呼ばれる、幻魔に属する白蝶型の契約者です」

手に残る感触を再確認するように、エルダは微かに指先を動かした。

「根拠は四枚の羽だけか？」

「それだけではありません」

エルダは直立のまま続ける。

「感応幻蝶族は主の力を吸い取ってそれを糧に生きると言われていますが、このとき吸い取るのは、主が本来有する力と正反対の力で。つまりは十属性の対極、主が炎魔ならば水、風魔ならば地、氷魔ならば雷」

「闇の対極は光、か」

辻褄が合う。

それだけでも彼女の推測を裏付けるには十分だとセオフィラスは思った。

「その、感応幻蝶族について、ですが」
エルダは淡々と続けた。

「感応幻蝶族は吸い取ったその力を自ら行使することに加え、対極の属性を吸収することによって主が持つ本来の力を相対的に増幅します。……つまり、感応幻蝶族と契約した者は、自らの力を増幅しながら、元の自分に匹敵する力を有する忠実な従者をも手に入れることとなります。他にもやや信憑性は低くなりますが“臃”と同等の偽装能力 人間を装う力も授けられると書かれた文献もあります」

セオフィラスは少し眉をひそめた。

「我々にとつてはありがたい話だな」

「……」

そこで初めて。

それまで淡々と話していたエルダの表情に僅かな陰が差した。

「どうした？」

「……感応幻蝶族は将魔クラスが手に入れると国、王魔クラスが手にすると世界を滅ぼしかねないほどに危険な存在です。しかし当然のことながら、実際に世界が滅ぼされたことはありません」

「それほどに希少な存在ということではないのか？」

「それもあります。ただ」

と、エルダはずつと脇に抱えていた一冊の本を手に取り、セオフィラスの執務机の上で開いた。

セオフィラスは不自由な体を小さく動かしてそれを覗き込むと、
「ずいぶん古いな」

「これでもかなり後に作られた写本です。原本は遙か昔に失われたと聞きます。……それほどに古い文献ですので、どこまでが信用できるのかわかりません」

並んでいる言葉には古い文字がかなり混じっていて、セオフィラ

スにはすぐに解読することができなかった。

「ここに感応幻蝶族についての一文があります」

エルダはその中の一節を指し示す。

「其は破滅の兆し、其は破滅の従者、其は」

節をなぞっていた指がピタリと止まった。

「其は 破滅を食らう者也」

「……なるほど」

セオフィラスはその意味するところをすぐに察する。

「別の文献には“死の蝶”や“寄生し尽くすモノ”と表現しているものもあります。……もし、これが正しいのだとすれば」

エルダが少しだけ、珍しく感傷的な声を出した。

セオフィラスはそれに気付かないフリをして、

「……破滅をもたらす者を食らい尽くす、死の蝶か。それが本当だとするなら、我々人間にとっては天使のごとき存在なのかもしれないな」

「……」

「あの男が破滅をもたらす者なのであれば、な。いずれにせよ、いずれにせよ、それをどうすることもできない。」

セオフィラスは途中で言葉を止め、そのカビ臭い本から視線を外す。

エルダは思いつめた表情でその文献を見つめ続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5660w/>

デビルバスター日記外伝『大量殺戮者（ジェノサイダー）』

2011年9月30日01時14分発行